

---

# わたしと Kitsune さんと 赤い本

R\_iz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

わたしとキツネさんと赤い本

### 【Nコード】

N0752L

### 【作者名】

R  
i  
z

### 【あらすじ】

小鳥遊たかなし 小鳥ことり、高校一年生。平穩、というよりはただ過ぎていく日常をこよなく愛する少女。だが「何も書かれていない無名の赤い本」をゲットしてしまったことから彼女は非日常を押し付けられるハメに。彼女は言った。「私だけ巻き込まれるのはイヤ（面倒）なんで、キツネさんも一緒に。」……脇役以下一般人を希望する少女の巻き込まれ物語。…現在異世界編。

その1 『わたしとキツネさんと赤い本との初日』 (前書き)

初めまして。 Ri | z です。 お話や設定を考えるのは好きですが、  
今作が処女作となります。 温かく見守ってもらえると幸いです。

\*全て主人公視点。(違う場合は以後明記します。)

## その1 『わたしとキツネさんと赤い本の初日』

書き始めは何にしよう…私は困ってしまった。

徒競走でスタートしようとしたらピストルの音を待ちわびているのに鳴った瞬間走る気力が無くなったっていうか、さあ頑張るぞ！って言ったら何を？と質問されて何だっけ？と答えてしまうくらい。んー何を書こうか、ね。　まずそもそもの始まりは『この本』だ。

本日は快晴、だけど24時間ずっとお空を見ていたわけでないのでずっとお日さまがジリジリしていたとは限りません。所々に雲があつたのでもしかしたら場所によっては時々曇りかもしれません。5月中旬の、13日の水曜日。

15歳の私が通う高校は毎週水曜日に職員会議を行う。学生である私には関係ないんで、それに帰宅部な私は時折お世話になる図書室にお邪魔していた。試験が近いわけでもない放課後の図書室に人が多いわけが無く。おかげでゆったりと一般図書のコーナーをそれこそ不審者並にうろつく。

入学して興味のある本は読んでしまったので、新刊か新たなジャンルを開拓するしかない。専門書はそもそも趣味の範囲である読書とは離れるのでアウト。頭使いたくないし。

ノンフィクションは基本的に思考が現実的であるので、こーゆー時くらい夢見させてくれ、でアウト。

まあ学校の図書館なんで、そういった条件が付いてしまうと絞られてしまうワケです。

そして、うるついでうるついでうるついで見つけたのが、一冊の本。手に取るが古ぼけて、古すぎて表紙の文字が読めない。そのため表紙をめくる。

中表紙という普通ならそこに作者と本のタイトルが書いてあるその場所を見て思わず、という感じに…

「それがないってどういうことよ？」

言っちゃまった。

図書館特有の静寂の中声を出せば当然の事で、複数の視線が背中を突き刺す。

私の頬は羞恥のため赤くなり、固まったのは数秒。再起動してからは無言で自動貸出機で処理し、足音を最低限に抑えて図書館を後にする。

そのままの勢いで下駄箱まで歩き、自分を落ち着かせようと冷静になれと言いつける。

「何で棚に戻さなかったんだ…！」

後悔先に立たず。

すでに腕の中の赤い布製のカバーの本はしっかり貸出処理済でしっかりと腕の中に存在している。

小心者の私に今から本を返却しにいくなんていう勇気のいる行動が出来るはずも無くて。

仕方なく、本を持ち帰ることにした。

私の帰路は駅まで徒歩15分、電車は乗り換え一回含んで22分、

駅から家まで徒歩で5分。  
計42分が私の通学時間。それが長いか短いかは人によってだから置いといて。家からもっと近い高校はいくつもあったけど、私服おkで共学っていう条件で選んだため今の学校にしたのだ。

駅までの徒歩、そして電車。いつも通りなのに何か違う。

電車に揺られながらチクチクと感じる違和感の正体を探し、そして気が付いた。

「目が合う」のだ。

例の本は中々の厚さだし、色々詰められたバックに入るわけがなかった。腕の中にいる。

本を抱えている女子高生なんて珍しいから？

いや、確かにそうだけど珍獣を見るような視線に感じないのだ。視線を感じて顔を向けてみれば視線が合う。歩いていても視線を感じて目が合う。誰と、ではなく複数。合う度に気まずさを感じて逸らす。最寄り駅の改札口を出てからも感じる人目に「異常」と判断する。

もはや「目立つ」で片付けられないとし、私は家ではなく「キツネさん」に会いに行くことにした。

カランカラン……

喫茶店のような店はやはりこんな鈴ベルの音が付くべきだと思っていたり。

実際はギィ……と場面によっては怖い展開が待ち受けている音なのだけ。

「こんにちはー」

常連つていうわけじゃないけれどよくちよく来るこの喫茶店『たぬき堂』なんてツツコミ満載なこの店は5人掛けのカウンターと2人用のテーブル2つ、小さい個人経営のにしたらそんなもんかな静かなところだ。

「はいはい、こんにちわ。いらっしやいませ」

店内には客はいないようで、カウンター内に一人の男性、『キツネさん』がいた。

『キツネさん』は『キツネさん』で、本名は知らない。

私が『キツネさん』と呼んだ時からオーナーの緑川さんもたまに見かける私以外のお客さんもみーんな『キツネさん』と呼んでいる。

ちなみにオーナーは大体『タヌキさま』と呼んでたり。

「相変わらずお客さんはいないんだね、キツネさん」

「おやそうですか？ お客さんならホラ、一人いるじゃないですか？」

キツネさんはヒマなようで「お話し」の相手になってくれるようだ。隣のイスにバックと重たい本を置いて、私はカウンター席に座った。

「私がお客さん？ じゃコーヒーお願いします」

「はいはい、コーヒーね」

そういつて用意されたのはコーヒー2杯と一口サイズのクッキーの山。

キツネさんはブラックを、私はコーヒーの苦さを打ち消すほど甘くされた、いつものコーヒー。

別に苦いのが嫌いだったり甘いのが好きでもないけど、前に『コーヒーってどれくらい甘くできるんだろうね？』と言ったらそれ以降私に出されるコーヒーは甘いコーヒーだ。

ちなみにインスタントだったり。だってお金取られないし。キツネさんも飲んでるし。

「ふう…甘いね」

「ええ、甘さが苦さを超えました」  
一息ついてクッキーに手をついたらキツネさんの目が『それで?』  
と問いかけてきた。

『キツネさん』・・・そんな名前をつけちゃうように、キツネさんの目は細い。

まあ細すぎて線になるようなことは無いけれど、すくなくとも黒目の動きははつきりと見れる。

ついでに言えばキツネさんはカツコいい部類に入る。真ん中分け黒髪に、健康的な白い肌、スレンダーで手足の長いキツネさんは彼のオーラもあつて近づきにくいカツコいい男性、という位置付けになる。

私から言わせてもらえば、おもしろい人が一番に浮かんで来るんだけどな。

無言の問いかけにクッキーを口に放り込み、バツクの上に置いた本をドンツとコーヒーがこぼれない様にカウンターに置いた。キツ

ネさんは「ふむ」と顎に手を当てて『考えてます』のポーズをとる。

「学校の図書館から借りてしまいました」

そういつて何か書いてあるうけど全く読めない表紙をめくる。

中表紙には何も書かれていない。さらにめくっても全て白紙なその本。

「ふむ…これはこれは」

「何でしょう?」

嫌な予感がかないりしますが、聞いておかないといけなない気がして。

「随分ご立派な『主人公フラグ』を立てましたねえ」

「……はい?」

甘いコーヒーはまだ温かさをもっているが、そんなのを飲んでいる状況ではなくなってしまうた。

主人公フラグ：それは何もしなくてもトンデモなイベントに強制参加、多少の補正はアリかもしれないけれど、鬼畜な場合は死亡フラグも遠慮なく待ち受けている。

うん…明らかに私が好きな平穩とは程遠いよね。

「も、もしかしてココに来るまでやけに人と目が合ったり視線を感じたりしたのは…」

「ええ、『主人公』だからです」

「でもなんで？ 主人公だから目立つのはこの際認めるけどさ、それって身近なトコだけじゃないの？」

例えばハーレム設定の物語の主人公とヒロインたちだけ、とかさ。

「何言ってるんです、主人公に鈍感というオプションは付きモノですよ」

ガクッ

「…この本を返したらフラグも返却できますか？」

「無理ですね」

でーすーよーねー。

「返そうとしても『この本は我が校の物ではありません』とか言われて手放せないでしょうね」

「じゃあ捨てたら…？」

例え図書館の本とされても「無くしました」とちゃんとした手続きとかすれば問題ない筈。

通常ならば、の話。

「ホラーな展開、望みますか？」

いーやーだー。

ゴチン

木製のカウンターに額を押し付ける。

頭のすぐ側にあるであろう

元凶にため息が出た。

そしてそのまま1、2、3で、ハイ。

「キツネさん」

「何ですか？」

ため息をついてそのまま悲観に暮れてもしようもない。

顔を上げ、まっすぐキツネさんの顔を見る。

キツネ目の中にある真つ黒な瞳が私の茶色の瞳とぶつかる。

「どうやったら早く終われると思います？」

主人公という役目を負ってしまったからすでに「物語」が始まっている、もしくは待ち受けていると考えられる。すでに「不可解な本を手に入れた」なんていう「イベント」が起きてしまったのだから。

つまり。「物語」が無事終幕を迎えることが出来れば私の「主人公」という役目は終わり。

これまでの平穏な生活を過ごしてきた私に戻るのだ。

「…そうですね」

ブラックのコーヒーを一口。ついでに私も甘いのを一口。

「無駄にイベントを起こしまくって、早く結末へ近づくことですね」  
スツと細長いきれいに整えられた指が何も書かれていない本をめくる。

私はただじつとその様子を見ていた。

赤い布製のハードカバーは擦り切れていて何が書いてあるのか読めない。

その中の何も書かれていない白紙がパラパラと。

「何も書かれていない本…これが始まりなら、白紙を埋め切れたら終わりでしょう」

「埋め切れたら、ねえ…」

私を「主人公」なんていうポジションにした原因を睨む。

一見何て事のないその外見にムカつきが沸いてくるが、カバンに入

らなかったり「重い」と感じることからソイツはムダに厚い、とてつもなく。ムカつき度アップ。

「インクを垂らして真っ黒に」

「却下。何が起きるか予測できません」

「他の人に差し上げる」

「却下。すでに始まっているから他人に譲ることは出来ないですよ。」

それに何かあった時のために手元にその本があった方が良いと思いますよ」

「むう・・・せめて白紙じゃなくて未来が書いてあるパターンならなあ」

その通りに行くとは別にして、そのきっかけや流れを知っているといいのでは大分違う。

『構え』という姿勢が取れば対処もしやすいし、常に気を張らなくて良いからね。

トントン。

考え込んでいた私を現実に引き戻して、キツネさんはこう言った。

「未来日記、というのはどうでしょう?」

「はい?」

「ですから、これから起きることを本に書いてしまっんです。

未来をこちらで決められるなら心配は無いですし、ラクに埋められるでしょう」

書いたことが本当に起きるかはわかりませんが。とまあ・・・何て素敵な方法でしょう。

「ノッタ!!!」

静かな喫茶店に私の声が響き渡る。

良かった、他にお客さんがいなくて。うん。

善は急げ!とかじゃないけれど早速実行することにした私。

カバンから筆箱を出し、中からボールペンを取り出す。  
何でシャーペンじゃないかって？

消しゴムで消えるような文字だとこれから書く未来の信憑性が薄そうだな、と。

まああとは私がシャーペンよりもボールペンが好きただけなんだけど。

「突拍子の無い事は書かないほうが良いですよ。ちゃんと現実で有り得る範囲でないと」

「んーそれじゃあ明日の予定ぐらいでいいか。」

学校に行つて帰りにココに寄つて家に帰りました、みたいな。

まあ試してみましょ、って感じで。これでハプニングが起きれば書いても意味が無いつて事だし」

「そうですね、取り合えずそのような感じであれば問題が起きない筈ですから」

では早速！

ボールペンを持ち、まずは何だろう…明日のことを書くのだから、5月14日、か。

カリカリ…？

「？」

「？」

カリカリ…カリカリ…ガリガリ…ツポイ。

「無理です」

書けない。

指で触つた感じも見た感じも特に何ら特殊加工されていない普通の紙なんだけど、その上にボールペンを走らせても何も無い。思いつきり力を入れても紙はへこみもしない、有り得ないただの紙だった。最後は諦めてボールペンを投げた音。

「ということは何らかのイベントが起きた後に文字が浮かんでくるとかでしょうかね？」

「ん…もしかしたらさ、自分でそのイベントが起きた後にソレを

本に書くんじゃないのかなあ」

「……」

あれ？

甘いコーヒーに口をつけながら引っかかる。

「…今なんて言ったか思い出してみましょうか」

「『自分でそのイベントが起きた後にソレを本に書くんじゃないのかなあ』、です」

やべえ。

「もしかして私、やっちゃんいました？」

「ええやっちゃんいました」

「や、やっちゃんいましたか…」

やっちゃんたぜ！なんて決め付けている場合じゃない。

ここには物語の方向性を示すものがない。

主人公はどうすればいいのかというのと、説明してくれる相棒もしくは脇役…そんな存在。

私がこの本を手にしてから物語が始まったとしたら、ここまでの登場人物は二人。

私とキツネさん。

けれど「どうしよう」の段階でそういった存在がいなくなれば大体が登場人物の誰かしらが言った台詞に「答え」が隠されているもので。

つまり。

私は「自分でそのイベントが起きた後にソレを本に書くんじゃないのかなあ」が「答え」で、そうやって白紙を埋めるしかないということだ。

イベントというのに完全に受け身であるこの状況はヤヴァいのである。

「…ハア」

「まあ今まで通りの行動しか取らなければ最低限のイベントしか発生しないでしょう」

「受けるのはやってくるモノのみって事ですか」

それがトンデモな事じゃなければ良いんですけれどね。

心の中でそう足してクツキーを何個か口に放り投げて甘いコーヒで流す。

ふう。

口の中にモノが無くなったところでキツネさんと目が合う。

「残りのクツキー1枚、どちらが食べましょうか？」

…食べたければどうぞ。

私はあえて視線でそう答えた。

しばらくの間、私は白紙と向き合った。

一軒家である私の家は小さい二階建て。 両親と兄と私の4人暮らし

なので特に小さいとは思わないし、ちゃんと兄妹各一室与えられているので不満は無い。

現在自室の電気は消しており、机の上のスタンドライトのみが私と白紙を照らしている。

手に持っているのは「タヌキ堂」で書けなかったボールペン。

念のため先程メモ用紙に試し書きは済ませておいた。これでボールペンに問題なし。

「……」

何を書こう。

何の説明も無いこの状態で気楽に書けない。

まあ自分の発言から今日のことを書くんだな、という答えはすでに  
出ている。

つまりは「日記」に近いんだな。

そうとわかればペンが動く…わけではない。

自慢じゃないけど、私は「日記」は続けられない。

過去に書くこうとして挫折したこと4回以上。小学生の夏休み日記  
もある程度溜めてから書いていたし。

そんな私が「日記」を書けば途中で飽きて放置する。

例えばそれが私を「主人公」に仕立て上げたとしても。嫌なもんは嫌  
だし。めんどい。

何だか段々イライラしてきた。

「あーもう！」

隣の部屋では両親が寝ているはずなんで、声は抑え目で。

それとは反対に、ペンは荒々しく動いた。

とにかく思ったことを書いていけばいいんだろう！

『書き始めは何にしよう…私は困ってしまった。』

徒競走でスタートしようとしたらピストルの音を待ちわびている  
のに鳴った瞬間走る気力が無くなったっていうか、さあ頑張るぞ！  
って言ったら何を？と質問されて何だっけ？と答えてしまっくら。

んー何を書くこうか、ね。　　まずそもそも始まりは『この本』だ。

』

書き始めてみると意外とスラスラ手が動いた。

学校の図書館で変な本を借りてしまった事、タヌキ堂でキツネさん  
と本について話した事…。

書き終わってから読み返してみるとキツネさんの名前（キツネさんも本名じゃないんだけど）しかないことに気づく。慌てて私の名前を追加して、こう締めくくるところにした。

『最後に。ちなみにコレを書いている私は 小鳥遊<sup>たかなし</sup> 小鳥<sup>ことり</sup>という名前。

キツネさんからは小鳥さん、オーナーさんからはヒナちゃん（小鳥＝雛鳥）

学校の友達からは小鳥遊、小鳥遊さん、小鳥さん…さん付けが多い。

家族からはヒナと呼ばれている。（オーナーと同じ発想）  
追記。

但し、「ヒナ」と許可無しで呼ぶことは禁じます。

そうして本を閉じ、明日は何事もないよう祈りながら私は眠りに落ちた。

…って。何フツーに書けているのをつつこまないんだ、私。

その1 『わたしとキツネさんと赤い本との初日』 (後書き)

本文は日記の内容か物語のそれかは読者さんの判断でどうぞ。

\* 8 / 4 (木) 修正。

その2 『少年を見送った日』上

何にも書かれていない本を（不本意で）手に入れ、（迷惑な）主人公フラグを持たされた

私、たかなし小鳥遊 ことり小鳥。

高校一年生でまあ小鳥は大丈夫でしょう。けれどこの先が不安です。

どんなに年を取ろうと私は「小鳥」なんですね…お母さん（名付け親）。

現在 何も書かれていない本 は タイトルの無い本 へと進化しました。（てってれー）

昨夜どうやって（不本意で）本を手に入れたかをキャスト私とキツネさんの二人で低コストに綴った。そのおかげで少なくとも私の日記もどきがあるおかげでタイトルのみが無い、ってことになったんだけどねー。

タイトルは学校の帰りに「ためき堂」に寄って、キツネさんと考えようかと思っている。

勿論、今日この本に書くことはそれにしようと思っただけであって昨日決めたわけでもないけど。

適当でいいんだよな。　　ってか、よくよく考えたら作者名も書く必要があるのだろうか？

本名で書くのもあれだし…ペンネームを考える…あ、これ話題として使えるな。

5月14日　木曜日　　天気は良好、晴れです。

でもこれだけ陽射しが眩しいと帽子か日傘が欲しい。　　けれど残念ながら私服OKな高校で

「なんちゃって制服」を着ているため、帽子は無理そうです。

一応説明はしておくけど、「なんちゃって制服」というのはそのまんま、自分で自由にコーディネートした制服、または制服風な私服、といえは良いのだろうか。

Yシャツにクリーム色のサマーセーター、紺色の膝上丈10センチのスカート、同色の靴下。

あとは気分でパチッと止めるネクタイ…生憎今日は付けていないけど。

まあともかく。(一部除くが)学生制服には帽子が似合わないってことです。うん。

いつも通りの道のりを今日書く文章を考えながら進む。

気が付けば駅から出て歩いて10分の道のりの途中…随分考えていたようだ。

少し早めに家を出ているため同じ学校の生徒もあまり見かけず、むしろ駅に向かう人の方が多い。

とはいえもう少し歩けば同じ学校の人しか見かけなくなるんだけどね。

そうやっていつも通りの周りの様子を楽しみながら、歩く。

そのまま学校に着けば・・・着けばよかったんだけど。

頭の中にあの タイトルの無い本 が強引に浮かび上がってきた。

「異世界に行きたい!!」

「っそ。 じゃあ叶えてあげる」

「え、マジでー！」

「うん、マジマジ。」

あー。

「でもさ、どうやって？」

「何言っているの、そんなのは『魔法』よ」

「おー異世界召喚ってヤツだな！」

「そうそう。 私が送ってあげる」

浮かび上がってきたことをツッコもうと思ったけど…一言言おう。

ナンダコレハ

隠れた近道として公園を突っ切ろうとしただけなのに、ってというか私の通学道でなんだ、この目の前の異界光景。

学生バックにYシャツ…バックが近くの私立男子高校の物なのでそ

この生徒に、謎の美少女。

服装は至ってシンプルなミニスカワンピース。けれど色は魔女の如く紫だ。

少年よ、怪しいと思わないのか、人形みたいな顔をしているが見たまんまでいえば彼女は『魔女』だ。

ミニスカだけど。

「どんな世界がいい？」

「やっぱりファンタジーじゃなきゃな！」

「ふぁんたじー？ 何ソレ？」

「んーまあ、この世界に無い魔法や人種がいるとこってカンジ」

「っそ。でもそれだと候補が多すぎるわよ？」

「どんな候補があんの？」

「えっとねー」

ゴソゴソとポケットから紙の束を取り出す魔女（ほぼ確定）な美少

女。

っっていうか、どうする私!?

少年と美少女は互いに見つめあって集中しているようで私に気づいていないが

私からは会話が聞き取れるほど実はそれほど距離は長くない。

危ない薰り満点すぎるこの状況に逃げ出さたくて逃げ出さたくて…。

とはいえ地面は小石混じりの土で無音で逃げられるとは思えない。

その前にこういった見ちゃいけない状況を前にして逃げ出したらかすかな音でも聞き取られて

私の存在がバレるっっていうのがお決まりじゃないだろうか？

ならばこのまま知らん顔して通り過ぎれば…

いや、あえて「おはようございます」と挨拶をして通り過ぎれば…

逆に一切動かないで息を殺して去るのを待てば…

ヤバい…上手い逃げ出し方が思いつかない。

あーだこーだと考えてもどれも「私の存在がバレない」ですんなり終わってくれない。

これって『巻き込まれ』パターンじゃないでしょうか、キツネさん  
…。

鞆に何とか詰めこめられたずっしりな本の存在を思い出しながら問  
いかけてみれば  
脳内でニコヤカに「王道ですね」とキツネさん。

そうか、まずは王道…ってんなもんいるか！

その2 『少年を見送った日』上(後書き)

ちよっと長かったので、上下に。

その2 『少年を見送った日』 下（前書き）

トボセシブーの話を「その2」です。

その2 『少年を見送った日』 下

小鳥遊<sup>たかなし</sup> 小鳥<sup>ことり</sup>です。

昨日は主人公フラグ、そして今日は巻き込まれフラグですか。

いやーこれはこれは派手に立ち上げますね……。

はい、現実逃避を止めます。

状況は簡単に言えば予想通りという感じ。

ええ、見分かりました。

昨日思わず「ツッコミを口に出してしまった」から主人公フラグを  
手に入れてしまったのに先程も「んなもんいるか!」と「ツッコミ  
を口に出してしまった」んですよ。

そんなことをすれば当然の事ながら異世界の魔女（脳内確定）美少  
女が真っ先に私を見つけ、学生の少年も同じく。

「へえ、アルファベットを崩したような字なんだねー」

「だよな、全く読めない」

「当然でしょ。私の使っている文字なんだから」

「ここに書かれている世界に行けるって事でしょ？」

「っそ。ほとんど魔法がある世界だけど、ドレがいい？」

「ドレって言われてもなあー」

そして現在その異界光景に参加してます。

上から私、少年、美少女、私、美少女、少年。

少年…名前を聞きそびれているのでわからないけれど、近くによって顔を見ればそれなりに整っている顔立ちだった。

「異世界に行きたい」などとほざいているので中身が幼いだろっが「異世界冒険」とかすれば立派な青年になるでしょう、マル。

…主人公ってこんな感じだよな、っていう感想を思わせる確立100%

つまり。

こんなヤツに任せていたらトンデもな世界に飛ばされかねないってことだ。

「決定権がキミにあるようだから聞くけどさ、どんな異世界がいいの？」

「どんなって・・・魔法があって人間以外の種族があったり・・・」

ダメだ、これは。

「あのね、異世界そのものにそんな要求するんじゃないって、もうちょっと自分に欲張ってみようって」

「自分に欲張る？」

「そーね。その方が世界も絞れるし、あたしは賛成よ」

美少女（魔女）からのお許しも出たので、早速少年と会議することに。

∴あ。これって私も一緒に飛ばされる前提だったりする？

ヤバい。

「魔法は使いたい？」

「もちろんっ！」

「じゃあ「魔法剣士」と「魔法使い」、どっちになりたいの？」

「んーやっぱ剣道してるし、けど魔法も使いたいから「魔法剣士」  
だっ」

「決まった」

なにが？と、とぼ（フザ）けた少年は無視し、美少女（魔女）何度も言ってる（の）方に向く。

「どんなトコロがいい？」

「一言で言えば、彼を勇者として歓迎する、世界、だね」

「そ。」

我ながら良い条件を付けた、と満足しながら美少女（魔女）が紙束をパラパラと捲る様を見る。

どのページも蛇みたいに崩れたアルファベットがズラズラ。目に

入る単語が全く読めないしわからないので文字通り見るだけだが、果たして本当にそんな異世界が見つかるのやら。

「…ゆ…勇者…募集中は…魔法行使可は…」

その紙束は求人募集誌ですか。

色々とツッコミ過ぎると本当に巻き込まれてしまつと危惧し、ノドまで来ていた言葉を飲み込む。

ふー危ない危ない。

「あつたわ。」

例え少年と一緒に飛ばされる前提で決まったとしても…ってあれ？

一緒に飛ばされるなんてヒロイン…？ってダメじゃん！

私はそーゆーコトっていうかそもそも自分の日常以外に関わらない方針の元、生きていくとしたのに！

「じゃ、早速キミを希望の「ふぁんたじー」な世界に送るね」

「え、今すぐ？」

「っそ。思い立ったら吉日って言うんだっけ？ まあこの世界のモノはホトンド使えないから色々準備してっても無駄だし。なら別に今でも問題はないでしょ」

「あーまあーそうなるのか？」

「そうなるの。」

美少女（魔女）と少年が話しているのを横目に見ながら私はどうするのかを考えた。

このままだと私は少年と飛ばされてしまうのか？ いや、美少女（魔女）の言葉だと少年のみっぽいし何やら二人の世界に突入しかけているから私は無関係な人間としてこのままフェードアウトか？  
なら一歩後退して異界光景から脱することが一番最適だと思うし、

すぐにそれを実行することが大事だ。

けれどまたそれによって二人…ってどうか美少女（魔女）に目を付けられたらもお仕舞いだ。

穏便にこの場面をやり過ぎせばいいのか…何かしらを捨てなければ逃げられないのはわかるがそれによって日常を失うのはやってはならないことである。

だからといって……。

「ねえねえ」

あ。

「…何でしょう？」

考えることに嵌まり込んでいた私は美少女（魔女）に否定したい現実に戻された。

「カレの見送りはしないの？」

「へ？」

美少女（魔女）の指差す方を見てみれば何やら幾何学模様や出身不明の文字によって複雑に描かれた「魔方陣」。

その上には興奮やら不安で表情をカッチカチにした少年の姿が。

あれ…？ どうやら私は「異世界に勇者として召喚される少年を見送る」というイベント中らしい。

え、もしかして悩んだのは無駄ってことですか。

まあ私が巻き込まれないのはわかったのでここは「見送る」しかないだろう。

と、いうことで。

「少年」

「少年？ あ、はい」

「主人公だからって油断しないように頑張つて。

私はココにずっといるからさ、また会えたらどんな世界だったかその時は教えてよ」

「うん、わかった！」

やや強張っていたけれど笑顔が見れたので隣にいる美少女（魔女）に視線を送る。

名前をも知らない少年ってか、初めましてなのもスッ飛ばした状況

ではあるけれど「日常」から「非日常」へと自ら進んだのに敬意を称して「頑張れ」とエールを。

視線を受けた美少女（魔女）はちゃんと分かってくれたようで、魔方阵陣に向かって何かしらの言葉を呟くとソレは発光を強くし、眩しいくらいになった。

「……………！！！」

眩しさを腕をかざすことでなんとか堪えていたけれど、光が少年を塗りつぶすようにその姿が消されていく。

何やら少年がコツチに向かって声を上げていたがそれも光が消してしまつて何の音も聞こえなかった。

目を細めて少年の口の動きで読み取るうかとしたところで光と共にこの世界から消えてしまった。

こうして、私の目の前で「異世界召喚」イベントは終了した。

その2 『少年を見送った日』 下（後書き）

こんな感じで脇役みたいな？ポジションでこの物語の主人公は色々関わっていきます。もちろん、キツネさんも一緒に。

その2・5 『少年が旅立ったその後』(前書き)

間奏のような話です。多分。

## その2・5 『少年が旅立ったその後』

「異世界召喚」イベントは終了した。

そう、少年が私の目の前で消えた事で終わったはずだけど考えてみれば継続でイベントが起こり続けるのも何ら不思議ではないのだ。だって、紫色のミニスカワンプの美少女（魔女）が残っているじゃない

少年を、私が見送って美少女（魔女）が送って・・・隣に私からしたらある意味元凶がいるじゃないか。

「ねえ、待って」

二人だけになってしまったから「あ、ヤベ」と気づいて意識してスミーズにその場から去ろうとしたら呼び止められてしまった…。

あーあーあーあー…。

悲哀の言葉と涙がココロに響き渡ります。

「アナタは何？」

「何って…この辺の高校に通う学生の一人、小鳥遊 小鳥です」

「その『小鳥遊 小鳥』って何？」

「はい…？」

え、この美少女（魔女）は何を私から聞き出したいのだろうか。

私の名前の由来？コレまでの人生？それとも性格や嗜好を聞きたいのか？

何故私がこの場にいるのかを聞かれれば偶然だし、鞆の中に押し込まれた分厚い例の本のせいかもしれない。

だが私が何なのかはコレに当てはまらないし、昨日手にしたものに私を定義付けられるのはいささか不愉快な気分になる。

「…っそ。ヒトは己がナニかだなんて認識しきるなんてわからないモノだものね」

顔は無表情だが一人納得しているようにウンウン頷く美少女（魔女）。  
自然と眉を顰めてしまうのはしょうがない。

「美少女（魔女）さん、私もう行ってもいいでしょうか」  
大分ここで時間をくってしまったし、というか登校途中だった。  
せっかく早めに来てるのに急がないと。もしかしたら遅刻かもしれない。

「ああ、ソレであたしを呼んでいたのね。っそ、いいわソレで。じゃね」

去ろうとしていた足を再起動させて私は早足で近道の公園を突き進んだ。

回れ右をした時、美少女（魔女）が表情を笑顔にして手を振ってバイバイしているのを、見た気がする。

近道の公園を抜けてまっすぐ、目の前の青の歩道信号で渡れば学校だ。

ただ信号機の所に来たところで赤になってしまったのでお休み。車の通りが激しいので赤で渡ろうとするヒトは全くいない。

まあ信号待ちしているのは私一人なだけだ。  
道路の向こうに門があつて、その奥には校舎が見える。

そんなんだから登校時間内であるならば生徒一人見ないというのは逆に難しい。

「もしかしてもう授業始まっていたりするのかな…？」

車が通り過ぎるので声は私しか聞こえていなく、ポケットに入っている懐中時計を出す。

慣れた動作で時計を覗いてみれば・・・

「し…7時10分？」

何故だ。

いつもならこの+1時間の8時10分に到着しているはずで、あんなイベントがあつたなら+2時間としてもおかしくない。それくらい的时间を感じたんだから。

信号が青になる。

慌てなくてもいい、むしろゆっくりし過ぎたほうがいいんだけど…  
慌てる。

ズカズカと学校の門を抜け、ズカズカと校舎へ歩く。

この状況でパニックになるのは簡単だけどそれを表現するのは「非日常」を曝け出している様で私が許せない。

私、小鳥遊たかなし 小鳥は「日常」をこよなく愛する女子高生である。

何を今更、な顔で脳内のキツネさんが私を哀れむが…許せないのだから仕方ないでしょうが。

この時ばかりは忘れていた名前の無い赤い本ではなく、紫ミニスカワンピースの魔女（美少女）を私に意識させた。

ふんっ、絶対に『本』に書いてやるもんかつ！！

そう決意した私は余分な時間を有効活用（睡眠）すべく、誰もいな

い教室の扉を開けた。

その2・5 『少年が旅立ったその後』（後書き）

次話から「ラブコメ編」になります。ラブコメの定義が怪しい作者ですが、私なりの「ラブコメ」ということで。けれども主人公の小鳥は相変わらず「巻き込まれ」なので期待しないでください。

その3 『わたし』という名が記された日 (前書き)

ラブコメ編の前にもう一話あるの忘れてました。 うっかり。

### その3 『わたし』という名が記された日』

5月14日木曜日

私は本日の授業を終え、キツネさんのいる喫茶店「ためき堂」に駆け込み寺の如く逃げ込んだ。

そして今朝あった『初対面の少年を見送る』なんていうイベントについてキツネさんに報告したところ哀れみの微笑を贈られた。いらん。

まあココまでのことはココまで。 今日ためき堂に訪れたのは話しかかったからだ。

「その赤い本のタイトル、ですか？」

「うん。 やっているのはただの日記みただけどさ、書くことの話題作りにもなるし、

昨日は本を手に入れた経緯を書いたから今日はソレにしようかなって」

「…そうですね」

たぶん。 いや、きつとキツネさんは今日書くことは異世界召喚された少年のことだろう、と思っっているに違いない。

しょうがないじゃんか、ソレを書いちゃうと美少女（魔女）も付いてきちゃうんだから。 だからダメ。

ふーむ…。

私とキツネさんは二人して考え込んだ。 ただの日記なら「私の日記」やら「Diary」で済むが、また言うが今朝の出来事からトンドモな本であることが分かる。

そんな本に安直なタイトルで良いか、というので頭を悩ましているのだ。

「小鳥遊 小鳥の冒険日記」

「冒険の旅に飛ばされそうなので、拒否します」

「小鳥のほのぼの日記」

「…異世界ほのぼの、になりかねないんで拒否します」

とまあ思いつく限りキツネさんに候補を挙げてもらいましたが、全て拒否。

だって全部私にトラブルってかイベント起きるの確定だったし。何事も！ってか今後は平穩が命！と声を高らかに主張したい。

「ヒナちゃんいらっしやい」

「あ、タヌキさま」

タヌキさま…このタヌキ堂のオーナーで私のことを小鳥「雛鳥」ということから「ヒナちゃん」と呼んでいる人。

この喫茶店とは別の仕事もしているようで、店に居ないことが多いスラリとしたキツネさんに対し、タヌキさまは50代男性の平均的な体型…まあちょぴつとぽつちやり系といえはいいだろうか。

髪は真つ白ではあるが残念な頭ではなく「さま」と敬称をつけている通り上品なおジサマだ。

そんなタヌキさまは先程まで私以外にいた近所のおじさんと話し込んでいた。

どうやらおじさんは帰ったらしいので私とキツネさんがいるカウンターに来たようだ。

先程のおじさんは見かけたことあるので、それを振る。

「話してたのこの辺のどっかの店のおっちゃんだよね？この時間ってまだ店開いているんじゃないの？」

「んーまあそうだけど奥さんが店にいるしねえ…どうやら外人さん

一家が引つ越してくるらしいよ」

それとちよつと話して店に戻って行った、と。

「え、それだけ？」

「ちよーつとな話しにも付き合うのがご近所付き合いに大切だよー」  
いつもののほほんとした空気そのままにおっしゃるタヌキさま。

その言い方だとタヌキさまも「どうでもいい」と思っている様子である。

果たしてそれでいいのか？と聞き返したくもなるが、その話はもう終わったとばかりにタヌキさまは私とキツネさんの間にドーンと置かれた分厚い赤い本を見つけたようでした。

そうなれば当然話題がコレになるのは当然で。

「あ、もしかしてその本がキツネ君が言っていた『主人公フラグな本』？」

他人事なので興味津々に私の目の前に置かれている本を手取る。

「主人公ってワケじゃないですけど、面倒事が起きそうで」  
ええ本当に。

タヌキさまは昨日私が書いた本をゲットした経緯を書いたページを読み、あとは真っ白なページをパラパラと流す。その様子を見守るような私とキツネさん。

「ふーん……」

「日記形式の物語、ですか。面白そうではないですか」

・・・はい？ 返された赤い布カバーの分厚い本を受け取りながら、ちよつと思考が停止した。

何となく嫌な予感、ってか何かやらかした予感がする。

「で、この本でお話していたようですけど、シナリオについてですか？」

「いえタイトルが未定だったので小鳥さんとどんなのがいいか話し

てたんですが……」

「ああ確かに中表紙にタイトル書いてなかったですねえ」

「はあ……」

タヌキさんとキツネさんを見てみると、キツネさんも私と同様に何やら感じているようだ。

会話をしながらもどこか虚ろで視線が私の手の中の本に向いている。中表紙……？

耳に入った単語で右の表紙を捲ってみる。 右……？

「……あ」

私の呟きでキツネさんも気付いたらしい。 視線に哀れみ感じます。だからいらん。

やらかしたといえはやらかした。

漫画や小説、ノートなど、ご自分のお持ちの『紙を束ねたモノ』を思い浮かべてもらいたい。

ホチキスやらクリップやら自身の手で束ねたのや一部を除いて。

それらはどちら側から開くでしょうか？

簡単に言えば私は小説や漫画と同じく、右扉で書き始めてしまったのだ。

日記というのはノートと同じ左扉。

それではなく右扉であり、日付入りの文であったためタヌキさまは『日記形式の物語』と称したのだ。 まあ間違っていないですよ。うん。

『日記』という受動態な書き物ではなく、『物語』にしてしまったんですから、自分で。

「続き、楽しみにしてますよヒナちゃん」

「はあい……」

泣いてもいいですか？キツネさん…。

深夜自室。

昨日も同じシチュエーションで日記を書いていたが、寝る前に書くのがタイピングとしては丁度いい。

だから状況については記述無しとして…タイトルどうしようか。悩む。

結局ためき堂ではあのあとショックが意外と大きくて、タイトルどころじゃなくなったのだ。

ふと机の上の例の本を見て、「もしかしたら」とカバーを見る。

私が右扉としてしまったのは何かしらカバーに原因があったのかと思っただのだ。

そういえば何かコトバやら染みっぽいのがあったのを思い出して、まず『表紙』。

やはり。そこにはうつすらとだが何かしらあった。

そうだ、このせいで無意識に表紙をこっちにしてしまったんだ、と『裏表紙』を見る。…ってあれ？

「両方あるじゃん」

え？リバーシブル？んなワケないか。大きさは違うけれど、カバーのソレは両面あって、つまり『勝手に私がやらかした』ですね、ええコレは。だから哀れみはいらん。（脳内のキツネさん）

カチ。

秒針が「12」を指し、それでも走り続ける。ああ、日付が変わってしまっただ。

朝の登校時間が魔女（美少女）のオカゲで早まったが友人の突撃な愚痴で潰れたので、眠い。

タイトル…タイトル…たいとる…。

考えても考えても気に入るモノが思いつかない。ああ、もうシンプルでいいよね。  
シンプルイズザベスト。

『この本のタイトルについて今日色々と考えて話し合ったりしたけれど、思いつかない。

どうも「物語」な感じな強制イベントがくるようなんで何かしら変な方向付けするようなのはダメ、

そう思っただんでありのままにするとしよう。 ありのまま…まあそう考えると「本と私」？

本を手にした少女が巻き込まれる…ええまさにそんな感じ。

だけどさ、現実だけど否定したい。なら…ん？なら？ あ、そうだ。良い事思いついた。

これならまだマシでしょう。

【わたしとキツネさんと赤い本】

だって、私だけってイヤ（面倒）だし、それに一人よりも二人いたほうが何かと良いよね！

…だからキツネさんも一緒に。』

明日この中表紙をキツネさんに見せてどう反応するかちょっと楽しみになったのだった。

その3 『わたし』という名が記された日 (後書き)

次回から本当にラブコメ編。この物語は主人公の特性上、脇役以下一般人な視点のつもりで読んでいただけると楽しめるかもしれない。たぶん。

#### その4 『ラブコメ的展開を見た日』上

私がこの『わたしとキツネさんと赤い本』なんて名付けた本をゲットしてから『主人公フラグ』なんていうのを押し付けられ、外を出歩く際に人の視線をよく感じるようになった。

とはいえ平均的な女子高生の外見な私である。無意識に確認するようなチラ見程度がほとんどで、そういった対象にならないのが現状だ。

悲しくはない、だって「普通」を嫌うのはおかしな話でしょう？

そして今日登校する際にもいくつかの視線を感じたが、三日目ということもあり大分慣れてきた。

脇役以下一般人を自負する私 小鳥遊<sup>たかなし</sup> 小鳥<sup>ことり</sup>であるからどんなにも敏感なのは仕方ない。

5月15日金曜日。

一昨日昨日と同じパターンで行けば「ためき堂」に場面が変わるんだけど、今日は違う。

私は今、通っている公立学校の階段広場にいる。

まあ説明すると、この学校の校舎は上から見ると「8の字」型で、8の二つの穴は二階から三階への階段及び広場となっているのだ。生徒が出入りできるのは片方だけでもう一つは植物を置いて緑を配置している。

で、私ら生徒が使うのは階段兼広場であるため「階段広場」と呼んでいる。

その階段には木の板が設置してベンチとしても使えるため、天気の良い日はそこで昼食を食べたりするのだ。

そして現在、私は友人と二人で昼食をそこで食べていたりする。天候はどんな曇りのためそれほど生徒がいないが目の前の友人は関係ないらしい。

この友人は漆原<sup>しつじほ</sup> 有希<sup>ゆき</sup>。

私と同じ中学校出身で、たまたま高校が一緒だったのだ。

中学の時はクラスメイトではなかったので親しくなる機会が無かったのだが、同じ中学出身との事で高校生になってから急に親しくなったのだ。

私は彼女を「有希ちゃん」と呼んでいるが、それは少数だったりする。

というのも、「漆原 有希」は「姐さん」キャラなのだ。

同級生は勿論、上級生にも敬語を無意識に使わせる雰囲気を持ち主で、性格も皆のリーダー格になるような「強い女性」。あと、ついでに当然の如く「美少女」である。

なので彼女を呼ぶ際は「有希」や「有希さん」、「漆原さん」と「ちゃん付け」をする人はほとんどいない。

一緒に食事中の有希ちゃんは私の方に身体を向けながらもキレイに弁当を平らげて行き、その様は男子生徒の「眼福」なるものになるらしい。

まあ実際有希ちゃんが入学してから撮られた（隠し撮り）写真が密売買されているっつー噂が公然とあるし。

「小鳥、聞いてくれる!？」

「あー現在進行形で聞いてますとも」

「なら良し!」

なんでこんな生まれながらの『主人公』と一緒にランチをしているのかと思えば、彼女は私に愚痴りたいのだ。

ていつか愚痴っています。

こんな「美少女」が何故こんなにも不満が溜まっているのか、という和有希ちゃんは確かに「美少女」だが恋愛事は現在NOなのだ。

理由は一部なら私は知っているがそれは置いて。

告白なんて4月で両手の指が足らないほど連続斬り。

それはもう容赦ないほどの斬り様だったらしく、5月にはいるとよほどの兵しか斬られにいかないらしい。

私もそれほど恋愛事に興味はないので有希ちゃんがうらやましいとかは一切思わないが、他の女子生徒はそうはいかない。

最近、有希ちゃんはある一人の生徒を斬り続けている。

今聞かされている愚痴というのはほとんどその斬り様だし、ってか昨日から十二回斬り続けているって。

純粹に斬る方も斬られる方もすげえと感心せざる負えない。

そして聞き耳を立てていた男子生徒らはほとんど蒼褪めているが、まあ問題ないでしょう。

で、話は少しズレたかもしれないけど、有希ちゃんは斬り続けている容赦なく。

けれども散らないのをどう散らしたらいいのか、または散らない不満を話す相手が私しかいないのだ。

他の女子生徒からしてみると「斬らなきゃいいじゃん」で終わってしまう。というのもココが大事。

斬られ役が『美少年』。

何でも外国からの転入生。幼少の頃向こうに越したため純日本人だが数年の滞在で英語は完璧。

つい二日前に越してきて、有希ちゃんのクラス1Bに編入。  
そんな彼・・・君島トオルは有希ちゃんの元お隣さんで現お隣さん  
でもあつて幼馴染だという。

「…何ですと？」

「だからー。 あいつは小学校3年まで家がお隣の幼馴染だったの  
よ！」

「で、転入早々有希ちゃんに告白したの？」

いつの間にか食べ終わってたお弁当を膝の上に置いて熱く語る有希ち  
ゃん。

ちよつと、まだ私食べ終わっていないんですけど。

「『帰り道まだ越したばかりで不安で、同じ方向って先生から聞い  
たから良ければ

一緒に帰らない？』なんて言つて！　　そこで私の家の前まで来

て『久しぶりだね、有希ちゃん』

なんて…なんてなんてえ!!!」

「で、告られたんですか」

「勿論斬り捨てただけだね」

ああさすが姉御。

そんな声が周囲から聞こえた気もするが、怖いから無視する。

けれど確かに言い切った有希ちゃんは迷いがなくカッコ良かったよ。  
うん。

「色々つーかほとんど聞いてあげたけどさ、私に何をして欲しいの  
さ？」

カッコ良い有希ちゃんがただ愚痴るだけってのはないと思う。

まあ友人の愚痴を聞くだけでスッキリするなら聞いてあげるんだけ  
どね。

「ヤツとの接触を最小限にする。　だからそれに小鳥も協力してほ  
しいのよ」

えー。とは内心思ったが出さない。えらいぞ私。

「…具体的に？」

おそろおそろ聞いてみる。

「下校登校を一緒に。明日の休みも私の買い物に付き合っ

えー。とは（ry…

「いいよ。有希ちゃんがそんだけやる気なら協力したいし」

「ありがと！ 小鳥！！」

ガバツと勢いよく抱きついてきた有希ちゃん。

彼女の方が背が大きいため包まれているような感じで。

ちよ…小鳥並な小ささとか思ったのは気のせい！うん、気のせいだよね！

あ、胸が顔の目の前にある…って意外とでかかった！？

って、んなコトより私の昼食の残り<sup>パン</sup>食べさせて！

慌てて彼女を引き剥がそうと肩に手をかける。

パンも持っているので片手だったが予想してたよりも力が強く、もう片方の手もってパンが…あっ！！

埋もれながらも手から落ちていくパンを見る。…私のお気に入りのパン。

そして気が付く。

パンの先に学校指定の上履きが見える。

各所に配色されているのは「赤」なので、私と同じ一年生。

それにしても随分と新品だな…新品？

「…あ。」

私の声到有希ちゃんも私の視線を追う。

そして露骨に嫌な顔をした。

「有希、もうすぐ授業の予鈴がなるから迎いに来たよ」

「次は選択で私は『美術』、アンタは『音楽』でしょうが」

「俺の授業覚えてくれてるんだ？ 嬉しいねえ」

「『一緒じゃない授業』だもの、当然じゃない」

鳥肌が立ちそうなくらい寒い空気がこの場を支配する。

容赦なく存在を斬り捨てる有希ちゃんと微笑を浮かべるまさに『美少年』な君島トオル。

え？ 何この展開。

「教材を取りに来るだろうから教室にいても良かったんだけどさ、有希がいないし。」

「つまらないから迎えに来てあげたんだよ？」

「私のためじゃなくてアンタのためでしょうが。 第一ただのクラ

スメイトを何で『お迎え』するのよ」

「有希が好きだから。付き合っただけから。」

「……」

言い切った…！言い切ったよこの人！

やはり外国の風土のせいなのか、コレは。

そして確認してないけど有希ちゃんから阿修羅のようなオーラが…！  
うわぁ13回目の一刀両断確定だねこりゃ。

スク…スタスタ…ズドム。

「寝言ほざくのは墓の中でしなさいよね」

一刀両断は一撃必殺でした。

皆が固まる中、一直線にかつ流れるような動作で君島トオルの前に立つとお弁当をグローブに腹に一撃。

崩れ落ちた君島トオルに冷ややかな視線と共に言い放つ有希ちゃん

はカッコ良かったが：ちょっと怖かった。

「じゃあ小鳥」

「は、はいっ！」

「さっきの話、頼むわね？」

「イエッサー！ 出来る限りするよー！」

頼むわね、と崩れ落ちたソレ（十三回目）をそのままに有希ちゃんは颯爽と教室に戻っていった。

有希ちゃんを見えなくなるまで固まったままでいたらキーンコーンカーンコーンと解呪の鐘がようやく鳴り響き、周囲で固まっていた生徒が次の授業のためにそれぞれ動き始めた。私も教室に戻らないと。

横に置いてあった飲み物を手にして：：どうしよう。

地面に放置された私の昼食の残り（パン）。\*人影は無視。

3分ルール適用で良いですか、キツネさん：：。

その4 『ラブコメ的展開を見た日』 下(前書き)

場面はいつもの喫茶店から。

#### その4 『ラブコメ的展開を見た日』下

「・・・と、まあまた何やら起きたみたいです。 キツネさん」  
「今度はラブコメですか」  
「・・・はい？」

有希ちゃんのご要望通り一緒に下校し（君島トオルは部活を見に行つた）、中学が同じということからわかると思うが家もそれほど離れていなく、そのため最寄り駅は一緒なのだ。  
ただそこから西口と東口で方向が分かれるのだけど。  
私は東口に向かう有希ちゃんを見送つた後、駅内の本屋で時間を潰してから同じ方向の「東口」へと歩いた。

何故って、そりゃあ「たぬき堂」が「東口」方面の商店街の端っこにあるからなただけど。

商店街内の個人経営の喫茶店つてのは制服姿の少女が一人で入るにはかなりの勇気がいる。

私の場合、キツネさんに案内されて初めて「たぬき堂」に入ったからこうして常連客となっているが、そうじゃなかったらお店に入る機会なんてありそうにもない。

そんなところに駅の反対側に住んでいる私が常連客と友人に知られると・・・というか生まれ付いての「主人公」な有希ちゃんに知られたら「連れて行きなさいよ」とか言われそうだし・・・。

この「たぬき堂」は私の「逃げ場」でもあるので内緒にしておきたいのだ。

あとはただ単に私が秘密主義な性格っていうのも理由にしておこう。

「ラブコメって・・・私、もしかしてまた巻き込まれ？」  
「少なくとも主人公ばりな美少年が好きな少女にとつて『主人公く小鳥さん』な状況なんですから、間男ならぬ間女的な？」  
「いや、有希ちゃんには恋愛ごとお断りだからだし。普通に友達ですから。」  
少々イキ過ぎな勘違いをしているキツネさんに訂正をし、私の「いつもの」コーヒーを飲む。

本日の「ためき堂」は平和です。

私が来た時はタヌキ様もいたんだけど、挨拶もそこそこなところで電話がかかってきて忙しそうに二階に行ってしまった。

あ、この「ためき堂」は一階が喫茶店で、二階はタヌキ様の趣味が詰められているらしい。

他のお客さんもないしタヌキ様も忙しそうだし、苦さ無しの甘いコーヒーをキツネさんに淹れてもらい今日の報告をしたのだ。

それで返ってきたのが冒頭の会話となり現在となる。

「それで小鳥さん」

「何ですか？」

「今日はそのラブコメのことを書くんですか？」

「ああ・・・」

キツネさんの視線とその質問が私の学生バックに向けられているのを確認し、それに応えて押し込められた分厚い本（元凶）を取り出す。

いつものコーヒーといい私とキツネさんだけといい一昨日の状況そっくりだがまあ今はツツコまなくていいだろう。

「そうそう昨日のアレ、これに決定しましたって話を。」  
ペラリ。

『わたしとキツネさんと赤い本』

「・・・何ですと？」

「だって、一人より二人。それに初日から連続で出演しているの私とキツネさんだけですから」

少年の見送りは本に書いていないのでノーカウント。美少女（魔女）なんて言わずもがな。

「その思考もタイトルのセンスも色々と言いたいところですが・・・書いてしまっただんですよね」

「ええボールペンで」

「はあ・・・書いてしまっただんですか」

「ええええ、そうです」

軽く項垂れているキツネさんに哀れみの視線を送りながら優越感に浸っていると、階段を降りてくる音がした。

タンタンタン・・・

「タヌキ様、忙しそうだね？」

いつもマイペースで素敵なオジサマなタヌキ様がアワアワしているとなると、やはり気になる。

あちこち動き回ったのか髪の毛が少々乱れている。

「そうなんですよ。ここ2、3日で急に副業の方が忙しくなりましてね」

「オーナー、紅茶です。どうぞ」

「ありがとう、キツネ君」

はあー。

いつものコーヒーの私、紅茶のタヌキ様、お茶請けとして出されたクッキーを摘むキツネさん。

それぞれ一息入れてから会話を始める。

「キツネ君、悪いけどあつちの仕事が忙しくてお店に来れない日がありそう」

「それは困りましたね。平日なら大丈夫ですが、週末はやはり厳しいかと・・・」

「うん、僕もそう思っているんだ。だからさ、ヒナちゃん」  
「へ？」

話の内容から私に振られると思っていなく、驚いて顔を上げる。

「このお店『たぬき堂』で働いてみない？」

『タヌキ様の頼み事を私は受けることにした。』

私の通っている公立高校は制服もないし、校則もない。

そんなんだからバイトも勿論okだし、週末の土日は決まりで、平日はタヌキ様の都合で入ることに。

そうなると明日は土曜日なので早速、となるが明日は有希ちゃんとの約束で「買い物」に付き合わないといけないので明後日の日曜日から「たぬき堂」でバイトをすることになった。

タヌキ様にそういつた事情を話すと「青春だねえ」と微笑ましい笑みをいただき、ご理解してくれた。

ありがたい。』

本に「日記」を書くことも慣れてきて、スラスラとインクを乗せていく。

明日のことも考えて今日は早めに就寝すると決めているため、時計の針は未だ『12』を越えていない。

本当のところまだ眠くはないのだけど、明日イヤこれからを考える  
と寝て良いのなら寝ていたほうがいいのかも。精神的にね。

『今日の出来事をキツネさんに「ラブコメ」と評されたっていうことは明日も有希ちゃんがいるし、我が高校はラブコメの舞台と成り果てているのかもしれない。

そうなってしまう以上は『脇役以下一般人』に成りすますのが一番と思う。』

「何を今更」な表情をしたキツネさん（脳内）は本のタイトルを見せ付けたときの表情で帳消しをした。

これで良し。

『兎も角、明日の買い物が必要な買い物であること祈ろう。』

パタンと本を閉じ、何と書いてあるか分からない表紙を視線で一撫でてからお気に入りのボールペンを置いた。

「・・・んっっ」

背もたれに体重を預けて、固まりかけた体をほぐす。

そうすると本日の疲れが押し寄せてきて、もしかしたらすぐに寝れるかもしれない。

ラッキーと思いつつ背後のベットに向かおうとすると・・・

「何だ。 12時過ぎているじゃん」

そりゃあいつも通りの時間なら眠くなるよね。

有希ちゃんとの待ち合わせに合わせた時間に目覚ましのタイマーをセットし、私は布団にもぐりこんだ。

その4 『ラブコメ的展開を見た日』 下（後書き）

もし1つの話が4つ以上での投稿になったら？とか？での投稿になりそうです。

\*7/7 脱字修正

その5 『彼女がヒロインと気付いた日』上(前書き)

その5は上・中・下の三つです。

今週中に分けて投稿します。

## その5 『彼女がヒロインと気付いた日』上

5月16日土曜日。

炎天下、ではないものの太陽の陽射しが強く眩しい天気。まあ要するに「良い天気」なんです。

私は姉御で友人の漆原うるしはら 有希ちゃんゆきちゃんの要請通り買い物に付き合う事に。

何故「姉御」に「要請」なのかというのはその通りで事実なのだからともかく。

現在10時35分。

「やばい……」

ポケットから懐中時計を出して確認しても時計の針は戻りもしないしそんなホラーいらないし。

視線を慌てて左に流すが来そうにも無い。

何が来ないって、電車です。

傍から見れば私は「かなり急いでいる少女」に見えるだろう。ってかそうだし。

急いでいる理由を言えばこうだ……昨夜有希ちゃんから電話があり、この電話は自宅用の電話だ。

実を言うと私は携帯電話を持っていないのだ。

かなりの少数派になるが理由と話がズレるので置いておいて。

電話の用件は明日、時間的には今日の待ち合わせについてだった。待ち合わせ場所は電車で15分ほどの都心街。

最寄り駅が一緒ならそこで待ち合わせしたらいいじゃないと思うがその駅で突っ立っていたらあの君島トオルに見つかりかねないと有希ちゃんが言い張り、買い物をするその都心街の駅前の噴水で。と

いうことになったのだ。  
ちなみに時間は10時30分。

『ドアが閉まります、ご注意ください。 ドアが・・・』

もうここまで説明したらお分かりいただけただろう、そして説明したら挙動不審が収まった自分。良かった。  
幾分か冷静になった頭でさらに現状を説明させてもらう。  
現在10時39分発の電車の乗り、15分の苦行を味わっていると  
ころです。

最短でも10時54分に到着予定。

携帯電話を持たない私には有希ちゃんと連絡を取る術がない。

・・・最低昼飯をおごる覚悟を持たないと。

遅れたのは寝坊でもない、ただ準備に戸惑っていたのだ。  
いつも通りに寝たはいいが準備を一切せず、当日バタバタとしていたところにイスの足に躓いて派手に転倒。 あまりの痛さに転げ回っていたら兄が登場、散らかった部屋と一緒に片付けてくれていたのを母親に観察され、父親は時間がないというのにしっかりと朝食を作ってくれそれを食べるしかなく・・・前準備がこれほど大事  
と思ったことはありません。ええ、本当に。

『次は××駅、お降りの方はお出口変わりました・・・』

うう・・・到着したは良いけどはたしてどんな修羅（有希ちゃん）  
がいるのやら・・・。

乗客の半分は降りるので私も胃を軽く押さえながら流れに従って出口に向かう。

有希ちゃんとの待ち合わせの噴水は東口だった気がしたな・・・頭  
上の案内に従って早足で進む。

走りたいがこれ以上目立つのはイヤだし（カバンを覗いたらあの赤

い本があつた。何故だ。）、とはいえ遅刻確定なので急ぐしかない  
ので早足。

でも競歩だと変人に見られるのであくまで徒歩でしかないんだけど。

10時56分。

階段を上がりきって噴水が視界に入り、友人（修羅）がいるだろう  
と駆け足にしようとしたら・・・。

「・・・・・・・・」

何だろう、アレ。

今まで散々現状の説明をしてきたが、アレは説明して欲しい。

人だから、というのか。

噴水を囲む様に何やら2周のリングが出来ている。

生憎身長155cmの私では外周しか見れずリングの核が全く見え  
ない。

というか一周目のリングが密度高過ぎる。

え？　もしかして・・・。

展開が見えすぎな気もしなくもないが無視して2周目（野次馬）の  
人、私と同様噴水を待ち合わせにしているような20代前半の私服  
女性に声をかける。

「あの、すみません・・・」

物凄いスピードでメールを打っていた指を止めてコチラを向く見知  
らぬ女性。

「何かトンデモな事でもあったんでしょか？　この騒ぎ・・・」

「ああ、ただのナンパよ。もしくはキャバの勧誘だと思うけど」

ナンパ・・・・・・・・キャバ勧誘・・・・・・・・。

「有希ちゃん・・・。」

予想してた展開過ぎるけどそれにしても・・・ごめんなさい。マジ

に。

声をかけた女性は私がこの騒ぎで待ち合わせ相手に会えないから困っていると思ったのか、親切に「どんな子と待ち合わせしているの？」と話しかけてきた。

言えない・・・あのリングの核が待ち合わせ相手なんて。

「いえ、もう少し自分で探します。ありがとうございます」  
丁重にお礼とお断りをしてからその場を少し離れて駅に戻り、出口付近の柱に背中を預けた。

「ふう・・・どうしよう」

どこをどうしたらあんなリングが形成できるのかは全くの謎だが、今の私に核（有希ちゃん）を取り出す方法がない。

携帯電話が無いから連絡は取れないし・・・あそこに突っ込んで行くのはムリだ。っていうかイヤだ。

あーどうしよう・・・こういう時ってさ、颯爽と割り入って困り果てている少女の手を掴んでこれまた颯爽と去るのが典型じゃないだろうか。

まあ有希ちゃん強いから自分で強行突破できるかもしれないけどさ・・・。

私の力じゃあ再度言うけどムリ。

だからといってこのまま見てるだけっていうのも精神的なダメージ（良心への）がじわじわとくるので何かしら方法がないかと辺りを見回す。

えーと。

野次馬に参加しているのは言わば「エキストラ」だからダメだし、大人の男性に「助けてください」と縋るか・・・いや見ず知らずの人間に言われれば即お断りだろう。

こういう時役に立つのって事情を察してくれる知り合いの男性・・・  
そこで思いついたのは「キツネさん」。(嫌そうな力才をしている)  
そうとなれば藁にも縋る気持ちで駅構内に向けて走る。 目指すは  
公衆電話！だって携帯ないから！！

「たぬき堂」の電話番号も公衆電話の場所も記憶力はまあまあ良い  
方なので覚えている。  
ただキツネさんが来てくれても最低15分以上かかるけどな！  
けれど行動しないよりはマシ！ということでも本気で走る私を人が避  
け、自然に道が出来るため最速で辿り着けそうと喜んでいるとこれ  
またトンデモな出来事が。

「君島トオルツ！！！」

ほら、これこそ「ラブコメ」な典型じゃありません？  
巻き込まれなくて良かった、とその笑顔が語ってくれる。(脳内キ  
ツネさん)

ええ、まさにその通りですね！ でもコイツ(赤い本)には感謝し  
ません！！

その5 『彼女がヒロインと気付いた日』上(後書き)

読めない文字があったり誤字があった場合など遠慮なくどうぞ。  
気が付き次第修正は各話施しています。

8 / 1 (日) 誤字修正

その5 『彼女がヒロインと気付いた日』中（前書き）

上と続けて読んでもらうとわかりやすいかも。

一応中だけでもわかるようにしているつもりですが…。

その5 『彼女がヒロインと気付いた日』中

「小鳥ー！！！」

がばあと抱きついてきた有希ちゃんを受け止め、というか抱きしめられている私。

昨日のように逃げようとするのはせず、今回は大人しくされるがままにされていた。

…だって全面的に悪いの私だし。

謝っても謝っても許されてもそうじゃなくても反省はしています。けれど心の中でもう一度謝らせてもらえないだろうか…。

ゴメンなさい、有希ちゃん。

「急に引っ張られて何かと思ったけど、僕の有希が困っていたなら大事だからねえ」

私に抱きついて視界から外しているようだけど、忘れちゃダメだから。

君島トオルを。

こうなるまでを説明すると。

有希ちゃんを助けるべく知り合いの男性に助けを求めようと駅中にある公衆電話を目指していた私。

そんな中乗り換えの途中なのかこの街に買い物に来ていたのかなんてどうでもいい、そこにいた「君島トオル」を使える！と判断した私は名指しで指名、腕を引っ張って噴水へと向かった。

お互い自己紹介なんかしたこともないけど昨日顔見知りにはなっ

いたし、私が有希ちゃんの友人であることや尋常では無い様子、女性には優しいまではわからないけど引つ張られるままに付いて来てくれ、噴水を囲むリングの核がある場所を指差し、「有希ちゃん、あそこ！」と簡潔（すぎる）な説明。

あとは颯爽と入って颯爽と有希ちゃんの手を引つ張って来ましたとさ、というわけです。

で。

「こんなところ（歩道）にいるのもなんだし、近くのカフェにでも入ろうか」

私と有希ちゃんに君島トオルが加わるのはさも当然というかのよう  
に、そして彼は私たちを近くの店に連れ、私にカフェラテを有希  
ちゃんにハーブティー、自分にダーズリンを用意する（奢りだった）  
と店奥のテーブルを確保した。

…いや、もう流れについては突っ込まないよ。

私と有希ちゃんが並んで座り、有希ちゃんの向かいには君島トオル  
が。

それぞれがちゃんと席に着いたところで、私から切り出した。

「有希ちゃん、ごめんなさい」

ぺこり。と頭を下げる。

いやもう何がごめんなさいってさつきからそうだけどもう色々。

遅れたのもそうだしそのせいでいっぱい絡まれて困らせてしまっ  
たし、助けるためとはいえ元凶を避けるための協力をしている人物  
が何故元凶を連れ込むのかと。

そしてそれと共に行動し、真正面を陣取られてしまつのも含めて全て。

全て最初の「私」が「遅れた」ことからのドミノ倒しな展開である。

「…もう、気にしだしたらそうよね、小鳥つてば譲らないんだもの。

今回だって私が言い出したんだから私にもそれなりに責任はあるのよ。

まあ一番は待ち合わせに盛大に遅れた小鳥だろうけど」

「う、う~~~~っ」

反論も何も出来ず、私の心に有希ちゃんの言葉が鋭角にヒットする。

ぼんぼん。

「充分反省しているのはわかったから。これ以上謝ったら怒るからね？」

私の頭で子供あやす様な動作をしているのは有希ちゃんの手の平でその彼女の優しい雰囲気の中に言葉通りの「嚇し」がひしひしとまた感じられて…。

「うう…わかった」

素直に頷くしか私には許されなかったのである。

「それでよし」

一件落着きといった空気をほのぼのと醸し出していたのに、遠慮なく言葉が切り出される。

「さてと。」

その瞬間有希ちゃんの目は鋭くなり、私はその鋭さにビクッと身を引く。

元凶・君島トオルのターン。

「僕にも説明してもらえろ権利、あるよね？」

……今日は買い物ドロロじゃあないようです、キツネさん。

その5 『彼女がヒロインと気付いた日』下(前書き)

下です。

場面はいつもの「たぬき堂」からです。

## その5 『彼女がヒロインと気付いた日』下

喫茶店「たぬき堂」。

謎な赤い本を手に入れてから私はここに毎日通っていることにふと気が付いた。

今までは気が向いた時に来ていたのだが、これはもう常連というか常習者…？

いや、その表現だと私が何やらやってはいけないことをやってしまっているようなので却下します。

ともかく。

昨日ー昨日同様、本日の顛末をネタにキツネさんとお話することにしました。

「いやはや、本当に何と云うか……」

カウンターを挟んで向かい合っている私とキツネさん。

本日は財布に多少のお金があったのでアイスココアを頼み、キツネさんは先程までいたお客さんのカップなどを片付けていた。

「呼ばれなかったことに安堵して他の感想が浮かばないんですよ、キツネさん」

カランカランとグラス内の氷を弄びながら指摘する。

一見完璧そうな雰囲気でクールなキツネさんだが、慣れてくると意外にわかりやすいのだ。

それが私の「面白い」という感想の理由。

「わかっているのですからいいじゃありませんか。それで？明日はデートですか」

「うん。有希ちゃんと君島トオルがね」

カフェで色々と話し込んだ後、君島トオルは駅に来ていたのはちゃんと予定があつたようで（決して有希ちゃんを追いかけて来たわけではない：本人談）、街中に消えていった。

その後姿を見送り、残った私はブツちぎれそうな有希ちゃんに連れられカラオケへ強制連行となつた。

費用は全て有希ちゃん持ち。

カラオケという習慣が全くない私は聞き手オンリーで、マイクは有希ちゃんがずっと握り締めていた。

ストレス発散のシャウトをBGMにしながら「何故」を説明しよう。これまでがこれまでだからすでにわかる人もいるかもしれないが、

一応。コホン。

待ち合わせ時間ジャストに到着した有希ちゃんは噴水前で私を待っていた。

五分待つても来なかつたらここ（噴水広場）を見下ろす位置にある適当な店に入って待つことにしていたらしい。

しかしそんな有希ちゃんに5分も立たないうちにまず声をかけてきたのがヨボヨボなおじいさんだったらしい。

最初は適当に交わっていたがしつこく、流石に「どっかいけ」と強く言えずにいたらひよろい男どもが集団で絡んできて…そんな感じなのでのリングは形成されたらしい。

そして気が付いたらとんでもない集団が集まっていて逃げ出そうにもタイミングがわからなくて困り果てていたところ、突然手を引かれ、見てみるとあの君島トオルだった。

経緯を聞き終わると君島トオルはただ「そうか」だけ言い、本当はそこで席を立とうとしていた。

しかし有希ちゃんが呼び止め、「借りがでかいのよ。 相応な礼をさせなさい」…有希ちゃんらしい言葉だ。

そして君島トオルは「明日、一日僕に付き合っただけ欲しい」と言い、

有希ちゃんが理解する前に「デート、だよ」と続け店から出て行った。

…元凶が去ったは良いけど落としていったのはそれなりのもので。

有希ちゃん曰く。

明日はかなりのストレスを溜めるのだからそれまでに今のストレスを退けるのよ、ということ。

そして付き合わされている私は彼女が示す曲番号をただただ打ち込み、その合間に昼食にと頼んだ「きつねうどん」を食していた。

奢る覚悟でいたがすべて有希ちゃん持ち。

けれどこの苦行…あと4時間あるんだよね。

声を多少囁らしているがいつもの有希ちゃんとは駅で別れ、私は重い足を引きずりながら「たぬき堂」に向かい、そして現在いまとなる。

別に有希ちゃんがかなりの音痴とかではなくて。

むしろ上手い方になるんだけどね…流石にカラオケ約5時間というのは初心者にはキツかったです。

「はい、どうぞ」

トン、と置かれたお皿の上にはナッツ系のクッキー。

「いただきます…」

お腹はすいてはいないんだけどキツネさんのご好意なので頂くことに。

疲れた時には甘いもの…クッキーにアイスココア。

うん、見事な組み合わせで甘すぎる。

けれどそれを文句言うほどの元気もあまりないのでもう一つの本題へと入ろう。

「ねえキツネさん」

「何でしょう?」

「明日私、バイト初日だよな?」

「そうですね」

…そうですねって。研修とかさ、事前に説明なり色々あるでしょ。

私のジトーとした視線を受け流し、キツネさんは自然にクツキーを  
摘むとポイツとお口に。

「まあやることは単純でして。私がついたモノを運んで、始めと  
終わりに掃除をしてくれれば

良いですよ。お給料は月末。あとの細かいことはその都度き  
ちんと説明します」

「確かに…別にタヌキ様やキツネさんを疑うとかそーゆうのはない  
し。」

あ、そうそう、服装はどうするの?」

ちなみに服装はだいたいこんな感じ

キツネさんはYシャツに黒のズボン。腰からのエプロンを付けてて  
色はズボンと同じく黒。

タヌキ様は縦ストライプの入ったYシャツにクリーム色のズボン。  
その日によって色の違うエプロン。

このエプロンは普通の首と腰で紐を結ぶタイプ。

「服装は特に指定はないですね。ただオーナーと同じタイプのエ  
プロンをしてもらう、くらいです」

「ふう〜ん……」

その後ポツポツとゆっくり質問をして仕事を把握。

お客さんがいないのでカウンターに入って色々見せてもらった。

へえーこうなってるんだ。へえーとまあ簡単に覚えて、早速明日日本番  
なんだが…。

いささか緩過ぎる気もしなくはないがまあ元々がタヌキ様がいない時の応急処置らしいのでこれでいいんだとか。

上司のキツネさんがそう言うのならまあいいかと納得し、夕飯まで家で昼寝をしたかったので帰ることに。

「じゃあね、キツネさん」

「ええ、ではまた明日」

「明日は従業員ですか、私」

「私はその上司ですか」

では、また。

そして重い足を引きずりながら私は駅の向こうの自宅へと。

場面はいつもの。

昨日よりは早い時間。

自室の机に向かい、眠い目を擦りながら何とか起きている。

ホットコーヒーを入れてたが何故かホットミルクの役割をしてくれる。…甘くし過ぎたか。

もしかしたら久しぶりに日付変更前に落ちそうです、本当に。

けれどやらないといけない事があるので起きることに。

ええ、やらないといけないのは「日記」です。

今日の出来事…いやあ長い。有希ちゃんとの待ち合わせ、それに盛大に遅れた私。

解決策として引き摺りこんだ君島トオル。カフェからカラオケでの顛末。

ココアとクッキーの甘いコンビを選択したタヌキ堂でのキツネさんとの会話。

疲れのせいかな簡略して書いてしまったがまあいいだろう。

一応書き終えて、お気に入りのボールペンを置く。

ラブコメ展開：かあ。

張本人にならないのが脇役以下一般人な私にぴったりだし、という  
か役不足だ。

むしろ主人公になるなら有希ちゃんや君島トオルに：でもラブコメ  
っていうかこーゆーのって主人公は一人だよねえ：で、ヒロインっ  
て最初は一人いるんだけど、色々なイベントで落として落として増  
えていくんだっけ？ まあいいや。

と、なると：主人公は君島トオルで、ヒロインが有希ちゃんか。

あれ……？

眠気でボンヤリとする頭がやや冷めた気がするが無視。

思考する余地ができた気がする領域で思考する。

何？ 有希ちゃんってばヒロインポジションの子だから今日の出来  
事って彼女には必然というかごく自然な休日イベント？ 何ですか  
それ？

そして主人公が君島トオルだからアイツが助けるのも当然で明日の  
「一日強制デート」も当然な結果。<sup>イベント</sup> だって、ヒロイン助けたんだ  
もんね。

「ええ……」

布団に潜りながら一人呟く。

独り言にしてはやや感情過分な叫びだがここはまた無視して。  
いい加減素直に受け入れてみたらいかかでしょう？というキツネさ  
んには「なら巻き込むよ？」と脅しといて。

：明日はタヌキ堂でのバイトなんだからそんなイベント起きないハ

ズ。

そう自分を説得して落ち着かせ、長く「待て」をさせてた眠気に身を任せた。

その5 『彼女がヒロインと気付いた日』下（後書き）

ラブコメってこんな感じだよね？な展開を元に。

このお話は「本編」な有希ちゃんと君島トオルに沿うようなサブなストーリー、そんなお話のつもりです。

## その6 『わたしが初めてバイトした日』上

5月17日 日曜日。

目覚ましが鳴る一分前に起きてカーテンを開ける。うむ、静かな朝だ。

カーテンの向こうの朝日でも拝んでわずかに残る眠気をぶっ飛ばそうかなと気分で行動。

そして空に視線を向けてみれば青空：雲〃4：6という微妙な様子。ぼんやりとした眠気が飛んだかどうかよくわからないまま一階のリビングに降り、禁煙を何度も挫折している母親に「おはよう」と挨拶し、それに煙をふうと吐いてから「おはよう」と返される。

適当に自分の分だけの朝ごはんを作り、食事、片付け、いつもより長めの準備。 出発。

今日は「たぬき堂」でのバイト初日である。

「で、早速買い出しですか」

「ええ、そうですね」

「おかしくないですか？」

「いいんですよ。もしもの時、小鳥さん一人をお店に残すわけには行きませんから」

「左様ですか」

そして現在街中をキツネさんと歩いている。

飛びすぎか。

いや、まあ私もそう思うけどバイト先「たぬき堂」に入ったらすぐに外に追い出されたのだ。

キツネさんに。

笑顔で「さあさあ」を背中を押され、視界の奥のこれまた笑顔のタヌキ様に手を振られ。

カウンターに新しいエプロンが置いてあったと思うからここで働くのは間違いない。

仕方なく抵抗を諦めてこの早速の仕打ちの理由をキツネさんに聞くことにする。

で、要約すると以下になる。

… オナーのタヌキ様不在時のアシスタントが私・小鳥遊小鳥たかなしことりだったわけだがタヌキ様が今日急遽お店に出れることになった。それなら私がいらないわけだが今後頼ることもあるかもしれないので丁度お店で使うコーヒー豆が少ないし、ならお客さんの少ない午前中に買出しの店でも案内しよう、とのこと。

ちなみにそのお店があるのは先日私と有希ちゃんが行った「あの街」です。（君島トオルは削除）

… 絶対何かあるような予感がするんですが。

ややどんよりな天気の中、都心街であるこの街は休日の若者で賑やかだ。

ファッションは勿論、映画やカラオケ、レストランなど大抵の店はあるから偏りのない、色んな人だ。

そんな賑やかな街の中、私とキツネさんとはある一軒のお店の前にいた。

「… ホントにこのお店なんですか？」

「ええ。これで開店しているんですよ」

「マジですか」

人通りの多いエリアを抜け、やや寂れたエリア。周囲は何が入っているのかわからない雑居ビルと昔からここにいます、な古い住居。

実際に人が住んでいるのか疑ってしまいうくらいの。

そしてそんな中にあるお店。

看板は長年の風雨で消滅したらしく、店名はない。

日に焼けまくったカーテンが埃のこびりついた窓の向こうで不動状態にて完全に店内をシャットアウト。

ハッキリ言っつて一見、閉店して何十年もたったお店その1、な感じなんですか。

そのドアは果たして本当に開くのか！？なんていうナレーションが入ってもいいと思う。

私の疑いの視線を受けたままキツネさんは自然な動作で店内へ。

…入れるんだ。

「おはようございます、ご主人」

一度深呼吸してから私も続いて。

アレルギー持ちじゃないけどアレルギー反応がでるほどの埃を覚悟していたら…そんなことは無かった。

まず入って感じたのは埃など何処？な清潔感。

目立つのはコーヒード豆を煎るための機械らしきもの、コーヒード豆の袋。袋は何個もある。

アンティークが好きなのか配置されている家具は高級そう。

皿などが飾られた食器棚の上にはこれまたアンティークな西洋人形。固定された笑顔がいくつも並び、怖い印象を与えるが店内の雰囲気。がそれを明るくする。

そしてそれらに囲まれている最新のリクライニングチェアには一

人の人物が。

「おお、なんだタヌキのトコのキツネ君か。 …ん？ 後ろの子は？」

見かけたことのない子だね、とコチラに体を向ける。

それが私のことだとはすぐにわかったのでペコリと頭を下げながら自己紹介する。

「タヌキ様のお店で働くことになった、小鳥遊 小鳥です。

今日はキツネさんのアシスタントで来ました」

「今後こちらに伺う時彼女一人かもしれないので、よろしくお願ひします」

「ふむ……。 」

その人はタヌキ様とはまた違った変わったオジサマだった。

タヌキ様のようなポヤポヤ感が無く、なんとというかキリッとした威厳あるオジサマ、だろうか。

白髪混じりの黒髪はとても似合っており、全て後ろに流してオールバックにしている。

…そして腕の中でまんまと眠っている猫もとても似合っています。シヤムネコ

アイテム、というのは人の印象を左右するモノだと初めて知りました。

やの付くお仕事…それも雲の上という所属の。 そんな感じがします。  
…挨拶を済ませてからオジサマの姿を直視して良かったです。 ええ。  
でも、怖いもの見たさでもう一度オジサマの方に向け…目が合った。

「…！！」

ビクッ。

「中々オモシロい子を見つけてきたもんだね、キツネ君」  
「オーナーが話されましたか。…ええ、常連客なのですよ」  
「ふむ、覚えておこう。ところでいつもの豆で良いんだね？」  
「お願いします」

猫を床に降ろしたオジサマはキツネさんを連れて店奥へと行ってしまった。

とはいってもガサゴソと聞こえるしたった扉一つ向こうなのだけれども。

そして残されたのは猫と私。

「…」  
「…」

キツネさんに「ついて来い」とは言われなかったのもその場にいたが、猫と睨み合うハメになった。

ピタッと動きを止めた猫に合わせて私も動きを止める。

「ニャー。」

まあそれも10秒と立たずに向こうが終わらしたが。

足元に近寄ってきた猫を抱き上げて、まずはフワフワな感触を楽しむ。

「…どうしよつかない」ニャー。

コチラはやることは終わってしまって、どうやら猫も私と同じで一緒に悩むことに。

ヒマだ、と。

取り合えず一通り部屋を見回してみる。  
先程と同じ、てかついさっき見たしね。

アンティークかそれっぽいかはわからないし、オジサマのものな  
で触るわけにもいけないし。

次の案。猫と遊ぶ。

一応仕事中でバイト初日でもあるので猫と遊ぶのはどうかと思う。  
まあ猫を抱きながら思うことでもないんだけど。

「ついてくるな、ともいってないし…そうするか」

扉の向こうにいるであろうキツネさんの手伝いをするに。

ペーパーですが荷物持ちくらいは出来ると思うし。

そうと決めれば名残惜しいが猫をご主人様であるオジサマ…ボスが  
座っていたイスの上にそっと置く。

「ニャー」

ありがとうかだっこの催促かは分からないが、軽く一撫でしてから  
扉の方へ。

そして開こうとしたら…

ガチャリ。

勝手に開きだした扉。

伸ばされた手は何も掴むことなく彷徨うハメに。

「小鳥さん…手伝っていただけ」

猫、カモン。 ニャ。

「うりゃ」

猫パンチ。ペチン。

「……いつの間に人様の飼い猫を従えているんです？」  
小鳥のくせに。という台詞は聞かなかったことにして。

「ボスに会いたかつたんですよ、猫が」  
そう言つて腕の中に飛び込んで来てくれたがすぐに離すと猫はちゃんと着地。

キツネさんの後ろにいるボスの元へとトコトコ歩いていった。  
ぴよこんとジャンプし、ちゃんとボスの腕の中に納まったのを確認して。

「手伝いに来たんです」

上司の言うことは（なるべく）聞かないといけませんから。  
遠慮なく、手伝いますよ？

私2キロ。 キツネさん2・5キロ。

決して体重の数字ではないことは明白だけどここに明記しておく。  
ついでに言えば私：155センチ キツネさん：176センチ。  
身長差は21センチ。

…キツネさんは男性だもんね、成人だもんね、働いているんだもんね。  
悔しくは無いんだもんね。

「何失礼なこと考え流してんですか」

「いや、それって何気に私に対しての失礼じゃね？です」

「気付いているのなら良いじゃないですか」

何という陰しツなドえ…

あえて崩してみたけれどまた気付かれそうだったんで言い切るのを止めとく。

よいしょ、と抱いている荷物を持ち直してキツネさんの隣を歩く。

まあ荷物が何かなんて隠す必要はないんで。

コーヒー豆です。

ボスが煎ってくれた、もの。

結局本当にボスだったかは確認できませんでしたが小心者なんです、仕方ない。

手伝います、と名乗り出た私にキツネさんは「小鳥さんは2キロです」といつてすぐさま麻のような布地の袋を押し付けられ、「私は2・5キロです」と私と同じなのか大きいのかよくわからないサイズを軽々と抱いてボス「ご主人に礼を言ってから店を去った。

これが果たしてキツネさんの言った通りの重さかはわからないので腕の中のを「2キロ」としといた。

いつもの雰囲気でテンポでキツネさんとおしゃべりしながら歩く。

とはいえキツネさんところうして歩くのは数えるほど。

ほとんどたぬき堂で会ってさようなら、だからね。

意識はしていないけどちょっと興奮しているかも？

興奮：別に感情的にはなくあくまでも気分的、です。

赤信号。

「これってお客さんから注文されたら挽くの？」

袋に視線を向けながら。

「いえ、開店前と午後の2回にそれぞれある程度の量を挽いておくんです。

これは小鳥さんでもできますね」

「じゃあ今日にでもヒマだったらお願いしますよ」

「急に頼まれたにしてはやる気ですね…とはいっても小鳥さんには紅茶の淹れ方からの予定です」

「じゃ、それでいいや」

「そうですね」

青信号。

この歩道を渡りきったら目の前は駅。

とはいえこの歩道はやたらと長く、もしかしたらここで50m走できるかも、な感じですよ。

しかも人もかなり多いってか多すぎるくらいだけど。休日だし。

その途中。

「あ」

人を避けながら歩いていると目に入ったのは大きなテレビ。

遠くからもわかるよう、自宅用ではなくこうした街中の宣伝用というか…まあ業務用だよな。

思わず足を止めてしまつところだったが…危ない危ない。ふう。

そのまま信号をやっと渡り終えてからキツネさんから声かけられる。

「どうしたんです？ 何か、あつたんですか」

私と同じで「何か」に巻き込まれたくないキツネさん。眉を顰めてる。

「あれです、あれ」

『わ、私はただの付き合いでっ…！』

『今日はデートです、僕たち』

『アンタなんてウソを！』

『ウソは言っていないよ?』

「……………」

固まったキツネさんに再起動させるべく説明する。

「漆原有希ちゃん、友達。あと君島トオル。以上。」

「…ラブコメ、ですか」

「良かったですね、テレビ越しですけど顔を知れて」

「そうですか・・・」

「良かったですね、今日は巻き込まれなくて」

「…そうですか」

だから最初に思ったんだよ。

昨日の今日で、何も起こらないはずがないってネ。

その6 『わたしが初めてバイトした日』上（後書き）

取りあえずな感じで書いてたらこんなことに。  
決まっていたのは『街頭インタビュー』だけでした。

その6 『わたしが初めてバイトした日』 下（前書き）

作中の紅茶の淹れ方は適当です。一応調べたのですが、素人ですの  
で。

## その6 『わたしが初めてバイトした日』下

紅茶をおいしく淹れるのには「ゴールデンルール」というものが存在するらしい。

キツネさんからそう「お話」された。

「こーゆー」。

「新鮮な水」を使い、「温度を落とさない」ようお湯を扱い、茶葉を「躍らせる」。

あとは好みで「蒸らし」て、「最後の一滴」まで味わう。ことらしい。

私個人の解釈も混じっているからこれがそのまんまそれとは限らない。

あくまでキツネさんの説明を受けて、なので。

店に戻ってからもタヌキ様にお店はお任せして、用意されたエプロンを付けて簡単に髪を纏める。

紅茶の淹れ方を教わることになり、まずはキツネさんのお手本を説明付きで見る。

順番はあとで覚えればいいから、取り合えず「動作」に注目する。沸騰し切れていない微妙なラインからの動作。

茶葉を躍らせるトコロなど一連の動作を全て「記憶」する。勿論私とキツネさんの体格差も考えて。

「さあ、やってみて下さい」

一度頭の中でシュミレーションを行い、「模倣」する。

そして出来上がったのをキツネさんが淹れたのと並べる。

「色が違う?」

「そうですね」

「匂いも違う」

「そうですね」

「ん…味も大分違う」

「そうですね。…初めてにしては中々出来ていたと思いますよ」

「どうもです」

とはいってもこれは「三回目」なんだけれども。

一回目二回目は「飲む」までいかなかったんだよね。

やっぱり『こうすればおいしく淹れられる』方法があるっていつて

もやはり「喫茶店」というお店で商品として出すのはそう簡単にい

かないようだ。

キツネさん曰く一人一人好みがあるから絶対にコレ、というのはないんだそう。

茶葉の質やその日の湿度によっても味が変わってしまうし。

なので自分の中で一定のラインがあって、それをクリアしていればおこなそう。

…ということは私の壁はキツネさんの味覚ですか。

「キツネ君、ヒナちゃん！ もう出れるかい？」

「はい！」

タヌキ様の声にキツネさんから紅茶のレクチャーを一旦中止し、私とキツネさんはカウンターのほうへと向かった。

何度も言うようであるが、今日は私のバイト初日である。

だいぶ日が長くなった今日この頃。

窓から差し込むふと目をやり、『冬』を思い出した。すぐに真っ暗にならないのが不思議に感じてしまった。これからどんどん長くなるのに。

店内にはお客さんが何人か。

えーとカウンター席に二人組みのお客さんがいて、これはキツネさんが対応。

タヌキさまはどうやらお知り合いの方がいらしたようでテーブルに向き合って話し込んでいる。

結構にこやかながら雰囲気が真剣なのでもしかしたらタヌキ様の「副業」関係の人かもしれない。

そして私といえば。

『はあ…やはり日本語はマスターしないといけないですよね…?』

「んー、目的というかゴールがそうなら結局はそうじゃない?」

『結局、というのは?』

「何も一本道じゃないってコト。ノー、ワンウェイ。」

外人女性さん相手に相談相手を請け負っております。

仕事中に何してんだとか何話話が通じているのかとかまあ色々あると思いますが。

こつちだつて大変苦労しているんです。

聞き取りなら向こうも日本人学生つてことで簡単な単語をなるべく使うようにしたりゆっくりと話してくれているオカゲで何が言いたいかは分かる。

だけどこつちが何と言えばいいか分からない。

日記なのでアワアワした部分はちよつと省いて…というかテンパツてて会話を鮮明に覚えていないんだなコレが。

なので「よくコレで通じるよね?」な表記なのです。

外人女性さん、「スフィー」。

この前タヌキ様と近所のおっちゃんが話していた「引っ越してきた外人さん一家」の奥様がスフィー。

実をいうと「外人さん一家」というのは訂正がいる。

察しが良い人はもうわかると思うけど…スフィーの息子さんがあの「君島トオル」なのだ。

まあ再婚なので血は繋がっていないし、君島トオルは前にも書いたけど純日本人なので。

で、スフィー（こう呼んでくれ、と言われている…書き忘れ）の悩みというと…

再婚した旦那さん（＝君島トオルの実父）とは向こう（アメリカらしい）で入籍、日常会話も全て英語だったし、君島トオルとも決して仲が悪いわけでもないらしい。

しかし旦那さんが日本に戻されることが決まってからは家の中で昔のカンを戻すためか親子で「日本語」を話し始めた。

それを耳にする度に疎外感を味わい、暗い顔をした新妻を旦那さんが置いていく筈無く…家族三人で日本へとお引越し。

引っ越したからといって余計に日本語しか耳にしなくなるし旦那さんはお仕事急がしそうだし息子は学校で昼間いないし。

で。まあスフィーが英語で話しかければもちろん英語で答えてくれるし、

家族とのコミュニケーションには問題ないがそれはそれでどうしよう？

簡単な挨拶ならやっと出来るようになったがこのままではいけない、だからどうしよう、と。

「…小鳥さんの言うことは最もですが、曖昧すぎですね」  
「キツネさん。あれ？お客さんは…帰ったのか」

カウンターの方を見ると今は無人。

キツネさんは自分のコーヒーと私にいつものコーヒー、スフィーにはもう冷めてしまっただろうと淹れ立てのコーヒーが置かれた。

「アリガト、ゴザイマス。」

「いえいえ」

私とキツネさん、スフィーの間にはチョコチップの入ったクッキー。

…色々と準備を済ませたの登場らしい。

「私が英語に訳してあげますから、遠慮なくどうぞ」

「さすがキツネさん。そこで日本語に訳すといってくれないのは優しさですか」

「小鳥さんは聞き取りならできるとでしょう？」

うん、まあね。

「そもそもさ、日本語習いたいとかなるべく日本語で話さないで欲しいとかいうのは旦那さんに言ったの？」

『ご家族に日本語についてはお話されたんですか？』

『いいえ、忙しそうですし迷惑を掛けたくないのです…』

キツネさん、私の言葉とはすこし違くありません？（聞き取りは出来るのでわかる）

まあ言いたいことも聞きたいことも合っているからいいんだけどさ。

「じゃあ何？ 家族に知られないように日本語習いたいの？」

『ご自分ひとりで日本語をマスターしたいのですか？』

『可能な限り、です。私のことは気にせずそれぞれに打ち込んで

欲しい、安心してほしいのです』

自分の要望、というか希望を語ったスフィーは心の底からそう願っているようだ。

…確かに立派だとは思っけど。

キツネさんと目を合わせる。

返してくれた視線を私と同じ意見であると（勝手に）判断し、結論を下す。

「どっやって巻き込もうか？」

キョトンとした瞳はとても年上の女性だと思えないくらい可愛かったです（感想）。

『今日であつたスフィーという近所に越してきた外人女性さんは君島トオルのお母さんだつた。日曜日だというのに旦那さんは会社の用事でいないし君島トオルも有希ちゃんデートだ。自分以外にない日本の家にいたくなくてせめて家の周辺の雰囲気でも慣れようと散策して「たぬき堂」に立ち寄つたらしい。そこからの話は地味に長く面倒だから書かないけど、私はスフィーと火曜日に買い物に出かけることになつた。』

店内には私とキツネさんだけ。

タヌキ様はずっと話し込んでいたお客さんと出かけてしまった。

閉店時間が近いのとお客さんがいないので私はキツネさんの指示で片付け、掃除を行う。

ドアに掛けられている「OPEN」のプレートを「CLOSE」に替え、カーテンを閉める。

そして現在。

どこかいつもと違う雰囲気の中、キツネさんとおしゃべりしながら私は例のモノを書いていた。

戸惑うスフィーを私とキツネさんで上手く丸め込み、納得の表情で帰って行った。

そろそろ旦那さんが帰ってくる時間なんだとか。

「でもさ、きつとあの爽やかな表情は『自分の悩みに共感し味方になってくれたから』だよな？」

カキカキカキ。

「まあ悩みというのは話すだけで軽くなりますしね…」

カキカキカキ。

キツネさんが隣の席に座る。お仕事ではないからカウンター内にいる必要も無いしね。

「というか小鳥さん」

カキカキカキ…。

そうだ、あの見かけた街頭インタビューは書いたほうが良いんだろうか。

まあスフィーの息子の話題だし…時計を見る…書くか。

「何ですか？」

カキカキカキ…

「これって巻き込まれじゃありません？」

カキカキ、カキ。

「あ。」

そーゆーことは今更って…そうか、キツネさんもか。  
なら良し！

5月17日 日曜日。

どうも私のバイト初日、早速「巻き込まれ」たようです。 キツネ  
さんも一緒に。

その6 『わたしが初めてバイトした日』 下（後書き）

紅茶は家庭用のティーパックでもこのゴールデンルールで淹れたらよりおいしくなるようです。

## その7 『タヌキ様ご乱心の日』

5月18日 月曜日。

本日はバイト二日目。

学校が終わってから有希ちゃんは部活があるし、君島トオルはどうしてなのかは想像し易いが有希ちゃんに引っ張られて消えた。

とにかく、有希ちゃんが君島トオルを連れ去ったので「要請」は勿論本日はナシ。

即効で直行で「ためき堂」に向かった。

濡らした布巾でテーブルを拭きながら。

「…今週はあと木曜日と金曜日。で、決まっている土日ですか」

「明日はオーナーがいますし、水曜日は定休日ですから」  
ふーん。

何の会話って、私の今週のバイト日程について。

昨日初日で今週は5日：高校生のバイトにしては多すぎると思っ  
ているがどうもタヌキ様がココのところ忙しく、お店に来れない日  
が多々あって仕方ないのだとキツネさんに説得された。

まあ来れば来るだけ給料も増えるので、と現実的に前向きに考えよ  
う。

それからポツポツとのほほんと私の好きな「平穩」にゆったり味わ  
っている、ソレをブチ破る勢いでドアが開かれた。

バアアン!!!

「やったよ！ やつとお宝ゲットしたよキツネ君、ヒナちゃん!!!」

びっくりしてドアの方を見ると。

素敵なオジサマキャラな筈のタヌキ様が、少年のように目を輝かし

ていた。

…「平穩」が崩れる気がしたのは間違いない気がする（現実逃避含む）。

今日は小雨の中、登校した。

私は別に濡れてもあまり気にしないんだけど、これから教室で授業となればそうはいかない。

100円シヨップの脆いビニール傘を差しながら隣の少女を見る。

普通の傘より骨が多めで丈夫そうかつ優雅な水玉模様の傘は彼女に良く似合っていた。

漆原 ウラハ 有希ちゃん。 友人。

「……」

「……」

駅のホームで待ち合わせをされていて、顔を合わせた時は「いつもの有希ちゃんだった。

「おはよー」と普通に挨拶したし、電車の中でも授業のこととかまあフツターの会話をしていた。けれど。

昨日と一昨日については有希ちゃんに対しては「禁句」だと思っていたので一切出していないにも関わらず、時が進むに従って口数が少なくなり、駅から学校への歩き道になってからはどこかぼんやりと無口になってしまった。

まあ静かになったならからって気まずくなるとかでもないのですそのまま互いに無言で歩いていた。

BGMとして雨音もあるし、いいかって思ったのだ。けれども。

流石にいつもと「こっ」違うとイラついてきたのも事実で。

赤信号で立ち止まったのをタイミングとして話しかけようとしたその瞬間…

（ （ （

有希ちゃんの携帯の着信メロディが鳴り響いた。

まず二つ折りのソレをパチンと開いたのでどうやらメールらしく、話しかけようとしたのを一旦止める。

「…っ！」

「静」だった雰囲気「怒」？ いや「困惑」？

携帯を持つ手が震えているので少なくとも「喜」や「楽」ではないのはわかる。

原因であるう携帯をそつと覗き込む。

『待ち受けにさせてもらったよ』

短い文に添付されているのはどうやらガラス製の鳥…小物かな？

中身を確認させてもらってから送信者の欄をこつそり。

『君島トオル』

ああ。納得。

信号が青になっていたのに気が付き、わなわな震えている有希ちゃんに「青だよ」と声をかけて進む。

何故有希ちゃんが怒に近い困惑なのか、何て聞くまでもない。

十中八九「昨日のデート」と「ガラス製の鳥」…そして「君島トオル」。

いやー、実に簡単な事で…とはいってもラブコメに本格的に巻き込まれたくも無いのでこれ以上追求も何もしませんが。

私立のお嬢様学校を通り過ぎ、私が通う共学の公立高等学校に到着

する。

実は今年度からの新しい校舎で…私は一年生なので旧校舎は見たことも無いが…見るからに新しい校舎へと歩く。

隣に有希ちゃんがいるせいか、やや視線が痛い気もするがそこは頑張って無視。

だって、教室までの我慢だから。

でもちよつと折れて傘をかなり低めに差して顔を隠す動作をしたのは「しょうがない」と思うんだ。

昼過ぎには雨もすっかり止んでしまつて。

お荷物な傘を「置き傘」として学校に放置してくるなんていうのは全く罪悪感がない。

タヌキ様の両手の間にあるダンボールは雨に濡れてはいないが、見たこともない興奮の様でいつその中身が零れるかわからない。

取り合えず、私ははしゃぐタヌキ様にいつも通りに接することにした。

「お帰りなさい、タヌキ様」

「うん、ただいまヒナちゃん」

にこやかな笑みに汗がちらりと見えるがまあ落ち着いてもらったみたいなので見なかつたことに。

ちらりとキツネさんに視線を送る。

タヌキ様の見たこともないはしゃぎっぷりに驚いて動きを止めていた。

…そんなに驚くことなのだろうか？

確かに「見たこと無い」「くらいだったがキツネさんが「動きを止める」ほどなんて…まあいいや。

その内再起動するよね、きつと。

「何？ それってタヌキ様の「副業」の戦利品ってヤツなの？」  
カウンターにダンボールを置いたタヌキ様。

「そうだね、まあコレクションになるのかな？」

「中見せてもらっても良いですか？」

「どうぞ〜」

お宝ゲットのタヌキ様はホクホク顔で。

それを見せるというか見せびかせてくれるようでダンボールの中から出てくるのは…

古びた赤いリボン…傷だらけのどこかの手帳…何度も直した痕のあるクマの人形…黄ばんだ本数冊…すごい古めかしいランプ…フレームだけのメガネ…etc…

「た、タヌキ様？ この共通するのが『古い』っていうだけのモノたちは何ですか？」

脳裏で緊急アラームが鳴り響いているのはおかしくない…ハズ。

「ん？ これらはねえ…」

ガサゴソとダンボールの中を漁り、取り出したのは欠けてしまったティーカップ。

「何らかの想い入れがあつて捨てられないモノ…価値としては低いんだけど本人だけの『宝物』」。

僕はそういったものを『コレクター』するのが趣味でしてねえ…  
「副業」というのは稀に

価値のある物品も紛れるのでそういったのを「鑑定」や「処理」をするのです。

まあ「鑑定人」や「仲介人」でしょうか

…その趣味で暮らしていかないで「副業」とするのがタヌキ様らし

いです。

っていうかここ最近アワアワしてたのってそのダンボールをゲットするため？

まあタヌキ様がそんなに喜んでるのならいいんだけどさ。

その後、タヌキ様はウキウキな状態でダンボールを再度抱かえて2階の趣味部屋へと消えた。

きつと2階ってカオスで異様な空間なんだろうな…。

私は好奇心でその空間に決して関わらない、そう決めた。

スタンドライトが眩しいな、とかちよっと思ったりしながら現在私は自分の机へ。

そしてお気に入りのボールペンでカキカキ。

『お店を閉める時間になっても降りてくる気配がないタヌキ様。キツネさんによると「副業」というか「趣味」に走る時はいつもこーなんだとか。

いつもこーなら何でキツネさんは一時停止しちゃうほど驚いていたのだろうと聞いてみると、『ダンボール箱で来たのは初めてだったので』とのこと。

なら大漁だったんだとか思っていたら「もしかしたら小鳥さんの『本』のせいですかもね？」って。』

「そんなハズ：そんなことはない、ハズ」  
ですよ？キツネさん。

そう問いかけたら苦笑が返された。ちくしょー。

5月19日 月曜日 雨のち曇り。

今朝の有希ちゃんとの登校やタヌキ様の興奮っぷりをつらつらと書く。  
最後に私の望む「平穩」は一体どこにいったんでしようか？と心の底からの本音も書いといて。  
ちよつと強引に終わらせると読み返すことも無く本を閉じた。

ここまでくるともうわかっているとは思うけど、就寝前の自室。  
今日はさつさと終わらせたかったので早足で進むことに。

早く終わらせて、寝たかつたんです。

「不貞寝ですね」と（脳内）キツネさんに爽やかな笑顔で言われた  
が言い返すことなく肯定しといた。

…だって、そうですから。

せめて「睡眠中」「ぐらい（記憶ないけど）」「平穩」に眠りたいんです。

これ、切実。

あ…明日ってスフィーと買い物だっけ…待ち合わせには間に合わな  
きやな。

では、おやすみなさい。

その7 『タヌキ様ご乱心の日』（後書き）

タヌキ様の副業発覚。 こういった職業が本当にあるかは調べが足りず不明ですが、おそらく「鑑定人」の仕事からの分岐の一つではないかな、と思います。

脳内キツネさん：アニメや漫画といった架空のキャラクターで妄想する時、頭の中で色んな行動を勝手に起こさせたりするでしょう。小鳥はそれをキツネさんというキャラクターで行っているだけです。

## その8 『彼女の家』に鳥がやってきた日』

5月19日 火曜日。

昨日は昼間まで雨降ったりしていたけれど、今日はどうやらその心配はなさそうです。

雲ひとつない、快晴。むしろ暑いって。

学校が終わってすぐに教室を去る。

待ち合わせは15時半。

駅まで歩いて、電車の乗って、到着。

スムーズに行けば待ち合わせの10分前には到着する予定。

…あの悪夢を再現しちゃうあいけないからね（土曜日のコト）。

日本に来て家族以外に知り合いがなくて心細いんです、とか悩んでいるスフィーに平日だけどそんなの関係ないほど賑わっている街に一人で来いとか鬼か私、って思ったけど今更だよな。

んー、まあ踏み出す勇気が必要なんだよ、うん。

それにスフィーが嫌がる様子見せなかったし、私は鬼じゃないんだよ、うん。

「ココが本日の目的地」

『何を買うの？』

会話については日曜日と同じような感じで。

実際は大げさな動作でのボディランゲージだけ？まあそれを加えながら日本語だったり英語だったり話しています。

スフィーも簡単な日本語なら片言だけど話せるのでお互い英語と日本語が混じっている。

私の例の本効果と外人女性さんのスフィーという組み合わせは視線が辛かったりしますが、そこは我慢。友人、というよりは協力者なんでその辺は堪えないとね。

で。

私とスフィーが来たのは駅にくつついている総合デパート。

地下と一階が食品で、その上は服・雑貨となる。確か6階までだっけ？覚えてないや。

色々見て回リたかったけど私は学校帰りで休日ほどゆっくりできる時間がなかったし、

スフィーは家に帰って夕食などの家事がある。

ならまずお目当てのものを買ってから見て回ろう、と連れてきたのが今いるお店。

綺麗に展示されている商品。

それらを眺めながら、私は探していたの見つけた。

ガラス製の小物たち。

その専門店で、商品はガラス製の小物・お皿だけ。

指先ほどのサイズから手の平サイズの大きい日まで。

様々な動物や魚がいて、お皿も含めてインテリア用なモノで、実用性は無い。

見ているだけでも結構面白い、そんなお店だ。

「スフィー、今日はコレを買っていくんだよ」

小さくキラキラした透明な動物を見ていたスフィーを呼び、目的に指を差す。

『これは…鳥？　なんで？』

数ある中なんで『鳥』なのか。

元々約束した時点では「初心者向けの日本語」とかそんな本を買っていつて明らかに「日本語を習いたい」とアピールさせて家族と交流させて仲良くさせよう、そんな風に思っていたんだけど、昨日急遽変更。

「まあこれ買ったら近くのカフェでも入って話すよ、ちゃんと」

『そう…コトリは私のために今日付き合ってもらっているだものね。』

でも、どんな鳥がいいの？』

「スフィーと旦那さん、仲よし夫婦が良いな」

スフィーが真剣に選んでいるのを確認して、私はもう一つの目的に取り掛かった。

まあ単純で、スフィーが選んだのを飾る台が欲しかったのだ。

その辺にポンって置くよりはせつかく夫婦で買うのだから一つの作品として見立てたかったのだ。

一応昨日の内に自宅でこのお店のサイトを探し、目星はつけてある。円形で深さがやや浅めの器。

器がメインでないし、スフィーの選んだ鳥を消さないように無難に透明なのを選んでおく。

そしてまだ鳥探し中のスフィーに見つからないように、こっそりと会計を済ませてしまう。

スフィーのと一緒に袋に入れてもらうつもりなので、店員さんには包装を待ってもらおう。

レジでスフィーを待とうと思っていたけれど、ふと横に包装時に使うのか机があった。

「まだ時間あるしな…」

お客さんが私とスフィーだけだったのでヒマそうな店員さんに声をかけて頭の中で思い描いていたのを話し、可能かどうか確認した。

必要な材料は運が良くお店にあったので、それを利用させてもらうことにする。

私が隣の机に中腰で作業をしていると選び終わったスフィーがやってきた。

『コトリ、この鳥に決めたわ』

スフィーが選んだのは黄色の尾が長めの鳥と、淡い青色の澄んだ鳥。黄色の方が一回り小さい。

「スフィーが黄色で、旦那さんが青いのだよね？」

旦那さんは会ったことないけど、黄色の鳥はスフィーに合っているとと思うよ。」

そこまで話したところでスフィーが私が机で作業しているモノが気になったらしく、簡単なその作業に目的を言わずにじゃあやってみる？と場所を代わる。

…その間に、スフィーが選んだのを会計してしまう。

小物計三点、別にそれほどの出費でもないし元々私が払うつもりでいたのでさっさと済ませる。

「ありがとうございます！」

親切な店員さんの声を背中受けてながら勝手にお金を払った私に申し訳なさそうにしている

スフィーは大事そうに抱いている。

何って、さっき買ったもの。

早く家に帰って家族に見せたいかもしれないけれど、それじゃあ本

来の目的が叶わないので。

駅内にある適当なカフェに入る。

新鮮な野菜やフルーツのジュースを売りとしている人気のお店で、お客さんは女性がホトンド。

仲間内のおしゃべりで夢中だから声も気にせず話すことも出来るし、机の上にモノを多少広げても文句は言われないうら。

「さて、何でコレを今日は買いに来たのか？だっけ」

『そうそう。確かに可愛いプレゼントだけど、そうじゃないのしょうっ？』

「元々、どうやってスフィーが日本に、日本での生活に慣れるかが目的だからね」

買い物とその本来の目的が繋がらないのか、目をパチクリとしているスフィー。

反応が予想通りで思わず苦笑してしまう。

「・・・まあまあ、色んなの見て回る時間がなくなっちゃうかもしれないけど、聞いてね？」

「スフィーにはまだやることあるんだから」

夕食は19時半。

これは我が小鳥遊家の平日の夕食時間。

どんなに早くおかずが出来ようがご飯の炊きあがりか19時半に設定してあるのでそれまでお預け。

壁に掛けられた時計を見ると19時15分。

まだ時間があるな・・・。

『日記』でも書いてしまおうか。

駅で別れたスフィー。

私が言ったことを実行して成功してくれば良いんだけど・・・まあ主人公な君島トオルがいるんだ。

きっとスフィーが幸せになるようなルートをお膳立てしたんだから補正でもかかって上手くいくだろう。

…それでも一応不安だから「ためき堂」に報告しに来てね、と約束したんだけど。

「小鳥ー！！ ご飯だよー！」

「わかったー！ …ま、何とかなるっしょ」

書こうと思っただけで日付だけで放置。

あとは寝る前になるのかな。

『カフェで買ったものを出して、そこで作るつもりだったけど

お店で時間と運が良くて仕上げてしまう。 だけど説明の為に

それを机の上に置く。

通常ならプチプチシートで一個ずつ包装してくれるんだけど、

お願いしてプラスチックのケースに入れてもらった。

ただしガラス製なので動かしてぶつかり、傷つけてしまったらどうしようもないので

その辺はちゃんと考えていて。

綿を手で裂いて空気を含めてから器に入れ、鳥2羽もそこに収められた。

ケースはちょうど器がきっちり入ったので固定は必要なし。』

「こんなに上手くいくなんて、君島トオルのせい…？」

そんなわけないけど、この際はいつか。  
私は続きを書く。  
スタンドライトだけが日記を照らす。

『そもそもスフィーは弱いところを見せたがらない、そんな人なんだろう。』

だからこそ日本に来て戸惑っているのにそれを見せないから旦那さんも仕事に行っちゃうし、

君島トオルも学校生活を満喫するのだろう。

今回のことでスフィーが一人頑張ってきたことを知ればいいと思う。』

あのカフェで言ったのはどうなるか、ではない。

私はこうしたら言いと思うよ、と提案してそのアイテムをあげただけなのだから。

「これを持って、君島トオルから『鳥』を受け取って」  
息子と同じ学校に通っていることを伝えて、驚かせて。

「スフィー、家族なんだよ」

その息子が私の友人に想いを寄せているのを伝えて、驚かせて。

「大丈夫。私が、じゃなくてスフィー頑張ってきたんでしよう？」  
お見通しだ、と伝えて本当に驚かせて。

「日本では『母強し』…カカア天下な家が昔つからあるんだから  
そういつて笑わせて。

「スフィーは『お母さん』なんだから」

その微笑は忘れられないものだ、私は思う。

「頑張つて」

スフィーを見送り、反対方向に歩き出した私。

私はスフィーの家族ではないし、君島トオルともただの知り合いだし、ヒロインな有希ちゃんのお友達でしかない。脇役かそれ以下でしかない私は「頑張れ」としか言えないし、これ以上のことは言わない。今回はまあ特別になるのだろう。

日記を閉じ、ボールペンを置く。隣の部屋では両親が寝ているので小さな声で。

「頑張って。」

さて、おやすみなさいの時間だ。

その8 『彼女の家に鳥がやってきた日』 (後書き)

この日、君島トオルは有希ちゃんに「何でダメなの？」と詰め寄り、「時間を頂戴」と微妙な空気に。 そんなお話は一文も書くつもりはありませんが。

## その9 『彼とお茶会をした日』

5月20日 水曜日。

何とまあ『例の赤い本』を手にいれてから一週間がたった。

…おかげさまで面倒な日常です。

昨日はスフィーの約束があつて下校は有希ちゃんに断りを朝の内にしといた。

登校時は少なくとも表面的にはいつもの有希ちゃんだつたし、一昨日に比べたら

良いだろうと思つていたけど…本日は装う気力もないらしい。

姉御な有希ちゃんらしくない、沈んだ状態の有希ちゃん。

禁句を言わない方が良いとか話しかけない方が良いとか、そんなではなく。

話しかけない、のだ。

だから一緒に登校していても横に歩いているだけな感じだし、「おはよう」の挨拶だけだ、

言葉を交わしたの。

何が原因か、といえは即答で「君島トオル」なのだが…そんなヤツと今お茶会していたり。

時間はすこし遡つて。

通学において家からの最寄り駅として使うこの駅は改札が2つある。北口と南口。

私と有希ちゃんや君島トオルが使うのは専ら北口で、その改札を出てから東西に分かれるのだ。

なので東口を使う有希ちゃんと君島トオルと西口を使う私は同じ改札（北口）、というわけだ。

電車を降りて北口に向かう私。

今日は「たぬき堂」は定休日だし、久しぶりにゆつくりとした時間が過ごせるしゆつくりとネットかな、いや昼寝なんて贅沢でいいかも…そんな風に心を躍らせていたのに。

改札が見えてきたところで見えてきてしまったのは「君島トオル」。何故そこにいる、何故そこに立っている。

そう考えると答えはすぐに出てきた。

ああ、私を待っているんだな、と。

HRが終わって放課後。

いつもなら私がいる1-Eの教室に有希ちゃんが迎えに来てさあ帰ろう、になるんだけど来ない。

HRが終わって10分ほどたっているからどの教室もHRが終わっているはずで。

おかしいな、と思い私は有希ちゃんの1-Bの教室に向かうことにした。

1-Bへの廊下の途中、1-Aクラスの知人に会ったので有希ちゃんについて聞いてみると

「体調不調」を理由に帰らせた、とのこと。

…ああ、あまりの有希ちゃんらしさじゃないから周囲がそうさせたのだな。

納得はできた。

知人に礼を言ってから一人で帰ることに。

君島トオルは主人公スキルで目立っているんだけど、生憎私も「例

の本」のオカゲ（せい）で  
人目が刺さる。無視して帰ろうとしたんだけど、とうかしてた  
んだけどお約束な感じで  
捕まり、近くのファーストフード店に連行された。

君島トオルは自分が誘った（私的：強制連行）のだから私の分まで  
出す姿勢でいたが  
レジが2台空いているのを良いことにもう一つのレジに入り、自分  
の分だけをさっさと注文する。

フィレオフィッシュバーガー、ホットコーヒー、ホットアップルパ  
イ。  
会計を済ませ、互いにトレイとバックを持ちながら二階へと。

駅を見下ろせるカウンター席に並んで座る。  
特に前置きも無く私から切り出す。

「で、有希ちゃんの何を聞きたいの？」

私と君島トオルは別に遠慮でも気を遣うでもない。

そもそも共通の「知り合い」がいて、私たちはそこからのただの「  
知り合い」なのだから。

バーガーをパクリ。

モグモグ。

もうどのファーストフードかは分かったと思うけど書かない。何と  
なく。

「僕は…小学校3年生から最近まで向こうにいたのは知っているね？  
聞きたいのはその間に特別な出来事があったのか、ということな  
んだ」

普通のハンバーガーも好きだけど、だったらチーズがあった方がい  
いな。

まあ今はフライ魚にタルタルですが。これが一番好き。チーズも

あるし。

私はモグモグと。

君島トオルはポテトを摘みながら。

「私は小学校が違うし、中学はクラスが違った。仲良くなったのは正直いって

高校入ってからなんだよね。それで何が聞きたいの?」

直接ではないが君島トオルの質問には答えられない、という。

有希ちゃんが「恋愛事NO」な理由の一部なら知っている。

だけどそれは彼女から「誰にも言わないで」と言われているのでヤツには言えない。

つまり、私は有希ちゃんのコトを話さないでアドバイスしなければならぬのか。

メンドイ。

「知らない、というんだね?」

私の言葉の意味をちゃんと読み取ってはいる。けれど何でわからないのか。

「知ってても口止めされてなくてもどんなことがあるかと私は君島トオルには話さない。

そもそも有希ちゃんが周囲を困惑されるほどマイツている原因が君島トオルだし、

何故そんな人間に話さなくてはならないの? というかそもそも私との間に信頼関係の

カケラも無いのに「まるで僕を信用して話してくれる」ような口調でこられても

何お前、な感じなワケですよ、君島トオル」

絶句、という感じな君島トオルを他所に私はモグモグ、ゴクン。

青い包み紙を畳む。

「そうか…それもそうか」  
納得してもらって何よりです。  
でも、と君島トオルは続けた。

「僕が有希、いや有希ちゃんと呼んでいた頃、有希ちゃんは泣き虫でね、

その頃を思い出せばいつも泣き顔だった、それほど彼女の涙は見ていた。

そんな有希ちゃんが今では涙を見せたことのない、そんな女性だった。

一番最初に困惑したのは僕だったね」

「…何その情報、初めて聞いたし」

「ちよつと待って」

一旦話を中断させる。

スティック砂糖2本、ガムシロ1個、コーヒーミルク1個。

本当はコーヒーミルク2個使いたかったけど人目があったから我慢軽く混ぜて、一口。

やっぱりキツネさんが淹れてくれるいつものコーヒーとは違ってコッチの方が苦い。

当たり前か。

「そんで有希ちゃんと『仲良く』したい、ってこと？」

お次はホットアップルパイ。

久々なので楽しみ。

「僕は泣き虫な有希ちゃんしか知っていようとしていないのかもしれない。

けれど僕にとって『漆原有希』は『有希ちゃん』でしかない。

彼女が笑顔でいてほしいというのは間違っているかな？」

何お前。

その言葉は出来立てのホットアップルパイに消された。

一口目が熱すぎて単純に言葉が出せなかったのだ。

しかし美味い。うん。

「…間違っちゃいないね。だから私から君島トオル、アンタに言えることは簡単。」

『利用』すればいいってこと」

「それは…」

話しが通じないか分からないか、いやわかるうとしていないのか。スフィーみたいに天然にキョトンとしてくれたら癒されるのに。

ああでも君島トオルは似合わないか。ならいいや。

「まあ遠慮する必要もないし言うけどさ。」

君島トオルは過去の有希ちゃんと同じように今の有希ちゃんと『

仲良く』したい？

フザけた事言ってる自覚がある？ そーしたから有希ちゃんは困っているんだよ。

過去と今、確かに有希ちゃんは変わった、過去を知る君島トオルからすれば。

でもさ、じゃあ君島トオルは『あの頃』となーんにも変わらない、そう断言できるの？」

今日のお茶会の自分はやけに饒舌だな、そんな感想。

ホットアップルパイが半分をきった。中身が零れない様に食べる。パクン。

「……」

「『違う』んだよ、何もかも。小学校から中学、高校。

学び舎が変われば自分も変わる、細かく言えば私とこうして「お茶会」する前としている

今では何かしら『違う』んだよ

「そんなこと……」

「否定は断る。言い訳も押しつけも受け付けない。

でもって繰り返しよ。『利用すればいい』ってこと」

空になったハコを潰す。

温くなったコーヒー……底に砂糖があるかどうか確認しながら飲む。

「……」

考え込んでしまった君島トオルを他所に、私はコーヒー攻略に取り掛かる。

幸い砂糖は溶けきっていたようでマイペースに飲むだけなんだけど。

『違う』のならば『同じ』ではない。

それはただの模倣に過ぎない。

歪んだ模倣が歪みを生み出すことに何も感じない。だってそうじゃない。

最後の一滴まで。

そこまでの根性は見せなかったが取り合えず飲み干す。  
では。

「ご馳走様でした」

トレイを持って立つ。

「え？」

ゴミ箱は一階への階段の手前があるので、バックも忘れずに持つ。

「…そう暗く考えることもないと思うけどな。  
何で有希ちゃんがちゃんんと落ち込んでいるか、考えればわかる  
じゃん」

だって。

有希ちゃん、良い子だから。

そう言い残して私は去る。

君島トオルの戸惑いの叫びのオカゲで目立つことなくお店を出るこ  
とに成功した。

『5月20日 水曜日。 晴れ時々曇り。

何だかこの本を手に入れてしまった一週間前と同じような気もし  
なくもないが、

気のせいにしておく。』

夕食後、私は自室で日記を書き始めた。

今日書くのは君島トオルとのお茶会。

あれは相談というよりはそんな程度に留めておいた方がいいと思う。  
そこでの会話と、君島トオルへの愚痴をツラツラと書く。

最後に『有希ちゃんがいつもの有希ちゃんに復活しますように。』  
そう締め切った。

携帯を持っていない私が連絡を取る場合、家の固定電話を使う。

リビングに電話はあるんだが、この時間家族がいるので会話が丸聞  
こえだ。

なので両親の部屋にある子機を使うことにした。

ただしこの子機、声が聞こえにくかったり電池が少なかったりする

んで不便なのだ。

そこでお呪い程度に「例の赤い本」を持ってきて、それを抱きながら電話することにした。

「夜分遅くに失礼します。

同じ高校の小鳥遊と申しますが、有希さんをお願いできますか？」

本当に、お呪い程度なんだけどね。

その9 『彼とお茶会をした日』（後書き）

このお話の執筆中、電話シーンでパソコンにエラー発生。

…すべて消えました。なんとかもう一度執筆したけれど、

お茶会の会話が充分表現が違っちゃいました。

途中小まめに保存、学習しました。

11/8/18編集しました

## その10 『タヌキとキツネがやってきた日』

5月21日 木曜日。

本日の「タヌキ堂」はとても静かです。

「……………」

「……………」

店内は私とキツネさんのみ。

タヌキ様は用事があるとかで本日はお店に来ないかも、とのコト。

まあ実際この「タヌキ堂」に関してはほとんどキツネさんに任せているんで、

今日みたいに静かな日だとキツネさん一人でも大丈夫なんだとか。

…私の存在を否定された気がしたけど、あくまでお客さんが少ない場合であって

それは確認されないから本日のバイトを命じられました。

で。

来たはいいけど夕方になるとお客さんがいなくなってしまったのでキツネさん監視の下、

再度紅茶にチャレンジです。

最後の一滴まで。

前回よりは手つきが安定してきたけれど、やっぱりどうしてもキツネさんのようにはいかず。

それを口にしたら「当たり前じゃないですか。私は毎日何年も淹れてきたのですから」と

自分の上司っぷりをアピールしてきた。

そして今回淹れたのは3人分。

まず1杯目を試飲用としてキツネさんがジャツジメント。

残りの2杯は私とキツネさんのティータイムへと。

本当に静かで平穏だ…学校とは違って。

大体今週くらいから。

これ以上深く巻き込まれるのは嫌なのであえて有希ちゃんと君島トオルについては

日記への書き込みを最低限に留めていました。

まあ昨日君島トオルと強制お茶会inファーストフード店でしたが、これはもう諦めるべきなのかいやそうじゃないとか内心葛藤があったけど、今日とある

出来事を目の当たりしたんで良い機会、書いてしまうことにします。そしてこれは今日のティータイムのネタ。

どこかで書いたっけ？

私と有希ちゃんは互いの家が駅を挟んでいるので「要請」以来、登校の待ち合わせを駅のホームですべて。

今日もいつも通りの時間に出て、待ち合わせの場所に行きました。行きましたが。

何故そこに有希ちゃんと君島トオルが派手に立ち並んでいるのかと。

今週の月曜日。

昼休みの時間に何故か教室に取り付けられているテレビに有希ちゃんと君島トオルの街頭インタビューが流れました。

教室で友人とお弁当を食べていた私は「えー」と思いました。だって。

学校中が祝福してんだもの。

今週の水曜日。

有希ちゃんがあまりの不調に早退した日。

「あんなに悩むなんて…恋する乙女？」

…実は今日知ったことだけど…どうやら恋をしたことのない（ハズ）の有希ちゃんだから初恋で、

それがあの君島トオルだから戸惑って悩んでいるんじゃないかと思われたらしいです。

周囲が早退を進めたのもあまりにも微笑ましいのと付き合っているのをからかえないから、  
らしいです。マジかお前ら。

今週の木曜日。

つまり今日。

有希ちゃんと君島トオルの二人を見た瞬間、私は隠れました。そして時間になっても来ない私を

気にしながらも電車に乗る二人。私も次の車両に乗り込む。

通勤・通学時間は大変混むので見つかる可能性は低いし、どうせ降りる駅は同じだし。

その後も見つからないよう安全圏からコソコソ登校した私。

そして校門にやっと到着すると、そこで新聞部と放送部の突撃インタビューが行われていた。

案の定昼休みにそのインタビューが流されているし、下校時間には号外だとかいって紙を押し付けるし。

良かった。

何をそんなに盛り上がっているのかはよくはわからないけど、有希ちゃんが私の教室には

来れないと悟り、バイトがあるので一人で帰らせてもらった。

そして平穏なキツネさんとのティータイム。

「真面目に書いたら今度こそキツネさんの言う間女的な感じになり

そうですね」

ハハハ。と乾いた笑いが口から出た。正直だね、私。

「当の本人は納得してないのでしょうけど、それだけ周囲が盛り上がっていたら…無理ですよええ」

「盛り上がり過ぎな気もするけどね。結局、戸惑っているだけで嫌じゃないんだと思うよ?」

本気で嫌なら有希ちゃん、今も君島トオルを斬り続けているしね。

紅茶にミルクを足す。

キツネさんがこの茶葉はミルクティーにしてもおいしいですよと言ったから試しに。

スプーンでかき回して、一口。ミルクが多すぎた…。

「まあこれでラブコメも終わりですか」

私がミルクっぽい紅茶に苦戦しているのをニヤリとしながらのキツネさん。

絶対のその笑いは今の私に向けてますよね。ラブコメに対してじゃないでしょ。

「終わりってか、これで一応落ち着くんじゃないですか?

あとは有希ちゃんがちゃんと答えを出すだけなんですから」

ティータイムの終わり。

ごちさーさまでした!

日が暮れる頃。

二人組みのお客さんをキツネさんが対応していて、私はお店の前を掃除していた。

そろそろ閉める時間が近いので今いるお客さんで最後にしたいところ。

きつとキツネさんも同じだろう。

チリトリでゴミを回収していたら後ろに人の気配を感じ、振り返る。

「ヒナちゃん」

「あ、タヌキ様お帰りなさい」

「ただいま。 いやー、今日は青春を見ちゃったよ」

…いや、まさかね。

まさかだよな。

口元が軽く引き攣った。

深夜自室にて。

『5月21日 木曜日。 今日には晴天。 けれど風がやや強めでお空に雲が流れていました。

そして有希ちゃんと君島トオルが正式にお付き合いすることになったようです。』

…。

いきなり書いちゃったよ、どうしよう。

ボールペンを持つ手が空中で停止する。

結構無自覚だったけどインパクトが強かったみたいです。

はあ…とため息をついて書こうとは思っていなかった部屋の新参者について、か。

陶器製の狸と狐。

タヌキ様からのお土産だった。

書くつもりなかったんだけどなー。

青春を見た、と爽やかな笑顔のタヌキ様と共に店内へ。  
丁度中ではお客さんが会計をしようとしていたので私は掃除道具を  
持ちながらレジに。  
配膳・ごみ掃除の他に手が空いているのならやってほしいといわれ  
たのが実は会計。  
まあ単純操作だし、頭の中で何度もシミュレーションしたから大丈  
夫。  
「ありがとうございますー」

二人組みのお客さんを見送り、タヌキ様に先程の話を振る。

「青春って…道の真ん中で夕日をバックに告白でもしている人たちがいたの？」

何ですかそれとキツネさんが言う前に。

「よくわかったねー」

私とキツネさんの目が合う。

…もじゃ、ですよ。 おそらくそうでしょう…。

「近くで見てたとかじゃなくて遠くからちらっと見ただけなんだけどね」

けれどそれだけで告白とわかったと。

「タヌキ様、多分っていうか絶対それ、私の友人だわ」

このタイミング、そのシチュエーション…漫画な展開はあの二人しかいない。

というかそれ以外にあってたまるか。

その後。

掃除も終えて帰ります、なところにタヌキ様が「今日行った所のお土産。僕がもらったんだけど、

『趣味』のモノじゃないからねえ」と押し付けてきたそれが陶器製

の狸と狐だ。

畜生、上司だしタヌキ様だし断れない。

そうして我が家、我が部屋にやってきた狸と狐。

出来栄えは素人目にも良いとは思っけど……女子高生の部屋では中々の珍獣っぷりを

晒してくれる。ハッキリ言おう、浮いている。

例の本にはタヌキ様への「ありがとう」と陶器製の狸と狐は取り合えずな褒めを。

カキカキカキ。

終わり。

本日の書き込みは短い気もしくもないが、書きたくないこと(学校でのこと)があるんだと感じ取って欲しい。

そしておそらく明日も有希ちゃんとは登校しないでしょう。

だって、全力で逃げますから。

そのためにさっさと寝ることにした私。

お休みなさい。

その10 『タヌキとキツネがやってきた日』 (後書き)

次のお話でラブコメ編はいったん終了です。

## その11 『キツネさん不在の日』

5月22日 金曜日。

今日は朝から清々しい天気です。

雲ひとつ見当たらない空、後ろからちよこつと手助け程度な風。

カバンの中にしつかりと存在感ありありな『例の赤い本』なんて気にならないほど。

そしてそれから。

私、本日から完全に「要請」が解かれました！

「おはよー」

「おはよう、小鳥」

下駄箱で会ったクラスメイトと挨拶を交わし、そのまま並んでおしやべりしながら教室へ。

今朝早く、有希ちゃんから電話で「もう大丈夫」と言われた。

私にはそれだけでわかったしタヌキ様という情報源から解ってはいたので深くは追求しなかった。

それに追求したら有希ちゃん怒るよね。ツンデレな感じに。

とにかく終わったのだな、そう安心してたらうっかりいつもの登校時間を過ぎている事に気が付き

慌てて家を出た。 まあそれも良い思い出でしょう。うむ。

本日使う教材を机の中に収めている途中、古文の教科書を忘れてることが発覚。

そうか。 昨日予習が終わってなかったから家に持って帰ったんだ。何故ノートはあるのに教科書を忘れるのかはわからないが、仕方ない、教科書は誰かから借りることにしよう。

「ちよつとB組の子に教科書借りてくるわ」

「早く帰ってきなさいよ、あまり時間無いからね」

「りょーかい。」

早足でB組へ。

AとH組は同じ階にあり、横並びのため時間さえあればE組の私もこうしてB組へと

教科書を借りることも出来る。借りようとしているのは有希ちゃん。

「大丈夫」とは言われたものの直接顔を見て判断したいって気持ちと友人に言われた通り時間は

それほどない。

なら多少トラブってもそれを理由に逃げ出せる。そう考えたからだ。

…巻き込まれるのは嫌だけど、友人を心配している気持ちはあるんだし…たまたまそっちが勝っただけ。そしてB組へ。

前後のドアは開けっ放し。そしてその中から聞こえてきたのは…

「「「おめでとー!!!」」」

…。

祝っているなあ。

考えることは止めにした頭でぼんやりとそう思った。

これで心配している気持ちより巻き込まれたくない気持ちがあっさり勝ちました。おめでとつ。

教室を覗くのをやめた私はお祭り騒ぎなB組を野次馬している他のクラスメイトからA組の友人を見つけた。

この友人、水曜日に有希ちゃんが早退したことを知っていたりと中々な野次馬さんでして。

入学式で知り合った仲だけど愉快的な友人です、ええ。

見ているだけで巻き込まれないなんて、なんて羨まし過ぎるんだ、と言いたい。

心の叫びは押さえてA組の友人にこれまでのこと（見てきたこと）を説明させる。

友人によると。

有希ちゃんと君島トオルは二人並んで登校。教室に入るなり君島トオルと有希ちゃんは手を繋ぎ（何気に恋人繋ぎ）高々と宣言「真剣交際、してます!!!」と。事前に君島トオルがクラスの連絡名簿で登校時間と発表があります、と通達してて クラスメイト達に盛大な祝福とど派手な宣言をくらった有希ちゃん 盛り上がったB組は有希ちゃんと君島トオルの席を教室の真ん中に並べてそこに座らせる B組担任教師、花束で二人を祝福 真っ赤になった有希ちゃんとニヤケ顔な君島トオル 盛り下がることのないB組。

私が聞いた「おめでとっ」も何度目かわからないとのこと。

何だ、B組ごと「ラブコメ化」したのか。

っていうか担任教師は混ざるな。

校則はないからって立場があるでしょうが。

ココロの安静のために突っ込みながら目をキラキラさせて語ってくれた友人に本来の目的である

古文の教科書を貸してくれ、と頼む。

いいよ、とあっさりおkしてくれた彼女から教科書を受け取り自分の教室に戻る。

エンドレスな祝福がBGMって…勘弁してほしい。

私、たかなし小鳥遊 ことり小鳥は考え付いてしまいました。

学校では色々とあり過ぎて疲れたけれど前向きに考えよう、前向きだ。

ともかく、有希ちゃんと君島トオルのラブコメは一山越えたのだからしばらくは落ち着くはず。

ならしばらくは傍に近寄らない限り私は「何も無い日常」なわけだ。主人公やヒロインがいないのだ、イベントが起きることも無く巻き込まれることもない。

そうだ、そう考えればいいんだ。平穏なのだ。

ためき堂でのバイト中、そんなことを考え付いてしまいました。

「ヒナちゃん、何だか嬉しそうだね」

とタヌキ様に指摘されてから顔が緩んでいることに気が付く。いけないいけない…バイト中なんだから。

今日はタヌキ様というオーナーさんと二人っきりでのバイトなのだから。

本日もバイト。

正直なところあまりこの仕事にお金が発生していることに実感が無くて、

バイトというよりはお手伝いな感じが強いというのが私の感想。

キツネさんは本日お休みということで先程も書いたけどタヌキ様と二人。

やはり『オーナー』という人と一緒に働くのかなしければし

っ  
かりしなければと  
多少なりと緊張してくる。

そしていつもより一時間ほど早く表のプレートを『CLOSE』に  
してしまう。

緊張が更に高まる。

タヌキ様の前で紅茶を淹れる私。

手が震えるほどではないが手の動きをいつもより意識しまう。

頭の中とのズレが顕著で気にし過ぎてこれでは出したい味とは異な  
ってしまっただろう。

でも途中で「すみませんやり直します」とも言える勇気も無くて、  
少し渋みが強いかもしれない。

本当はストレートで飲んで欲しかったが仕方ない、ミルクと砂糖も  
用意して…終わり。

「…確かにこれではストレートは厳しいかもしれませんねえ」

「ですよねえ、やっぱり」

私とタヌキ様は渋い紅茶を一口飲んでからお互いのティーカップに  
ミルクを追加した。

一口。

…飲む。

お茶請けはタヌキ様が仕事仲間にもらったという「マカダミアクッ  
キー」。

アーモンドと比べればマカダミアの方が好きなので、これは嬉しい。  
クッキーだから香りと飲みやすさを重視した紅茶を淹れたかったが  
…しょうがないか。

ためき堂の二人用のテーブルで向かい合いながらのティータイム。

キツネさんとも時々こうしたお茶請けがあると早めにお店を閉めてティータイムしていたらしい。  
そして今回のお茶請けであるクッキーはキツネさんが好きだから内緒ね、と約束。

そうだろうなあ…なんかいつも何かしらのクッキーを常備している感じはしてたし。

色々と私がタヌキ堂を知る前の出来事を聞いていたがミルクティーがなくなったのでティータイム終了。

残りのクッキーを頂戴した私は入れてあった袋にクッキーをしまつて家族へのお土産とした。

帰り際。

最初から聞きたかったことを聞いてないことに気が付いて。

お疲れ様でした、と帰る前に聞くことにした私。

「そうだタヌキ様」

「何ですか？」

「なんで今日キツネさんは休みなの？」

「ああ、言つてませんでしたね」

本日、本当はキツネさんとタヌキ様、二人で私の紅茶を見てもらう予定だったのだとか。

それにキツネさんが好きなクッキーもあつたし…タヌキ様がもらつたというのもそーゆーのがあるからなんだろう。

「別に大したことではないんですけど、風邪気味で咳があるから本日はお休みさせて下さい、と

今朝連絡があつたんですよ。 お客さんに風邪をうつしてはいけ

ませんからねえ」

キツネさんが風邪、ねえ…。

「ま、それじゃあ仕方ないですよね」

「そうそう、ヒナちゃんも気をつけるんだよ？」

「はい」

そして深夜、私室。

寝る前に今日の出来事をこうして『例の赤い本』に書くことも習慣づいてきた。

…あんまり嬉しくもない習慣だけど。

けれどこうして毎日書いていけば白紙は減っていく。

全て埋めたら私はこの本から解放されるのだ。

なら書く習慣がついてもいいではないか…と思いつく。

『今日はたぬき堂でのバイト。オーナーのタヌキ様と二人での仕事だった。』

キツネさんは風邪でダウンだそうです』

今日は会っていないキツネさんの顔を思い出す。

…まあ本には毎回名前がでてるし、会ってない感じはないんだけど。けれど気になることがある。

昨日やってきた狸と狐の陶器製の置物。

セツトのような扱いだが実は単品を並べているだけでして。

置いてある棚へと視線をやる。

そこには狸しかいなかった。

帰宅早々私室に足を踏み入れた私は違和感を感じた。

色々服や本や小物や本が多くてそれほど綺麗な部屋ではない。

どこかどこにあるか把握していれば良いや、な私は使ったソコに置きっぱである場合が多い。

なので何というか…固定的な汚さがあるのだ。

そこに感じる違和感。

キヨロキヨロとして探して、見つけたのは『狸だけ』。

昨日セツティングしたばかりの狸と狐を動かす理由も記憶も全く私には無くて。

夕飯の時に家族に聞いたところ…

母は「漬け物石に使ってないよ。使うなら狸の方かな」

人のものを使うなよ。

父は「そんなサスペンスに出そうな凶器もらってくるんじゃない」「テレビの見過ぎだよ。」

兄は「狸？狐？ そんなのお前の部屋にあったっけ？」

ああ昨日話した時いなかったんだ。

とまあ結局「ためき堂」でキツネさん欠席と同日に我が家の狐も行方不明で…。

日記を書きながら「いや、まさか…ねえ」と不安が。文を読み返す。

有希ちゃんと君島トオルのラブコメが一先ず終了したことをすっごくアピールしたソレ。

キツネさん不在のソレ。

狐が行方不明なソレ。

…え、続けて何かしらのイベント発生？

そんなことはない。そうさ、明日バイトでためき堂に行くんだ、きつとキツネさんも

一日休んで体調回復させていつも通りにいるはずさ。 なら問題はない。

そうとなれば早く日記を終わらせて寝てしまおう。 バイトなんだから。

…。

では、お休みなさい。

『何も起きません様に』

本日の日記に記した最後の一文を念じながら。

その11 『キツネさん不在の日』 (後書き)

これで一旦ラブコメ編は終了です。次回は異世界編です。だつて、ジャンルは「ファンタジー」ですから。

異世界編 その1 『現状把握』 (前書き)

今回から異世界編に入ります。  
その64まである予定です。

異世界編 その1 『現状把握』

「いてっ！」

「…小鳥さん？」

何だか額がすごく痛い。

急にうつ伏せになった身体を動かし、のそのそと顔を上げる。

ずっと座りっぱなしだったようでお尻の感覚がない。

って。そんなことより。

「キツネさん…」

「何ですか？」

「説明お願いします」

私は小鳥遊 たかなし 小鳥 ことり、公立高校に通う高校一年生。

最近『赤い布製カバーの名前のない本』をゲットしてしまい、そこから学び舎がラブコメとなり、

それに色々と関わってしまったので何とか逃れようと必死だったのが昨日まで。

本日から一旦ラブコメが落ち着いたので「ああ明日から『平穩』

…！」と舞い踊っていたのが

つい最近始めたバイト中のこと。

そんなことからをつらつらと地味に『わたしとキツネさんと赤い本』なんていうまんまなタイトルがついた例の本に日記のように綴った。そして寝る前にもこれで落ち着くよなーなんて思いながら書いた。ええ、書きましたとも。

そして寝たんですとも。

ですから、説明お願いします。

「何故私は無駄に大きい木製の机にうつ伏せで寝てたのか。

何故私は図書館みたいな部屋にいるのか。

何故、ですかキツネさん……」

「異世界だからですよ」

な、なんですと……！！

「ふう」

キツネさんに淹れて貰ったお茶は異世界のモノみたいだけど、味としては紅茶そっくり。

見た目はやや濃いけれど……。

取り合えず、私に気が付いた時というのがキツネさんがお茶を淹れた時だったので、

説明を聞きながら紅茶らしいお茶を……

「ああ、『紅茶』ですよ、名称。一般的なお茶の一つです」

…『紅茶』を飲みながら一旦整理しよう。しょうがないから。

ちくしょー、おいしいじゃんかこの紅茶。

…私がいるココは『国家図書館』、まあ国内で発行された書物を収集、所蔵しているトコロ。

でもって国ってというのは『オルブライト王国』で、『首都アズライト』にある王城の一角に

この部屋は存在している。

ちなみに所蔵数がそれなりなものなんで部屋、というよりは図書館。

でもって私は『図書館管理司書長』でキツネさんは『司書長補佐』  
…この辺の設定は

「そーゆーもんです」な感じで流すのが一番らしいです、キツネさん曰く。

私だっっていつそんな役職に就いたのか記憶ないし。

私気がついたのはついさっきで、キツネさんはこの世界の一週間前に来ちゃったらしい。

ご愁傷様。

まあそのオカゲで落ち着いて説明が聞けるんだけど。

納得するっっていうよりは「そーゆーもん」って頭にぶち込むしかない。

だっって、すぐ隣にあの『赤い本』が普通にあるし。お気に入りのポールペンと共に。

…ああ説明のまとめだっった、話がずれた。

とはいうものの…紅茶の入ったティーカップが空になっておかわりでも頂戴したいなとか

思っただら軽装備の兵士がノックの後に入ってきて。

「司書長殿、ミレシアン国妃様がお呼びです」

え、何この展開。

そー思っただが呼び出し相手はとてつもなく上の人。だっって『国妃』  
だぜ

素直についていく他無かった。

あ、でもキツネさんも一緒にね。

水晶の間。

そこにいるらしいミレシアン様…うー生まれて初めて人に様とかつ

けたし。

タヌキ様とはいうのは愛称だから別カウントなんです。

話がズレやすいな…だって異世界だもんな。

水晶の間というのは勇者が召喚された場所であり、一般の兵士は入れなくて神聖な場所。

何故そこにいるのかは案内役の兵士に聞くことでもないと思って聞かなかつた。

だって軽装備だしねえ。明らか下っ端っぽい。

案内の兵士、私、キツネさん…縦に並んで歩いています。

歩きながら周囲を見る。

石レンガの壁。フカフカな絨毯が敷かれた通路。電気何ソレ？

な感じの照明。火っぽい？

途中掛け声が聞こえたので見てみると窓の向こうの敷地で兵士が訓練中のように。

格好が明らか案内の兵士より凝っていて派手。中装備くらい、かな。

そして呪文っぽいのを唱えて手に持っていた長槍に火が纏わりついた。

ふあ、ファンタジーな異世界!!!

声に出さなかつたが思わず足を止めてしまった私に案内の兵士が「どうかされましたか？」と声をかけ、キツネさんが後ろから肩をポンッと叩いた。

「諦めなさい、小鳥さん」

一週間前からいるキツネさんは知ってたであろう、『魔法』という存在。

私は…そうだ、あれ（赤い本）を憾いらいんでやろう。漢字が違う？そこんところは私の心情を読み取ってくれ。

そして到着しました、水晶の間の前。  
ちよつと前に「ここからは自分は立ち入れないので」と案内の兵士と別れた。

どうやら水晶の間に繋がる通路にも兵士が立っていて、そこから先はある一定以上の役職の者しか入れないようです。

「知らない情報くれましたね、キツネさん」

「知ってました？ 司書長って実は独立した王族直属の一部門の長なんですよ」

「知っているわけないじゃん、です」

更に余計な知識をもらいつつ深呼吸をして水晶の間の前に立つ。

「国庫管理司書長、その補佐2名、ミレシアン様の命により参上しました」

「入りなさい」

小さいがよく通る綺麗な声が聞こえた。

観音開きな扉の前には警備の兵士がいない。

…どうやらキツネさんのある一定って実は途轍もなく高いんじゃない？  
考えたくも無いことだったので流す。

キツネさんに扉を開けてもらい、中に踏み出す。

その途端。

空気が体に纏わり付いて気分が直角に下向。

気持ち悪い。すんごく。そして何か吐き気もする。すんごく。

流石に女王様の前でそんな様子を出したりするのは駄目と思うので  
必死に堪えて無表情に。

「・・・あまり時間がないので手短に言いましたよ」

水晶の間、という割には水晶というのが見受けられない。

あるのは水が湧き続けているのに溢れない、という石で囲まれた人工的な池。

その池の水が発光しているのが池の底：人工建物内だからそんなに深くないハズ：が

発光しているかはわからないけれど、空間内の三分の一を占める大きさなので明るさは

周囲を把握できるくらい。っていうか気持ち悪い。

中にはミレシアン様一人のようで、西洋人みたいな顔つきに金髪と藍色の瞳。

30～40代のようで何とというか威厳のあるお方。当然、綺麗な方です。

「勇者の軌跡を我が国家図書館に所蔵すること」

「…勇者、というと」

「ええ、つい先程『報せ』によりわかったことなのですが…

勇者・アイザワが近日帰還します」

ですから。とミレシアン様は続けた。

「国家図書管理司書長コトリに命じます。

このアイザワの旅路を本に纏め、『我ら』の所蔵の一つとしなさい」

マジで気持ち悪いんですが。

水晶の間を出る。

ミレシアン様の命令はそもそも断ることなんて出来ないし、わかんないことだらけだけど

気持ち悪いし、あとでキツネさんに聞けば良いやなんて思ったし、吐き気がするし、

了解しましたと返事をして「ではお願いしますね」と言われたし。

「キツネさん」

「どうかしましたか？」

来たばかりの私じゃあ元の部屋、国家図書館の場所がわからないので

キツネさんのあとについて歩いている中。

「キモ、チ悪い…もうムリ…ポ」

体が重いし眩暈が酷くて視界に色素がないし何かを吐き出したいけどねっとりとしていてムリだし。

あれはいつだっけ…約一時間前に異世界にやってきた私は原因不明の気持ち悪さと吐き気に意識がブラックアウトした。

異世界編 その1 『現状把握』（後書き）

小鳥が倒れたのを地面にぶつかる前に慌ててキャッチしたキツネさん。

「…無理っぽくないじゃないですか」

そして抱かえたまま仕事場でなく初めて行くことになる医務室へと向かう。

…異世界に来ちゃった割にはあまりパニックもないし説明不足ですがよろちよろ  
としていくよていです。

## 異世界編 その2 『状態把握』

目を覚ました。

そしたらそこは

っていつかそこにはキツネさんがいました。

「キツネさん、ここどこですか？」

なので聞くことにしました。

「小鳥さんが倒れてしまったので、私が医務室に運びました。

倒れた原因は医者の方が来てから検討、ということだ

ハイ、と渡されたのはお茶…この世界の紅茶を受け取る為に体を起こす。

意識を失う、なんて初めてな体験だったけれどももう二度と体験しなくて良いし。

すんごく気持ち悪かったんだから。

まあ今は多少ダルさが残るけれどもう問題ないし。

「ふう…目が覚めるとキツネさんの紅茶ですか」

「目が覚めるのにも気分転換にも良いではありませんか」

「あ、流せってことですね」

そのまま適当な会話をしていると、ドアが開かれた。

入ってきたのはやたら白いワイシャツを着ているオジさん。

その白さが不自然過ぎてちょっと引いたがそれよりも全体を見ると動き易そうな服装。

兵士の格好でもないし給仕の格好でもないし…誰だろう。

「目を覚ましましたか、管理司書長殿は」

「ええ、もう大丈夫なようですよ、こうしてお茶しながら会話も普通にしてますし」

キツネさんは誰だかわかっているようで会話を交わしている。

「というか管理司書長殿ねえ…案内役の兵士も司書長殿って呼んでたし役職で呼ぶのが

普通なのかココは…」。

「キツネさん…」

誰なのこの人。そんな視線（合図）を送る。軽く頷いてくれたので伝わっただろう。

「この医務室の医師、ヤンリさんです。先程まで所用で医務室を空けてたのですよ」

「何、軍の宿舎まで病人の様子を見に行っただけさ。仮病だったんで蹴飛ばしたけどな」

「…」

随分な見た目と反するオジさんだ。

爽やかだけど実際は真っ黒じゃないか、この人。

「さてと」

ヤンリさんは近くの机…コップや紙束が置いてあったり。多分この人の机なんだろう…から棒状のものを取り出して口にくわえ、長袖を肘まで大雑把に捲りあげると私がいるベットに腰掛けた。

私は手にしていた紅茶をキツネさんに預ける。

「調子はもう本当に良いんだな？」

「まだ体が少し重く感じますけど、歩き回れるくらいには大丈夫です」

「倒れた原因に心当たりは？」

「うーん」

異世界にやってきて呼び出されて水晶の間について勇者の本書いて言われて…。

まあ異変を感じたのは水晶の間に入ってからだよね。

「ミレシアン様に呼ばれて水晶の間に入った途端、すんごく気持ち悪くなつたんです」

「ふむ」

「で、用事が済んで退出したすぐ後に気持ち悪さに限界が来ちゃつて倒れたんですけど…」

「自分でも原因はわからないと」

だって倒れたこと自体初めてだし。

コクンと頷く。

「いくつか原因らしい事項が浮かぶがなあ…管理司書長殿は『魔術』は使えますか？」

「まじゅつなんて…ないですね…」

きたきた魔法、じゃなくて『魔術』か。

ファンタジーな異世界出身じゃないですからーソクソクアルワケナイジャンイデスカ。

普通にそんなキーワードが出てくる時点で逃げ出したいがもうここが『ファンタジーな異世界』だもんな。

キツネさんの方を見る。

ああなんか諦めな表情だな。だよ、一週間も前からココにいるもんね。

ベットに腰掛けていたヤンリさんはもう一度自分の机に向かい、何かを引き出しから取り出すと

引き返してきた。

「ちよっとコレ、手の平に乗せてくれ」

差し出された物を受け取り、見てみる。

材質が水晶っぽいが普段見かけるようなツルツルなヤツじゃなくてゴツゴツしてて

とてもじゃないけれど商品的価値がなさそう。

「乗せるだけでいいんですか？」

「『其の輝石を示せ』」

呪文のようなモノが唱えられた瞬間、体中からナニかがズルルと蠢いた。

原因だと思っ手の平の石を投げ捨てたかったが体は固まったように動いてくれなくて。

気持ち悪さに冷や汗が額ににじむのを感じ、ほんの数秒だったけれど随分と長く感じた時間に

開放され肩のチカラを抜いた。

手の平から無色の水晶が転がり落ちる。

私の様子をじっと見詰めていたヤンリさんは口に棒状のモノをくわえたまま転がった水晶を拾う。

「ふむ…体が軽く感じないか？」

「え？」

指を動かし、腕全体を動かす。　　シーツで隠れている足も軽く動かす。

あれ？

「さっきまでのダルさが全くないですね。むしろ軽い？」

寝ていたのがウソなくらい。

けれど二度の「気持ち悪さ」は覚えている。  
ウソではない。

「んーやはりなー。 管理司書長殿、かなり重度の魔力拒絶症だな」  
ふあ、ファンタジーな病気ですと!?

医者であるヤンリさん曰く。

人には魔力を持つ者と持たない者がいる。 後者は魔力は空氣的な  
扱いだが前者は

1人につき2つの魔力をもつ。 それは生命と同等の純粋な魔力と  
自身の属性色の魔力。

魔術の行使には色持ちの魔力、つまりは属性色の魔力が使われる。  
では純粋な魔力は何の為にあるか。 ハッキリとは判明していない  
為有力な説となるが、それは魔力持ちの人間が生きるため、と言わ  
れている。

非視覚存在である『回路』：属性魔力が流行、貯蓄している。 体中  
に張り巡らされている…を生かすための魔力であり、いわば人間の  
第二の心臓部分である。

…色々ファンタジー来たなー！

さて。 私に下された「魔力拒絶症」だけど…上記の設定には2つの  
魔力が共存しているのが前提。

ただごく稀に属性色の魔力を持たない、純粋魔力のみを保有する  
人間もいる。

カレらは魔術行使のための魔力がないため魔術は使えない。

そしてその魔力は心臓としてではなく「貯蔵<sup>タンク</sup>」として存在する。

回路を持つ人よりも遥かに大きい貯蔵<sup>タンク</sup>を持つが、その中の魔力は人

によって異なる。

しかし貯蔵<sup>タンク</sup>が満タンになることはない。それでも満タンになった場合に起きるのが

「魔力拒絶」。まあ許容範囲を超えた魔力に耐え切れなくて体に「異変」が起きるのだと。

手が震えたり気分が悪くなったり頭痛が起きたり…。

これでわかっただろう。

私は要するにそのごく稀にいる純粹魔力しか持たない人間で、水晶の間という魔力の吹き溜まりの場所にオルブライト国内で一番の魔力を持つミレシアン様がいたのだ。

入った瞬間に私の貯蔵<sup>タンク</sup>の許容範囲がオーバーしたようで、気力で耐えていたが

部屋を出たところで倒れた。

「さっきやったのは中の魔力を使い切った『宝珠』でな、管理司書長殿の溜まった

純粹魔力を『宝珠』に籠められる分だけ移したんだ。

今は許容範囲内だから「異変」もないんだろう」

「その方法でしか私の魔力って減らせないんですか？」

魔力があっても何も出来ないっていうのなら空にしてしまえば良いけど、何度も

あの蠢いた気持ち悪さを体験したくないし。

「とはいってもなあ…一般の魔力持ちの人間って純粹魔力が0（ゼロ）になると死ぬって

いうしな、正直言って純粹魔力を空にするのはお勧めできん」

「つまり？」

「満タンになる度に『宝珠』に純粹魔力を移す、それが一番ってことですか」

一緒に話を聞いていたキツネさん。  
あ、そういえば紅茶預けっぱなしだったよね…温い紅茶を返してもらう。

「それも一つの方法だけだな、補佐さん。安全性で言えばそれが良いけど他にもあるんだよ」

温くなったけれどおいしい紅茶を飲みながら、ヤンリさんの情報を聞くことになった。

帰宅。

といっても初めてな「我が家」。

国家管理司書長なんていう大層な役職な私だけど記憶している中での本日といえば…呼び出されて倒れて医務室直行、だけ。

その辺をキツネさんに聞いてみると「小鳥さん、本日の仕事を終えて一休みしていた所でコチラで目覚めたんですよ」らしい。

つまり、現実世界にいた時から私はコチラの異世界に存在していたと、キツネさんの上司で。

一週間異世界の「私」と一緒にいた、とキツネさん。

とつても聞きたいことがありまくりだけど王城内に徹夜用の仮寝室があるがちゃんと城下町の

高級住宅街、城に勤めている人たちの住居の集まりの中に「我が家」があるらしいので

仕事終わりの夕刻のため帰宅することになった。

王城に勤めている人、というのは貴族が多いのは勿論だけど庶民の数も少なくはないらしい。

まあ給仕さんとか一般兵士とか。そーゆー人用の合同宿舍もここら一体の中にあるらしく。

私も庶民なんでそういった合同住居かなーとは思ってはいましたが。

「ここが小鳥さんのお宅、です。」  
貴族のソレと比べられると確かに質素だけど、立派な2階建ての洋館まるまるとは。

え、ナニ様？私サマ？

「…その辺もちゃんと調べましたので…取り合えず中に入りましょ  
う」

異世界一日目、説明だけで終わりそうな感じです。

異世界編 その2 『状態把握』（後書き）

説明はなるべく書くようにしてますが全部書くと文が2倍以上になるんで、

小鳥視点で必要なところのみ書き出していく感じで。

そして主人公の小鳥の体質：元々決まっています。

彼女にとって嬉しいのかもしれないがね。

### 異世界編 その3 『ついでの把握』

我が家だというこの洋館。

私の役職・国家図書館管理司書長は一応王族直属の部門の長になるのでこんな扱いなんだとか。

でも仕事場には私（司書長）とキツネさん（補佐）しかいないんですがそれはどうなんですか。

ああ、それは元々何代か前の王様が私的に創った部門だから、とね。…というかキツネさん。

「一体どこまで調べたんですか」

私が質問するたびにちゃんと答えてくれるキツネさん。

一週間前に来た、というわりには何だかかなり博識な感じが、する。

そこで早く来ちゃった可哀相なキツネさんの話をそれぞれ説明してもらいながら話してもらうことに。

だって、この我が家…私とキツネさんしか住人いないしね。

「可哀相は余計ですよ」

「私がそう思っただんですから、それは気にせずどうぞ。」

一階にある談話室で机を挟んで向かい合う。

勿論、な感じに机の上にはクッキーが置いてある。

真ん中に置いてあるけど絶対キツネさんの方が食べるよなあ…。

キツネさん調べによる私の設定。

私・小鳥遊 小鳥は庶民の子ではあり幼少の頃流行り病で両親を亡くし、その両親と親交があった経済財務大臣の秘書であるロウ氏が養女として引き取った。

ロウ氏には既に息子が1人おり彼が跡を継ぐことは決まっている。

異世界の私はロウ氏の為にも働きたいと言い、空席であった国家図書管理司書長に  
国家試験を合格後自ら志願。  
永久の窓際と言われる役職に就職…ついでにキツネさんは同時期に  
補佐に就任しているそう。

「キツネさんの設定は？」

「私の方は…軍の方に所属してましたが、ハッキリ言って年下の上司に飛ばされた、ですね。」

生まれは一般庶民そのものです。」

「わあ…ちなみに記憶ってある？ 私はないけど」

「私だつて一週間前から、ですよ。必死になって調べたんですから」

そりゃあそうだろうな！。

気が付いたら魔法ありの異世界で上司に私がいて、何が何だかわからないんだから。  
ん？

「異世界の私に聞かなかったの？ ここはどこですかーとか」

私はこうして調べ終わったキツネさんから聞けるから良いけど。

「言いましたよ、最初だけですけど。」

その時のコトリさんは『何キツネさん…窓際に突っ立ってんの嫌だから精神病患者専用の

牢獄行きを希望なの？ 何その自殺願望』とか言い返してきて…  
仕事の方はほとんど

コトリさん1人で済むようなので城の中歩き回ったりして大変だったんですよ…ハア」

「…」

無言でクツキーのお皿をキツネさんの方に寄せる。

「これって異世界トリップになるんですかね」

「召喚モノでもないようですしね…」

「絶対に『アレ』のせいですよ…」

「そうではなかったら何ですか」

ホント、燃やしたくなるくらい怨みますよ。

ボソツとキツネさんに言われた。

『マジックアイテム  
魔術道具』。

その名の通り、魔力を動力に魔術を発現するための道具である。

「人の使う魔術には『回路』と属性魔力が必要だが、マジックアイテム魔術道具は魔力さえあればいい。

ただ仕込まれた魔術しか使えないし、なら自分の言霊で指定できる人の魔術の方が

使い勝手が良いから魔術を使う人間が多いオルブライト王国ではマジックアイテムあまり魔術道具は使わないな」

ヤンリさんは一旦話を止めると紙とペンを用意し、何かを書き始めた。

「純粹魔力を空の宝珠に移したってまた使うには籠められた純粹魔力が抜けないと駄目だしな。

他に害がないのは確かだが空の宝珠がそこらにあるとは思えん」  
宝珠とは自然に存在する魔力を長い年月をかけて内包し溜め、人の手によってその魔力で擬似的な『回路』を作ることによって通常よりも少ない魔力で大きな魔術が使える、という魔術の補助道具の一つ。  
空の宝珠は己の魔力を込めてその色が自分の属性になるそう  
な。

「確か城下町の…ケヲスの商店だったか？」

まあその店が補助仕様の『マジックアイテム魔術道具』専門店でな、場所は覚えて

いるんだが

店名がわからん。地図をやるからそこに行くといい」

「補助の…」

渡された紙には中腰で書いていたけれど真つ直ぐな綺麗な線で。

見やすくなりやすくもあり、これなら店名がわからなくても大丈夫だろう。

「つまり、小鳥さんの純粋魔力をマジックアイテム魔術道具で消費する、ということですか」

「そーいうこつた、補佐さん。軍に所属してたなら魔術使えるだろうし知識もあるだろう。」

お前さんもついていってやれ」

嫌な顔はされなかったが、面倒だな、と顔には書いてあった。この正直者め。

「ってか軍人つてみんな魔術が使えるんだ？」

もちろん、キツネさんも含める。

「このオルブライト王国の8割以上の人間が魔力持ちですからね。」

魔術を使いたい、学びたいのであれば軍に所属するのが一番ですから」

とうとう器まで抱きしめながらキツネさんはそう答えた。

まあお腹空いてないし、別に良いんだけど。

「で、今はその知識を私に自慢でもしたいんですか」

「得たモノを有効活用するには当たり前じゃないですか」  
左様ですか。

ヤンリさんとこにあった空の宝珠は私が使った一つしかなくて。

初めて魔術を行使した時なんかに起きる『魔力酔い』にそれは使うらしく、

今の私に自分の純粹魔力を放出する術がない。

いつ許容範囲をオーバーするかは正直わからないのでキツネさんと話して明日にでもヤンリさんが教えてくれた店に行くことになった。これまで何故症状が出なかったかだけが不思議だが、わかったのだから対処しなければならぬ。

そこで気が付くと現実世界と同じ11〜12の時刻表示の壁掛け時計の針が9時を過ぎていて、

「今日は色々と疲れたでしょうから」と私の寝室だという部屋まで案内してもらった。

他にも書斎や執務室もあるらしい。

この異世界はどうやらヨーロッパ風なようで。

お城の内装もそうだしこの洋館もそうで、この始めて入る私室にしてもそうだ。

靴のまんま部屋に入るのは引けたけれど、ここで裸足になったら汚れるだろう。

我慢して部屋のを物色する。

木製の小さな机と椅子。机の上には本と筆記道具。

姿見の鏡。楕円形で、装飾は金色の花と蔓で。やっべ、高そう。

あと、壁一面を利用したクローゼット。

自分の趣味が感じられないけれど、生活感はある…そんな私室。

キツネさんがいうにここは「寝室」なのだから私の事だ、あんまり寝る以外でいなかったのだろう。

現実世界では小物がちよくちよくあったり本がたくさんあったり…趣味は「読書」なのだ。

これまでの原因でありキツネさんが怨む例の「赤い本」をゲットしたのも学校の図書館だし。

「書斎」がある、ということは私はそこに入り浸っていたかもしれない。

そう考えると何だか異世界の私が気になって、鏡に自分の姿を映す。  
「こんな服着てたんだ」

漫画で見るような、西洋の服装。

とはいっても中世の女性のようならわっさわっさしたドレスではなくて、男性のような

動きやすい服装。 まあ私仕様なのかサイズはぴったりですが。

ふとキツネさんの服装を思い出す…ああ、たぬき堂での服装とそれほど変わらなかったからか。

よくよく思い返してみれば兵士にしてもミレシアン様にしても見かけた騎士にしても現実世界からしてみれば「コスプレ」じゃないか。私にしてもこの格好、その範囲に入るだろう。

何故気にしなかったのか…。

「何故？ 異世界だよ、ココ、服装が違うのなんて当たり前？

でも意識はまるっきり現実世界のまんま…？」

1人っきりの部屋でブツブツ呟いている様は誰にも見せられない。見られてないからこそ口に出しているんだけど。

現実世界で読んだ事のある異世界トリップモノの小説を思い返す。

「そうかつ！」

急いで机に駆け寄り、適当に本を開く。

文字が、読める。

私はよく読んでいた召喚モノやトリップな感じではない。

憑依？にしても該当するかどうかはわからないんだけど。

まあとにかく。

私が異世界にやってきた今日のそれ以前にもこの異世界に私は存在

した。  
異世界の記憶も知識も全くない私。  
つまり、こういうことだ。

「違和感」だけをすでに「理解」しているのだ、と。

異世界の私と現実世界の私が入れ替わったのかはわからないけれど、異世界に来た  
現実世界の私が混乱しない程度には既に私は理解し（わかつ）てる  
のだ。

お城の中においても驚きはしなかったし、むしろ装飾が高そうとか思  
ってた。

服装なんて今さっき気にしたのだ。

国家図書館なんていう場所において目にする本の名前が読めることを  
気に留めない。

唯一過剰反応したのが現実世界には有り得ない『魔術』だけ。

そりゃー空想でしか存在しなかったからね。

「そーゆーこと」に収めるには少々容量がでか過ぎるが、それでも  
ないと確かに頭が  
パンクしそうだ。

おそらくキツネさんも「そーゆーこと」で考えるしかなかったんだ  
ろう。

それに考えても現実世界に戻れるとは思えないし。

「……」

額に触れる手がやや熱く感じてる。

フラフラとベットに歩み寄ると、ベットの上には寝巻きであるうゆ  
つたりとしたパジャマが。

…使ったものをその場に放置。

共通の習性に感情を動かすこともなく、何も考えずに着替える。  
その才カゲですんなりと着替えが出来たけど。

ふんわりとしたその感触に私の意識はすんなりと落ちた。

…何だか今日、寝て起きてばっかりだな。

異世界編 その3 『ついでに把握』（後書き）

小鳥の異世界初日終了。 異世界編ではサブタイが全て決まっています、

それに合わせて話を進めているので一日の区切りではないです。異世界でも相変わらずのんびりと説明を交えつつやっていきます。

\* 投稿後に色々なミスを発見。 各所修正一応してます。

## 異世界編 その4 『準備しましょ』

寝てばかりいたせいか、日が昇り始める時間に自然と目が覚めてしまった。

まあ仕方ないよね。

寝たと思ったら異世界で目が覚めちゃうし昼間に。そんなもってその一時間後には

己の『魔力拒絶症』なんていうファンタジーな体質で倒れるし。

異世界という現実に打ち拉がれながら就寝。

寝て起きてを何回だ？ 3回か・・・そんなだから起きちゃうのも2度目の仕方ない。

部屋を出て人の気配が全く感じられないからキツネさんはまだ起きていないのだろう。

1階の昨夜にも使っていた談話室に入る。

小さな木製のテーブルにいかにもフカフカそうなソファーと同じ絵柄のデザインの椅子。

テーブルにはキツネさんが抱いていたクッキーが入っていた器が。

中には1個も残っていないけど。

そしてそんなキツネさんが座っていた場所に布の袋がポツンとあった。

「忘れたのかな・・・」

袋を手に取り、どうせすぐあとに会うことになるだろうから忘れないうように、と

それを持ち歩くことにする。

初めての我が家を探検気分散歩することに。

いつまで異世界かわからないが、ここは自分の家。

しかも一般庶民ではなく、貴族とはいかないけれど結構立派な建物

なのだ。

ちよつとくらいイイ気分を味わってもいいじゃないか。

食事をする部屋、台所、シャワーだけの風呂場。

客間らしき部屋は2つあった。そんなに偉い役職なのか・・・？

2階は今後の楽しみにしといて。

外に出てみよう。

起きた時、窓の外は霧が濃かったので少し時間を空けたのだ。

広くは無いけれど、家庭菜園ぐらゐは余裕で出来るよね、そんなサ  
イズ。

現実世界の両親なら頑張つて季節の花や木を植えるだろうけど、生  
憎私は

あまりそういった趣味を持たない。 異世界の私もそうだったのか  
不快にならない

程度の草だけで、でもってそれが靴越しでも優しい感触で。

「流石私。」

取り合えず、褒めといた。

周囲の家がちよつとぼんやりなくらい、霧は薄くなつてきている。

やはり、というか貴族なのだろうか・・・どの建物も『屋敷』で、  
遠目から見ても『金持ちの家』ばかり。

庭の方も広く、霧で見えないがきつと手入れが施してあるんだろう。  
そうなると王族直属部門とかいいながらの私の洋館はシヨぼいのか？

まあ住んでいるの2人だし、住むところに見栄を張る性格でもない  
から何と

言われようがこれで良いんだろう。

家の裏側に辿り着く。

正面玄関から正反対のそこは裏口のドアとブランコがあった。  
「何故にブランコだ、自分」  
今度は疑問を投げつける。

返事が返ってくるはずも無いので異質の存在に近づいてみた。

正面玄関は垣根がまばらで覗こうと思えば丸見えな、そんな感じ。  
だから他の屋敷も見えたんだけど。

今いる裏庭、と呼ぶとして、は隙間なく垣根が植えられて高さは2階にまで届く。

なので場違いなブランコが裏庭に入らない限り他から目撃されることはない。

ギイ・・・

所々サビ付いているのが見えるが状態に問題はなく、座ってみると私の体重で少し揺れた。

ブランコ、とはいっても現実世界でよく公園でみる鎖と木の板ののではなくて。

向かい合わせの椅子に楕円形の囲い。鉄製だろうか・・・わかんないけど。

まあ自分で漕ぐタイプではなく、後ろから押してもらって遊ぶような：小学生がハッスルするモノではなく、幼児が親に押しってもらってキャッキヤという遊具だ。

1回立ち上がって本気で漕いでみようかと思ったけど、隠しているのだ。

おそらく異世界の私が大事にしている、もしくは思い出の品かもしれない。

そんなことを考えながら体重を移動してゆったりとした揺れを維持し、楽しむ。

まさか高校一年生にもなって1人ブランコで安らぐとは……。

何となく恥ずかしくなったのでキツネさんの忘れ物である袋の中を見してみる。

コロン。

まず出てきたのはお気に入りのボールペン。

「と、いうことは……やっぱり」

出てきたのは絶対に元凶であろう『赤い本』。

この本が私とキツネさんを異世界に召喚したとかそんな事は二人とも考えていない。

だって見た目も中もそんな要素ないしね。

けれど本を手にしてからの出来事を考えるとコレしか有り得ない、ということだ。

そういえばキツネさんはもう起きただろうか……時計が無いので時間がわからない。

「まあ、いつか」

昨日は書かずに寝てしまったのだ。

日付はわからないけれど、書くこと……書きたいことは山ほどある。

そしていつも通り『赤い本』を開こうと手が触れた瞬間。

「っ……!」

指先から背筋に向けてビリビリと痺れ、本を投げ捨てると同時に痺

れてる背中を

ブランコの背もたれ部分に強打した。

痛みの方を堪えて、痺れが走った指先を見る。

指先から肘まで、明らかに震えている。

正直、ヤバくね？

そう思ったけれど痺れと痛みのせいではらくは体がまともに動き  
そもも無くても。

けれど耐えながらブランコに揺られるのをどうにかしようと思故だ  
か思い、

揺れているにも関わらず無理をしてブランコから、落ちた。

「だよねー。」

動きそうにもないにも関わらず無理に動かしたんだから。

これって無謀や無茶の範囲に入るかなーとか意識飛ぶ寸前じゃね？  
な思考を

客観視しつつ、異世界の私が庭に草を生やしたまんまで良かったと  
思った。

ブランコから落ちたけれどこれといった怪我もなく。

まあ背中強打してるし痺れてるしムキズとは言い難いんだけど。

落ちた状態のうつ伏せから仰向けに体を動かす。

何とか動いてくれた体にお礼を言いつつ、空を見上げた。

「・・・」

『赤い本』の効果で異世界に来ちゃって魔術なんていうファンタジ  
ーがあるけれど

私の体質『魔力拒絶症』のオカゲで魔術は使えない。  
そんな状態の私に帰還する勇者の旅路を本に纏める、という。

未だに薄っすらと霧ががっている空。

霧を通した朝日は気持ちよくて優しかったけれど……

「何してんですか、小鳥さん」

主人公ではない私に、異世界はキツイようです。

「……キツネさん、ヘルプ」

何とか我が家に戻れた後。

談話室のソファで濡らしたタオルを額に乗せて寝っ転がっていると痺れの方は

抜けてきて、強打した背中が痛むだけだった。

きつと痣になるんだろっようなコレ……。

「本当に大丈夫ですか？」

裏庭に放り捨てた『赤い本』はキツネさんに持ってもらっている。

2階の自室にいたキツネさんは朝の空気を入れようと窓を開けたら  
ブランコの

軋んだ音が聞こえ、下を覗いてみると仰向けに倒れた私がいたそう  
な。

経緯を話し、ボールペンだけ受け取って本はさっきも書いたけどキ  
ツネさんが持つてる。

「あとは背中が痛いだけだからね……」

「昨日みたいに気持ち悪くなったりとかはしなかったんですね？」

「そうそう。ビリリッて痺れただけで」

「・・・具合が悪くなったらすぐに言ってくださいよ」

「もう倒れたくないですしねー」

ひよい、と額のタオルが取られる。

「倒れる前に自主報告してください」

頑張ります、と言った。

昨日、ヤンリさんに教えてもらったケヲスの商店はこの洋館から歩いて40分程度の

城下街にあるらしい。地図を見てみると大通りに店があるわけではないので、

ちよつと中に入って見つけ出さないといけない、というのがキツネさんの見解。

なので歩いていこうと思つてたのだがそこに私の状態だ。

馬車を呼んで、大通りまでだけど乗りましょう。

目をしっかり合わせられて言われちゃあ流石に断り難いし、断る理由も思い浮かばない。

「まさか馬車に乗るなんて思わなかったよ」

現実世界では見かけないし、旅行中に行ったレジャー施設の乗馬体験も拒否してたし。

テレビで見る馬の回数の方が圧倒的に多かった。

「私はコトリさんにお使いを頼まれました。一度。なるべくゆつくりと走ってもらって周囲の

景色に馴染めるよう努力しました。勿論、街の地図をちゃんと見ながらですけどね」

ホント、大変だったんだねキツネさん・・・。

大通りの一角に馬車を止めておく場所があつて。

念のため帰日も馬車を使うことになり、そこで待機してもらうこと

になった。

心配し過ぎだとは思ったが昨日今日と倒れてたり倒れてたり・・・。  
うん、しょうがない。

「なーんか、RPGにある商店街な感じですね」

「大通りから少し中に入っつてしまえば屋台街ですからねえ」  
その通り。

大通りに面したお店は何と言うか格式が高いというか・・・まあ高級店な香りが満点で。

さらに石畳の道で雰囲気倍増で庶民な私には居辛い。

ヤンリさんの地図を見ながら小道に入った時の「おかえり」な雰囲気は嘘じゃないと思う。

何かの串焼きのお店の隣には女性用のアクセサリーを売っているお店があったり。

賑やかでいて色んなのがごっちゃん屋台街は馬車なんか通らず皆歩きた。

「小鳥さん、もう少し先で右ですね」

「目移りしないでちゃんとついていくから大丈夫だって」

興味がそそられるのがチラホラあるけどさ。

「で、ここがご紹介されたお店ですか」

「ケラスの商店って言うたけど『ケラス』って文字ないよ？」

「ケラスは国名ですからね、おそらくケラスの人がやっているお店なんでしょう」

「ま、入ってみますか」

「入りましょうか」

屋台街をちよつと通り抜けると、噴水がある広場があった。

そこはこの辺に暮らす人たちの溜まり場なのか随分とのんびりした空気のところだ。

個人的に一緒にそこでまったりしてみたかったけれど、用事がある

から仕方ない。

さらにそこを過ぎると住居の住居兼お店が連なる地域になる。紹介されたお店はこの中にあった。

「いらつしゃーい」

背の低いおっちゃんの陽気な声が出迎えてくれた。

店内を見渡してみると用途不明の機械のパーツが1個ずつ展示してあったり、

まとめてハコに入れられていたり。

値段表示は”セル”。確かこのオルブライト王国の単位だったかな……。

「ご主人、実は知人に紹介されてきたのですが……。」

店内と探索中の私の視界の端で、キツネさんが用事を済ませようとしていた。

……お世話好きの部下に手を焼かせる上司、そんな図が浮かんできたので慌てて

キツネさんの隣に移動した。

私が『魔力拒絶症』であり、純粹魔力で使うことの出来るマジックアイテム魔術道具があるかどうかなどを訊ねるキツネさん。……だよな、魔術が使えるから知識もあるだろうし昨日の説明で

理解していた気持ちでいたがきつとキツネさんの方が私より理解しているのだろう。

まあここはお任せしましょう。

そんで。

「小鳥さん、コレをはめてみてください」

渡されたのはちょっと硬い材質のリストバンド。

2つあるということは両手だろうから、左右の手首にそれをつける。軽く腕を動かすとズレないし、サイズは問題ないようだ。

「・・・何も効果ないけれど？」

不思議がる私にお店のおつちゃんに欠けた前歯を見せながら言った。  
「そりゃー回路を起動してないからな。お嬢ちゃん、”起動”<sup>アクセル</sup>ついでいってみーな」

「”起動”<sup>アクセル</sup>？」

その言葉を発した途端、見た目には何も変化が無いけれどあった。  
リストバンドが熱くはないが熱を持ち、先程よりも軽く感じるのだ。  
「すごいですね、ワン・ワード・キーですか」

「起動するのに自分の魔力が必要だが、威力を上げるには周囲の魔力でもだいじょーぶだ。」

お嬢ちゃん、ちよーいとコレ、殴ってみい？」

ポイ、と投げられたのは布製のボールだろうか。

ちよーと顔の高さに来たソレを「殴る」という行動はいわば防衛本能で。

思わず力を込めて殴りかかる。

ドゴオオー！！

「それは力が強く出来たりする、つーのを実演してもらおうかと思つたんだけどなあー」

「充分過ぎる実演で、当たったらタダじゃすみませんよ、コレ」

「ハハハハ。窓ができてしもーたわー」

「・・・。」

初めての魔術に恐怖を感じました。



異世界編 その4 『準備しましょ』（後書き）

ちよつと時間の使い方が悪くて執筆がノロノロです。

最低週1、更新します。

のんびりと気長に楽しんでいただけたら、嬉しいです。

異世界編 その5 『急いで準備しましょ』

「勇者凱旋が2日後、とはね」

「それまで通常の仕事はほとんど停止状態、とはね」

お目当てのものを手に入れた後、馬車で仕事場のある王城まで向かった。

けれど城内はその勇者凱旋準備に追われていてバタバタしてて。

そしてその影響が仕事場に來たのに仕事がない、なんていう状態になってしまい、

昼時だしお昼食べながらどうしようか話そう、と共同食堂で現在食事中。

食事は見た目は現実世界とあまり変わらなくて、和食中華なしの洋食オンリーって感じ。

味はおいしいし、食材とか気にしてたらどうしようもないから無視。蛇口を捻れば水が出る、そんな認識で良いでしょう、うん。

それはキツネさんも同じなのか、食べ物についてはあまり知識を有効活用しないし、

お互い「日替わり定食」を頼んでこれからどうしようかと話していた。

「というか、勇者の本ならその帰ってくる勇者に話を聞けば良いんじゃないの？」

通常の仕事がないといつても昨日ミレシアン様から命じられた任務がある。

することは、まああるのだ。

「それだけで済めばいいんですけどねえ・・・確か司書長の仕事に

ついてまとめた

書類があつたのであとでそれを見てみましょう」

「何でそんなのがあるの？」

何故書類としてまとめる必要がある。

「元々私的部署だったのを直属ではありませんが正式な部署として稼働する際、

それがどのような仕事をするのかを公表したそうです。

・・・まああんまり深く気にしたら負けですよ、小鳥さん」

「そうですか・・・」

セルフサービスのお茶は、見た目黒で味は玄米茶っぽかったです。

国家図書館の中にある、司書長室。

ここが私の仕事場で、昨日目が覚めたのもこの部屋なのだ。

未分類の本や状態の悪い本は司書長室に置かれ、禁書指定の本はこの部屋からしか

いけない「封印書庫」に保管されている。

今はそこは関係ないから取り合えず説明だけ、ね。

欲しいのはキツネさんが言った「国家図書館管理司書長」についてまとめた、という書類。

電子化というか電気というのがまったくないので残っているのは勿論紙媒体のみ。

「過去の、っていう一纏めにしたのは誰・・・！」

ヨイシヨ、と確認の終わった紙束を端にどける。

「コトリさんに決まっていますでしょう・・・！」

新しい「過去の」書類の詰まった箱を持ってくるキツネさん。

二人してネットの検索機能の有り難さを知った。

「あつた・・・！！！」

そしてトレジャーハンターの喜びを知ったのは探し始めて3時間後でした。

キツネさんと並んで見つけた書類を読む。

読むにつれて段々と肉体労働でかいた汗が冷や汗に変わっていくのを感じる。

「ねえキツネさん、これってさ」

「ええその通りだと思います」

「『国家図書館に所蔵する書籍は王族の所有物であり・・・歴史を刻み、後世へと繋ぐ歴史そのものである』」

「小鳥さんが書くのは『勇者の軌跡』ですが・・・」

ミレシアン様、つまりは王族へ献上する書物でもある、と。

「つまりはさ、この国の歴史の一幕を書けってことじゃね？」

・・・昨日流し気味で聞いた任務、実はかなりの重要任務でした。

それから私は。

気付いてしまったからには知らんフリも出来なくて。

何せ王族、国妃ミレシアン様からの命令だし、いつ現実世界に戻るかわからないし。

あと2時間ほどで終業時間だけどにかく出来ることをしよう、とキツネさんと一緒に

聞き込みをすることにした。

運良く2日後に勇者凱旋なんでみんな勇者のことを話題にしているし、実際に会った人は

快く思い出を語ってくれたので司書長室にあった白紙の紙束を手

メモっていく。

「アイザワ ヨシノリ、黒髪に黒目、推定年齢12歳。魔力属性は”光”と。」

話してもらったエピソードを元に、我が家まで馬車の中で勇者について現時点の情報で

簡単にまとめる。

「光”だけ、というのは初めて聞きますね。確か付加属性としてなら可能だとありましたが・・・」

メモ帳に記されたエピソードに視線を落としながらキツネさんと会話を話す。

「そこが勇者クオリティってヤツじゃないの？」

「それもそうですね」

あとほかにも主人公特典とか召喚特典とかあるんだろーな！。

・・・羨ましくなんかないもん。

それからそれから。

「アクセル起動”」

両手足の4つのリストバンドマジックアイテム型魔術道具。

お店のおっちゃんがいうに4つで1式らしく、どれも同じ回路の為

「身体能力強化」だけしか使えない。

感覚を掴むべく、談話室の一角で慎重に発動させる。

やはりリストバンドが熱く感じるだけで、とくに変化はない。

「よいしょ、と」

試しに外で適当に拾ってきた石を握ってみる。

バギツ。

強化された私の力に耐えられなかった石に罅が入る。

「やっばすごいな魔術・・・シャットダウン切断”」

床に石の破片が落ちてないか確かめながら一人呟いた。  
あ、ちなみに“シャットダウン切断”ていうのは魔術スイッチのOFFの言葉。  
まんまだなーとか言ったら「わかりやすくていいやねーの」とおっ  
ちゃんに言われのを思い出す。

拾える破片を回収し、外に捨ててこようと正面玄関のドアへ歩き出  
す。

ちなみに談話室にいないキツネさんは台所で紅茶でも用意している  
のかもしれない。

昨日もココで紅茶とクッキーでお話ししてたしね。

そうしようとは決めていないけど話すことはたくさんあり過ぎるの  
だ、私だって手の中の破片を捨てたらまた談話室に戻ってこようと  
思ってるしね。

ガチャ。

「・・・あれ？」

ドアを開けると何故か門の前に馬がいて。

馬車は帰した筈だし・・・ていうか馬車だ、あれは。

これは馬だけ・・・目を凝らす・・・人発見。

我が家の前にいるのだろうから私、もしくはキツネさんに用なのだ  
ろう。

取り合えず手の平の破片をその辺に放って、馬の方に近づく。

街灯というのは一応あって、現実世界の電気ではなく古いガス式で  
もなく魔術が

用いられているらしい。

とはいえ習慣として夜に出歩くことはあまりないようなので、街灯  
はあまり強い明かりではない。

オマケに馬の影に人が入っているようなのでコチラから見えにくい

のだ。

「どなた様？ 用があるなら私が聞くけど？」

敷地内に留まって、思ってたよりも小柄な客に声をかける。

すると小柄な客・・・少年は私に気付くと慌てて頭を下げた。

・・・だからさ、私ってそんなに偉いのか。

「す、すみません！ 夜分遅く伺いまして・・・実はミレシアン国妃様より「言伝」を頂戴しております」

やべえ、もしかしてあの任務についてか。

何を言われるのかと、思わず顔が固まってしまっ。

「で、どんなの？」

「あの、いえ・・・管理司書長殿に直接言うように言われてまして・・・」

「あー、それ私だから大丈夫」

ごめんよ雰囲気が庶民で。

「申し訳ございませんっ！・・・言伝は『明日の9時、特別な必要物資があれば訪ねなさい』、以上です」

「他には？」

「いえ、これだけです」

「そっか。じゃ、ちゃんと聞いたし、夜遅くにこくるーさんでした」

ふんわりした茶髪を揺らしながらペコリとお辞儀し、少年は馬に乗って住宅街の奥に行った。

・・・着ていたのも制服みたいな感じだったし、どっかの貴族の坊ちゃんかな。

明日のスケジュールに一つ書き込みがあったので、それを伝えるべく司書長補佐のキツネさんの元へと。  
まあ談話室にいれば会えるか。

で。

「明日の9時に、必要物資、ですか・・・」  
時計の針が10時を回った頃。

異世界の豆知識を教えてもらってる途中に、そういえばと先程の言  
伝をキツネさんに伝えた。

2杯目は温かいミルクティーで。クッキーはもうキツネさんが食  
べてしまった。

「何か変なズレじゃないですか？ 私たちは勇者が帰って来たら色  
々聞いて書けばいいや

なんて思っていたのに、向こうはやけに慌てていませんか？」

「確かに・・・。」

このオルブライト王国の歴史を書くことになってその責任重大さに  
逃げたくもなつたけれど。

私もキツネさんも引き受けることにして、今日は聞きこみもした。

「・・・小鳥さんは、歴史の教科書ってどんな風に書いたと思いま  
す？」

歴史ということと繋がったのか、キツネさんが聞いてくる。

「どうねえ・・・色んな資料に何人もの専門家が検証して『正しい』  
ものを書いていく・・・？」

「私もそうなのはわかりません・・・私たちの場合もつと原始的  
じゃないでしょうか？」

原始的・・・。

ミルクティーを一口。

「それは資料も何にもない状態での歴史・・・？ それを綴る・・・  
？」

嫌な予感がしてきた。

「慌てている、が正確であるとしたら見えてきませんか？ 『一番

早く』に勇者の軌跡を発表したい、と」

「・・・なるほど」

勇者を召喚したオルブライト王国の王室から発行された、『勇者の旅路』。

国の歴史としての公式本。

「嫌な予感が当たりましたが・・・これはお城での聞き込みだけで済みませんね」

「ええ色々と・・・。コレが、私たちが異世界に飛ばされた『理由』かもしれないね」

「ホント、平穩のんびりできませんねえ・・・」

ウラムぞ、赤い本・・・。

カチャン。

飲み干したティーカップをテーブルに置く。

キツネさんも同じく空のティーカップを置く。

「取り合えず、絶対に必要な物だけを今晚中に準備しましょう」

「明日は準備だけで終わりそうですね」

聞き込みなんてしているヒマはなさそうだ。

だって、しょうがないじゃないか。

「旅なんですから。」

「ええ旅になるんでしょうね」

異世界編 その5 『急いで準備しましょ』（後書き）

こんな感じで小鳥とキツネさんの旅は始まる…とはいってもしばらくは

準備とかでまだ出発しません。 …だらだらと話を全部書いていくと

無駄に長くなるんでいくつかのシーンを摘まんだような書き方のためわかりにくかったりすると思います。ご了承ください。

異世界編 その6 『あとの準備は・・・』

この大陸には3つの国がある。

まず私がいる「オルブライト王国」。

魔力持ちの人間が多く暮らす国で、領土・人口共にトップ。

勇者を異世界召喚したなど私から言わせてもらえばファンタジー王道な国。

次に「アジユラ連合国」。

獣人や半獣の大半はこの国に属していて、その各族が集まって出来た国。

人口は3カ国の内一番少ないが、獣人や半獣は人間より寿命が長かったりするんで

私の感想は「量より質」。

最後に「ケラス自治国」。

人間より平均的に身体が小さいが戦闘能力が高く、実力主義な国。

国内のほとんどが山で、東西南北の都市とその中央にある首都からなる。

以上、この3つが大陸の約半分を占めている。

残り半分は何か、といえば「山」なのだ。

山ならケラスみたいな国があってもおかしくはないんだけど、

その山が普通ではないため人が住めないのだ。

というのも単純、魔物が多く住み着いているからなんだよね。

そんな山だらけな大陸半分の中で有名なのが「デスマウンテン」と

「ツンボス突山」。

一際目立つ高さもそうだけど、この2つの山には特に強い魔物が出現するようで。

「デスマウンテン」なんか魔王がどこかにいる、という噂があるくらい。

勇者もココに向かっていたらしい。

あとは・・・そうそう、この大陸の真ん中には日本最大の琵琶湖が小さく見えてしまうほど

バカでかい河があつて。

各国に流れるその河はこの大陸の命を支えているといっても決して過言ではない。

その河の名は「はじまりの河」。誰の所有物でもなく、全ての源であり、はじまり。

「・・・こんな感じですか」

「まあそんな感じでいいでしょう。私も聞いて本で調べた、だけなので」

昨夜の伝言通り、今朝早くミレシアン様の所に行つて勇者が訪れた土地を巡りたいので

各地の入国許可証と正式な身分証明書が欲しいといつたら・・・その場で渡された。

ちくしょー、やっぱりあの任務はこういうことだったのか。

そしてあと必要なものは全て王族名義で用意して良いまで言われてしまつて。

プレッシャーが怖かつたけれど、断る理由もないので了解して退室。あ、場所は水晶の間ではなくミレシアン様の私室でした。

赤い本はキツネさんが持つてていたし、体調が崩れることはなかったです。

退室後、午後に城下町で必要なものを買つとして、お昼まで時間が

あつたので

図書館にあつた大陸地図を見ながら大まかな知識をキツネさんによつて植え付けられた。

「で、どうする？ この地図は持って行くの？」

広げた地図は最新で各地名が書かれている。 B4用紙2枚分な大ききさなんだけどね。

「いえ、図書館の地図ですし・・・あとで城下街に行く時に買いましょう」

「買い物リストに追加、と」

メモ用紙になる紙、というか紙なら司書長室にいらなほどあつたので使わせてもらつてゐる。

書いている文字は現実世界の、我が日本語。

意識すればコチラの文字も書けるけどやっぱり私は日本人だし、忘れては、捨てては

いけないものだと思つので。

それとオマケにキツネさんの有効活用。

「紙」は一般家庭にも普及はしているものの現実世界ほども用しなく、紙そのものではなく

「本」として使用しているのがほとんど。 だから「紙」だけが大量に放置されている司書長室は

そついつた意味ではやはり王族直属の部門ですね、とのこと。

・・・一気に詰め込まれた知識に頭が痛くなるが前日に比べれば、こんな。

メモを書き終えたときにはお昼の時間になつてゐて。そこで城下街の屋台を思い出して

「あそこでお昼食べたい！」と私が主張したので、決定。

何のお肉か解らないけど良い匂いのする串焼き、見たことも無い聞いたことも無いフルーツ。

そんなのをお腹いっぱい食べたいんですか、とキツネさんに言われたけれど

いいじゃない。私とキツネさんは精神は現実世界だとしても身体はちゃんとコチラのもの。

今まで食べてきたのだから、精神が違っただけで受け付けないなんて贅沢な。

「そんなこと言って・・・本当のことを言ったらどうです?」

「おいしそうだったからに決まっているじゃない!!」

呆れ顔は無視して、さあいざ城下街へ!!

「さてと・・・。あらかたは揃えましたね」

チエックマークのついたリスト。

消耗品に関しては移動のほとんどを公道で行くので町が点々と存在しているし、旅行者用の

小屋もあるんで野宿は少ない。

なので現地で調達し荷物を軽くしよう、のため買い物リストには書いていない。

「王族名義・・・『クローリスト』家っていえばどのお店も「はいどうぞ!」っていう感じに

サクサク買い物できたしねー」

城下街に向かって早速屋台街で買い物。

さすがにこれは自腹だけど、串焼きは勿論おいしかったし、フルーツはマンゴーとパイアの

中間な感じの白くて・・・濃い甘さが白いフルーツ、さすが異世界。一番おいしかったのは透明な麺と透明のスープ。

一見つまらないけど味はラーメンと全く同じで。けれどあっさり感

がかなり強かったのもう一杯軽くいけそうな気がした。だって他のも食べたかったし。そんな異世界フードを満喫している私だけど、キツネさんもそれなりに楽しんでいるようだ。

買い物を終えてリストに残っているのと漏れているのを確認しつつ休もう、とお店の中へ。

ワンプレートの軽食とデザート、紅茶などが揃ったこのお店はまさしく「喫茶店」そのもの。

ゼリー入りの冷たいジュースは私、キツネさんは緑色のジュースとクッキー。

この異世界でもあった「クッキー」にキツネさんは声には出ていなかったけれど、それはそれは

すごい喜んでいる表情で。我が家で食べていたのはキツネさんお手製のクッキーだったので…

というか作れる時点で材料はあったんだし異世界にあってもおかしくないのでは？

そう聞けば「材料が同じなら全く同じ料理モが出来る、それは珍しいんですよ」と真剣に

語ってくれた。

日持ちが良くて持ち運びおトどこでもいつでも食べれる、それが売りのとある屋台。

そこでクッキーを見つけてしまったキツネさんはそれからずっと、この喫茶店に持ち込んでまで

ずっと幸せそうに食べ続けている。

「およその準備は出来ましたし・・・あとは何でしょうね？」

「もう少し“旅人ロード”の奥を行ってみますか？」

「そうすると帰りは馬車の方が良さそうですね」

「そうですね」

太いストローでジュースの中のゼリーを吸い込む。

「・・・」

詰まりやがったし。

”旅人ロード”というのは正式にはそうじゃないけれど大体の人が使う名称みたいなもんで、

旅に関する商品を取り扱う店が密集し、ソコに行けば誰でも旅人になれる！な紹介をされてた。近くにファンタジーとか冒険モノでよく見かける「ギルドホーム 首都アズライト支所」があるらしいのでそれでそういったお店が集まったんだとか。

地図もそこで買ったんだけどそのお店は旅人ロードの入り口付近で、奥の方には武器とか

防具が多いので行かなかったのだ。

・・・というのはそれなりの理由で。

本当は

「あの勇者と同じデザインの防具 大量入荷！ これでキミも立派な冒険者へ！！」

「勇者も訪ねた 店！！ 今なら全品20%引き！」

そんな変な熱気で異様に盛り上がっている地帯に踏み入れたくなかつたのだ。

「勇者凱旋」は公表されていないハズなんだけど・・・王城中がアワワワしてるし、

洩れたか洩らしたかで広まったんだらう。

私にとっては特に関係ないし、むしろ勇者に会っている商人には話を伺いたいくらいだし。

「・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・」

とはいえその前に「踏み入れたくない」のだ。

せいぜい入り口付近の地図ぐらいで、その先は「NO」。

キツネさんも私と同じ気持ちなのか異様に盛り上がっているゾーンを無言で突っ切る。

中には旅の便利グッズを取り扱っているお店もあったけど「勇者」の文字が入った煽り看板が

視界に入ったため見なかったことに。

黙々とただ前のみを見ながら進んでいくと、やや開けた場所に出た。

「ここは・・・座小市みたいですね」

この場所一体はギルドの土地で、決められた額を払えば誰でも店を出せる。

ただ敷物を敷いて、その上でしか商売は出来ないだけだね。

けれど普通のお店と違うのはメインは「商品」ではなく「自分」であること。

まあ見習いが自分を売る為の場所、それが「座小市」。

旅人ロードの奥にあるこの広場は入り口付近とはまた別の熱気がある。あつて。

けれどそれは先程の不快さはなくて・・・

「とはいえっても冒険者じゃない私たちには無用ですかね」

「そんなこと言って・・・本当は見たいんでしょう？」

「だって、楽しそうじゃないですか」

キツネさんのため息は無視して、私はまず一番近くの店を覗こうとした、その時。

「――！！」

奥の方にある人ばかりから歓声上がる。

広場に入った時から人が集まっていたけど商品の実演とかもやっていたので

多分それかな、と思っただけど・・・そんなレベルじゃないな、アレは。

「何だと思います？ アレ」

後ろに控えるキツネさんに聞いてみる。

「何人が手を上げていている人がいますしねえ・・・競売でしょうか」  
確かに視線を人だかりに戻してみると何人がが手を上げたり下げたり。

盛り上がっているみたいだし・・・

「行ってみましょうか」

「コノ子はそんじゃそこらの飛行獣とは違うよ！！」

血筋は勿論一等級！ 育成・調教はその腕前はケラスーのベレントの愛弟子である

この私アイラが5年かけて鍛え上げた今まで以上の出来さ！！

さあさあ我がコに心を奪われたヒトよ、コレが1万セルだなんて笑わせる！

上はいないのかい？」

木箱を台に声を張り上げている女性が人だかりを見渡すと、手は上がり値も上がっていく。

一万セル、といえば大体一般家庭の年収に相当し一般人ならある意味笑える額だ。

まあ馬車や騎獣より断トツに速い飛行獣なら1万セルでも高くはな

い、というのがキツネさんの  
考えらしいが：現在3万セル。

それでも人の手も大分減ってはいるけれど熱心な何人かまだ競っている。

「小鳥さん、コチラからなら見れますよ」

そう言われて人だかりの後ろからズレて木台の斜め後ろへ。

堅牢な檻に頑丈そうな鎖。

人の盛り上がりなんか気にならないようで・・・あ、あくびした。

商品である飛行獣というのは小型のドラゴンをイメージしていたけれど、違った。

一言で言うならば「途轍もなくバカでかい鳥」。

藍色の羽はふさふさしてきつと顔をうずめてみたら気持ちよさそう。座り込んでいるため脚は見えないが、尾の先っぽの羽は空色。

そして鳥には無いはずの角が2本。

触ってみたい・・・!!

ふわふわな羽は勿論、存在感ありりな角も。

きつと心地いいんだろっ！きつと想像できない驚きがあるんだろっ！

思わず飛行獣のいる檻に近づこうとした私の肩をキツネさんに掴まれ、抑える。

と、そこで檻の中の瞳と合う。

「・・・」

喧騒の中に沈黙が生まれる。

音だけでなく動きも沈黙したその場を打ち破ったのは、キツネさんだった。

「10万セル、でどうでしょうか」

喧騒が沈黙を塗り潰した。

異世界編 その6 『あとの準備は・・・』 (後書き)

次回から勇者アイザワサイドのオマケが付きます。

ネタばれとかはないですが、彼らのストーリーもあるのです。

更新は…一週間以内の予定です。

異世界編 その7 『勇者が帰還するってさ』 (前書き)

本編後に勇者アイザワサイドのおまげがあります。  
ネタバレとか関係ない予定です。

異世界編 その7 『勇者が帰還するってさ』

飛行獣・・・命名「ラバル」を競売で落とし、それらの手続きや色々な事々の処理に

追われてあつという間にその日が過ぎてしまつて。

先程まで空の旅になるので防寒服を調達したりして、準備は終わった。

とはいっても「聞き込み調査」をしなければならぬので休むのはそこそこに。

明日は勇者凱旋で皆落ち着かないし話を聞くヒマもなさそうだし・・・というか、

明日はもう「旅」に出るつもりなんだけど。

「明日、ですか？」

我が家に向かう馬車の中、キツネさんとお話し。

私の発言は想定していなかったらしく「驚き」という珍しい表情のキツネさんが見れた。

「そう。王城内での調査によれば凱旋から一月後に勇者は現実世界に帰還する。」

つまりは別に凱旋直後に直撃インタビューしなくても良いつてことでしょ？」

それに凱旋直後にそんな時間が取れるかわからないし。だつたら多少落ち着いた時にゆっくりと話を聞きたい。

「まあ確かにそうですね・・・飛行獣での移動ですから特別な事が起きない限り

3週間はかからないでしょうし・・・いいんじゃないですか？

今は小鳥さんが私の上司ですし」

「なら決定で」

旅の準備は終わっているのだ、あとは「出発」するだけ。

「日の出と日の入り時には霧が出ますから飛べるのも動けるのも日が出ている

時間だけ。・・・明日の早朝からラバルの飛行準備は私がやり

ますので、小鳥さんは

その間も聞き込みしますか？」

「んー今日までの聞き込みで大体聞いたしなー…荷物の確認と出発の報告を済ませとくよ」

お話しは家に到着してからもしばらく続いた。

そして次の日、つまり今日が勇者帰還の日であり私とキツネさんの旅出発の日。

仕事場である司書長室で用意した旅装を着て、確認する。

黒上下のインナーの上にワンピースのような膝上丈の赤い服。

黒の太めのベルトには特注で作った本や紙を収納できるポケットを3つほど付属。

肘と膝には簡易な防具。

こげ茶色の何の皮かわからないけど皮製の防寒具。

腕を通すようなものではなく被つて前のボタンを止めるだけのモノ。

両手足首には身体能力を上げる魔法道具。

あと今はつけて無いけど手袋がある。

・・・こうして述べてみると何だか重装備に感じるけど私の格好はかなりの軽装。

まあ魔法道具があっても攻撃力はないし、逃げることしかできないし。

それに比べてキツネさんは自身の属性である「風」と「水」の法飾が刻まれている立派なファンタジースタイル。私と同じデザインの防寒具がなかったらホントファンタジー丸出しだよ。ちなみにキツネさんとは王城まで馬車で一緒に、あとで待ち合わせしてある。

「さて、と」

荷物の中身を確認し、忘れ物はなし。

ラバルの食料とか飛行装具はキツネさんが準備してくれてるし、報告しときますか  
ミレシアン様に。

図書館に念のため鍵をかけ、水晶の間へと向かう。

昨日まで王城内で聞き込みをしていたオカゲが大体の構造・ルートは覚えてしまった。

なのでこうして1人で歩きまわれるんだけどね。

そのことをキツネさんに伝えたら「小鳥さんも立派な異世界人ですね」とか言われたし。

まあその後「キツネさんの方が立派な先輩ですけどね」って言い返したけど。

水晶の間へと通じる道の前には見張りの兵士がいて。

身分を名乗ってミレシアン様に用事があると伝えると、現在確かに水晶の間にいるが

誰も通すな、とのことで通せない。

じゃあ言伝でも言いか。

「国家図書館司書長小鳥と補佐、任務によりしばらく国外に出るため留守します、と」

ミレシアン様にお伝えお願いできますか？」

「了解です。言伝お受けしました」

銀色の鎧のせいで顔は見えないけれど、声音から思ってたよりも年齢が若そうだ。

そう思いつつ見張りの兵士にありがとうと礼を言い、ささと。

「キツネさんの様子でも見に行こうかな」

準備が出来ているようなら図書館に置いてある荷物を持ち出して、すぐに出発しよう。

通路の外、庭園にある噴水が目に入る。

今歩いている通路をまっすぐ歩いて建物の中に入れば図書館は近い。入らないで建物をグルッと出るとキツネさんのいる獣舎小屋が見えてくる。

夜勤だった兵士がそろそろ交代の時間のようで、朝の霧が出始めていて生憎見えている

噴水は多少ぼやけていた、実は。

けれど。

そんな静かな情景の中騒がしい気配を感じた。

「訓練、にしては時間が早すぎるし・・・何かトラブル？」

噴水の向こう・・・確か西門だったような。

騒ぎの内容が聞こえてこないし、距離としてもそれほど近くは無いんだろう。

そんな風にぼんやりと考えながら歩いていると前から走ってくる人物が、1人。

とても忙しそうなので通路の端に寄って道を開けようとする・・・

「あ、すみません言伝をお願いしても良いですか!？」

・・・この異世界、言伝多くね？

陸軍総司令官室。

「あああー！！ ホントすみませんっ！管理司書長殿にこのような下っ端の仕事をさせて！」

おつかい気分で言伝を伝えるともものっすごい勢いで頭を下げられた。・・・国家図書館管理司書長っていうのはほんとーに偉いようです。「まあ気にしないで下さい。丁度手が空いてたので…それに私も聞かせてもらって良かった、

くらいなんで。」

「『勇者帰還を一日遅らす』、ですか？」

そう、言伝というのは勇者帰還を一日遅らすという・・・いや、急過ぎないか？

私にはそれほど関係ないし勇者の異世界滞在が一日伸びたくらいにしか思わないけどさ。

「はぁ・・・あとでアイツには厳罰として（地獄の）トレーニングさせておくとして…失礼ですが

管理司書長殿に今回の凱旋とどのような関係があるか聞いてもいいでしょうか？」

ヴィストリア総司令官は部下の処罰を考えながら、私の方に上目遣いで聞いてきた。

それに私は敬語はナシでいいですし「コトリ」でいい、と最初に付け足して。

「国家図書館に『勇者アイザワの旅路』を収集することが決まりまして・・・なので勇者の情報は

何でもいいので仕入れたいですよ」

「ほお・・・」

50代ぐらいの貫禄あるヴィストリア総司令官。

いくら位がこっちの方が上だとしても私は現実世界に住んでいた女

子高生。

正直目を細められてじつと見られると気まずくなる。

「はっはっは。何、歴史を決める者が目の前におるんです、興味を持つのは当然でしょう。」

「むう。でもまあ、安心はしてください。私は全てを公平に見るだけなんですから」

全てを公平に。

この言葉は「国家図書館管理司書長」の仕事をまとめた文章に書かれたもの。

王族直属の部署であるが、全てにおいて公平でなければならぬ。何故なら、そうでなければ国家のためにならないのだから。

そして説明書の余白に、こんなことが手書きで書かれていた。

王に不利なことを書いたなら、王はそれに対処しなければならない。大臣に不利なことを書いたなら、大臣は相応の処分を受けなさい。兵士に不利なことを書いたなら、兵士は大人しく口でも噤んでいなさい。

走り書きされたメモは私らしくて一度目にしただけで覚えてしまった。

その後。

陸軍総司令官のご好意で兵士の待機場、まあ休憩所みたいな所で勇者の訓練に付き合ったという男性騎士とゆっくり話せた。そこで訂正が一つ発覚。

「勇者アイザワは14歳、ね」

「ええ何でも二ホンジンは童顔だから実年齢より下に見られやすいとか・・・」

「助かった。聞き込みでは12つて聞いてたから会った時に失礼だしね」

「あー、あと身長の方も気にしているようなので、触れない方が良いかもありません」

「ふむふむ」

14歳・・・中学生かな。身長は小さいようで、禁止語句と。

特注のポケットに紙とペン、赤い本（触れなければ大丈夫）は旅装で出歩いていたので

急なインタビューにもこうして対応できた。

「ありがとうございます、急にお願いしてしまって・・・」

「いえいえ。アイザワ達が今日帰ってくると思うと恥ずかしながら眠れなく、定時より

早く来てしまつて。・・・コトリ殿とお話して大分落ち着きました」

「それはお役に立てたのなら何よりです。まあ勇者たちの凱旋は明日に延期ですがね」

「・・・え」

向かいから聞こえたマジな「・・・え」に紙から男性の顔へと視線を変える。

「いや、私もこの話題を偶然聞いてそこからの縁でこうしてお話しているんですけど。」

「・・・そうらしいですよ？」

「あ、ああそうらしいんですか・・・はあ・・・。」  
ため息を深くつき、肩を落とす様は実に気の毒なんで持ち直す方法を考える。

こーゆー時は、こうだろう。

「・・・そんなに勇者一行を待ち侘びているなんて、何方か親戚で

も一行にいるんですか？」

「義理弟と、昔面倒を見たことのある子が一行にいるんです」

「どんなヒトか、貴方から教えてくれませんか？ お好きなんでしよう、その2人のことが」

好きな思い出を語らせて、それに浸らせる。

「すみません、気を遣わせてしまったようで・・・」

「いいえ。時間ならありますし、これも私の仕事のウチになるようですよ」

そして。

ヒルパキルス・J・ベイトソン（35）は脳裏の映像に心地よさそうに目を閉じながら、語った。

今回から勇者アイザワ一行サイドのオマケ付きです。

デスマウンテンを飛行魔獣で降り、旅の始めに立ち寄ったエルフの里に向かう。

あの魔界での戦闘後しばらくは高揚していたが、デスマウンテンに背中を向けた時から

口は開けなかった。

目的は果たした。

しかしココロの全てが喜んでるわけではない。

喜びの内に悲しみが不動し、後悔を誘うが・・・それは出来ない。何故なら『してはならない』からだ。

前を向け。

魔界から脱し己の命の存続に歓喜する中で。

己の剣を恐れるように怒るように、嫌悪を顕わにしてアイザワは大地に突き刺した。

誰もがそのココロを察し、見守るしかない。

しかしフランフォルグ・クローリストは違った。

彼はアイザワの前に立ち陽を遮ると己の杖で突き刺した剣を横に、殴り飛ばす。

ココではない。前を向け。

ソレに縋ってはいけない、そんなの望みやしない、誰も。

喜べ。世界を救ったのだ。

『魔王』を打ち破ったのだ。

『魔王』という言葉にアイザワは顔を上げる。

逆光のせいでフランフォルグの顔は見えない。

自分と同じく泣いているのだろうか 自分に怒っているのだろうか やがて慣れてきた目がその表情をみる。

「・・・なんで何も無いんだ、フラン」

アイザワの涙が大地を濡らしても、何も無い。

ただ見つめたまま沈黙を続けるフランフォルグ。

そんな彼らを見ているしかなかったカトリーヌ・ヴィストリアは地面に転がったままのアイザワの

剣を拾うと隣のケルヴィン・J・ベイトソンに目で合図を送り、こう言った。

「帰りましょう、いつまでもココにいたら・・・悲しいだけだわ」

そうして『魔王討伐』を果たした勇者一行は旅の始まり「オルブライト王国」へと  
帰還する、のだった。

異世界編 その7 『勇者が帰還するってさ』 (後書き)

ようやく執筆がいつものスピードに戻ったので維持するためにも投稿することにしました。

オマケをあとがきにいれるか迷いましたが、取りあえず本文内に入れときます。 あとがき内の方が良ければそう一報ください。

異世界編 その8 『1日延びたらしい』

朝の霧はとつくに晴れ、陽射しは眩しい。  
空は青く、風は優しい・・・そんな出発日和でしたが。

「1日延びたらしい、ですよ？」

「太陽が真上を通り過ぎた今更に言いますか」

「ええ、言います」

「くきゅー？」

あ、最後の台詞はラバル（競り落とした飛行獣）です。

ヒルパキルス氏の思い出、私にとっては勇者アイザワ一行の貴重な情報を

聞き終えたのは太陽が真上になった頃だったと思う。

元々通常業務はお休みだったし本来なら今日は勇者凱旋でワタワタする予定。

けれどそれが明日に突然延期となったため何だかぽっかり空いてしまった休日みたいな。

まるで嵐の前の静けさと言ったのは誰だろう・・・まあいいや。

インタビューの礼とついでのアドバイスをいくつか伝えてからキツネさんのいる

飛行獣用の小屋に向かうことにした。

そんでラバルの拘束装具を片付けているキツネさんと会うことになる。

「その様子だと早くに情報をゲットして『延期』の判断を下したよ  
うだね」

邪魔にならないようにやや離れたところからキツネさんとラバルを  
見つめる。

「ええこの小屋には凱旋パレードに参加する騎獣がいましたからね。  
伝達の

必要はあつたんですよ。それで小鳥さんの事です、色々聞き回  
っているうちに

時間がたつて結局はコチラも延期だと思つたので」

小鳥さんの事です、とか他にも気になる箇所はあるが特に反論はし  
ない。

だつて全否定とかはできないだろうしね。

「その代わりにさ、イイ情報手に入れたんだから小言はナシだよ」

紅茶を淹れるのは考えてみれば久しぶり、というわけではない。

異世界に来て3日、いや4日か？

まあそれまで現実世界では「ためき堂」で毎日淹れてたのだ。

キツネさんがいなかつたあの日も夕又キサマの前で紅茶を淹れたな。

・・・ 渋くなつちやつたけど。

なのでこの異世界で『紅茶』を淹れることになつても慌てる事はな  
かつた。

むしろああこんな感じだ、とどこか充実した気分になりながらゆっ  
くりと作業が出来た。

「はい、どーぞ」

現実世界の紅茶の淹れ方で『紅茶』を淹れたが・・・キツネさんは  
特に問題ないって言うし、

私はやり方しか教えてもらっていないからまあそれなりの味しかそもそも出せない。

あと気分しかラクに出来ないのものでその他への気を抜くと失敗してしまふ。

「……初めて淹れた『紅茶』は見た目が元々濃さが違つたため判断できなけれど香りからすれば

まあ大丈夫、だと思ふ。

キツネさんに差し出した紅茶には勿論クッキーを盛つた小皿が付いてて。

「……安定してきたみたいですね、小鳥さん」

完璧な合格ではないけれどまず1歩次2歩目、つてところでしょうか。

国家図書館の司書長室でキツネさんにこの世界の紅茶を振舞つて。

私はティータイムには同伴しないでお仕事……というよりは本日の聞き込みの成果を

忘れないように紙に書き込む。

学校の授業でもないし普段ならほとんど覚えていられるけどこの数日、異世界の知識が

大量に脳内に押し寄せてきて全てを覚えておくのは難しい。

優先とするならこの異世界の常識であるし、聞き込みの成果・情報というのは後々役に

立ちそうなんで紙に残しておくことにしたのだ。

「それで、誰から情報を仕入れたんです？」

ひたすら紙に文字（日本語）を書き続ける私にキツネさんが聞いてくる。

片方が作業に真剣で自分はティータイムをしているっていうのは何だか自然と申し訳ない

気持ちになつてくるようで少しでもその空気を誤魔化そうとしている。たぶん。

まあ別に私としても隠すことでもないし、会話をする余裕もあるんで別に良いんだけど。

「ヒルパキルス・J・ベイトソン、第一騎士団副団長さんです」

「・・・これまた凄いところに行き当たったもんですね」

キツネさんの反応も無理もない。

騎士団というのは魔術・武術両方を兼ね揃えた人しかなくなくて主に王族の護衛なんかを務める。そんで第一騎士団というのは血筋が良い貴族が集められた…一番有名なエリート集団なのだから。

さらにいうのなら『ベイトソン』というのはオルブライト王国の宰相にして国王の家庭教師を務めていたアスキリア・J・ベイトソン氏の一族であることを示し、ヒルパキルスさんは宰相の一人息子さん。とびつきりの大物なんだよね、実は。

「色々、ていうか単純に勇者の帰国凱旋一日延期の伝達というお使いを頼まれてね？」

それで会った陸軍総司令官さんからご褒美的な感じで対談が成立しただけだったり」

もう少し詳しく言えばこの陸軍総司令官さんは第一騎士団団長さんと仲良しで、この団長さんを通してヒルパキルスさんを紹介してもらいました。

なので第一騎士団団長さんにも会ってはいるんだけど・・・まあこれはいいか。

「小鳥さんはホント無自覚な大物ですね」

「何言ってるの。偶然だよ。私は一般庶民まんまだって」

何故かキツネさんはため息をつく。

いまいち理解は出来ないが、ツツコムの疲れるし作業中だし先に進もう。

「今書いているのは個人の思い出・・・対談でね、勇者一行にヒ

ルパキルスさんの義理の

弟さんや面倒を見た子がいてね、勇者アイザワに関しては大分情報が集まっていたから

アイザワ以外のパーティーメンバーについて教えてもらってたんだよ」

「ああ確かにそういえば勇者には何人か騎士団員がついていったらしいですね」

勇者アイザワについて聞き込んでいた時もそーゆー話は耳にしていた。

それにいくらなんでも異世界から召喚してはい魔王倒しに行け、なんて虫が良し過ぎるだろう。

補佐する道具なり旅に同行者をつけるのは当たり前だしね。

「で、オルブライト王国から勇者アイザワに同行したのは3人。

まず情報源のヒルパキルスさんの義理の弟さん ケルヴィン・J・ベイトソン。

『風』の属性持ちで、魔獣テイマーの資格を持っている。 双剣と弓を扱う。

次は家族同士で付き合いがあり幼い頃面倒を見た、というのはカトリーヌ・ヴィストリア。

勇者一行の唯一の女性で『大地』の属性持ちでバスターソードの使い手。

最後に皇子で提督官補佐官兼左翼魔術研究所所長の フランフォルグ・クローリスト。

『四大元素』である『火』・『水』・『風』・『大地』全てに適性を持つ魔術師。

さらには付加属性として『光』も使えるという・・・オルブライ

ト王国一の魔術の使い手。

とまあ、こんな感じですか」

キツネさんの感想は……

「何ですか、その豪華過ぎて強者の揃い同行者。

私だけじゃなくて国民にもよく知られている人だけじゃないですか」

とのことです。

どうもあんまりにもメンバーが凄過ぎてうまく感想をまとめられないみたいです。

紅茶を口にして誤魔化しているし。

「そしてちなみにこれはヒルパキルスさんから私が国家図書館管理司書長であり『勇者

アイザワの旅路』を書くことを伝えたので教えてくれた極秘情報ですが…アジユラ

連合国から2名ほど途中追加したそうです」

名前やどんな人物かはわからないそう。

「……よし、こんなもんか」

異世界らしい『火』の宝珠がはいったランプを使い、その仄かな温かみのある灯りで

これまでの聞き込みの成果をまとめた紙束を全て読み返していた。

キツネさんは奥の仮眠室で寝ている。

というのも出発を明日に延期したということはまた朝早く起きて準備しないといけない。

なら荷物はすでに持ち込んでいるのだから一晩だけ泊り込んでも問題ない。

それに国家図書館には何故か仮眠室もあるから尚更それで良いじゃないか。

終業時刻になった頃話し合ってそう決め、食堂で夕食を済ませたらキツネさんは明日  
早いからと早々に仮眠室で寝てしまった。

そして私はというと前文であつた通り今までの情報を読み返していた。

私だつてキツネさんよりは遅いものの霧が晴れた頃に出発で朝は早いのだ。

けれど異世界にきて数日の私は何もかも足りない。

キツネさんに知識を教えてもらつても色々自分で聞いて回つても、限りがある。

それに私は一度見たものや聞いたことを全て覚えていられるほど頭は良くない。

こうして何度も目を通すなり頭の中で繰り返すなりしないと、覚えていられない。

全てを頭の中に押さえ込むには、あまりにも足りない。

「・・・ああ、いけないな」

無駄に考え込んでしまった。

思つてたよりも身体も頭も疲れているのかもしれない・・・そう思つてランプにカバーを

被せ、司書長室にあるソファーに横になる。

革張りのフカフカナそれは丁度良い程度に身体が沈んで、硬いベットよりマシだ。

それに私の身長が小さいオカゲで体が収まるしね。…現在は、ね。

深い赤色のひざ掛けをお腹に掛け、眠気に身を任せよう。  
ランプの光はカバーのオカゲで天井方面にしか光が向かわず、周囲を把握できるくらいの  
光で私の睡眠欲を妨害しない。  
仮眠程度の・・・まあ2・3時間程度だろう。  
それくらいなら宝珠も持つだろうし・・・眠い。

では明日の『出発』まで、お休みなさい・・・。

### オマケの勇者アイザワ一行サイド

自然に囲まれ、自然と共に生きることを生涯とするエルフの民。  
カレらは総じて魔力が高く、精霊魔術を得意とする一族である。

「ふむ、自然と共に生きるといふのは我々と同じだな」

獣人のヴィリア・ト・ティンガは木の上に建てられた小屋からエルフの里を見下ろし、

興味深く観察していた。

マジックアイテム

その横でエルフの作った魔術道具をいじくっていた半獣のフェオマギ・ルト・ピキアートはティンガの隣に行くと彼と同じように里を見下ろす。

「確かにね。けれど彼らは人に近いくせに嫌う気があるようで…  
何もかも受け入れる僕たち

とはやはり違うよ」

獣人・半獣、さらには人間が集まって出来た「アジユラ連合国」。  
各民族にそれぞれ異なる性質・掟がありながら一つの国という、寄せ集めと言われる我が国。

オルブライト王国で嫌われたバラド民族でさえ我が国は受け入れた。

ハハハと軽く笑い、ティンガは「そうだな」とそんなピキアートに肯定する。

「それは仕方ない。エルフは最もヒトに近い種族なのだから。ヒトと違う『獣』が混じることさえも受け入れた我らと同じになる事はない。

今も、これからも」

ティンガは己の腕を見る。

灰銀色の毛は全身を覆い、それを映す瞳は狼のように鋭い。当たり前だ、自分はヒトである前に『獣』なのだから。

隣のピキアートはヒトの身で『獣』を受け入れナカに寄生させるという珍しい一族だ、

薄い水色の髪に白い肌にはよく見れば鱗がある。

いや正確に言うのなら鱗があるから肌が白く見えるのである。彼を良く知るならばそう言ったほうが良いだろう。

「けれど共存はできるのでしょう？ 貴方達なら」

オルブライト王国の第一騎士団員で勇者アイザワの同行者であるカトリーヌがそう

言ってピキアートとは反対のティンガの隣に立つ。

「何だ、聞いていたのか」

「ここは静かだからでしょうね。下は騒がしいったらありやしない……」

勇者パーティー内では一番熱く、積極的な行動派の彼女だがその反面冷静さも人一倍もつという人物だ。

呆れたように指を差した先を二人が見やれば勇者アイザワがエルフの少女に引っ張られて

どこかに連れ込まようとしている。

「ケルヴィンはどうした？ アイザワと3人で行動していたのではなかったか？」

「あー、ケヴィー？ アタシが小屋に戻るって言ったたら『4人分の飲み物持つてくるよ』って

言っただからすぐに来るんじゃない？」

「何で飲み物限定なんだ？」

下の騒ぎを観察するのをやめ、ティンガはカトリーヌの方に向く。カトリーヌの方は勇者アイザワの護衛という一応の仕事意識から対象を視界から外していないが。

「さあね。ケヴィーって天然な性格だから本当にそれで来る可能性もあるし予想外な行動も

するからわからないわ・・・そもそも夕食食べる為に降りたのに忘れていたのかしら？」

アイザワのせいで喰いっぱぐれたのよねー。

「なら皆で降りてケルヴィンと合流してパーツと食事しませんか？  
再びマジックアイテム魔術道具いじりに集中していたピキアートが顔を上げ、提案する。

「明日はオルブライト王国に出発、あの飛行魔獣の脚なら日中に到着するでしょうからこうして

仲間が集まれる夜というのは今日が最後だったりするでしょう？」

「ああそついえばそつね」

「あまり実感はないんだがな。長老が『好きなだけ』と言ってたし  
…この際だ、クローリストも

攫って飲み比べといこうじゃないか」

乗る気になった仲間と共にピキアートは小屋を出てエルフの里に向かう。

「好きなだけ飲んで食べてパーツとしましょう。 … 本当なら僕た

ちの方がうるさいくらい騒ぐ

べきなんですよ。 勇者パーティーなんですから！」

「ええ勇者パーティーですもの！」

「おおおおいねえ！ エルフのヤツら以上に盛り上がるうじゃねえの！！！」

「「おおおー！！！」」

そしてその後飲み物や食事といったあまりの荷物にワタワタしているケルヴィンを拾い、長老の話し相手をするクローリストを攫い、合計5人は里のど真ん中にある広場で『勇者パーティー』を始める。

……肝心の勇者アイザワは全員が酔っ払いと化した場合に混ざるの  
だが…翌朝は死屍累々だったそう。

異世界編 その8 『1日延びたらしい』（後書き）

執筆スピードがノロノロのため週末あたりに週一話ずつを目標に頑張っています。

…小鳥とキツネさんはおそらく次話で出発です。

異世界編 その9 『入れ違いで良くな』

準備はすべて整った。

日の出前に大地を覆う霧はすでに晴れて、太陽の姿を目で捉えることが出来る。

ここオルブライト王国、というよりこの異世界は雨がものすごく少ないらしい。

大体年に2〜4回ほどで必ず雨の降る前日は空が黒い雲で覆われる。水に関しては「はじまりの河」のオカゲで困ることはないし、むしろ雨は降らなくてもいい。

なので雨具が発達するはずもなく水路や井戸などの技術が高い・・・話が違うか。

まあ何が言いたいのかと言うと・・・この異世界は空が綺麗だ、ということ。

雲は小さいのが漂っていることは見かけるけれど、覆うのは年にほんの数回。

そのため朝目覚めて空を見るとほとんど遠く青い空が拝める。

今日も、出発日和です。

「またそんなこと言って・・・ピクニック気分な発言は控えてくださいよ」

すぐ真後ろからキツネさんの声が聞こえる。

振り返るとおそらくキツネさんの服が視界を埋めて自分の小ささに愕然とするからそのままです。

「わかってますよ。けれど青空であるだけで気分がいいのは本当でしょう」

「それもそうなんですけどね」  
なら、良いじゃないですか。

飛行獣であるラバルには人が乗る為の鞍や制御するための拘束具が装着され、両翼の下に

は旅に必要な道具や食料がまとめられた荷物がセットされていた。

これは通常の飛行獣に比べてカラダの大きいラバルだからこそ出来ることで、私が欲しかった

からだけでなくこの旅に打って付けだ、とキツネさんが判断して10万セルで落札したとか。

まあそんな理由だからとかでなくラバルとこうして一緒にいられて頭の角が触れたただけでお金

なんてどうでもいいんだけど。時と場合によっては些細なことを気にする必要が無いのだ。

全ての準備を終えて、キツネさんがラバルに跨って最終確認をする。空に飛んでからハプニングがあると対処が限られてしまう。

そのため念を入れての確認作業を見ながら、キツネさんの有効活用を思い返す。

騎獣や飛行獣といった魔獣を従え使役できる人のことを魔獣テイマーという。

キツネさんは元々このスキル持ちで騎獣騎士になりたくて軍人になつたんだとか。

その辺はどうでもいいけど、とにかくキツネさんのそのスキルがあったためラバルを

落札することにし、空路を選択することになったのだ。

あ、そうそう。魔獣テイマーは馬などの動物も乗りこなせるって…これもどうでもいいか。  
ついでに勇者アイザワ一行のケルヴィン・J・ベイトソンも同じスキルを持つ……一応ね。

有効活用終了。

どうやらキツネさんの最終確認が終ったようです。

「問題なしですか、キツネさん」

「ええ日中の飛行は大丈夫でしょう」

手綱を緩め、ラバルのカラダを宥める様にポンポンと2回ほど叩くキツネさん。

すると羽を動かしてソワソワしていたラバルが大人しくなりその場に座り込む。

「それとラバルは手塩に掛けて育てられたけれど実態経験がない子です。」

その辺はこの旅で経験を積んで成長してもらおうしかないですし、悩むことではないでしょう。

まあ現時点での問題はない、ということだ

「ピーー!!!」

大丈夫！任せろ！と言つかのような元気な鳴き声で自信満々の様子をアピールするラバル。

うん、私にはそう聞こえたからそれでいいよ。

「さて、小鳥さん今じゃありませんか？」

キツネさんの背後には透き通った青空が見える。

「うんそうだね」

差し出された手を握り、力任せに強引に上げられ、納まる。

「よっ、と」

私の位置はキツネさんの前。

手綱を握る腕に包まれるような感じで。

「宜しいですか？」

すでにラバルは羽を広げ、風を起こす体勢でいる。

「うん。 キツネさんのタイミングで」

ゴーグルはまだ青をみていたいから、まだ。

「では・・・行きます！」

ふわっと体が重力を感じながらも浮き上がる、飛行機より不思議な感じ。

バサバサと音が聞こえるたびに青に近づいている気がする。

「小鳥さん」

思わず手を伸ばしそうになったけど、キツネさんの声に前を向く。

「よし、じゃあまずはエルフの“ヴィフィールの里”に向けて、出発！！」

「了解！」

途端に速く動く視界と前方からの風に、首にぶら下げていたゴーグルをかける。

大丈夫。 青空はちゃんと見えている。

高度も軌道も速度も安定し、相変わらずゴーグルを付けてないと風が強くて目を開けて

いられないがキツネさん曰くこの状態がラバルの負担が軽いし魔物も襲いにくいそうなの。

あ、そうだ。

ただ乗っているだけの私はヒマだし、ここでファンタジーでお馴染みの「敵」についての

有効活用を披露することにしよう。

RPGなんかで出てくる「敵」。

この異世界では総称として「魔物」と呼ばれている。

魔物とは「魔」に犯された「物」から付けられたものである。元々この異世界には存在し、己の縄張りの侵入者に対してのみ攻撃していた。

けれど近年人の生活範囲が広がるにつれて魔物は人を襲う数が増え、個体数も増えている。

前者に関してはまあわかるが後者について説明が必要だろう。

これに関してはオルブライト王国では「魔王」が関係しているという。

そもそも魔王の存在はオルブライト王国に存在する未来が記された「虚空の書」に

書かれており、魔物の数が増えたということは魔王が世界を滅ぼそうとすることである、という。

そしてそれを阻止するためには異界からの光の心を持つ勇者を喚び出す必要がある。

魔術主義な傾向のあるオルブライト王国は未来より「虚空の書」に記された勇者召喚の

魔術陣といった魔術技術に興味があり研究の結果として魔術が一般的になったが、

記された通りの未来が訪れる。

そこで勇者召喚を「虚空の書」の指示通りに行って・・・になる。

なんか無駄なところも書いた気がするが話を戻そう。

「魔物」の「魔」とは属性で言えば「闇」になる。

なので前述に加えると「闇」の「魔力」に犯された「物」となる。

言葉としては前述だけど存在としてはコチラになる。

人が持つ得ることのない属性、「闇」は「物」から理性を奪い、「魔力」によって肉体を

強化されている。

そんな魔物を倒す為には魔術が有効と言われている。

ただ「闇」の対は「光」であり、これはこの異世界では稀少な属性なので人々は魔物本来の

属性の逆属性色を使って倒す。

魔物本来、というのはそのまま闇に犯される前に持っていた「物」本来の属性色のこと。

闇に犯された後でも属性色は残るしそれを使っての攻撃をしてくるので有効なのだ。

魔物に関してはこれくらいだろうか…あとはこれを退治する人の魔術についてこの際ついでに。

この異世界には「世界基盤」が不視覚に存在し、人は己の魔力でこの世界基盤との回路ラインを

設立、形成し、「言霊」によって回路ラインに注がれた魔力量と同等の現象が基盤より現実

に顕現される。人によってはこの顕現は精霊によるとかいうけど、今は略。

わかりにくいシステムと思うのでキツネさんが話した例を復唱。

「水」属性の保有魔力量を100とし、10の魔力で基盤との回路を形成、

言霊で「一滴の水滴」と指定する。

10の魔力を秘めた一滴の水滴が顕現される。

「水」属性の保有魔力量を100とし、10の魔力で基盤との回路を形成、

言霊で「前方視覚可能範囲を雨」と指定する。

合計10の魔力分の無数の雨が前方の一範囲で顕現される。

・・・なんとなく、理解できたかな。

使い手は己の魔力量の把握を絶対とし、一発の威力か持続的な効果を求めるかは戦法次第。

こうなると魔術の発動にタイムロスが発生すると考えられるけど人は考えた。

補助とする道具に人口回路を刻み、特定の魔術を簡易に顕現できるようにしたのだ。

そしてオルブライト王国ではそれを自分の武器に刻み、武器による物理攻撃と魔術による

攻撃を同時に敵に与える、というカタチが軍人の間では一般的だ。

私が異世界初日で見た魔術は剣に炎を纏わせていたから、あれはメジャーな

魔術の使い方となる。

「…………ふう」

キツネさんの有効利用が抜けてなくて良かった。

頭の中で一通り流して自分に合格を出す。

体内で溜めていた息を吐き出し、前を向くと一面森の地平線の奥に山らしき景色が。

一番高い山は「デスマウンテン」だというのできつと、あの今は小さい山でラスボス戦が

あつたんだろうな。

「小鳥さん」

「ん？」

ラバルの飛行が安定してからお互い無言でいた私とキツネさん。

風が強くて声が聞こえにくいだろうかと話さなかったけど、こうして間近にいれば大丈夫らしい。

「思ってたよりもラバルの調子がいいですから夕暮れ辺りに第一目的地に到着しそうです」

「最初は森で一泊の予定がねえ…ならそうしましょう。ただ、無理はさせないようにね」

ちよつと背筋を伸ばして気持ちキツネさんに近づいて答える。

後ろから「了解」のあとに少し間を空けて、第二の質問が来た。

「本当にこんな擦れ違いで良いんですか？」

ああ、そのこと。

本日は私とキツネさんの旅の出発であると同時に勇者アイザワが堂々の魔王討伐の旅からの凱旋帰国の日。

確か帰国したばかりじゃ色々予定がぎつちりでインタビュー出来ないだろうから

その間ヒマだし…とか言っただけ。

「何か困りそうなことでもあるの？ キツネさん」  
前を向いたまま質問。

「いえ…ただエルフの里という目的地は決まってきましたし多数の方がご存知なのは

わかります。けれどその先の詳しい立ち寄った場所があまりわからないでしょう？」

「あ。」

最終的な目的地「デスマウンテン」はわかるが、その他は？

途中仲間に加わったのは獣人と半獣…明らかにアジュラ連合国の者じゃないか。

エルフは他の種族と深い関わりを持ちにくい、というし…・…ということは。

「ま、まあ行けば次がどこかわかるよ！！ それを辿って行けばいいんだよ！！！！」

絶対に後ろを振り返ってはいけない、意識してはいけない。  
キツネさんのため息なんて（風が強くて）聞こえないんだから！

以下、オマケの勇者アイザワ一行サイド

水上の都『アズライト』。  
オルブライト王国の首都は人口の湖に浮かんだ一つの島である。

ケルヴィンは沈みゆく夕日を眺めながらリラックスしていた。  
王城のある一室であるココは誰かが一休みするためだけのところなのか小さいテーブルとそれを挟んで向かい合う椅子が2つだけ。  
彼は自分が座る椅子を開放されている窓に向け、一人静かに夜を迎えようとしていた。

その動きは目で追うことはせず、ただぼんやりと地平線に沈んでいく太陽を見る。

「・・・そういえば何で地平線に近い太陽は大きいのだろうか？」  
頭上の太陽との距離と地平線の向こうの太陽との距離はどちらが遠いか近いかわからない。  
解明する知識も技術も距離を測る術さえないからわからない。  
とはいえ。

ただ単に勇者を召喚することが決定され自分がその従者と決まった時から先程まで。

こうして夕日をぼんやりと眺める時間も余裕もなかっただけで、別

に答えなどどうでもいい。

椅子に座って、ただ夕日を静かに眺める。

己の体を地平線に隠し切るまで何分か。

今日もいつも通りの動きをし、己の使命を果たすまで何分か。

毎回己の軌跡を残すように空を赤く染めるのに気付けなかった。

ケルヴィンはただ静かに、見守った。

コンコン、

「あら、こんなトコロにいたのね」

「カトリー又こそ、僕を探していたの？」

相手の返事も待たずにドアを開けた幼馴染で同じ従者だったカトリー又からケルヴィンの方向は

逆光で本来なら眩しいさにまったく見えないはずだが、すでに半分以上の空は闇に染まっている。

「今日ぐらいゆっくりしなさい、って言われてね。家までケヴィーと同じ馬車で良いでしょう？」

「だからワザワザ探してあげたのよ」  
「そっか」

椅子をもう一つのと向かい合うようにセッティングして、カトリー又のいるドアへ歩くケルヴィン。

「でも義理兄さんといっしょになんだけど、それで良い？ 待ち合わせしてるんだ」

元々義理の兄であるヒルパキルスから誘われていて養子である自分に断れるハズもなくて。

内心ため息をつく。だって。

「そ、そーなのっ!？ あーうー…じゃあ今日はお父様と帰るわ。何だか家族とゆっくりするのは久しぶりだし、一族で凱旋の祝杯あげるようだしね」

ケルヴィンがまだ一般庶民のウッド性であった頃、軍人一族として有名なヴィストリア家の  
カトリーヌと知り合い、その伝手で現在のベイトソン本家で義理の兄となったヒルパキルスと出会った。

雲の上の人である彼には何かとお世話してくれて、そこにはカトリーヌも共にいた。

早い話、幼馴染のカトリーヌは結婚して子供もいるヒルパキルスに恋心を抱いている。

「向かいがその騒ぎじゃあ僕たちの方にまで飛び火してきそうだね」  
誰にもそれは知られていないがケルヴィンの前だと気を抜いてしまおうようだ。

「『勝敗の杯は皆で味わえ!』だもの、大戦時代の我が先祖の遺言が。諦めなさい」  
戦功によって貴族に昇格し、国王が『我が剣が見かけではないかと洩してしまっほどの

偉大な先祖は彼女にとって信仰すべき存在なのかもしれない。

腰に手をあて胸を逸らすカトリーヌにとってその行動は自然なもの。ケルヴィンは空いたスペースを通過してドアの外へ。

「カトリーヌはどうする？ 馬車まで一緒に行く?」

「お父様まだ訓練場の方だし、拾ってから帰るからここでお別れね」  
「悪いね、探してくれたのに」

「いいのよ別に。私も一汗流していくわ」

「『酒は肉体を動かした後が上手い』だっけ、相変わらずのお父さんだね」

「今は陸軍総司令官なんてのやっているから腰と頭だけ疲れるって愚痴ってたわ」

それじゃあね、とカトリー又は訓練場で暴れる父親を地面に転がす気なのだろう、腕を回して

軽く体を動かしながら歩いていった。

それを見送り、ケルヴィンは義理兄の方も仕事は終えただろうと待ち合わせの場所へと。

たまたま視界に窓の外の景色が目に入る。

そして周囲に誰もいないので思わず、言葉が声として出た。

「ああ霧はもう、見慣れている」

日没時に世界を白くぼやかすソレはケルヴィンにとって見たくも無いけど馴染みすぎた存在だった。

異世界編 その9 『入れ違いで良くね』（後書き）

サブタイと本文に違和感ありまくりですが私の力不足故です…。  
けれどサブタイは全て固定されているのでそのまま進みます。

次回の更新はまた一週間後ぐらいに。

異世界編 その10 『それで良いんだよ』

エルフたちの住まう“ヴィフィールの里”。

属籍はオルブライト王国となっているが閉鎖気味で必要以上の干渉を嫌う。

近年はケラス自治国と霊珠の取引が盛んで、エルフの作る防具・武器は高品質だと有名である。

……とまあ図書館からの知識はこんなもんか。

出発前日に読み返した資料から引き出して、現実逃避をしてました。

「それで我がエルフの誇る先祖伝来の宝剣を勇者サマにお譲りし見事魔王を我が宝剣で倒したのです！あれ少し改良は施されていた気がまあ些細なことですし大事なのは魔王を討ったのがエルフの宝剣ということなのですよ勇者サマのお力もあるでしょうがやはり竜を討ったという言い伝えがありますよそれは私のおじいさんのおじさんが婿入りした時に相手側に婿入り道具の一つとして献上した剣なのです私の嫁で先代の巫女からも宝剣には不思議な力が宿っていると言われてましてあれはいつでしたかそう私が……」

ザ・エンドレス。

終わりません……。

夕暮れ前。

霧が出る前にエルフの里に入りたかった私とキツネさんは本来なら里から少し離れた所に

着陸し里まで歩いていくつもりだったけど時間的にそうは言ってもらえなくて。

ラバルに乗ったまま木製の門の近くまで飛び、門番のエルフ2名に槍を突きつけられながら着陸。

大きな羽と尾でエルフに攻撃しかねないのでキツネさんにラバルを制してもらい、私が

ミレシアン様の用意した身分証明書と訪問の理由を説明した。

そこでやつと槍を降ろしたエルフにキツネさんがラバルでここまで飛んできた理由を

説明し詫びを入れる。

そしたら向こうも納得してくれたようで、獣舎の場所を教えてくださいました。

ここまではよし。

エルフ側の反応も想定内で問題ない。

それでラバルを獣舎に繋げた後、里に一軒だけという宿に行き部屋を借りた。

部屋は大きいのを一つ。

寝室が分かれているしそこもう一人は布団を借りて別室で寝れば良いと決定。

まあ別に私はキツネさんと一緒の部屋で寝ても問題はないと思うけど。

そして借りた部屋を見て回って落ち着いた頃、訪問客が来た。正しくはそのお使いの人だったんだけど。

「長老が宜しければ夕食など一緒にどうですか、とのことですがどうでしょうか？」

今思えば「イエス」の返事が現実逃避の始まりでした。

オルブライト王国の代表として『勇者』として旅に出ているし、一行にはフランフォルグ・クローリストという皇子サマがいたんだから立ち寄ったエルフの里の長である人物と面識あるはず。

今日は取り合えず里の雰囲気を感じて明日にでも訪ねようと思っただけだから向こうから来た

のは順番が逆になった程度のことです、すぐにおkの返事をして長老の家に招待された。

「ようこそヴィフィールの里へ、管理司書長殿。 さあさあどうぞこちらへ」

エルフというのはベジタリアンなのか野菜中心の料理で。

食事をしながら話しましょう、と席に着く。

で、箸をつけて招待してくれたことの礼とか一通り話した後で本題の勇者アイザワについて聞いた。

そして聞いた。

そしたらこれだ。

「我が家に宝剣が納められた日それはもうすごい美しい剣身でして普段は無口な父がそれで酒を飲む姿が印象的でした父は大戦時代を国王と共に戦ったエルフの闘神と呼ばれたほどの強者でしたそんな父の息子である私も若い頃はやんちゃで各地を旅したこともありまして当時は魔物が今ほど活発では無かったですから相手はヒトである場合が多く空しい時代でしたなそんな中……」

エルフの長老さんの話し相手になっているのは専らツネささんだけなんだけど。

喫茶店の店員だけなだけあって話し相手になるのは職業柄というか私は最初の必要なところのみ頭に叩き込んで、それからは窓の外を

眺めたり…もう夜で  
まったく見えないけど。

苦し紛れにゆつくりと現実世界の食材と照らし合わせながら食事したり、キツネさんの  
有効活用を思い返したり。

いい加減ネタがつきそうだ、いや、私の現実逃避のネタの方がね。  
仕方ない、強制撤退としますか。

「あれは盛大な祭りでした大陸中の腕に覚えのある冒険者から傭兵  
確か騎士なども参加してまして私も父に強制的に参加させられ「お  
暇します」になりましたが今となっては遊び呆ける私に湯を入れて  
くれたのでしようまあ結局は三回戦で若い獣人に負けてしまいまし  
たがあれあの獣人によく似ている気もするが気のせいですねきつと  
決勝は私に勝った獣人とケヲスの騎士で素晴らしい戦いでしたがそ  
れよりすごかったのがエキシビジョンバトルの現ケヲス国王と若き  
オルブライト国王の戦いでして…」

…何だがすごい話をしているっぽいキツネさんが聞いているよう  
だし。

後々有効活用としてその時間聞ければいいや。

さて、と。

長老さんには一言言っただし、行きますか。

立ち上がりキツネさんの方を見ると顔に「何してんですか」と書いて  
ある。

どうやら私の言葉は聞きとれていなかった様子。

目を瞑って思い返しながら話続ける長老さんにをちらっと見てから  
キツネさんに視線を戻す。

理解はできたようだけど戸惑っているようで。珍しい。

そんなキツネさんに口パクで「お先に。」と言って、私は長老さんのお宅をあとにした。

まずはそうだな…取り合えず宿に向かおうか。

里を探索する？懐に多少のお金はあるけどもう夜だよ？

それにエンドレストークのオカゲでどれくらい時間がたったかわからないんだよね。

何をしても宿に一度戻ってから考えよう。

明日はキツネさんの愚痴が始まるんだろうし、聞き流せる気力を残しておかないといけないし。

擦れ違いの首都アズライトに凱旋帰国した勇者アイザワについてはその後、だね。

夜7時。

思ってたより、いやまあこんなもんか。

宿に到着し自分の部屋に入る。

チェックインの時に布団を一つ頼んでおいたのでそれが部屋に置いてあった。

それ以外に触られている形跡もないし王城に勤務する者で任務の為に訪れていることは

宿に伝えてはいるので何かあってたら互いに困る結果になるんだけどね。

ああそんなことは一々どうでもいいか。

7時。

シャワー浴びるにしても普段10時過ぎの私には早過ぎる気がするし、じゃあ何するか。

ヒマ潰しになる物を探して部屋を探索する。  
そして途中ふと窓の外の景色が目に入って、立ち止まる。

森の中にあるエルフの里、“ヴィフィールの里”。

夜空の下に森の中という場所からより一層暗闇に包まれるハズのこの里はあれも魔術道具マジックアイテムの類なのか街灯なんか**が**ぼんやりと綺麗に輝いていて…まるで現実世界と同じような明るさ。

「…そうだ」

思いついたらキツネさんのいないうちに行動してしまえ。

テーブルに置いていた私の水筒（人口回路が刻まれていて中身の温度が変わりにくい）を持って再度外へ。

私は地図を見ることは出来るが指でなぞった道順通りに行けたことがない。

初めて行く場所にしても出発地点とゴール地点を頭に入れといて、あとは感覚で歩いてしまう。

勿論それで迷ったこともあるし時間が大分かってしまったこともある。

けれどゴール地点に到着した時に振り返るとそこに後悔はなかった。

感覚を頼りに窓から見えた場所に到着する。

「やっぱりそうだ」

遠くからみた街灯を装飾がわかるほど近くまで。この広場を中心にそれが均等に

並んでいて。

そんな周囲を見渡して確信する。

「この里、この広場が底のお椀みたいなカタチなんだ」

そもそも里に入った時もやけに坂道だな、と思った。

けれど宿から長老さんのお宅まではフツツの道。

感覚で歩く私はそこで「あれ？」と感じたけどまあ初めて来た場所だし気にすることでもない。

それ以上考えることを止めていた。

そしてまた考えたのは宿の窓から外を見て。

街灯とか今いる中心に池がある広場の全体が見える程度に見下ろせて、面白い景色だなんて。でも旅の出発前に地図をみたけどオル

ブライト王国からヴィフィールの里までほとんどが森で山があるとなかなかつたし、土地の高低について何にも書かれていなかった。

国家図書館にある地図だから間違いなんてない筈だし……つまり人工的なモノかそれ以外の

理由があるのか、と。

私は別にその理由とかは知りたくもなかったけど、ヒマだったこともあって確かめることに

したのだ。

水筒を持って。

一周ぐるっと里の構造を確認をして、窓から見えた池に近づく。

思ってたよりも小さいようで、直径5mほどだろうか。

細かく装飾が施された池の淵からは中の水がいっぱいだけど不思議と溢れことはなくて。

湧き出ている様子はないから池じゃなくて水溜りかと思ったけど、それにしても水が綺麗。

顔を近づけて底を覗くと白い砂がぶくぶくと泡がでてるような感じに動いている。

「・・・なんとというファンタジー・・・」

水が湧き続けているのに溢れることのない池。

もしかしたらこれも何かしらの魔術によるものかもしれない。

そう思うと王城の水晶の間が頭に浮かんで、自分の「魔力拒絶症」に至る。

「また倒れたら...!」

キツネさんに笑顔で怒られる!!

慌てて顔を上げ、不思議な池から離れようと体を反転した。

けれどそこから離れることはなかった...だって。

「じっ、こんばんは...?」

「はあい。こんばんは」

じっーとエルフの少女が私を見つめていたんだから。

## オマケ勇者アイザワサイド

勇者アイザワは召喚されて1カ月間、第一騎士団から訓練を受け召喚時の

肉体・運動神経強化と魔術を身に付け扱いこなせるよう訓練をした。そして騎士団員2名と皇子にして現役魔術師の中でトップレベルの

魔術師が

同行者となり、旅立つことになった。

しかしそのパーティーはレベル20ぐらいの勇者にレベル50が2名  
レベル70が1名と非常にレベルバランスが悪く、勇者アイザワに  
とって

スパルタ教官が2名もいることで涙が止まらない冒険になっていた。

そして今だってそうだ。

旅は同行者ケルヴィンが操る飛行獣に乗って魔獣に襲われることなく  
気楽になるかと思えばそうもいかない。

むしろ魔獣襲ってくれて思ってたくらいだ。

そんなアイザワの考えを呼んだ唯一の同情者ケルヴィンは手綱を握  
りながら

「たぶん今魔獣が出てモクローリスト様が瞬殺だと思つ」と、  
と、ハハハハ。

だてにレベル70ってわけじゃないもんな、諦めのため息をするア  
イザワ。

「さあ今ので大分魔力が薄れたからもう一度作り直しだな」

「うげえー……」

「あんたが下らない思考をするからよ。顔に書いてあるのよ、全  
部」

手の平に光の魔力を集圧して光球のカタチをしたソレは使い手の意  
識に

則ってカタチを無とし、前進する飛行獣の後ろへと流れて消える。

それをぼんやり見送ってから手の平を水平にし視線の高さと同じ高  
さにする。

回路を形成し自分の望む現象を言霊にする。

「我に降り注ぐ光よ この手に集い姿を現にせよ 集圧！」  
足を体を頭を顔を腕を伝ってナニかが手の平へと向かう感覚。  
決して不快なものでないが自分の目に見えないナニかが薄く剥がれて  
コロコロと転がるような…そんな感じ。

手の平に重みを「感覚」として感じ、目を開けてソレを見る。  
先ほど消し去る前よりも確かに重い気がする。

今度は失敗しないように他は何も考えないように、ただ見つめる。

そんな現時点で真剣に魔術の練習をこなすアイザワに視線を送りながら

カトリー又は隣で同じように様子を見るクローリストに言う。

「どう思います？ あたしは出来て2分だと思えますが」

他の属性と比べて光の属性魔力は集まりにくく維持するもの通常より神経を使う。

初心者なら集めるだけで、中級なら1分保てれば合格と言うだろう。  
けれどアイザワは光の属性しか持たないためそのラインは容易。  
そのためカトリー又は2分を合格ラインとして提示した。

「2分か。まあ妥当だろうな……ケルヴィン」

「何でしょうか」

飛行獣の操作をしていたケルヴィンは突然話しかけられ、何事かと構える。

「飛行型ではないが前方に魔獣の気配を『風』で読み取った。

此方に気が付いているようだし攻撃される前にその集団を殲滅する。

…アイザワの試験となるやはわからないしどっちでも構わない

んだがな」

その時カトリーヌとケルヴィンの二人は同じことを思った。  
「鬼か。」と。

そしてクローリストは飛行獣という足場の悪い所に涼しい気な顔で立つと感知した魔獣の場所を確認し、詠唱を始める。

四大属性と光の付加属性に適性のある魔術師、人類最強の魔術師と称される

クローリストだけが出来る出鱈目で恐ろしく…けれど低級の魔術。

初心者の魔術師というのはまず己の属性色を知り特性を理解することから始まる。

次に言霊を学び世界基盤と自身を回路で結び、『世界を正しく弄る』術を識るのだ。

『水』は流れる　その中心の円に集うように

『火』は燃える　その一点を灰にせんと

『風』は吹く　その円が世界の全てと思わせて

『地』は固く　その世界が我だと言わんばかりに

クローリストの魔術行使に合わせてケヴィンは飛行獣の速度を落とす。

そして強大な魔力と無数の魔術の『球』にパニック寸前の飛行獣をあやす。

初心者で一個作り出すのが精一杯な『球』を彼はその膨大な魔力と己の所持属性を

生かし、数え切れないほど同時に展開する。

無論こんな芸当上級者のクローリストだからこそできるが魔術そのものは低級であり  
複数の属性をもっていれば可能である、というわけで低級魔術に分類される。

「  
シユート  
発射  
」

カトリー又は思った。

わざとアイザワの合格ラインである2分内に戦闘を初めてせつかくできた『光』を  
消させるばかりかその拡散した光さえも本人の目の前でより強度の『光』を顕現し

それをフィニツシュに盛大に使うとか。

固まるアイザワにコレと同じ程度のを作れとか。

鬼だ、と。

異世界編 その10 『それで良いんだよ』 (後書き)

次は来週に。

異世界編 その11 『元パーティー：エルフの巫女さん』（前書き）

\*あとがきにて次回の更新のお知らせです。

\*今回は時間が前後交互に入り混じっている書き方をしています。  
大変読みにくい、理解し難い等あると思いますが一番コレがしっ  
くり

きたので、ご理解をお願いします。

異世界編 その11 『元パーティー：エルフの巫女さん』

ストーン、と私が彼女の隣に腰をかけたトコロで始まる。

「…じゃあ落ち着いたところだし、自己紹介がまだだったよね？」

私は『オルブライト王国 国家図書館管理司書長』のコトウ小鳥。  
アナタはどちらさん？」

「私はエルフの巫女。 ヴィフィールの里に住まうエルフの民と『自然』を繋ぎ、互いの

『幸福』を願う者…名前は巫女になった時に無くしたわ。 だ  
からごめんなさいね、

自己紹介がこんなで」

「まあそれなら仕方ないでしょう」

なら「エルフの巫女さん」とでも呼ぶことにして。  
で。

それからヴィフィールの里に訪れた理由や勇者アイザワについて聞いて回っている

ことを巫女さんに言うと、彼女はとても興味深そうに身を乗り出した。

「私そのインタビューの第一号？ …当たり前ね。

だって私、アイザワの旅に加わったんですもの、ほんの少しだけ  
だったけれど」

なんですと。

お椀型だということがわかったヴィフィールの里。

その底である広場で私は彼女と出会い、興味津々といったその瞳に見つめられていた。

彼女が何をしたいかはそれですぐにわかった。

けれどそばにファンタジーな池があるのを思い出し私が「魔力拒絶症」であるから場所を

変えて欲しい、と頼めばガイド付きで案内されることになった。

「そう、ならちよつと歩くけどついてきて」

歩く道は緩やかな坂道で。

気が付くと広場全体が見下ろせる程度の高さまで来ていて、さらに気が付く。

「建物と木が同化している…？」

人工物である家と木の境目がない。

見たことも無い不思議な光景に思わず足を止めた。

「ふふっ…それこそ長年掛けて築いたエルフの魔術技術。細かく説明してあげたいけど、

今は進みましょう。もうすぐ到着だから」

さあ行きましよ、と彼女は私を促す。

足元を見たら細い木の根が絡み合って出来た道だった。

そしてエルフの巫女さんが語る。

手の中にある『紅茶』が冷めてしまつくらい長く語ってくれたその話を忘れないように、途中から

冷めた『紅茶』をちゃんと飲み干してから片付ける。すぐにベル

トから紙とペンを取り出した。

その行動に気が付かないくらいに巫女さんは熱く語ってくれているけど、私は『勇者アイザワ』

の事を書くのであつて彼女がメインではない。

なので紙に書くのはその『必要』な事だけ。

それからしばらく歩いて、太い枝にリボンが括り付けられている…  
ただそれだけの場所で

彼女は立ち止まった。

「ココは私の特等席なの。 お茶があるようだし、夜のお茶会しながらお話ししましょ！」

「はあ……」

お茶というのは私の水筒だろう。視線がそれに向いていたし。けれど。

「木の根の地面だけど、ココに座るの？」

ベンチもないし高台にあるような手すりもない。

ただ道がぷつんと途切れて、リボンのついた太い枝がびよこんと空に突き出ているだけ。

地面が土じゃないからそれほど汚れそうにもないけどそこに座り込んでお茶会は…。

「ならコッチでしましょうか。 祝福の よ、其の一翼の恩恵を  
我に」

突然目の前にいたエルフの少女がふわっと浮き上がり、突き出てる太い枝に飛んだ。

… 魔術だな、絶対に。

っていうか今初めて魔術を間近で見た。

詠唱の一部聞こえなかったし「飛ぶ」なんて風だとは思っけど目に見えなかったし。

ちよつと軽くファンタジーの目撃に思考が飛びかけてしまう。  
あ、久しぶり脳内キツネさん。でも宥めなんていらなから。

「あら私が運んだ方が良い？」

「だ、大丈夫です！」

エルフの少女の声に現実に戻ってきた。

いやー危ない…けれどどうしようか。

私、「飛ぶ」なんてファンタジー出来ないし。

でも咄嗟に大丈夫って言っちゃったしな…。

目測で途切れた地面と少女のいる枝までを測る。

…まあ行けるでしょう。

「いつきまーす。…起動<sup>アッセル</sup>」

軽く助走をつけて、「跳ぶ」。

「じゃあ確認だけど、勇者アイザワ一行がヴィフィールの里に到着と同時にエルフ誘拐

事件が発生。勇者一行のオカゲで誘拐されたエルフの民は無事

救出、巫女さんは

この誘拐事件の被害者の1人だった、と」

「ええ犯人は背が小さかったし魔術を放っていないことからケヲス人と断定された…昨日

アイザワに聞いたけど、どうやらケヲス人の盗賊の仕業みたいね。

アイザワも詳しくは

知らないようだったからフランフォルグ様に聞くと良いわ」

ふむふむ。

エルフ誘拐事件の経緯や調べる事を書く…あ、ここはこの世界の文字で。

だって巫女さんに丸見えなトコで日本語使うわけにもいかないし。

よし、書き終わったので、次へ。

「巫女さんは勇者一行の元メンバーってことでいいんだよね？」

さつき言っていたけれど、一応の確認。

「そうよ。何？次は一緒に旅に出たときのことかしら？」

「ソレだね。あ、でも大体で構わないです。もうこんな時間で  
すし」

偶然こうしてインタビュー出来てるけど、明日正式に長老さん通し  
て対談する場を設けて

キツネさんと一緒に細かいことまで聞けば良いだろう。

「わかったわ」

驚くエルフの少女の隣に掴んだ枝で逆上がりをして、腰掛ける。

「あ、あなた魔術できないのならそう言いなさいよ！ びっくりし  
たじゃない！」

その途端に詰め寄る彼女に手首の魔術道具マジックアイテムを見せながら。

「コレがありましたし、できるかなーって」

身体能力を上げるんです、と説明すると納得できていないようだけ  
ど理解はしてくれたようです。

「はあ…そういえば『魔力拒絶症』だって言ってたわね…なら驚い  
たのも出来ると思い

込んでいたのも私の落ち度。ごめんなさい、っていうべきかし  
ら」

「いやいや。逆に驚かせちゃって悪いなーって感じなので良いで  
す。

それよりも、どうぞ。温かいですよ」

取り合えず、まずはお茶をどうぞ。

「私がアイザワ達の旅に加わるのをお祖父ちゃん…長老はすごく反

対したわ。

それはそうよね、私はエルフの『巫女』。魔王討伐という命を落とすかもしれない旅に

付いて行こうなんて言うんですもの」

「けれど振り切って旅に加わった」

「ええ。今思えば孫を思う気持ちもあっただろうし『巫女』を失う可能性を考えたかもしれない

けど…エルフの里から出た事のない私がアイザワ達のお荷物になるってお祖父ちゃんは

判断したんだって」

差し出されたカップに温かい『紅茶』を注ぐ。

「そしてそれは実際、現実になっちゃった」

私はボールペンを持つ手を止めて、俯く彼女を見た。

巫女さんは『紅茶』に映る自分を通して思い返す過去を見ているんだろう。

「怖かったわ…私は魔術を『幸福』のためにしか使ったことがなくてね、飛行獣の上で

アイザワにしがみつくしかなかったの。そして迫り来る黒い魔物達にアイザワの剣と

ケルヴィン様の飛行獣が犠牲となった…カトリーヌ様もフランフォルグ様も一生懸命

戦ってくださったけど、取り乱した私に飛行獣も感化されて不安定だったのよ。

アイザワにもお二方にも、ケルヴィン様には謝っても謝りきれない事を私はしでかして

しまった……」

語ってくれた彼女に、私は同情することもなくこう言った。

「それで？」

夜10時前。

現実世界と同じタイプの懐中時計はチェーンでベルトと繋がっていて、時刻を確認して仕舞う。

巫女さんの話は書き終わっていて、白紙だった紙には『物語』が断片的に綴られている。

「それじゃあもう夜遅くなっちゃいましたし、詳しくは明日正式にお話ししましょう」

起動しつばなしの魔術道具マジックアイテムの力を借りて木の根の地面に降りる。

巫女さんは木に腰掛けたまま、もう少しここで里を眺めるようだ。

「お待ちしているわ、管理司書長さん」

「お待ちしてくださいな、巫女さん」

振り返ることなく、ちゃんと覚えている宿への道を歩く。

シャットダウン  
「切断！」

地面が土に戻って転がる小石を強化された脚で蹴ってしまつて、物凄い勢いで飛んでいく。

慌てて回路ラインを落として飛んでいった小石がどこかぶつかったりしていないか飛んでいった

先を確認し、どうやらどこも当たっていないようで安心する。

宿に着いた時には10時を少し回っていた。

もしかしたらキツネさんが戻っていてすでに寝ているかもしれないしそうじゃないかもしれない。

もしかしたらキツネさんは戻っていないくてまだ長老さんのお話しに

付き合っただけであっているのかもしれない。

まあどれにしたって小言の一つ二つは当たり前だ。

でもまあ…私だって巫女さんとお話しして本来「散歩」の予定が立派に仕事をこなしてしまった

から受け流すのだって許されて良いもんでしよう。

カチャリ。

鍵を開け、中に入る。

明かりが点いているからキツネさんはどうやら戻っているし起きてもいるらしい。

一体あのエンドレス会話にどうピリオドを打ったか気になるが、その前に小言。

んーでもなあ…仕方ない、メンド臭いから小言は消しちゃおうか。

一番広いリビング的な部屋に入ると、やはりキツネさんがいた。

「お帰りなさいキツネさん」

「ただいまです…って逆じゃないですか小鳥さん」

『紅茶』を淹れたらしい部屋にはイイ香りが漂っている。

「いやーあのエンドレスからの生還的な意味で？」

「…そうですね」

空になった水筒をテーブルに置く。

「で、どちらに行かれてたんです？ 私よりも数時間先に退室した

というのに」

…結構根に持っているらしい。やっぱり。

「私的には『散歩』のつもりだったんですけど、『お仕事』しちやいました」

キツネさんに向かい合うカタチで座り、ベルトのポケットから断片的に綴られている

『物語』の用紙をテーブルの上に置く。

「どうやらキツネさんも異世界の文字は読めるようですね、『物語』を目で読む。」

「ああ、そうだキツネさん」

書かれた『物語』から目を離さないキツネさんを見てこれで小言は消えた、とは思ったけど

念には念を入れて。

「次の目的地、『オルブライト王国 首都アズライト』らしいですよ」

よし、これで小言は消えた。

以下オマケ勇者アイザワ一行サイド

『アイザワ』という響きは聞いたことがなくて、不思議な感じだった。

それで聞いてみると彼は「異世界の人間」で、『アイザワ』というのは彼の住む国特有の名前らしい。

そうなんだ、しか聞いたクセにそうとしか思えなかったけれど私はソレが羨ましかった。

お祖父ちゃん…長老から『巫女』として紹介されて『アイザワ』達の前に立つ。

皇子で最強の魔術師のフランフォオルグ様。

騎士のケルヴィン様。

数少ない女性騎士のカトリーヌ様。

そして異世界の『光』の勇者である『アイザワ』。

羨ましい羨ましい。

『全て』を恵まれている私はすぐに行動に移す。

それは別に意識してとかでなく、不思議と動いてしまったのだ。『全て』が。

まず言葉を交わし、そしたら笑顔が零れて、思わず手を引いた。

そして笑い合って、話し合って、顔を見合わせた。

不思議だわ。

そう言った私に『アイザワ』は「ああそうかも」と頷いてくれた。

『不思議だわ』

ココロの内に留めた言葉はそのまんまで。

『アイザワ』がカトリーヌ様に訓練されていたその日。

本当なら彼らはこの里からすでに旅立っているらしい。

まあ被害者である私にしては淡泊な感じだけど、「仕方ない」としか思えない。

フランフォルグ様はその先日の事件について忙しいようで、ケルヴィン様もそのお手伝いを

しているんだとか。

私はカトリーヌ様から逃げてきた『アイザワ』を連れて、お気に入り場所に案内した。

お母様からもらったリボンは捨て切れなくて、隠すようにけれど私だけが感じられるように

結んだりボン。

ココでいいという『アイザワ』に私は精霊たちをお願いして『翼』を貸してあげた。

大きな悲鳴に誰か来ないかと心配したけど、大丈夫だったようだ。

見下ろせる里を『アイザワ』に自慢して、褒めてくれた。

抱きつきたくなったらけれど私のためにできた里に申し訳なくて堪える。

けれど歓喜する『私』は抑えられなくて言った。

「私も『アイザワ』の旅についていつでも良いかしら？」

『アイザワ』にとってこの世界は『異世界』。

私にとって里以外の場所は『異世界』。

未知なる世界に二人で空想して楽しんだ。

手を握って歩むその世界はどんな世界なんだろう？

並んで歩くその世界はどんな世界なんだろう？

見知らぬ場所で見上げる空はどんな空なんだろう？

すでに頭の中で共に旅をする私に『アイザワ』が言った。

「じゃあ何て呼んだらいい？」

私は『巫女』、名は無いの。

「でも『巫女』って役職みたいなものだろ？　それで呼ぶのもなあ

…」

別に私はソレで構わないわよ。

「だって、俺たち『仲間』になんだ。『仲間』を役職名でなんか

呼べないよ」

『仲間』。初めて言われた言葉にドキンとココロが音を立てる。

私は『私』を抑えきるなんて、できない。

「なら……『アイザワ』が決めて。  
『仲間』の『私』に名前をつ  
けて……！」

ここのところスランプな状態で来週の更新はお休みしたいと思います。

とはいえ読み手としてはHPはチェックしてますし、再来週には次話を

投稿予定です。ただ書き手としてのモチベーションが低いのです。

更新予定のない来週ですが本編とは関係ない、いつ出すかわからない小鳥と

キツネさんご対面な話を書き殴ってあります。もし希望があればこちらを

お休みの来週の更新にしようかと。ただし文はオマケみたいな小鳥視点では

ありませんし特に修正を加えない、本編の次話投稿の際には関係ないので削除

します。いづれ日常編で加えたいと思いますがいつになるかは未定なので、

「読みたい」とのお声がある限りの一週間のみの晒し、ということ

です。来週のこの時間にそのお声がなかったら何もせず次回の投稿と執筆に戻ります。

無駄に長くなりましたが以上をこの物語を読んでくださっている読者の方々への

今現在の私の精一杯のコトバとさせていただきます。乱文失礼しました。

では次回に。

R

異世界編 その12 『旅の悩み』（前書き）

異世界編その11の後書きでの宣言通り小鳥とキツネさんの回想話は下げさせてもらいました。

今週から週1のスペースで更新したいと思います。

## 異世界編 その12 『旅の悩み』

ヴィフィールの里、2日目。

現実世界と同じ1→12表示の時計が使われている為時間に困ることとは特に無い。

けれど起きる為の「目覚まし時計」に該当するのが見当たらず、意外にこれに困った。

まあ異世界に来てから朝早く起きてしまうことがほとんどだったから寝坊とかはないんだけど、

早く起きすぎてしまうのも困ったもんだね。

寝室で眠るキツネさんを起こさないように声は出さずに。

時計の針が6時を指す頃、私は身支度も終えテーブルに紙を広げていた。

1度1階に降りて朝食の時間を聞きに行ったら7時からだそうで。

早起きだねえと宿のエルフの女将さん笑われ、まあコレでも飲んでなどハーブティーを

淹れて貰った。

私はその場で火傷しないように一口飲み、上品な香りとメント系が入っているのか喉が

スースーして朝の目覚めにぴったりだねという感想を伝えてからハーブティーを

溢さないように部屋に戻った。

なのでテーブルの上には紙がいっぱいハーブティー1杯。

香りの強いソレは部屋中に匂いを撒き散らして。

不快ではないしむしろ爽快な気分にしてくれるから良いんだけど。

紙に綴られた『有効活用』やら『物語』は何度も読み返してしまっ

て。

ヒマ過ぎて別の用紙にまとめ直そうかと思ったけど旅の最中に紙が足りなくなるのは困るし。

「……」

そこで目にしたのはベルトのポケットに入った『赤い本』。

この異世界の文字がわかってしまう私だけど表紙に書かれた文字は解読不可能で。

そんな本は触ると気味悪い感覚と共に体が痺れたりする…原因はわからないけど

「魔力拒絶症」は関係していると思う、多分。

異世界で発覚した私の体質は一定量以上の魔力を受け付ける身体に異常を来たすという

「魔力拒絶症」。

何もしない状態から体内への魔力供給というのは微々たるもので、魔術師が魔力を

補充する時は空の回路ラインに吸い寄せられるように自然と供給量が増えるもの、らしい。

通常の魔術師は自分の最大魔力量に達するとそれ以上魔力を受け付けなくて。

一方で一方の「魔力拒絶症」の場合、そもそもそんな便利な回路ラインという器官が存在しない。

貯蓄タンクがいっぱいになろうが肉体に異変が起きようが常に魔力を受給する。

つまり例え『赤い本』を手にしていない私も今現在絶賛魔力受給中、というわけ。

そういったことから考えられるのは『赤い本』に触れる時だけ魔力の受給量が多くなり、

許容範囲をオーバーしやすい状況になる。　　つまり痺れた感覚や  
内で蠢いた

アレは魔力の受給量が一気に増えたことが原因だろうか？

まあそもそも異世界に来るまで魔法やら魔術、魔力なんて空想であ  
ったから『今まで使った

ことのない器官』を急激で多量の『魔力』をその『器官』にブチ込  
まれた…え、つまり…？

「倒れたり痺れたりはいきなりの魔力に『ビツクリ』しちゃっただ  
けで、貯蓄が

満タンになっただけでない…？」

保有魔力量の平均なんて知らないから現在の私の魔力量も多いか少  
ないかも、自分の  
貯蓄の満タンがどれほどかわからない。

異世界初日でのヤンリさんの台詞を思い出す。

確か：『純粹魔力を貯蓄として持つ人間は色付き魔力持ちより遙か  
に多い魔力量を

持てる』だっけ？

キツネさん…思ってたより厄介なモノかもしれません。

いや、哀れみは勿論ありませんよ？

一人ぼっちの部屋でアレコレと考えて、時計を見る。

残念ながら朝食までまだ時間がある…どうしようか。

やることやるべきことやらないといけないこと。

適当に思いついた中であつたそのキーワードに「ああそつえば」  
と呟いた。

現実世界で習慣としていた『赤い本』への『日記』という書き込み。痺れたり気持ち悪くなるから、あとキツネさんに迷惑をかけてしま  
うから。

そんなに遠ざけていた習慣。

けれど先程『器官』が『ビックリ』していた『だけ』である可能性も出てきたわけで。

ということは我慢さえ出来れば『日記』を書くことも可能である、ということだ。

それほどの価値があるかはわからないけれど、書かないと『主人公』を返上できない。

だから書くしかない。

ベルトと特注のポケットを繋いでいるボタンを外し、皮の上から本を持つ。

『赤い本』に触れないようにテーブルの上へ。

そして別のポケットからいつものボールペンもテーブルの上へ。ボタン。

持ち上げられた袋から赤い本がテーブルに着地。

あまり大きい音を立てるとキツネさんが起きてしまうので最小限の高さから。

あ、でも朝食の時間には近づいているいるから別に起きても問題はないんだよね。

さてと。

やっっちゃってみますか。

「で、どうだったのですかとは一応聞いておきましょうか」

「書けなくは無いです、気持ち悪いです」

「…せめて対策くらい思い付いてから実行してください、小鳥さん」

収穫は「習慣」の再開と朝食を食べれないほどの「気持ち悪さ」でした。

そしてキツネさんの身支度を終える頃には何とか回復し、グーとなりそうなお腹を

抑え付けて本日の行動へ。

それは「エルフの巫女さん」とお話しすることなんだけど、まずは彼女のお祖父さん、つまり

この里の一番偉い長老さんに会いに行くことに。

これについてはキツネさんの決定です。

というのも昨日のあのエンドレストークを強制終了させた後に私とキツネさんの任務について

説明して「取材」の許可を取ったのだそう。

何重要なことを副官のキツネさんがやってんだとかは言わない。っ  
ていうか言えないし。

許可を取らないで偶然巫女さんにインタビューしちゃったし。

そもそもエンドレストークから逃亡してますから、私。

で。

そんなアポ的なことを事前に済ましていたからかトントン拍子に進んでしまつて。

「離れ」までの案内中でわかったことだけど「向こう」も私とキツネさんの訪問を

待ち望んでいたようで。

ほとんどを聞き流していたエンドレストークもそこそこで終わり、  
昼前と呼ぶにはやや早い  
時間帯に「取材」を開始することになった。

「待っていたわ管理司書長さん」

「待たせてしまいましたか巫女さん」

「離れ」に入るなり顔見知りな挨拶を交わす私と巫女さんにこの「  
離れ」まで案内して

くれた給仕だと思ふ女性は首をかしげていたが巫女さんに「席を外  
して」と言われると

忠実にどっかに行った。

これで私とキツネさんと巫女さんだけになった。

巫女さんの視線がキツネさんへと。

どうやら「取材」には関係者以外立ち入り禁止なようで、給仕さん  
の次に退かされそうな

キツネさんを紹介する。

「ああこの男性は私の副官のキツネさん」

「よろしく願います」

視線でキツネさんを審査をする巫女さん。

「わかったわ」

合格みたいだね。

昨夜話してくれた「物語」を掘り下げていく。

巫女さん視点でもなく勇者視点でもなく、ただそこにあつた現実が  
頭の中で再生されるまで。

基本的に私は記憶する場合文字を文字としてというよりは「一つの」  
写真」として記憶する。

その方が短期間でより多量な記憶が可能だからである。

今回の場合は巫女さんの「話」を頭の中で「文字」として展開してそれを紙に「写す」ことで

いくつかの「写真」に区切って覚えている。

まあこれも後付みたいな記憶方法だから他人に説明しても「こんな感じ」としか言えない。

私と同等かそれ以上の「瞬間記憶力」がある人はその人だけの「こんな感じ」だろうし。

「魔物が襲ってきた時のことについて、出来る限りの範囲で構わないからお願いできる？」

「良いわよ。 … デスマウンテンの手前辺りだったわ、森の木々も大地と風の魔力を帯びている

場所で大体昼過ぎだと思う。 そんな魔力を宿したトコロに住むことが出来るのは魔力を宿し

それを行使できる「魔獣」に限る。 つまり、より強い魔物が住み着いているトコロまで私を

加えた勇者一行はきていたの」「ふむふむ」

「いきなりざわめいた森に反応したのはクローリスト様と飛行獣を操っていたケルヴィン様。

とはいえ引き返すわけにもいかないし、そういつたことで一々魔力を消費したくも無い。

それにその場は木々が繁っていて飛行獣が降りれるトコロでもなかった。

だからフランフォルグ様はケルヴィン様にこう言ったの。 『突っ切れ』と」

… 大体の情景が「再生」できた。

いろいろと空白があるけどこの程度なら今後埋められるだろう。

「速度を上げた飛行獣の前に黒い影がいくつも現れたわ。

運悪く飛行型の魔獣の縄張りが進行方向にあって、侵入者である私たちを襲ってきた。

降りれる土地でないし旅に重要な脚でもある飛行獣に傷付けられるわけにもいかない。

アイザワは勇者の剣を、カトリーヌ様は己の身長ほどの大剣を、ケルヴィン様は飛行獣の

手綱を持ちながらも双剣の一つをいつでも持てるように。 フランフォルグ様は魔術師用

の杖を…それぞれが戦闘に備えているのに私はただ震えていたわ」

巫女さんの話を聞きながら、昨夜の「物語」の編集を行う。

大体の流れはそもそもわかってるし、斜め後ろにいるキツネさんが大真面目に巫女さんの

話に聞き入っているから聞き逃した部分はキツネさんに聞けば良いだろう。

「飛行型魔獣」「強行突破」「巫女」

白紙に書かれたのはそれだけ。

勿論巫女さんが旅に加わるまでの話は別紙に書いてあるんだけど。まあそれはどうでもいいか。

「…何とかカトリーヌ様の魔術で着陸できたの。 けれどそれ以上の進行は断念せざるを

得なくて、フランフォルグ様の水の魔術でフランフォルグ様とケルヴィン様のお二人は

首都アズライトへ。残った私とアイザワとカトリーヌ様の三人は

自力でのヴィフィールの

里までの帰還が強制された」

ピク、とペンを持つ手が止まった。

「……」

書かれたキーワードの下に直線を一本紙の端から端まで。

『物語』を書く準備を終える。

… 今回の旅において制限された荷物の中にちゃっかり「紅茶」グッズは収納されていて。

話し終えた巫女さんにキツネさんが「紅茶」を淹れる。

とはいっても水筒に入っている「紅茶」を注いでいるだけなんだけど。

目を閉じ「紅茶」の香りを楽しむ巫女さん。

そして一口。

「美味しいわね、とっても『満たして』くれるわ」

オマケ（巫女さんサイド）

その言葉が使えない。それはとてもココロが「悲しい」とナいていた。

けれど私にはその言葉を使う勇氣も権利も無い。

理由なんて口にしたくないからただただ、私は唯一使える言葉を使うしかない。

別れを告げよう、とする。

けれど「悲しい」「ココロがそんなのは許さないとやってきた。どうしよう。どうしよう。」

お母様のリボンがヒラヒラと風に揺らされている。

揺れる先を見れば地平線に隠れた湖上の都のある方角。

つまりは里の門もその直線上にある。

きっとあと少し、いやもうすぐかもしれない。

だってアイザワ達がココにいる理由はないし、あるのは立ち去る理由のみ。

別れを告げよう、と思う。

思うだけに止めておこうか。

これ以上は私も『私』もナいてしまう。

滴は零れることはない。

だって、それは逃げたことになってしまっから。

別れを告げたい、と思う。

けれど私はこれ以上『私』に耐えられない。

目が熱く感じるのも身体が震えてしまうのも『私』の所為なのだろう。

だったら唯一使える言葉でオサラバしてしまえ。

そう囁く私がいる、事実。

それこそ逃げることになってしまっという『私』がいる。

私は別れを告げる、決心をする。

逃げとなつてもいい。

けれどこれ以上『私』をナかせたくない。

彼女は大切に閉じ込めてしまう宝石箱に押し込んでしまおう。

宝石箱の中は永遠に綺麗なままなのだ。

例えばその箱を持つ手が傷つこうが。

私は『私』に別れを告げる、と宣誓した。

ナきそうな彼女は受け入れるだけだった。

お休みを言う前にもう少しだけ目を開けていて、とお願いして。

風に身を任せれば温かな風は「大丈夫？」と心配してくれながらも私を空へ。

私は別れを告げる。

「さようなら」

臆病な私は宝石箱を後ろ手に隠しながら、そっとキミに囁いた。

異世界編 その12 『旅の悩み』（後書き）

やっと執筆時間を確保できる環境になりました。

先週は丸々一週間ノパソコンにも触れられませんでした（泣

そして気が付いたらPV1万とつくに超えてました…ありがとございます。

これからもよろしく願います。

R

| i z

集中している時間というのは実際の時間とズレがあるようで。

「取材」を終えて気を抜いた途端に朝食抜きのお腹が「グー」と鳴ってしまい、

クスクスと笑う巫女さんに誘われてお昼ご飯を一緒にすることに。時刻は既に「1」を過ぎていた。

昼食中も勇者アイザワとの旅のアレコレも勿論あるがどうやら巫女さんはその役目に

反して研究者でもあるらしく、エルフの精霊魔術や魔術技術といったエルフ固有の

「術」を専門用語を混ぜ、解説し楽しく過ごした。

そしてその話の1つ。オルブライトの魔術騎士の中でも第一騎士団といったトップ

クラスの人たちには個人用武器の所有が許され、個々に合わせてハンドメイドの魔術

装飾が施された武器はこのエルフの里、ヴィフィールの里で全て造られる。

その話をした途端キツネさんが喰い付き、それを巫女さんが釣り上げる。

ま、何とかつまり…昼食後の予定が決まりましたって感じた。

「…このようにして宝珠に…」

「…ですがそれだと…」

「…それは確かに効率が…」

場所を「離れ」の2階に移して何やら色々な物があちこちに無造作に置かれている

部屋：「研究室」にお邪魔した。

建物の2階は区切りなどなく、2階は研究室の1室だった。

部屋に入るなりキツネさんと巫女さんは「お話し」に夢中になって勝手にその辺の

椅子に座った私なんて気付いてもいないだろう。

キツネさんは「有効活用」という無駄に多い知識があるためああいう風に専門用語の

入った会話が出来ているけど、私は出来ん。

だってこの世界の常識を覚えるのに手一杯だしね。

「ふう……」

話に参加できない私は取り合えず椅子に座って一息つく。

そして白熱した議論を展開している2人を見て、視線を逸らした。

いやだってとてもじゃないが割り込めないどころか聞いているのも無理っつーか。

となるとすることのない私は暇で。

暇つぶしになるかな、とポケットからこれまでの成果を取り出して読み返すことに。

旅の前にも読んだし今朝も一通り読んでいる。

今回はそれに「取材」での「成果」も加えて、読む。

…。

で、どうしよう。

読み終えたのに終わっていないとは、これどういうことだ。  
陽射しの様子が変わったことから時間はそれなりに進んでいるらしい。

つていうか進んでいるのに続いていることに驚きだよね、キツネさんと巫女さんの議論会。

もう「会」付けちゃうよ、ほんと。

座り続けていたため身体が固まっていて、首や腕、腰と大げさに動かしてバキバキ  
言わせながら解した。

固まっていた身体が解れてその爽快感に身を任せたかったけれど、

「小鳥さん」

いつの間にかキツネさんと巫女さんの視線が向けられていることに気が付いて、慌てて  
姿勢を正す。あれ？私って上司じゃなかったっけ？そんな疑問を持つことも出来ずに。

「な、何ですかキツネさん」

「ちょっとその魔術道具マジックアイテムを起動起動させてくれませんか？」

「別にいいですけど…」アクセセル「起動」

両手足首4つで1組のリストバンド型魔術道具は軽い熱を持つ。

視線が私にはなく魔術道具だとわかって注意が向けやすいように両腕を前に突き出す。

「……………」

「……」

そのままじーっと見つめてくる視線と両腕を突き出す私。どちらがより耐えられるか勝負と勝手に決めてプルプルと絶えながら次を待つ。

何秒たったか何分たったかカウントして無いのでまるっきりわからないけどもう無理！と

思った時、巫女さんが口を開く。

「改良したい」

巫女さんなのにマッドサイエントな雰囲気丸出しで私の魔術道具を取り上げるキツネさんを連れて移動、といっても研究室内を移動しただけなので座っている私からやや離れた程度。

けれど何をしているかは私からは2人の身体が壁となって隠れてしまっている為わからない。

結局、私はせつかく解した身体をまた固まらせることになった。

あ、魔術道具は使用者の身体から離れると強制的に『切断』シャットダウンされる。

「これで完ぺきだと思いますわ！」

特に見た目変化なしのリストバンド型魔術道具を頭上に掲げる巫女さん。

ふふふと怪しい笑みが零れている彼女に招かれて近づくと、「さあ使ってください！」と言わん

ばかりにキラキラした目で押し付けられた。

逃れることが出来ないのはわかりきっているため大人しくリストバンドを装着する。  
そして『起動』<sup>アクセル</sup>。

「お？」

熱くなるのは変わらないけれど、リストバンドだけだったそれが身体全体がポカポカしてきて。

とはいえっても体内だけがアツい感じで、それだけが感覚的に違った。「ふふふ…」

怪しい笑みが口の端から漏れている巫女さん。

せつかくのかわいらしい容姿がもったいないです。

「どうやらその魔術道具は<sup>マジックアイテム</sup>大分初期の身体サポート用みたいね。

素材自体は一級品だけど刻むべき回路が<sup>ライン</sup>粗くて美しくないからこの私が！

エルフ特有の優雅で繊細な魔術装飾を施しましたからこれでもう旧型と言わせませんわ！！」

どんどん加速的にアツくなっていく巫女さんに内心引きながら聞く体制を維持する。

だって聞かなかつたら倍速になるからそこは守らないと。

「魔力の流動率を上げましたから発動時間の短縮に効果は3段階と切り替えが可能！

管理司書長さんはまだ魔力の効率について認識していないようなので切り替えは難しいで

しょうが…使っていくうちに感覚は掴めていくでしょう！ええそうでしょうとも！！」

何だかバカにされているというかそうじゃないだろうけどイラツとつかチクツという感じ。

「更に魔力保有量が半端ないという色なしということで新機能追加！！」

『装填』<sup>リライト</sup>と『噴出』<sup>バースト</sup>は通常の色持ちでしたら滅多に使えないモノですが

管理司書長さんならそうそう倒れることはないでしょう!!

さてこちらの『装填』<sup>リライト</sup>と…」

新機能について語りだした巫女さん。

その横でウンウンと頷きながら巫女さんの語りを聞くキツネさん。まあ私も聞いているけど途中途中でいらぬ台詞(自慢的な言葉)があるのでまとめるとこうなる。

新機能は簡単に言えば純粹魔力をぶっ放して「跳躍」なんかが出来  
るらしい。

『装填』<sup>リライト</sup>は純粹魔力を体内から引き出してリストバンド型魔術道具  
に溜め込む。  
『噴出』<sup>バースト</sup>は溜め込んだ純粹魔力を一気に放出。

どんな場面で役に立つかはよくわかりませんがこのような機能らしい。

一応暴走気味な巫女さんにその辺の質問を投げかけてみると、

「魔物は確かに闇でありそれに対しては光が一番。それがなければ  
魔物本来の逆属性、と

というのが一般ですが純粹魔力というのはどの属性にも属さない魔  
力ですわね。

単なる魔力だつてぶつけられればそれ相応のダメージを受ける筈。  
つまり管理司書長さんはどの魔物に対して均等にダメージが与え  
られるわけですわ!!

それにつ! 身体能力向上効果がどれほどかわかっていないのに  
勘だけで無茶というか

無謀というか無鉄砲というか!!それを躊躇もなしに実践してし  
まうのですからこれくらい

保険は付けといて損は無いでしよう！！！」

「……！」

「……！」

あ、やべって言葉が出そうになったけど堪える。

巫女さんの無鉄砲な実践ってやつは昨夜のことだよな？

「ま、いけるかー」で走り幅跳びモドキをしたあの時ですよな？

そんなこんなで騒がしかった「離れ」から宿に戻ったのは日が沈んだ後だった。

出来れば日が沈む前に宿に戻りたかったけれどまず第1の刺客が巫女さん。

言葉巧みにキツネさんの興味を誘ってそのまま夕食まで連れ込まれそうになったけれど

赤い本を掲げて正気に戻し、阻止。

そして本殿に行けば待ち構える第2の刺客、エルフの長老さん。

巧みじゃないけど相変わらぬのドレスで脚を宿へ向けられない私たちをそのまま

食卓へ誘ってきたけれど強引に割り込んで任務を理由にお暇させていただいた。

「おーお帰りなさいな客人」

豪気な性格っぽい女将さんの声が何とも身に沁みた。

宿で夕食をとって部屋に入ると思わず「ほっ」と息を吐いた。

時間を見れば長針が8時なので「取材」の復習も今後の日程を今晚

中に決められるな。

そう思つてキツネさんを見てみるとお湯を貰つてきたのだらう、左手を高く上げ低い位置に

ある右手が持つポット内の茶葉を躍らせていた。

近くに保温の水筒が無いことから食後の「紅茶」らしい。

蒸らして注がれるには何分か掛かるのでそれまでにテーブルを占領しようとする木製の

イスに座る。ベルトから『赤い本』の入ったポケットと『物語』が綴られた紙が

入ったポケット2つをテーブルに。

本日から「習慣」を再開するつもりだ。

書くのは勿論巫女さんの取材だけど今後の予定とかも書いておこうとか思つたので1つの

ポケットはテーブルの端に。

紙が詰められたポケットから中身を取り出す。

『成果』の紙も混じっている為日本語だったりこちらの言葉だったり。

書いている文字もそうだけど内容も見せられないソレは今後取り扱いに気を遣わないと。

勇者と同じ世界からやってきましたーって言えるわけもないし信じてもらえないだらうしね。

つていうか極秘任務でも無いけどあまり他人に見せびらかす様なモノでもないから。

はぁーめんどー。

と思いながらも『取材』の紙に目を通す。

コチラの異世界の文字で書かれた『物語』。

出来事からして巫女さんは良くも悪くも経験したようだ。

歴史としてみるとただ単に汚点になりかねないけど…勇者アイザワと騎士カトリーヌには

この辺を聞いておかないと。

結局は旅をした彼ら中心に書くことになるんだから。

紙の余白にメモとして書いておく。

「小鳥さん」

顔を上げるとティーカップ2つを手にしたキツネさんが。

「どうもです」

テーブルの上の紙を適当に纏め、空いたスペースにティーカップが置かれる。

そして1度テーブルを離れたキツネさんはクッキーの入った袋を手にして私の対面に座った。

湯気がハッキリと見える「紅茶」は火傷をしそうなのでお互い手付かずのまま。

「紅茶」を口にしないまではクッキーがお預けなのかそちらにも手を付けていないようで。

じゃあ何しているんだらうと対面のキツネさんを見る。目が合った。

「小鳥さん」

美声とかそういう判断は苦手なのでよくわからないけど、とてもよく聞こえた。

2度目のソレは特に耳だけじゃなくて身体にも響いたのでコチラも瞳を合わせる。

「…」

「…」

どちらも逸らすことなく瞳が向き合つ。

「あまり、無茶をなさらないで下さい…」

「うん、わかった」

細められた目が何を示しているのかは考えないことにした。

そしてそんな私の態度を見たキツネさんはティーカップを鼻に近づけて「紅茶」の香りを

楽しむように閉じてしまった。

私も湯気が大分落ちて着いた「紅茶」で喉を潤わせようと現実世界よりやや色の

濃いソレを一口。

カチャン。

1つは静かに、1つは故意に鳴らした音を合図にして空気を変える。

「さてと。今夜中に明日からの旅の予定を決めちゃいましょうか」

次はオルブライト王国首都アズライト。その次は…？

オマケ（現在・勇者アイザワサイド）

「ねえアイザワ」

王城らしい華やかな装飾の廊下。

固めの皮で作られた靴でも床に敷かれたカーペットのクッション性が感じられてそれにか

られた金貨の枚数を想像しようとしたところを聞き慣れている声に呼び止められた。

振り返ってみると今日は訓練でもあるのだろうか簡易的な防具を身につけたカトリーヌがいた。

「あれ？ 今日には騎士団で訓練参加なのか？」

疑問に思ったことを素直に訊ねる。

すると「自主練習よ」とたった一言で回答してくれた彼女は己の用件を切り出す。

「アンタの見送りの食事会のことなんだけどさ」

「ああアジュラとケラスからもお偉いさんが参加するってフランから聞いてるぞ？」

旅の途中で寄った2カ国とこのオルブライト王国が一箇所に集うのは領土を巡った『戦争』

以降とかで『他国』とくにケラスに鼻で笑われてみる、いくら魔王を倒した勇者とはいえ

この俺がKILLERぞ』とかぶっちゃけ脅されたばかりだ。これ、昨日の話。

「まあケラスの方はドラゴンの被害とかあったけれど『世界の危機を未然に防いだ』からとか

色んな理由があつたりするんだけどね。

…おそらく集ったのを良い機会だとかで他にもやらかしそうよ  
「フランか」

「ええフランフォルグ様とかミレシアン国妃様とか。悪乗りして国王陛下、かな」

「…」

二人並んで廊下を無言で歩く。  
その脳裏には鬼教官が。高笑いをバツクにした国妃様が。守るべき  
上司の顔が。

コホン。

「食事会にさ、エルフの風の巫女を招待するのかどうか聞こうと思  
って」

「あ、そうか、それか！」

咳払い1つでなかったことにしたカトリーヌ。

アイザワを態々探したのもそれを聞きに来たのだろう。  
話に出た少女を思い出す。

明るく好奇心旺盛。

初対面で名前を名乗ったら『不思議と変な名前ね』とニコツと言わ  
れて内心シヨックを受けた。

わがママが許される立場だったみたいだけど自分で出来ることは自  
分で。

そう言つて1人健気にエルフの里を突らせていった風に愛される少  
女。

「そつかあ…でも来てくれるかな？」

何度も『しょうがない』と言つたが塞ぎこむ少女は風に閉じこもつ  
てしまった。

それでもなんとかこじ開けて『呼んで』あげると涙を堪えながら『  
ごめんなさい』と一言呟いた。

「来る来ないはあの子が決めること。 アイザワが呼びたいのなら  
招待状を送る、それだけよ」

「んー送つて当日来なかったら俺、アツチに帰りにくくなっちゃう  
じゃんか…」

「安心しなさい、帰還日については確定済みだから」  
「うわ、鬼…」

ギロリと睨まれて肩を竦める。

そんな反省した様子の無いアイザワにはあとため息をこぼすカトリ  
ー又。

「その様子なら一応『声』だけでもかけた方が良いでしょうね」

「仲間だからな。来なくても仲間だったんだ」

「もう…仲間なんだからそんなに不安がらないの、少年」

「がーっ、また『少年』って！っておい！」

「カーペットの金額を正解の導き出せない頭で考えるほどあたしは  
暇じゃないのよー」

ヒラヒラと手を振りながらカトリー又は丁度分かれ道にいたことを  
良いことにそこにタタタツと

駆け込む。

アイザワはそんなところまで観察されていたことに気が付いて恥ず  
かしさのあまり頭を抱えた。

異世界編 その14 『旅の再出発』（前書き）

\* 3つの時間をそれぞれ分解して時間列的順番になってません。

\* 上から読めば流れは読める、そんな感じ。

∴ 相変わらずのごちやごちやぶりですみません。

異世界編 その14 『旅の再出発』

現実世界ではお目にかかれない『炎』の宝珠の入ったランプの明かりの下に時間が過ぎるのを待つ。

霧の出ていないこの時間を朝というのには早くて、当てはめるのなら「夜明け前」だろうか。

明かりに照らされたリストバンド型魔術道具マジックアイテムは特殊な繊維を使っているの

だろうか時折チラチラと視界の端で細かに光る。

けれどそれに一々注目するわけにもいかないんで無視。

注目しているのは手元にある2冊の本だった。

『ねえ出発の前にあの場所に立ち寄って？ お願いよ』

夕食の誘いを断りキツネさんと共に立ち去ろうとした時、背を向けたまんまでお願いされた。

その「お願い」は明らかに私に言っていた。

だってその場で理解できたのは私だけだったから。

1つは「赤い本」。

現実世界での事々や異世界については丸ごとの元凶とすべきモノ。個人的に更にいえば「魔力拒絶症」なんていう体質まで付け加えてくれたのでホント大した

元凶である。

けれどその元凶を身に付け失くさないようにするばかりか今では日記的なことを綴る「習慣」まで。

生憎昨日今日と移動ばかりなのでエルフの里を出発する前日にまとめて書いておいた。

何でもまとめて書くのかといえは異世界での自分の体質の所為。

私はこの「赤い本」に触れると受給魔力量が一気に上がる、らしい（自己判断）。

そうなると思持悪くなるわ身体が痺れたりするわで誠に良くない。別に耐えられないほどではないけどそれによって他の人やキツネさんに迷惑をかけると

考えると無闇に触れない方がいいだろう。

考え無しに行動してしまうことが多々ある私でもそれくらいは自重できる。

と、まあこの「赤い本」は初めて手にしたその時から嫌々しながら持ち歩いている…日記帳的な

モノかな。

布製のカバーでものっそ分厚いけど。

勇者アイザワ一行の旅路をエルフの巫女さんへの「取材」によって次の目的地が判明した。

聞きたい事は聞けたし、どうも一行の帰路はまたこの里に寄っているのになぞる様に進めば

おそらくまたここを通るんだろう。

なら私たちも旅の帰路で改めて聞きたいことがあつたらそのとき聞けばいいじゃない。

そうキツネさんに言った。

だってそもそも勇者が現実世界に帰還するまでがタイムリミット。

いくら脚の速いっていつか移動が速い飛行獣ラバルを使つての旅とはいえのんびりしてたらあつという間だ。

次の目的地はオルブライト王国首都アズライト。ついでこないだ出発したばかりのトコロ。でもって出発は明日。

長針は『2』を過ぎた。

キツネさんも宿全体も、里全体も寝静まった雰囲気、さらに空気もお休みタイムのようで動いてる私が異質に感じてしまうそんな中。

んーでも異質コレは嫌いじゃないな。夜更かしで無駄に冴えてしまっている頭でそう感想を述べながら身体は動く。

宿を出たときから『起動アクセル』して身体能力が上がった私はそれを効率よく活用する

ように地面を足で蹴って跳ねるように前へ前へ。身体全体を無理なく使えば体力に自信が無い私でも息切れすることなく脇腹を痛めることなく目的地に到着した。

「2度待たせちゃいましたか」

「ふふふ。待ちくたびれていないから大丈夫よ」

「そうですか」

場所だけを指定した待ち合わせ。

だから待たせた待ったの会話もおかしい気がするけど、まあいつか。

「夜明けまで待たされるかと思ったわ」

「…何か残りでもありましたか」

「『私』はね」

「そうですか」

どことなく違和感を感じたけれど、頷いておいた。

特に返しがこないことからそれで良かったんだろうと内心また頷く。

「実はお話しじゃなくてこれを渡そうかって思いついてね」

「これは…？」

招かれた手に従って待たせてしまった巫女さんの隣に座る。

「『コレクターズブック  
収集の本』って私は呼んでいるわ。」

いつ誰が何のために作ったのかその一切がわからない、気が付いたらソコにあった…そんな本」

…何か曰くがあり過ぎる…嫌っぽい予感が脳裏に。

日の出と日の入り時に絶対に出てくる霧はそれほど長居はしない。

気が対いたらささーとやってきて名残惜しむことなくささーと消えていく。

けれど霧はまだ出てこない。

2つ目は『コレクターズブック  
収集の本』というこれまた怪しい本。

くすんだこげ茶色を見るからに古めかしいその本は「赤い本」のよ  
うに触れたら体に異変が

起きることはなかった。

ただザラリとした感触が指に送られ、ずっしりとした重しが不安だった。

昨日からベルトにぶら下がることになった2つの本。

身体の左右にあるそれらは片方であるよりバランスが取れていて、重さに疲れて悲鳴を

上げることはあっても一箇所に集中した痛みがなくなってそれほどそのもの自体には

不満は感じられなかった。

けどなあ…。

どちらも怪しいに変わりはないのだから巫女さんの思いつきに素直に喜べない。

例え喜んだとしても一体どの辺を喜んでいるのだろうか。

…。

まあ巫女さんの言っていた本の機能ぐらいいしか思いつかない。

確かその機能ってというのは…

「まずこの『コレクターズブック収集の本』には表紙・裏表紙・中表紙・本紙それぞれ完全に

回路が刻まれている、というより最初からそのようであったかのように1つの存在で

1つのモノが成存しているの。だから装飾師である専門家の私でもこの本には手を付けられ

なかった。とはいえこの本が何なのか、それくらいは回路を読むことで解読しているし何人

かが実際にこの本を使ったことがあるから成り立ちに問題があるうとも私たちが使えない

「ことはないの」

「ふうん…」

巫女さんから渡された問題の本。

差し出されたから受け取ってしまったが…どうやら『赤い本』のよう  
に異変は起きないらしい。

良かった。

こげ茶色で皮製の表紙を捲る。

「表紙と裏表紙は同じ回路で、中表紙はちょっと複雑な回路、本紙  
はの空洞の回路だけ。」

タイトルとかなしいただ回路がそれぞれあるだけだから何て呼べ  
ばいいか困ったんだから」

パラパラ紙を流していたのを巫女さんの言葉を聞いて表紙を見る。

回路は素人目にはわからないらしいので特にこれといって…って確  
かに普通はある『タイトル』

がない。

あの『赤い本』でさえ読めないけどタイトル（らしきもの）があっ  
たのに。

括弧をつけたのは気分。ええそれだけですよ（脳内）キツネさん。

「じゃあこの本で何が出来るのか…ふふふ、説明しましょう」

「お願いします」

怪しい笑みとか妙にキラキラした瞳とかは無視の方向で。

「回路があるモノというのは基本的に『アクション・キーワード始源起動言語』のような

世界基盤への言霊によって刻まれた魔術が発動する、っていうの  
はわかるわね？

ただ特定の魔術を指定した回路はその魔術しか発動できない…そ  
の『コレクターズブック収集の本』もヒトの手によって刻まれてはいないけど回路は

回路。例外では無いわ」

やっと真剣な眼差しをし始めた巫女さん。

いや、遅くね？ 始めからそれでいようよ。

という台詞はその辺の空想の川に流しちやつて。

「管理司書長さんの持つている魔術道具マジックアイテムは今日私が改良したでしょ？

その『装填リライト』と『噴出バースト』と同じような機能、とでも言っておきましよう。

ただ違つのは『注ノドがれた魔術』を扱うだけのこと」

ふと窓の外を見てみると…霧が出てきたようだ。

どうやらそれなりに時間がたって「日の出」になつたらしい。

うつすらと赤を広げる青空は大地との間に霧という白を挟んでいる。

首都アズライトという湖上の島の外、まあ都という島へ入る為の橋がかかる地点には

入国審査ならぬ入都審査が待ち構えている。

日が沈んだ夜はどの門も閉じてしまつので伝令の兵士とか「国家商人」の証を持った人間

以外は通せんぼされてしまう。

なのでそういった人たちや首都アズライトに入れない個人所有の飛行獣や走行獣は日の出

まで、もしくは用が済むまで入都審査門がある門前街の宿家で過ごすことになる。

なんでこんな説明を入れたのかというと簡単。

私たちもそこにある一軒の宿屋に泊まっているからだ。

巫女さんからの贈り物で左右のバランスが整つた私はリストバンドを起動させたまま宿へ。

雨に打たれても多少平気なように撥水加工がある皮でポケットはカバーされている。  
なのでそこをよーく見ない限り紙の束なのか本なのかは解らないようになっている。

…まあ人をよくみるキツネさんはすぐに気付いちやうだろうけど。宿の女将さんや従業員たちはまだ就寝時間のようで寝ずの番をしているエルフの人がウトウトしている。

あと1時間もしたら彼もぐっすり眠れるんだろう。

宿を出た際も同じ状態だったので部屋の鍵は持ったまま。

私は静かに部屋へ。

ボタン。

細心の注意を払ったドアの閉める音は小さいけれどキッチンと出てしまった。

今日中に首都アズライトに到着するためには早朝ここを出発しないといけない。

そのため早起きをするといっていたキツネさんだから小さな音にでも反応して起きてしまっだろう。

…起きていませんように。

そう心の中で祈りながらトイレやシャワーのある部屋を通り過ぎ、私の寝床であるソファアがある部屋へ。

宿代も食事代も自分の財布ではなく経費だ。

なのでそれなりのところに泊まっている。

スウィートルームといった最上級でないのは私とキツネさんが庶民だからだ。

あ、宿の女将さん情報だけど勇者アイザワ一行は上層地にあるログハウスを丸々借りていたらしい。

宿に泊まっていたら訪問客が絶えなくて面倒だから、とかいう理由らしいけど…

うん、これは要らない情報だったね。

知ることが出来る人だけが知っていればいいと思う。

私が書くことになっているのには書かなくていい情報だよ、そうだよね？

「そうそう、そうなんだよ…って」

慌てて口を閉じて動きを止める。

せっかく起こさ（抜け出したのをバレ）ないようにしていたのに何言っちゃっているんだ自分！

そのままの体勢でキツネさんがいるはずの寝室の気配を窺う。よし、大丈夫。

「…………（ふうっ、てアレ？）」  
数秒間止めていた息を吐き出して気が付いたのは部屋に漂う「イイ」匂い。

っていうかこれは「紅茶」の匂いじゃないか。

何故、と思うより部屋を見渡して確認する。

現実世界でもそうだけど寝る時は真っ暗にするがその寸前までは小さい明かりを付けっ放しな私。

部屋に入ってきたときもソファアのサイドにある小さい机の上にある淡いランプのオカゲで問題

なく進むことが出来た。

なので見渡して確認することも出来た。

ああ、それが。そういうことか。

なのでちゃんんと全てわかったつもり、だ。

色々思い返していたのを止めて、テーブルに置いている2冊の本をベルトに繋げる。

しっかりと止めてあるかチェックしてから防寒具を被り、手袋とゴーグル、小さいリュックを抱えてドアの前で振り返る。

門が閉まるギリギリで首都アズライトを出た私とキツネさん、そしてラバルは急遽泊まる宿を探さないといけなくなった。

飛行獣が入れる獣舎がある宿屋。料金は特に気にしません。

その条件で探すと結構あっさり空きが見つかった。

色々愚痴を零すおっちゃんは無視してしっかり者の娘さんに部屋に案内してもらった。

…まあ勇者帰還で盛り上がっているから部屋が満室になるのはそうだろうしだからどんな部屋

でも良いとは言ったけどシングルか。ベット1つか。また私ソファか。

キツネさんは私にベットどうぞって言うてくれたけど飛行獣を操っているのはキツネさんなのだ。

充分な睡眠と快適な睡眠をとる権利はキツネさんにある筈。

だからベットをキツネさんに譲って私はソファにぐてーと慣れたように横になったのだ。

そんなベットを占領していたキツネさんは「夜明け前」に飛行獣ラバルの準備と言って  
重い荷物とともに先に宿を出た。きつと獣舎か宿裏にある広場に  
いるだろう。

「……」

忘れ物が無いか視線で確認。

元々一泊で少々時間に厳しい旅と設定付けているため持っている荷物をそうそう広げることはしない。

広げてても手が届く範囲だけでその場を離れるなら回収した。

なので入ったときとほぼ同じ部屋の様子。ちよつと違つとしたら

人の出入りがあつた雰囲気ぐらい？

まあそんなのはいいか、忘れ物なければいいんだし。

時間的には「日の出」のこの時間はすでにお仕事の時間らしく、食堂フロアに行くとしつかり者

の娘さんに会えたため簡単なお願いとその我侭なお願いにそれ同等のチップを握らせる。

「はいはい毎度！ またのご利用をお待ちしています」

すでに霧は去つて角度の低い朝日は実に眩しい。

私は荷物に小さい包みを二つ追加してその宿屋を出た。

うん、本日も晴天。

「確かにリストバンド型魔術道具マジックアイテムと同じような機能ならいらな  
いと思つけど、

この『コレクターズブック収集の本』は言わばあなたの防御。

『バースト噴出』は攻撃のようだけど本当は「逃げる」ための機能。

だつて管理司書長さん、「闘え」ないでしょ？」  
「まあね」

現実世界というのは闘う機会もないですし。この異世界でもそれとは無縁だつたようですし。

「補佐さんはどうやら軍人出身らしいから、「闘えない」人はその人の邪魔にならないように

努力するしかないでしょう？」

…巫女さんの言いたいこと、だいたいわかってきた。

「私は巫女さんじゃないよ？」トトリだよ

「ふふふ…嘘つき」

朝早くから申し訳ないけど、一応長老さんに出発する旨を伝えておいた。

私とキツネさんは勇者でもないし目立ちたくないから見送りとかは一切なし。

ひっそりと静かにエルフの里、ヴィフィールの里を出発した。

宿裏にある空き地という広場。

獣舎を覗く前にそつちに足を向けると一発で当たり。まあ2択だつただけだね。

「キツネさん」

声をかけると一旦作業を止めて、振り向いた。

「おはようございます、小鳥さん」

「おはようございます。ラバルもおはようさん」

「クアーッ」

拘束具をつけたままなので視線と鳴き声で挨拶を返してくるラバル。

荷物もすでにセットしてあるから準備を終えて点検でもしていたんだろう。

「じゃああとはコレですね」

手にしてた小さい包みを一つキツネさんに。

「従業員用の朝ごはんを2つほど貰いました。 サンドウィッチだからココで食べちゃいましょう」

「なるほどコレは…おいしいですね」

旅の再出発までもうすぐ。

その情報をゲットした時、動き回っていたからあまり自覚はなかったけれど日が

沈みかけていた。

『国家図書館管理司書長』っていう身分証明書的なモノもあるし入都審査のパスは簡単だとは

思うけど次の目的地はわかったのだから首都入りせずにこのまま門前街で一晩休んで明日早朝出発しよう。

そう決まった。

「じゃあさっさと裏付け取りに行きましょうかキツネさん」

「途中ラバルが預けられる宿屋もチェックしておきましょう。 荷物を持って

いるラバルを無理に

連れまわすことはないですからね。 明日出発なら尚更です」

「だね。 明日からも随分な移動になりそうだしね」

「そうですね、小鳥さん」

私たちがゲットした情報はこうだ。

『勇者一行が使った馬がオルブライト王国とアジュラ連合国の国境にあるザンヴェイレラ町から

アジユラ商人連の者によつて門前街カドマチに返還された』  
情報源は何やら怪しい壺を抱えた胡散臭い男が関わっているし色々あつただけどこは省略。  
取り合えず次の目的地は国境にあるザンヴェイレラ町。  
急がないと霧が始まつてしまふ。

「嘘つきねえ…お互い様だと思つ」

「そうねお互い様ね」

ふふふという笑いからはあ、とため息を1つ。

「でもそうしないと、私は壊れてしまつわ」

「まあ、そんなもんでしよう」

本日も晴天、つて2度目か。

けれど2度目の旅立ち、再出発にはやはりこの青空は欠かせないと思つ。

次の目的地「ザンヴェイレラ街」は地図で見る限りエルフの里よりもはるかに遠い。

途中どこかで一泊しての移動になるかもしれないと、言われた。まあ旅であるわけだしそれはしょうがないでしょう。

鋭い鋭角に位置する太陽はそれほど温かくはないけれど、眩しい。地を離れたためその眩しさを遮るものがほとんどなくなり、ゴースルをしていても目が痛い。  
俯き気味の体勢になり影を作る。

「ねえキツネさん」

きつと手綱を握るキツネさんだからまつすぐ進行方向を見ているの

だろう。

もしかしたらサングラスみたいにそういった加工がされているコーグルなのかもしれない。

「何ですか？ 小鳥さん」

ラバルが風に乗ってスピードを上げ、前方からの風が強くなる。

そんな状態で身体を動かせば危ない。

けれど言葉は聞こえ合っている。

「あの『紅茶』、美味しかったですよ」

「…ありがとうございます」

ほら、ちゃんと聞こえ合っている。

おまけ　　ミレシアン様と国王陛下とカトリーヌとか

奥中庭の庭園にてティーブレイク中の国王陛下夫妻と護衛のカトリーヌ。

「カトリーヌ」

「はい、何でしょうかミレシアン国妃様」

「勇者アイザワは確か14歳でしたね」

「本人はそう言っています」

ミレシアン、国王陛下のほうを向く。

「ねえ陛下。結婚に年の差なんて関係ないですよね？」

恋愛じゃなくていきなり結婚ですか、そんなツッコミはできないカトリーヌ。

「…うむ。」

「あの申し訳ありませんが何のお話でしょうか」  
恐る恐る訊ねるカトリーヌ。

「何って決まってるじゃないですか。孫の婚約者ですよ」

「うむ。」

「えっ」

固まる。ええそりゃあ固まりますよね。だって、

「まだフランフォルグ様とマリフェリア様は婚約中で結婚式はまだ  
ですし俗に言う」

『出来ちゃった婚』でもないじゃないですか!」

「あらあら俗に言うなんて」

「え、流されちゃいました今の!？」

パニくるカトリーヌ。

「まああなたの言うことも理解わかってますのよ? まだカタチもない  
孫の結婚相手を

決めているなんて」

「それもそうですがアイザワは元の世界に帰ってしまうのですよ?」

「簡単なことです。返還召換の儀を止めればいいですし、執り行  
うのは私なのです。」

失敗したフリをしたら済む話です」

「なっ!？」

しれっというか何当たり前のことと言わせんの、な態度で言われると  
何だか自分の方が悪いじゃないか。

残り少ない冷静なカトリーヌが心の中だけで呟く。

「カトリーヌ」

「…はい」

「そんなにアイザワに帰ってほしいのですか」

「え、いや私はそれが当然だと…」

「ではこうしましょう。カトリーヌとアイザワが結婚し、その子供とフランフォルグの子供が結婚するのは。順々にいけば年も差ほど離れていませんし」キラーン。

「は、はああ!？」

「うむ。」

その後何とかカトリーヌは己とアイザワとの結婚とかnot帰還を思い止まらせることに成功。そんなタイミングで運良く(?)同僚の騎士から呼び出しされると伝えられたため護衛を代わってもらい、その場を去る。

「しかし流石は我が賢妻よ」

「あら陛下、何のことです?」

「男か女かわからぬ孫の婚約や勇者帰還の取り消し、さらにヴィストリアの娘との婚約なんぞ

全て嘘であって使い捨ての材料だな」

「おほほほ。当たり前です」

「…にしても本命はその娘に前夜祭でドレスを着させることとはな」  
「本夜祭では勇者一行の一人として騎士の正装で参加するとか言うのですもの。」

「こつこつ時でないと着飾れませんし身内のみ出席の前夜祭とはいえ他国の方々もいらっしやいます。」

「結婚相手を見繕うチャンスではありませんか」

「うむ。ヴィストリアの娘もそろそろ決めておかないとな、親がアレだから期待できんし」

「ええ。ですから油断は禁物ですよ」

「…何でそう僕に試練を与えまくるんですか、貴方たちは」

「面白いからに決まっているだろう（でしょう）」

はあ…とカトリーヌの同僚で幼馴染な感じで異性としては一番親しいと自覚はあるがそれまででちなみに昔から現在まで想いを寄せているのは周囲に知られているのに本人は気付かなくてけれど目の前の人達みたいになく応援されないむしろ嫌がらせかと思う試練とかを与えられるこの現状を打破するべくこの前占いが得意な旅の仲間未来を占ってもらったらその年下のはずの彼に肩を叩かれて頑張ってくださいとか言われて占いの結果ではなくおすすめの前占とかか教えられてしまい愕然としたけどポジティブに考えればまだドチラも可能性はあるということとただドチラにしてもこの人達とかは変わらないって言うだけのことと結局は教えられた胃薬は常備しておいた方がいいだろうという結論に至りああウツド性に戻りたいと泣きそうになるが同僚として信頼されている自分を捨てることも出来ないベイトソンの自分に吐き気がするがそんなこんなで昔から耐えることに慣れているため結局は面白いからなんていう理由で与えられた試練をご要望どおり楽しませながら合格していくんだらう、とケルヴィン・J・ベイトソンはため息をついた。

異世界編 その14 『旅の再出発』（後書き）

いつもより2倍の文量です。

分けて投稿しようかとも思いましたがサブタイ固定で書いているんで一気に投稿することにしました。

おまけは…おまけなんでノリで書くことが多いです。最後の一文はお暇

でしたら読んでみてください。

サンヴィレラ街。

オルブライト王国とアジュラ連合国との国境付近にあるこの街は互いの国への

『関所』であり身元審査が行われる場所でもある。

更に詳しく言えばこの街はオルブライト王国側となり、国境は誰のものでも無い

「始まりの河」である。

現在はオルブライト王国とアジュラ連合国は友好関係があるのでそれほど厳しい

審査が行われてはいないが審査門付近は常に緊張感が漂う。

…とここまでがキツネさんの有効活用だ。

街に到着してみると「関所」や「緊張感」とかいった言葉から真面目に暗いトコロかと

思いきやそうでもない。

まず最初に驚いたのは北から南へ街の真ん中を関所まで一直線の大通り。

石畳のこの大通りにはオルブライト王国、アジュラ連合国それぞれの物産を扱った

露店が立ち並び、首都アズライトの城下街のには劣るがとても賑やかだった。

そして歩いてみて驚いたのは「獣人」という存在。

エルフのような見た目ほとんど人ではなく、犬っぽかったりリスっぽかったりする2足

歩行の姿が。喋る言葉は共通のようでも聞き取れたけど見た目が全く異なるヒト達が

人間に混じって…だいたい1：1の割合、つまりドコを見て目に入るわけだ。

最初はキツネさん共々呆然としてしまったけれど

「ファンタジーですから」

「ファンタジーですからね」

ということを受け流すことに成功した。

さてさて。

ファンタジー異世界情緒溢れる光景と現実には驚いていたけれど本日一番の驚きではなかつたりする。

昼過ぎにサンヴィレラ街に到着した私たちは飛行獣も入れる獣舎付きの宿屋を探していた。すると運良く訪ねた宿屋の一軒にいた『運び屋』という獣人が自分のトコの獣舎で良ければ、という申し出によってラバルの宿が決定。荷物は預かり賃を払えば預かってくれるようなのでその場で私とキツネさんの部屋を借り、獣人の案内でラバルの宿に向かい、さらにその親切な獣人の働き場である『アジュラ商連 サンヴィレラ支部』にお邪魔することになった。

そしてここだ。

身分証明証にもなるミレシアン様がくれた通行証を提示して旅の理由を話していると  
こう言われた。

「ほおアイザワたちのことを聞いているのか。ならテマも呼んでやるつか？」

「「え。」」

その言葉を理解するのに3秒ほど。

理解してから振り返っての一連の流れに愕然とすること7秒ほど。  
10秒間フリーズした私とキツネさんに兎な獣人は瞳でいつぱいの  
その目を細めた。

首に巻かれたマフラーにつけられた群青色のバッチが見え隠れする。  
「それじゃあ自己紹介しとく。俺はポテ・ユラ。『半獣』民族  
であるユラ族の1人で、

弟のテマと一緒に勇者アイザワ一行の御者を務めていた…ぐらい  
だな、取り合えず」

普通ならそんな展開に『ええええ!!』なぐらいは叫んでもおかし  
くはないと思うけど、

私もキツネさんも「…」と無言だった。

いや、無反応じゃないしちゃんとポテという「半獣」さんの言葉は  
聞いているんですよ。

そうかテマという弟さんと一緒に勇者アイザワ一行に期間的に加わ  
ってたんですね、ほら理解もしてる。

でもさ。

この物語の主人公でもなく登場人物でも無いはずの小鳥遊わたし小鳥が初  
めのの旅に

任務の為立ち寄ったこのサンヴェイレラ街でたまたま入った宿屋で親  
切にしてくれた

「半獣」さんが私の任務において接触すべき対象である…という事  
実。

何この偶然。出来過ぎじゃね?っていうか「補正」っばいナニかを  
感じられる。

本日のベストサプライズ!とバカみたいに叫んでドツキリのプラカ  
ードの出番を待って

みたかったけど、何故此方の方を無視しなければならぬのか…あ、  
これも含めて逃避

ですか、そうですか。

「小鳥さん、そろそろ復活してください。早く（現実世界に）帰れるって思えば

いいんですよ」

「何そのポジティブ。…流石は『先輩』ですなキツネさん」

「…褒め言葉として受け取っておきましょう」

「うん、褒めてるし」

「ただいまー兄さん。ポックが会いたがって…てお客さん？」

私がキツネさんに促されてやっと現実に戻ってきた時。

明るい声が後ろから店内へ通る。

振り返るとそこにはポテ・ユラと同族であろう兎な『半獣』さんが上着ナシでゆつたりとしたズボンにそのズボンの裾を中に入れたブーツ。

モコモコのくせにマフラー…その格好はバッチ以外ほとんどポテ・

ユラと同じだ。

つまり…

「弟さん？」

「え、はい僕はそこにいるポテ兄さんの弟のテマ・ユラですけど…」  
どちら様でしょうかとか邪魔しちゃったかなとかそわそわと落ち着かないテマ・ユラ。

そんなことはどうでもいい。

「おー呼ぶ手間が省けてたな、テマ」

「…兄さん」

「っあ！ そんなつもりで言ったんじゃないし！」

「流石にそれは…」

「たーまーたーまーだっつうの！ 副官さんもそんな目するな！」

私が言いたいのはこうだ。  
トントン拍子に物事を進ませるなってね。

日が完全に暮れて審査門が閉じた為大通りの賑やかな露店たちは店じまいして昼とは

全く違う様子中、私とキツネさんは「紅茶」を飲みながら本日の宿屋の一室でのんびりしていた。

思い返す。

今日は勇者アイザワ一行だったというポテに会えただけでなく同じく元一行のその弟

テマとも会え、話す機会があった。

流れそのものに釈然としないというか素直に受け止められないところがあるけど

一々それに反してたら私の任務は失敗、だろうな。

なので途中雑談を混ぜながらエルフの巫女さん同様インタビューすることになり、

大体のことは話してもらったけど明日も「取材」することになっている。

思い返し終わった。

「さてと」

テーブルを挟んで私とキツネさんは向かい合うように座り、「紅茶」でのんびりタイムは終了。

キツネさんが私の言葉を受けて「オルブライト王国」「アジユラ連合国」「ケラス自治国」の三カ国が書いてある「世界地図」をテーブルに広げる。

主要都市は勿論関所や国道、街名なんかも書き潰れない程度に書かれている。

そんなモノだから当然サイズもでかくなり、ケラス自治国の左半分がテーブルの側面に広げられている。

その重さでソッチ側に地図が落ちてしまわないかと思ったけど、ソコは安心。

地図の右端に空のティーカップが置かれている。

陶器製なのでそれなりの重さがあり、そのオカゲで落ちることはないらしい。

「今日のことを不運か幸運とするかはほっというて、これでラストまでの道のりが

解りましたね」

キツネさんがそう言ってトントンと現在私たちがいるサンヴィレラ街を指す。

「次はアジュラ連合国の首都『コルトベフラント』。そして…」

国道をなぞって大きく書かれた文字が重点箇所であることを示すトコロに。

「ケラスまでの国道の南下にある『黒き溪谷』、カルドゥ・マーラそこにあるバラド民族集落地

に寄っていますね」

「アジュラ連合国のみで受け入れられた人間ヒトの一族、か」

寄り道のようなそのルート。

当然その疑問は訊ねていた。

「何でそのバラド民族の集落地に寄ったの？」

「エルフの誘拐未遂、というよりケラスがオルブライト王国に手を

出したのがアジュラと

しても見過ごせなかったのさ。元々戦争していた間柄だしな。で、同時期アジュラ国内でも拉致事件が数件発生しててな、そっちはどうもバラド民族

が関わっているんじゃないかって情報が有力でケラスとの繋がりをハッキリさせる

ためにも『合同捜査』、っとな

合同…その言葉にピンとくるものがあつた。

「それで勇者一行にアジュラから2名ほど加わつた、というわけか」「知ってたのか。まあ結局はバラド民族も良い様に扱われて…思ひ出したくない

匂いだつたな

ポテの言葉に弟のテーマも目を細めた。それによって空気が止まった様に雰囲気重くなる。

「…」

何があつたのかは聞いておきたかつたけれど、自分からは聞いてはいけない感じなので黙るしかない。それは隣にいるキツネさんも同じ。

口を開いたのはポテだつた。

「…なあ管理司書長さん」

「何ですか？」

「お前さんなら話しても良いとは思っているんだが…内容が内容だ。

少しばかり時間をくれないかい？ 一日でいいさ。俺たちが話せること、全部話そう」

「じゃ、それでお願いします」

バラド民族集落地がある「黒き渓谷」。

そこで何があったかはわからないままだけど、そこから先のルートだけはポテから教えてもらっていた。

国道を西に進み、始まりの河を渡るとその国土の大半が山であり十字の真ん中と四つ端からなる都市で形成される「ケヲス自治国」。

一通りこの5つの都市には足を運んでいるらしい。

次は緩やかな斜面から始まり途中から急な斜面となるツンボス突山。そして最後のデスマウンテン、らしい。

魔王がソコにいるっていう情報が元々あるわけだし「らしい」って言うのはおかしいかも  
しれないけど仕方ない。

ポテとテマがツンボス突山までのメンバーだからだ。

何でもデスマウンテンに住む魔獣は縄張り意識が過剰であり侵入者に対して

容赦なかったりとただ単純にレベルが高い地域になるので非戦闘員の2人が

自らパーティーを抜けたらしい。

デスマウンテン以降は巫女さんのいるヴィフィールの里に寄って出発地点でもあるオルブライト王国、となる。

そして現在のサンヴィレラ街までキツネさんの指が戻ってきた。

「とまあこんなもんですか」

私に対してなのか単なる独り言として処理して良いのか迷うところ  
だけど返しておかないと部屋が無言になってしまつので応えておく。

「色々と聞くところが多すぎますよねー」  
肘について頬を支える。

ついでにほんの少しで届かない脚をプラプラ。

「ええ勿論オルブライトにいる勇者一行に聞けばほとんど解消する  
んでしょうけど…そう

しないのでしょうか？ 小鳥さん」

「そうですね。主人公の「勇者」が「魔王」を倒すまでの旅、ですよ？」

アジユラにしてもバラド民族にしてもケヲスにしても…イベントがあつたのは必然。

物語なら良かったんですけど歴史ですから登場人物、舞台を調べないといけない

でしょうね」

あ、今私の方が上司っぽいつて思った。

まあ本当に異世界<sup>コ</sup>では私が上司なだけ。

「明日のポテへの取材でその対象を絞る、ですか」

「正解。勇者帰還までつていう期限を設けたのは自分らだし、のんびりは

してられないしね。

現時点で言えることとしては取り合えず

…」

トントン

空いている手を動かし「ケヲス」と文字が書かれた箇所を軽く叩く。

「ケヲスまでは確実に行かないといけないですね」

私の発言に対面のキツネさんは顎に手をやり「ふむ」と喉を鳴らすように呟くと

「ではそこから先のツンボス突山とデスマウンテンは勇者一行の取材のみで

済ますということですか？」

「いやだってそこは高レベルの魔獣エリアですよ？ 私とキツネ

さんで踏み込む

わけにはいかないでしょ」

それとも死にたいの？と言えは時々うつかりなキツネさんはあ、と気が付いてくれたようで。

「ああそうでした。しかし魔王が倒されたというのなら少しは安

全なのでは？」

魔王が倒されて世界は平和になりました…なんていう文章は一回は読んだことはあると思う。

確かに原因がなくなればそうなるよ。

「どうか。　なーんかその辺さ、どうもピントが合わないというか霧が晴れないというか

…しつくり来ないんだよ」

「…」

肘を突いて丸めていた背中をまっすぐ伸ばし、卓上の地図の全体を視界に入れるようにする。

そしてこれまでちよっぴり思ってたことを口にする。

「オルブライト王国にしてもヴィフィールの里にしてもこのサンヴィレラ街にしても

…いつも通り過ぎるんだよ」

オルブライト王国では勇者帰還を1つのお祭りのような扱いだった。

まあそうで良いはずだけど露店街のあの盛り上がり様…まるで退屈だった時に

舞い込んだブーム的な風というか。

ヴィフィールの里は魔獣が住む森の中にあるのだから警戒を怠らないのは当たり前。

それが普通であって勇者一行が魔王を倒したからといってそれを緩めていない。

いつも通り。ずっと。

サンヴィレラ街の大通りは友好関係にあるオルブライト王国とアジユラ連合国の2国民によって賑やかだ。戦争で生活苦だからそれを補う為に物々交換やら服を売る、とかではなく純粹に儲けを追求する商人達によって。

「魔王つてさ…本当に存在していたのかな？　勇者一行は魔王を倒したのかな？」

オマケ。

勇者アイザワ一行、サンヴィレラ街に到着する。そろそろ霧の出る時間だったのでその日は街の宿に泊まることにし、明日関所を抜けることにした。

しかし宿の一階にある食堂で夕食中、アジュラ連合国の首都までの道について街の人間に訊ねるとある問題が発覚した。

「馬が使えないですって？」

「そうなんだ。この時期は砂嵐が酷くて国道が砂に埋もれてしまつて、馬じゃ無理つて言われたよ」

「どうすんのよ」

「…そうなんだよな」

稀有な光属性オンリーという異世界から召喚された勇者アイザワは何の野菜かは

わからないが歯応え充分そうで新鮮そうなサラダを口に入れる。

…うん、味が全くない。

「ケヴィー、あんたスキル持ちなんだからどっかから借りた魔獣で行けば良いじゃない」

「僕の適性は飛行獣のみだよ。それに飛行獣も騎乗走行獣も慣れるまで相当日数が

いるんだ。　例えば借りられても一月はいるね」

「じゃあ魔獣と一緒に御者も雇わないといけないのね」

「『運び屋』を探すしかないね、これは」

取り合えず口の中のものをしっかり嚙んで嚥下し、テーブルの上を見渡す。

するとファミリーストランにあるような調味料のボトルらしきモノがあったのでそれをサラダにかける。

お、色がケチャップとマヨネーズが混ざったような感じだ。見た目美味しそうになった。

「まあフランフォルグ様に伝えないとね、人数が増えるんですもの」「そうだね。…にしてもフランフォルグ様遅くないかい？」

「もしかしたら別室でオモテナシされているかもよ。こつした一般食堂で食事する

なんて有り得ないもの」  
パクリ。

「そうかもしれないけどさ…でも『先に行ってる』ってココに来るって言っているのと同じだよな」

「食事を共にするとは一言も言っていないわ。食後來るかもしれないし」

おおシャキシヤキ感にこのドレッシングの相性良いな。ビリリ。

うまい…ん？ビリリ？…って辛辛辛あああああ…！！！！！！！！

「どうなるにせよ霧の夜過ぎだから明日、だね」

「そうね。げ、ケヴィーこれあげるわ」

「何、って…相変わらず苦手なの、ソレ」

水、水は…く、ちくしょう来た時一気に飲み干したから空じゃないか！

セルフだったから…アソコまで歩くまで耐えられない。っていうかすでに耐え切れないんだけど。仕方ない…湯気がはつきりと見えるスープ。これで誤魔化すしか…！！

「うーだって叔父様が大好きだからって1日3食以上これが主食になった幼い日の

記憶が今でも鮮明に思い出せるのよ！

私は人生における許容範囲以上食べたのよ、あれで」

「まあクセが強いコレが大好きっていう君の叔父さんは確かに変わり者だよな。

んぐ…：そういえば噂程度なんだけどその叔父さん、庭園にアジユラの新種の果実を

植え始めたらしいね」

「…収穫時期になったら本当かどうかすぐわかるわ」

火傷しないように気をつけて器を持ち、辛さで痺れる口内に。

うう胡椒が強い。そして…：沁みる！

舌はミントのようにスースーするけど喉奥は辛さに痺れていて…：！

「相席、お邪魔しても良いかい？」

「どうぞ。ケヴィーもアイザワも良いでしょ？」

「勿論」

「…」コクンコクン。

それどころじゃないっていうか痺れているし取りあえず何だかわからないが頷いておく。…：こうなったら他の食材で誤魔化すか。

「あたしはカトリーヌ、こっちはアイザワ」

「僕はケヴィン。君たちはアジユラの方だね？」

「おうそうさ。俺はポテ・ユラ。で、隣は弟のテマさ。」

確かに見ての通り半獣で…：お前さんらが探している、『運び屋』をやっつてんのさ」

「…！！」

「そう警戒すんなって。何、こっちは聴覚が人間の倍以上良いから聞こえて

しまったのさ」

「す、すみません僕が聞こえちゃって兄さんに言っちゃったんです」  
ポイルされたソーセージ…：これなら辛くはないんじゃないかな。パ

クリ。

「まあ何だ、食事しながら話そうじゃないか。『商売』の話さ」

「…ケヴィー、フランフォルグ様は？」

「僕があとで話しておくさ」

「それじゃあオーケーのようだし、早速…の前にテマ、水をジョッキでもらって来いさ」

「わかったよ」

うおこのソーセージ…ピリ辛かな。ピリリ。

つてよく見たら赤いのが練りこまれている！？辛あああああああ  
！！

「ジョッキで水って…」

「いや、俺が飲むんじゃないさ。そこの顔を真っ赤にして悶えて  
いるお兄さんさ」

「え、アイザワどうしたんだい？大丈夫？」

ゆるるなケヴィン。今の俺は何だか小刻みに揺れているんだ、何  
ていうか辛い。

「あらヤダ。ってそのドレッシングに半分のソーセージって…」

「おうさ。ドレッシングは『唐辛子』<sup>トシガラシ</sup>で、俺たちみたいな半獣に  
は匂いが

キツ過ぎるから辛さはそのままに匂いを柔らかくしたもんで、

ソーセージは

『唐辛子』が練りこまれているのさ」

「そんなドレッシングをこんなにたくさんにソーセージ…自殺行為  
じゃない」

辛い辛い辛い辛い。

「どんな泥酔しや奴でも一発で起きる『唐辛子』を躊躇なくパクつ  
いた人間、始めて

見たさ」

「アイザワは…知らなかったんだろっね、多分」

「お待たせお水だよっ」

「あ、アリガトウ…ピーター、らびっと」

「いや僕はテマ・ユラっていうんだけど…」

「…何気に重症ね」

「そうだね」

「あーお兄さん、水飲んでからコレ口の中で噛みな。味覚を反転させる果実さ」

ゴクゴク…ゴクゴク…ゴクゴク。カミカミ。

「あ、何だか甘くなってきた」

「ちなみにお前さんの叔父さんとやらが植え始めた果実がコレだったりするさ」

「…え」

「だって売ったの俺だしな」

「まあこの果実は主食にはならないさ。ホラ、食べてみなさ？」

「そうねじゃあ一つ…あら面白い果実ね」

「僕も一つ良いかい？」

「どうぞ。それにコレ、お酒とよく合うんだぜ？」

「…ケヴィー」

「一本だけだよ、一本だけ」

「アハハハハ」

「え、ちょカトリーヌさん！？俺未成ね…ぶわあーっ」

「僕だつてそりゃあそうさ…」ブツブツ

「…ポテ、テーブル移ろうか」

「名案だねえ」

「…という訳でしてこのポテ・ユラとその弟テマの2名をアシユラ

の首都まで

雇うことになりました」

「ちよつと待て。何が『という訳』かわからんし何だこの状況」

「ハハハ。まあ雇い主さんよ、という訳で弟共々よろしくさ」

「オオ、フランヤーつと来たのか！ お前も一口どおだ！？」

「……ケルヴィン、あとでじーっくり話そうか」

顔を今度は別の理由で真つ赤に：テーブルの上にはいくつもの瓶が  
転がりヘラヘラと肩に手を回してくるアイザワからはアルコール臭  
が。つまり酒だ。

陽気な馬鹿をそのままにして酒瓶の散乱したテーブルを見てみれば  
カトリーヌと

先ほどの弟だろう、の2人がお互いブツブツ呟きながらハイペース  
で手酌にハイペースで空に。

フランフォルグ・クローリストはピンク色のドレッシングがたつぷ  
りかかったサラダに遠慮なくフォークで一刺しするとその口に突き  
入れた。

「こんの馬鹿ザワがあああー!!」

「ギヤー辛ツー!!!!」

異世界編 その15 『元パーティ：ポテとテマ』（後書き）

週一更新の筈が先週は：身内の法事バイトの忙しさ精神的体力的にもアウトだけどそのまま週が明け学校そんな状態のため風邪をひき始め今週半ばにやっとじわじわ復活更新しようとしたらデータの入ったUSBを紛失運良く次の日つまり今日発見、現在更新に至るな訳でして先週の更新は無理でした。  
そしてお知らせです。

今後現状を考えると週一更新に自信がないため不定期更新とさせていただきます。

勿論調子が戻れば週一更新に戻しますがしばらくはご理解をお願い  
します。 R i z

異世界編 その16 『アジュラ：入国』

そこに踏み入れたのはすでに閉門ギリギリといった時間だった。

身分証明とかに時間が掛かったとかじゃなくて、私とキツネさんの  
は国妃である

ミレシアン様から頂戴したものだし、そのオカゲでほとんど荷物検  
査ナシで

スルーできたし。

とはいってもそこからはそれ以上の特別もなく、他の人たち同様に  
アジュラ連合国まで

始まりの河にかかった橋を歩く。

これは緊急の伝達の走行獣でない限り橋の上は歩くというルールが  
あるのだ。

まあ急ぎの旅とはいってもいつでも走らなきゃいけないわけでもな  
いしルールでも

あるからラバル含めて2人と1匹でのんびりと周りの景色を見つつ  
散歩気分です。

ザッザッザッ

足音が石を蹴るような硬い音から下へと吸い込まれるような沈む音  
に変わった。

「アジュラ連合国、入国ってね」

「クアア！」

公園とかの砂場みたいな感触の地面。

オルブライト王国のように一面森ではなく所々に固まって生えて、  
その木々は葉が

少なくともこの異世界では初めて見る植物。

現実世界、日本ではお目にかかれない光景が地平線の果てまで続いていた。

「異世界風景堪能しているところ悪いですが国境付近に町がないようですし、人が

住んでいる町なり村まで急ぎましょう」

いつ間にか足を止めていたキツネさんはラバルに乗せている荷物からラバルの

拘束具を取り出すと慣れた手つきで準備を始めていた。

「この辺ハウスはないの？」

ハウスとはこういった旅人や冒険者用の小屋で、非常食や水といった物が常備しており誰もが無料で使用・宿泊できる場所のこと。

あ、やっぱりこれも（キツネさんの）有効活用だったりします。

「ありますよ、このまま南方向に歩いて30分の場所に。ただ空路で真っ直ぐ首都に

向かうとなると南西方向に飛ぶことになるのでそちらのルート下にはハウスが

ないんですよ」

「…つまりハウスという選択肢はすでないんですね？」

「そういうことです。大体ハウスだからって魔物に襲われないという確証もないです」

上司わたしに何も言わずに勝手に決めないで下さいよ。

…とは声に出して言えない。

だってラバル操っているのキツネさんだし事前に話を聞いていた私だってそう判断するだろうし。

それにキツネさんがそう判断したのなら私が決めたより安心する。

私の勘よりキツネさんの有効利用からの方がイイに決まっているから。

「日が沈むまでに時間があります。それまで進みましょう、小鳥

さん」

気休め程度になるかと思つて淹れた「紅茶」。

正確には淹れてもらったんだけど。

まあそんなことは「紅茶」が目の前にあるという現実の前には些細なことでも「どうでもいい」と鼻で笑われてもしょうがないことだから頭の中にやらずにその辺に放っておく。

「…バラド民族つうーのはさ、元々の『魔法』っていう高等秘術を扱っていた一族だった

のさ。だけど今はその『奇跡』より『技術』が一般化して、オルブライトの国民からは

嫌われた」

「何で？」

「ちよつと例えが悪過ぎるが…ある一人を殺そうとする『奇跡』を起こすために

その1人分の血を捧げてようやく発現するかもしれない『奇跡』。

それが『魔法』なのさ。

殺せるかもしれない『魔術』に発現さえすれば絶対に殺せる『魔法』…三カ国戦争

時代終結頃、『魔術』がオルブライト国民の8割は使えるモノだと判明したら

『魔法』は禁忌とされ忌み嫌われたのさ。ケラスはそもそも『魔法』に反対してたし

オルブライトからは追い出された、なら残るはアジュラしかない」「アジュラは反対しなかったの？」

「反対も賛成もしないさ。来るもの拒まず、ってスタンスだしな。

で、バラド民族は他民族と触れ合わないようにひっそりと勝手にアジュラに

住み着いたのさ」

「ふうん」

折角淹れてもらった「紅茶」が冷め切らないうちに、と一口。

うん…相変わらず上手いなあ、キツネさん。

「ここまで説明すれば良いだろう…バラド民族に何があったのか、話しても良いのさね」

中途半端に砂漠化した大地の上を飛ぶ。

何となく評価が下がっているのは気のせいではなくて、細かすぎる砂がゴーグルを

しなければ目に入るしきつと髪の毛には砂が絡んでいるだろう。

慌てて大きめのタオルを取り出してガードしたので今は防いでいるがそれでも顔は

出さないと息が出来ないし、そこに砂が当たって痛い。

「…小鳥さん」

「何ですか？」

口の中に砂が入らないように俯き、手の甲でガードしながら。

「思ってたよりも風が強くてラバルのスピードが出せませんし視界の範囲内に村なども

ないですから」

その言葉はやっぱり、と思うものだった。

「野宿する場所を探しましょう」

キツネさんに「紅茶」のおかわりをせがむ。  
すると「しょうがないですねえ」と苦笑されつつ2杯目の「紅茶」  
が。

何故苦笑なのかは私のを淹れた後ポテとテマのも淹れ直していたの  
で聞けなかった。

「さて、と。元々俺たちはオルブライト王国からアジュラに帰る  
途中、偶然「運び屋」を

探していたアイザワ達に雇われてコルトベヲラントに行ったのさ。  
で、一旦はそこで別れたんだが最高議会の<sup>トル</sup>お達しがきてな、アイ  
ザワ達とアジュラの

調査員2人をバラド民族まで…拉致事件が解決するまで従うこと  
になったんだ」

「キミたちが指名されたのって顔見知りだから？」

「それもあるだろうさ、フランフォルグ様のご指名だったようだし。  
あと俺がアジュラ商連の特別配達人であるっつーのも理由の1つ  
だな」

「特別配達人？」

「まあ国が認めた配達人で、機密文書の配達も請け負ったりするん  
だ」

「エリートってヤツですか。ん？弟のテマは同じじゃないの？」

「テマは見習い、それも走行獣トレーナーのな。俺はテマが1人  
前になるまでの

教官として一般配達任務をしながらアチコチ行って色々教えてい  
たのさ。

だから手が空いてた、と言われればそうもなるのかねえ」

勇者一行をまとめるところなる。

光属性の勇者アイザワ。

騎士団員の従者2名。  
四大属性持ちの皇子。  
半獣で御者2名。

アジユラ連合国から派遣2名。

計8名つて…多くね？まあRPGゲームとかあんまりしないからわからないんだけど。

「バラド民族の集落がある『カラドゥ・マール黒き渓谷』に到着した俺らは荷車が大  
きい

こともあつて派遣の1人と俺ら3人は待機、他の人らが集落の様子を見に行ったのさ。

まあそのあと色々起きるんだが…まず最初に言っちまおうか」  
ポテ・ユラは私の目をしっかりとみつめて。

「バラド民族は1人を除いて殺されてたのさ」

本日の夕食は日持ちする硬いパンに温かいスープ。デザートにドライフルーツ。

これでお腹いっぱいになるのかと言われると意外になる。

まず硬いパンはそれを食べようと何回も噛むのでそれだけで満腹中枢が刺激される。

一応スープにつけてやらかししょうとはしているけどそれでも硬いのだ。美味しいけど。

ドライフルーツは疲れた顎を癒してくれた。通常のフルーツより顎使うけど。

そして食後には保温加工された水筒に入れられた「紅茶」。

「現在地はわかった？」

一足早く夕食を食べ終えたキツネさんは地図を広げ指から糸を垂らしたり空を見上げたりしている。

どうやら現在地と街、もしくは首都までどれくらいかを調べているんだそう。

地図や空へと忙しいキツネさんは一旦私の方を向いて、

「天候や風向きが悪くなければ明日首都コルトベヲラントに到着できるかもしれません」

と結果を伝えてくれた。

「ま、ルート外れないように進めば着くもんでしょ。ラバルもウトウトしているみたい」

だし、キツネさんも明日に備えてもう休んだら？」

「…そうさせてもらいましようかね」

やはり自分が見張りを、と言い返さないで素直に頷いたところをみるとそれなりに疲れているようだ。一方私はいえは風や砂やらを堪えて座っていただけで、その前は話を聞いていただけで…うん、平気。

規則的なような不規則のような焚き火の揺れを見つめたり。

冷えてきた気温に手を擦り合わせてみたり。

空一面天の川のような細かい星が散らばってる空を眺めたり。

キツネさんとラバルが寝ている中、私はそんなで時間を潰していた。とはいえ眠くなつてはいないが好い加減ヒマだ。

というわけで今朝書いた「物語」でも読もうかと行動する。

今まで読まなかったのは読んでいるのに集中してしまうと周りが全く見えなく

なってしまうからだ。見張りというのに周りが見れていないのは

駄目なのは

わかるがそれだとヒマで眠くなるし。

寝ているところをキツネさんに見つかるのと物語を読んでゆっくりしているのを見つかるの、どっちがマシか。

そりゃあ後者でしょう。

なのでベルトのポケットから取り出そうとすると…

…

パチパチとなる焚き火が異質なような空気。

何だろう…頭に引つかかるし肌が寒気では無いナニかを感じている。

「キツネさん！ラバル！」

自分で答えを出すより声を出して状況を伝える。

キツネさんは素早く立ち上がると私と同じように周囲を警戒する。

何ですか？と聞かれないということは異質な空気を察したのだろう。

ラバルはそのキツネさんの指示をじっと待っている。

「魔物…しかも群れとききましたか」

小さな独り言だったが静か過ぎるためハッキリと聞こえた。

…

異質な空気の原因、魔物の群れは私たちとの距離を動かしていないようだ。

けれど近づくのを止めて留まっているということは私たちが気が付いたことに気が

付いていてコチラを窺っているのだ。つまり、諦めていない。

警戒しつつキツネさんの傍に移動する。

「逃げ切るのって可能だったりしますか？」

「…何もしないで逃げるだけというのは難しいでしょう。…ここはコチラから仕掛けて

怯んだ隙に逃げた方がいいです」

私たちは別に冒険者でもハンターでもない。

だから戦わなければならぬ理由もないし逃げてはいけぬ理由も無い。

迷わず逃げることを選択したことに何ら思わない。

その決定に従って細かいことを簡潔に聞き、無言で頷いた。

そして動き出す。

「ラバル！ 空で待機していなさい！！」

「クアアツ！」

大きな羽が羽ばたき、空へ。

それと同時にキツネさんが前方へ、魔物の群れがいるところへ突っ込む。

「起動！」

何匹いるだろう。

黒い毛なのか煙なのかよくわからない四足で犬みたいな魔物は獲物が向かって

きたことで一旦後ろに体重を寄せたがそれをバネにしてキツネさんに襲い掛かる。

焚き火という小さい光と細かい天の川というライトのオカゲでカレらの瞳が光り、

襲い掛かったのは5、6匹だろうと判断する。

ザワザワと感じた異質はそれ以上と感覚的に掴んだ為、おそらく残りが私にくる。

昏間でも無いのに目が限界に開いているのがわかる。

指先までの感覚を意識できるくせに身体は無意識にキツネさんの後を追っていた。

初めての『戦闘』という行為に興奮しているのだろうか、恐怖するのではなく。

残り、の8匹が私の前方に来た。

視界の端でキツネさんがナイフにしては刀身がやや眺めの武器に風を絡め力マイタチのような風を飛ばしたり触れた魔物を複雑な風でまるで鋸の様な傷をつけたり、とファンタジーな戦闘を行っていた。

私にはとてもじゃないがそんなファンタジーは無理。

「！！」

前にいた2匹の魔物が同時に私に襲い掛かる。

攻撃をする手段がまともに無いのなら避けるだけ。

マジックアイテム  
魔術道具で強化された脚で地面を蹴り、そのままに勢いで前方宙返

りだっけ？で

避け着地する前に「装填<sup>リライト</sup>」する。

体の中で何かがズルズルと引っ張られる感じが気持ち悪いがそんなことは言ってられない。

まず着地したのは右足。

後ろに去った2匹とは別の4匹が左右から私を挟むようにきたので右足を軸に反転、その勢いのまま左足で蹴り払う。

「噴出<sup>バースト</sup>！」

純粹魔力というオマケつきで。

バアアアン！と何かが破裂する音が響く。

私の脚が魔物に触れた瞬間、当たった箇所がまるで風船が割れたように弾けた。

声には出さなかったけれど私だつてびっくりだ。

頭部をなくした魔物は私を挟もうとしていた2匹を巻き込んで地面に転がり、目の前で

仲間を倒された1匹は怯んで襲い掛かるのを止めた。

思わぬ効果と勢いでバランスを崩した私は再度「装填」しながら順々に飛び込んでくる

2匹を空いている手を使いながら避け、バランスを直す。

1匹消えて2匹遅れて1匹戦闘意欲無し、4匹が2度目の襲撃を仕掛ける。

群れという集団を形成しているということは個人での戦闘力は低いのだろう。  
さつきから2匹以上で攻撃してきているし、間違っていないはず。  
だったらそんなことをしても無駄。集団の意味をぶち壊して怯ませた隙に逃げるが  
一番。

「噴出!!」

ギリギリまで距離を縮め、避けきれないところまできてから両手を前に突き出し、  
ソコに溜め込まれた純粹魔力を放出する。

不安だったのは放出が全方位になってしまうことだったけれど頭の仲でイメージした

通り前方に収束されて発射された。  
ただ収束率が高かったのか攻撃範囲が狭かった為、当たったのは4匹中2匹。

けれど上半身、右半身が煙が強風で消え去るように掻き消えて行動不能になったのは成功といえる。

そしてこちらの予想通り動ける残りの4匹と様子見の1匹は私を警戒してすぐに  
襲い掛かることはなかった。

「…ラバル！」

今が逃げるチャンス！

キツネさんは私にこう言った。

『隙を見てラバルと逃げなさい。その瞬間私が広範囲の魔術で一掃  
までは』

約束できませんが必ず、追い払います』

なら最初から私はラバルに乗って飛んでいけばいいじゃないか、と思うが荷物を乗せるための装具しか付けていないラバルにスキルの無い私が乗るなんて出来っこない。

それにキツネさんだってこっちの世界では軍人だったりするが現実世界の日本の

人間だ。

私と違って「魔術」が使えるようだが、本来そういったヒトではないのだ。

なら、なら…変に一秒一秒の時間が長く感じる中考えが答えは1つしかない。

あの顔きは、嘘ではない。

なら…私はラバルと共に逃げる。

そしてせめて、キツネさんの「邪魔」にならないようにキツネさんの「助け」になるように。

砂地である地面を強化された脚でドンツと思いつきり蹴る。上へ跳ぶ。

行き先を見れば私の呼びかけにラバルはすでに私の指先の直線上で待機してくれていた。

上へ上へ！早く早く！

「ッッッ　　ッ！！！！」「」

足下ではナニかの叫び声が聞こえた。そんなのはどうでも良いから届いて欲しい。

あとラバルの脚まで50cm程度の時、寒気がした。

気温とかではない、これは何かの直感的な…指先から爪先へと視線を動かす。

「っー！」

声は出なかった。

けれど「恐怖」を明確に感じた身体は固く重くて、空中で一瞬止まる。

あとは降下しかない。

思わず手を引っ込めてしまう。

私は見てしまった。

黒い煙のような影のような魔物が1匹私の脚に喰らいつこうとしているのを。

何もかも黒い体から口の部分が大きく裂け、パクンと収まるくらいな大きさで。

「生きる」ためではなく「狩る」ために使役されてきたであろう牙は私の視線を独占する。

あと少しで届かないソノ距離は私の降下ですぐ埋まってしまう。

身体が落ちる。

ああ感覚は無いが視覚的にはすでに裂けた「口」の中に脚が入り込んでいる。

ゆっくりと「口」が閉じられる。

涙が出そうになる。

けれどそれは出来ない。

嫌だ嫌だ嫌だ。

ナニが嫌だつて？

決まっている！

こんなファンタジーな魔物になんか喰われて堪るか！

キツネさんの「邪魔」なんかになつてやるか！！

「……っ！ ば、<sup>バースト</sup>噴出……！」

引き攣る喉を無理やり発したのは1つの固定始原言語。ワン・ワード・キー

残っていたありったけの純粹魔力を何のイメージも制御もなしにぶつける。

身体の中の見えない器官がガリガリと削られているような音がしたけれど、ちゃんと

発動した一応魔術になるソレは再度私を空へ飛ばし、魔物は内側から破裂するように

ハラハラと散った。

私はそれをじっくりと見届けることなく手の先にあったラバルの足にしがみ付いた。

「ラバル！ もっと上に！」

「クアア！」

そうしてラバルと私が空へと逃げたすぐ後、下からゴオオオオオと目も開けていられない風が地面を這う。

咄嗟に顔を埋めて耐える。

たった数秒ほどだろうか、風が収まったようなのでそっと目を開けた。

キツネさんがただ1人、ポツンと立っていた。

異世界編 その16 『アジュラ：入国』（後書き）

なんとか今月中に投稿したくて…ギリギリですね。

一日に一文程度しか進めないことが多くて難産でした。本編の文量が多めなのでおまけは次回に持ち越しです。

…初めての戦闘シーン。こんな感じでいいかわかりませんがイメージ的には

背景と同化してそんな味方の脇役による戦闘です。勿論メインはキツネさんです。

では次回…年内にアジュラ編を終わらせたいですが…難しそうですね。

異世界編 その17 『アジュラ：首都コルトベヲラント』

アジュラ連合国 首都コルトベヲラント。

各々の民族を尊ぶ彼らが手を取り合い、アジュラという1つの国として形成している。

そんな彼らを象徴となるここはオルブライト王国の首都アズライトとは全てにおいて異なり各民族の代表が集い、国として動かす発信源の『揺るぎなき巨塔』エラグラレ・トドワールという突き抜けた大きい塔を中心に広がる街である。

「小鳥さん、お茶が入りましたよ」

「わかった」

異国の地。

どこかで見たような表現が当てはまる街並みである窓の外は2・3階ほどの建物だけで、例外なのは中心にある大きい塔だけ。

キツネさんが事前に晒してくれた有効活用通りの光景だけれど私には美味しい「紅茶」の香りよりも、今はコツチの方が心が惹かれた。

コトン、という背後の音はきつとキツネさんがテーブルに「紅茶」を置いて

くれたんだろう。

それは暗に「早く飲まないと冷めちゃうぞ」という小言でもある。

私よりもはるかに大人なハズのキツネさんのそんな行動に思わず口の端が

緩むけれど、堪える。

そして気が付けばあつというまに景色から「紅茶」の方に関心が向いていて、

余計に緩んでしまいが更に堪える。  
別にコレといった理由も無いんだけどね。  
だけど1度堪えてしまったのでそれは突き通さなければ。  
窓の外よりも口元の筋肉を意識せざるを得なくて背後のことなどに全く無かった。  
そんな時だった。

「小鳥さん」

真後ろからの呼びかけだった。  
思わず身体がビクツツとしてしまっただけで返事をする事も振り向くことも咄嗟に出来なかった。  
だから考えるしかない。

このまま背を向けたまま返事をするべきなのか。  
振り向いていつものように「何キツネさん」と返事をするべきなのか。

前者はそっけないように感じる上にキツネさんが淹れた「紅茶」を  
いらなげと言っているようだし。 後者は緩んだ口元を聞かれるだ  
ろう、で答えればキツネさんは拗ねてしまつかもしれないし。  
まあどっちにしたって。

そんな諦めモードな自分がホレ、さっさと動けと急かしてくる。  
確かにそうだ。 こんなウジウジ考えるのだから結局は時間を使っ  
ているのだから  
怪しまれる。

だからといってどちらにすべきなのかどうすべきなのか…「小鳥さ  
ん？」

「な、何キツネさん?!」

いつまでも返事もせず何も反応しなかった私に再度呼びかけが。  
しかも今度は疑問符付きだ…思わず振り向いたものの声は上擦って  
いるし、絶対に怪しまれる。

俯いていた顔をゆつくり上げて気になるキツネさんを見てみると、  
「そんなに異世界風景が好きですか…ですが一旦コチラにいらして  
ください。」

明日のお話をしましょう」

やれやれといった感じに自分の座る席には「クッキー」が既にセツ  
ティングしてある。

いつの間に。

「りょーかい、です」

何だかイイ感じに肩の力が抜け、いつも通りの自然な動作で席に着  
くことが出来た。

まだ熱めの「紅茶」がそこにあった。

いつもの風景がそこに。

「アイザワ達の旅を本に、だったか。でもアジュラ以前は俺たち  
も詳しくは

知らないのさ」

「あ、でも兄さん。確かギルドの討伐任務でポイントの荒稼ぎし  
てたって

言ってなかった？」

「何勇者のクセにそんなコトやってんですか…」

「まあその辺はフランフォルグ様に聞くと良いさ。なら『ギルド

センター』に行ってみたら

どうだい？」

「支部とはまた違うの？」

「んー支部は依頼を受け、報告する場所。センターは依頼をお願  
いする場所って

感じだな。センターで登録してあるハンターのこれまで達成した  
任務とか見れる

からアイザワ達のも見れるはずなのさ」  
『ふうーん』

「……というわけでまずは『ギルドセンター』なるトコロを訪ねる  
つと」

「私もそこにいたんで説明はいらなんでしょうけどね？」

「自分に対しての確認ってことにしといてください。あと他に行  
きたい場所とか

ありますか？」

そう聞くとキツネさんが口に出したのは食料品といった消耗品がほ  
とんどの買出し。

本当は地元オリジナルのクッキーを探したいってところでしょうが。  
そんな本音は置いといて買出しはココを出発する前に時間を見なが  
ら、ということに決定。

何だかあっけなく明日の行動が決まっちゃって「話し合い」なん  
てことにしなくてもよかつたんじゃないかなーとか思うけど…終わ  
ったことを後悔してもしようがないか。

カチャン。

「ま、ここまでくるのに疲れましたし…明日まで各自自由に過ごす  
ことにしましょう」

というわけで。

そう話を変えるのもついさっきしたばかりだけれども頭がクリアに  
働かない為仕方ない。

私は話し合いの後ラバルの様子を見に行くというキツネさんを見送  
り、早々に

自分の寝室へ。

今回の宿は1つに部屋に寝室が2つあり、要するに旅をする主従関  
係にある人向けなので主人用と従者用の寝室があるわけだ。ちなみ

に私がいるのは主人用。だって私が一応上司ですし。  
あと今回はキツネさんに「ゆっくり休んでください」と言われたの  
で素直に頷いたのだ。

ポフツとソファーとはまた違ったフカフカなベットに倒れた。

窓の外を見てみれば日没後の霧が晴れたばかりでまだ寝る時間とし  
ては早い。

それに防寒のマントは着たままベルトには本が繋がったままだ。

寝るのならせめて上の2つは脱ぎたいところだけど…その前に夕飯  
どうしよう。

宿代には食事代込みでこの建物の隣にある食堂でバイキング形式だ  
そうだ。

何でも色んな種族がいて食事にも色んな制限やら好みがあるのでだ  
ったら自分で食べたい物食べてよ、な感じらしい。あ、これ宿の  
おっちゃんからの情報だったりします。

「…何で皆私に有効活用を披露したがるかな…」

独り言。

何にも反応が返ってこない独り言。

そりゃあ当たり前だ、だってこの部屋には私しかいないんだから。

「……」

だから余計にそんな有効活用を見せびらかしてきたりラバルの背中  
に乗って飛んで

いたり、先日の戦闘だったりのシーンが脳裏に私の意向を無視して  
映し出され、流されていく。一番強烈に一番大きく映ったのは裂  
けたような口に私の足が入り込んで…噛まれていくシーン。

あの後こっそり自分の足を見てみたが特に傷もなく勿論出血もなく  
無傷。

戦闘終了後、あの魔物の群れを一掃した風が収まったのを確認して  
から地面に

降りた私。 そんな私を一見したキツネさんは「無事のように何よ

りです」と

いつもの笑顔でそう言ってくれたのだ。

結局その後はラバルを休め、私とキツネさん2人で明け方まで起きていたんだ

けど…まあその話はいいか。

あの時は視覚からの強烈な画のオカゲで他の感覚は麻痺したかのよう  
に働いて

いなくて。 本当に魔物の歯が私に触れたのかどうか、判断できないのだ。

確かに傷は一切ない、痛みもない。

けれど煙のようなあの魔物にそんな現実的なダメージが可能なのか。そう思ってしまうと不安が押し寄せてくる。不安に引き寄せられて恐怖も押し寄せてくる。

気が付くと寝っ転がっていたはずが丸まるように足を腕で抱いて体育座りをしていた。

体がわずかだけと震えている。

どこか自分の事なのに他人のような視点を持つも、依然として頭の中は色々

ごちゃごちゃだった。

これまでのことこれからのこと。

それらが一気に今、頭の中で混在しているのだ、多分。

ごちゃごちゃする頭はそれ以上のことを何も考えさせてくれなくて顔を埋めたままだったけれど、いい加減何か行動したくなかった。

寒さに凍えるような震え方をする体は動けないわけではないようなので取り合えず、

本という重石が付いたベルトを外すことにした。

いやだって動くにしても絶対に邪魔になるだろうし。まずは、ね。

冒険者用の特注で作られたベルトは頑丈に出来ていて、震えた指し

や大変

だつたりする。

中々上手くいかないののでボタンで留められた本の入ったポケットから外すことに。

外した「収集の本」<sup>コレクターズブック</sup>をベットサイドの棚に置き、もう1つの本へ。

そして震える指で何とか外したその時だった。

「やべっ…!!」

震えた指が皮製のポケットからチラリと見える『本』に触れた。

その途端、バチツと強い静電気のような音を発するがそれは外面だけでナカでは

駆け巡っていた。

ソトからナカへ。

電流が流れるようなでもなく鳥肌が立つような寒気でもなく、「気持ち悪い」と感じるモノが私を意思を無視してモゾモゾとすごい勢いで流れてきた。

出口というか行き先が私でしかないモノの流れは容赦なくて、それが全身が行き届く頃には私は意識を放棄していた。

次の日の昼ごろ。

雨知らずなのは世界共通のためアジュラ連合国にいたって晴天なのは相変わらずだった。

ただ砂漠地帯が国土にあるためか幾分か空気が乾燥している…感じがした。

ココでちよつと振り返つて朝。

昨日予定した通り『ギルドセンター』なるものへ行き、身分証明書  
を提示してから勇者アイザワがリーダーとなる『ナイト・サラバドリア光聖騎士団』の任  
務履歴を見ることが出来た。

コピー機がないのでベルトから白紙を数枚出してキツネさんと2人で  
その履歴を書き写す。

日付などを見てみると明らかにある短期間に集中していて、1日に  
10件以上討伐任務をクリアしていたり…これって環境破壊になる  
んじゃないか。口にはしないけど。

そして最後の討伐任務。ランクはSSS。

ギルドの任務の危険度を示すランクはE D C B A S S  
S S S Sとなつて

おりまた登録してあるハンターの強さも同じ様にランク付けしてあ  
る。

履歴、というよりは簡易報告書が任務順にまとめられているだけで  
一覧というわけでは

ないのだがどういふわけかその最後のSSSランク任務報告書には  
そのランクと任務完了報告受領というハンコしか押されていない…  
怪しい。怪し過ぎる。

全て写し終わつた後、キツネさんとも話してみたら「魔王討伐任務」  
ではないか、  
とのことだ。

…まあそれなら最高ランクなのも領けるけどさ、元々勇者の目的つ  
てソレなんだから。

けれど何故それを非公開なのか。  
魔王倒す為の勇者なんだからその結果を隠す必要はないし、第一そ  
れをアピールするため私とキツネさんが旅にまで出ているわけだし。

…結局、後々会う予定の皇子様やミレシアン様に聞けつてことで  
すか」

「そうですね。私たちで話しても正解は出ませんよ」

本日の予定、終了。大体昼前だったと思う。

そんなんで謎を解明するつもりがさらに謎を呼んだ結果となったけれど、その前に

解決しなければならぬ問題が発生した。

ぶっちゃけて言うと、小鳥遊たかなし 小鳥ことり 迷子になりました。

乾いた空気の間抜けな「え、マジで？」という私の呟きが響いたのが今から約1時間ほど前。 昼食を適当な食堂で済まし、商店街ぽいトコロをぶらりと歩いていた時まで私の隣にキツネさんがいたのは覚えてる。目に付くお店なんかをネタにどーでもいいコトを話していた。

で、気が付いたら1人で歩いていたのだ。

先程の呟きの前にどーでもいいことを呟いていた…一体私はどれだけ独り言を呟いていたんだろう。

慌てて辺りを見渡しても見当たらない。

半獣や獣人が混じっているんで人間なら数が少ない分見つけやすいはずなのに。

いやコレ迷子ってかはぐれた…ってそれが迷子じゃね？

軽くパニックしながらウロウロを30分。

それからは何度もお店の前を通る私に声をかけてくれたおっちゃん（半獣：ヤギの角）のご好意で落ち着くまで店内で休ませてもらった。

…と、以上が本日のこれまでである。

現在キツネさん探しは置いていて、1人観光を決行中の私。

というのも先程の親切なおっちゃんに「宿が決まっていんのかい？なら時間になったら」

ソコに帰って、それまでココを観光してみたらどうかねえ？」と近辺で絶対に迷わない観光名所を教えてもらったのでならそうしようか、とあっさり。だって迷子で不安になるよりソツチの方が気楽で确实だし。実際今の私は散策気分で、もしキツネさんを見かけたら「あ、そこにいたんだ」程度で済ませられる自信がある。

さて。

親切なおっちゃんの店で買った一口サイズの飴がたくさん入った袋を手に

目指すは『エラグラレ・トドヴァール揺るぎなき巨塔』。

街で一番大きくてどこからでも見えるので目指すのなら迷うことはなく、更にソコを

起点にいくつもの大通りがあるので宿への帰り道もわかりやすいだろう、とのこと。

ただし『揺るぎなき巨塔』は中を見学することは出来ないので外から見るしかないんだけど。

「まさか1人で異世界街を観光するとはね……」

まだ少し距離があるがそれでもその名の通り大き過ぎる塔はあと10分も歩けば

到着できるだろう。

段々塔に近づくにつれて店の種類が変わってきた。ついでにヒトの数も増えている。

この異世界に「観光」という言葉が存在しているのだから私みたいな観光客がほとんどかもしれない。

それに観光名所でもあるようだし、ココ。

ただツアーという団体観光はないようで個人や仲間内で立ち寄った、という感じが多いみたい。

そんな風に見渡してみればと色んなヒトがいる、と実感した。それは少数民族が集まって出来たお国柄なのか何故被らないんだらうと思うほど

様々なヒトが歩いている。

ふとキツネさんの有効活用を思い出した。

アジュラ連合国というのは人種で言うと大まかに3つに分かれる。

『獣人』は『獣』が人体化したヒト。

『半獣』は『人間』と『獣』が融合したヒト。

残りの1つは『人間』。

完璧に理解するには『獣』についての概念やら歴史やらを知らないといけないし、

すつごくややこしかったりするので流石にソコまでの有効活用は遠慮した。

まあ大事なのは己の部族のみだそうで人種についてはそれほど細かく気にしないそうだ。けれど『半獣』より『獣人』の方がレアというか秀团的に上らしいので間違えると失礼になるらしい。

で、『獣人』と『半獣』の見分け方が一応ある。

『獣人』の見た目は二足歩行する動物で、『半獣』は人の肌の部分がある。

ただポテとテマの『ユラ族』は見た目まるつきり兎型の『獣人』という例外もあつたりする。まあそれは少数になるみたいだけど。

「つと、まあこの辺まで来たらいいか」

気が付くと巨塔までの距離が大分縮んでいた。

これ以上近づくと見上げる角度がきつくて首を痛めそうと判断した私はガリガリと

小さくなつた飴を噛み砕きながら周囲を見渡した。

やはり観光名所であるからお土産屋さんが多く、パツと見てお目当てのものがあつた。そんな適当な一軒に入る。

「いらつしやいお嬢ちゃん。何をお探しかな？」

店に入るなり声をかけてきた暇そうなおつちゃん。

頭にねじつたタオルを巻き柴犬のようなクリーム色の毛の獣人。

入るなり話しかけてきたりその見た目からも「せつかち」と判断した。

ま、ヒトは良さそうだけど…。

「『揺るぎなき巨塔』の絵が描いてあるしおりつてないかな？」

簡単に持ち運べるお土産といえはこれくらいしか思いつかなかった。まだ旅の途中であるし、荷物を多くするわけにはいかないのだ。

おつちゃんは「んー」と唸るように考えてからゴソゴソと探し始めた。

「『しおり』、ねえ…他国、いやオルブライト王国の品かね？」

「そ、そういうのつていうわけでもないんだけど…本とかにここまですみましましたよーって

いう目印な紙端つて感じかなー」

「おーそれならソレに使いそうなのがあつたな。ちよつと待ちな焦つた。」

店の奥に消えたおつちゃんに頷き返しながら内心冷や汗が。

いや…そつか、しおりはこの世界になかつたのか。

考えてみればそうだ。本はまだ一般庶民層に絵本などといった力タチで普及して

いなく、学術書とか専門書や国政の書類といった『残すべき記録』でしか使われていなかった。

私が国家図書館管理司書長なんていう紙に埋もれた職だから勘違いしていた。

ドキドキしている心臓を押さえながら店の商品を眺めていると奥か

らおっちゃんが

小さい箱を抱いて戻ってきた。

「いやあ待たせた。お嬢ちゃんが探していた『しおり』ってこんなので良いのかな？」

目の前にポンと置かれた箱を覗くと薄い木の板や金属板、紙の束がいくつも入っていた。

「手にとつても大丈夫？」

「おう大丈夫さ。ただインクが付いているのもあるから気をつけな」

なるべく汚れていない綺麗なモノをいくつか取り出してみる。

するとドレも『揺るぎ泣き巨塔』が忠実に描かれており、金属板は彫られていた。

街並みから見上げるようなアングル、街の上から高さが水平になるようなアングル、『揺るぎなき巨塔』のみで周囲を装飾されたモノもあつた。

私はそれらの中から一つの薄い金属板を取り出し光に透かした。

職人の手で彫られたであろう穴から光が漏れ、まるで『揺るぎなき巨塔』に後光：いや朝日が差しているようで幻想的だった。

「それが気に入ったようだねエ」  
ハツとするとニヤついたおっちゃんが。

よこしな、と手を出してきたので素直に見とれていた金属板を渡す。しばらく私と同じように透かしたりルーペみたいなのでじっくり見たりした後、ため息を付いた。

「はアこりゃ『カレリ・マド・ピターチエ』の結晶板か：お嬢ちゃん目がイイねエ。」

稀代の細工師の作品を見抜くなんざ並の鑑定士でも難しいのに「んーその評価は嬉しいけど、そんなモノならしおりに使うのもつたないんじゃないかな？」

確かに一番綺麗と思つたのはその結晶板とやらだけど、紙一枚の絵

にしたって

充分なのだ。けれどおっちゃんは首を横に振る。

「確かに値段がちィと高くなるかもしれないがこの結晶板はさっきお嬢ちゃんの見方で

楽しむモンだ。それを見抜いたお嬢ちゃんに持つ資格があるさ」  
布で汚れなどを拭き取られホラ、と私の手の中に幻想的な画の結晶板が。

「持っていていきな。それで色んなアジュラの力オを見ると良い、それこそが作り手の

願いのハズだ」

再び道を歩く。

今度は『揺るぎなき巨塔』に向かつてではなくその近くにあるらしい休憩所みたいな広場だ。

地元のヒトだけが使うような小さな広場みたいだがそこに『揺るぎなき巨塔』をゆっくり眺められるベンチがあるらしい。小さくても見つかりにくくても行き方さえ知っていれば迷うことはない、と広場を教えてくれた先程の獣人のおっちゃんは力説した。

…何か迷ったことあるけど！な必死にも見えたのでどうしようかなーとは思ったが

迷ったら諦めればいいやと開き直ってこうして広場に向かっている途中、ふとそういえばと足を止めて呟いた。

「って私今迷子じゃなかったっけ？」

教えてもらった行き方通り進めば問題なく到着した。

何で初めての人間でも辿り着ける説明が出来るのにあんなに必死だったんだろっ。

まあいいや。

「折角の光景を楽しまなきゃ」

人工的に植えられた林の中にあつたその小さな広場は道から見えにくくさらに屋根などなくただベンチが円型に設置されているだけなのだ。

一応道として石が点々と埋められていたがほとんど草木で隠れてしまつて意味を

なくしている。そんな中、というのは少々変かもしれないがそれはあつた。

『揺るぎない巨塔』に背を向けて10歩。

次にクルリと反転。

更に首を斜め45度ほど上へ。

そしてその視界には『画』があつた。

『俺たちアジュラの民にとってあの巨塔は特別過ぎるんだ。巨塔

以外の建物が

こんなに低いのは法律に規制されている訳でもその技術がない訳じゃない。

自主的に建てないのさ。結局…突出した高さといいその名と

いい象徴にも

規則にもなつたが孤高の存在。

アジュラは集合体だ、それが『ひとつ』と表現されちゃあ昔を知っているヤツらに

してみれば気が気でない…想像できないだろうがそんなモノなのさ。色々あるんだ』

広場への案内の最後、獣人のおっちゃんは説明の時よりも真剣な顔で語ってくれた。

『あの広場はねエ、そんな間違いを気付かしてくれるトコロなんだ。行ってみな、きつとイイと思えるモノが見えるハズさ』

アジュラのヒトでもなくオルブライト王国のヒトでもない。  
この世界にとつて異世界人である私は爪先程度の知識でかろうじて  
やっていけている。  
けれど。

そんな私でも確かに『イイ』と思えた『画』があった。

ただ純粹に見とれていたその時。

私しかいなかった小さな広場に複数の集団が賑やかにやってきたのを  
気付けないでいた。

気付いたのは私を現実に引き戻した一言。

「あれ？ ニオイが付いているな」

キツネさんでも今日親切にもらったおっちゃんでも広場<sup>ココ</sup>までの  
道を説明してくれた

おっちゃんでもないその声。

たった一言だったが力強さが感じられる声音にその発信源に振り向  
くと。

「は？…いや…え？何事？」

狼のような鋭い目つきの6人の獣人が小鳥<sup>わたし</sup>を見つめていた。

おまけ

オルブライト王国首都アズライト 王城内のとある一室

三ヶ国の幹部クラス以上の重要人たちばかりが集って行われる食事会の開催が  
決まってからアイザワは旅のパーティーのメンバーだったフランフ  
オルグ皇子と  
騎士のケルヴィンに各国の歴史から招待客についての勉強会レクチャーが帰還  
して  
からの日常と化していた。

そして今日も勉強会が行われる予定の王城内のとある一室に向かうと  
教師その2のケルヴィンがすでに準備を始めていた。

「あれ？今日ってフランが先生じゃなかったっけ？」

自分の記憶を確かめながらそう問うとケルヴィンはアイザワに目を  
合わさずに言った。

「正直に言うつと逃げてきたんです。この部屋なら“あの人ら”は  
入れないでしょうから」

「そ、そうか！」

上手い返答が思いつかないまま定位置となるイスに座るアイザワ。

そしてすぐに淹れたての紅茶が彼の目の前に置かれた。

その一連の動作は教師と生徒としてはありえないが、元々一緒に旅  
した仲間で勇者と従者なのだから。

ポットに手を添えたままどこか遠くを見つめているケルヴィンに「  
S属性ないし俺はノーマル！」とかつて主張していたアイザワは慌  
ててパニックなままの頭で弾き出した台詞を言う。

「き、今日はケルヴィンがいるってコトは鬼フランはこ、来ないんだな！」  
自覚ナシで爆弾がセットされた。準備は完了。

心の中で密かに「でもMだよな？」と確認はしていないがそうだろ  
うと決め付けている

ケルヴィンは苦笑。

確かにアイザワにとってフランフォルグは魔術の先生という優しい

言葉なんかではなく最初から鬼教官であり、それは魔術だけでなく普段から全てにおいてそう評価している。ソレに対してケルヴィンには頼りになるお兄さんと落ち込んでいるなら励ましたいと気遣う辺りまるつきり正反対である。

「何もそんなに必死にならなくても良いじゃないか」

ケルヴィンはこっそりと爆弾の導火線を確保。タイミングを計らう。

「アイザワがそんな器用なことできないのは知っているし」

クスクスと笑うケルヴィンにアイザワは照れているのだろう、少し斜め下を向いて

俯いている。

「まー器用じゃないってのは認めるけどさー」

器用でないのを認めるのと不器用であるのを認めるのは同意義のようでそうではないらしい。心なしか発言に力が込められているようにケルヴィンには感じられた。

だがしかし、そんなほっこりするようなシーンとは裏腹に導火線に火を付けた。

勿論、躊躇なく。

「ちなみに今アイザワの後ろにいるフランフォルグ様（上司）に現状報告を求められると

思うけど…私（部下）は正直に包み隠さず言いますからね？」

「oh…」

「ふむ、今日はここまでにしといてやろう」

その言葉、待ってました！と言わんばかりに机にダレるアイザワ。全てにおいて優秀なフランフォルグは教師としても優秀だった。とても優秀だった。

きつとアイザワが現実世界で通っている中学校には勝てる教師など

いないだろう。

もしかしたら進学校と呼ばれるトコを目指す子が通う塾の講師以上かもしれない。

まあ塾行ったことないしイメージだけなんだけど。

ダレているアイザワを完全に無視して片づけをするフランフォルグにケルヴィン。

ケルヴィンは引火したことを悪びれる様子は一切なく今は新しく淹れ直した紅茶を鼻歌

交じりに用意している。

あの時、このヤロウ…と恨めしい思念を飛ばす前に鬼の怒気が部屋を充滿した為

アイザワには普段より3割増？いやいや5割増でしょう（アイザワ視点）な鬼教師

パーセンテージで行われた本日の勉強会。その感想を聞くと、数々の修羅場を潜り抜けてきたケルヴィンは「いつものことじゃないか」

その以上の場を無敗を誇るフランフォルグからは「このバカザワが」

…ともかくこうして勉強会が終わり、いつもの雑談会がその場で行われた。

話題は旅の思い出話から始まり時折フランフォルグの一人旅時代やケルヴィンの

苦労話が混じったりもしたが、和気藹々という表現が今度こそ終始当てはまる。

紅茶を2回ほどおかわりもしてそろそろ日が落ちるし雑談会も閉会に近づいた頃。

そつえば、と持っていたティーカップを下ろしてフランフォルグ

が口を開く。

「アジュラ商連を通してポテとテマから食事会の返事が来たぞ」

ポテとテマといえばアイザワにとって非戦闘員だとしても大事な仲間であるのは

譲れなく自分が現実世界に帰る前に会いたかった半獣達である。

「どうだった？」

「そう急かすな。 … 2人とも『喜んで！』とただ一言だ」

つまりもう一度会える！その事実だけでも両手を挙げて喜べるアイザワは流石にそう素直に表現するのは恥ずかしいので1人ガッツポーズを小さく。2人が見ているのは同じなのに。

ケルヴィンはそんなアイザワを視界から外してフランフォルグの方を向いて。

「しかしその返事だと我々と一緒なのかアジュラ商連の代表としてのなのか

わかりませんね」

フランフォルグはそんなアイザワを視界から外してケルヴィンの方を向いて。

「どう扱うかは我々に一任する気だな。 … しかも連絡を取ろうにもアチコチ

移動しているから難しいし」

「僕としては『仲間』として迎え入れたいんですけどね」

お茶請けとして用意されたマフィンは王族専属の料理師によるもので騎士である

ケルヴィンでもこうした場合でなければ食べれない一品だ。

甘党ではないフランフォルグのためなので甘さは控えめだがそれでも充分に美味しい。

「…実はその辺が曖昧なのは『国家図書館管理司書長』が不在のせいらしい」

「王城七不思議のうち4つを占める『管理司書長』、ですか」

確か義理兄が会ったとか言ってたな、とおぼろげな記憶を掘り返すケルヴィン。

首をかしげる彼にさらに話を進めるフランフォルグ。事情がわからないのだからと判断したらしい。

「その『歴史』を決める人物がな、今俺たちの旅路を纏める為に旅に出ているんだと。」

俺はソツチについてはほとんど母上に任せているから詳細は把握していないんだ

が……」

一旦紅茶で口を潤し、話を続ける。

「ソイツがポテとテマを俺たちの『仲間』として扱うのか『アジュラ商連の派遣隊』として

扱うのかによってソツチはそれに従うしかないのだ」

「王族が一部門の長の決定に従うのですか……」

政治軍事全てにおいて最高位に存在する王族、ましてフランフォルグがいう母上とは

国妃だ。エリートでもある第一騎士団であるケルヴィンでさえ雲の上と感じる人達が

従わなければならぬ、という事実には驚くのは無理もない。

「『歴史』と食い違いが発生するのは喜ばしくないだろうか？ しかも食事会と

銘打った『三ヶ国共同友好宣言』だ、些細なコトさえも気にするのは仕方ない」

気に喰わない、そんな表情をしながらも仕方ないと言うフランフォルグ。

ケルヴィンは自分が口を出してどうにかなる話でもないしこれ以上その話題をするとさらに機嫌が悪くなるのは分かりきっていたのでアイザワと違って器用に話を変える。

「そつえばこの間騎士団で ……」

こうしてとある王城の一室で  
紅茶と甘さ控えめのマフィンを囲み、穏やかな一時が過ぎていく。

オマケのオマケ

一方文章での表現でも忘れ去られていたアイザワ。

実は「おい」とか「無視するな」とか発言していたが同席者2名によつてフィルターが

かけられないことにされていたアイザワ（勇者）。

シカト、というスタイルでたっぷりと羞恥心を味わいふてくされた彼はお茶請けに用意されていたマフィンをヤケ食いしていた。…

後に喉に詰まらせたり1人で全部食べてしまつて密かに気に入つていたフランフォルグに怒られたりするの……また別の話。

異世界編 その17 『アジュラ：首都コルトベララント』（後書き）

年内にあともう一話投稿したいところですが：それまでの予定を考えると難易度高すぎます、正直。今はあまり無理せずのんびり執筆を続けるつもりなので気長にお待ちください。ではまた次回。

異世界編 その18 『アジュラ：ティンガ族』 (前書き)

前回の更新から1月以上…すみません。

異世界編 その18 『アジュラ：ティンガ族』

6人の獣人に見つめられ固まっているとその内の1人の男性が話しかけてきた。

「もしかしてオルブライトからの人ですか？」

狼という風貌にはいささか似合わないような丁寧で落ち着いた言動。害意というものがまるつきり感じられないので多少警戒しながらも答える。

「はい、任務でコチラに訪ねました。…あの、何か用ですか？」

未だに離れない視線に居心地の悪さを感じるがそれをそのまま指摘するのは悪いだらう。

だつてただ見ているだけなのだから。

「そうですねやはり…ああ警戒しないでいいですよ。私は『マライル・マト・ティンガ』」

「あたしは『フォルリレーナ』！ リーナって呼んでいいよ、お姉ちゃん！」

「そっか、リーナちゃんだね。よろしく」

と、突然抱きついてきた1番小さい獣人の子供の頭を撫でつつ…つてすげーフワフワする。

あまりのフワフワ感に両手で撫で回したくなるけど、何とか抑える。するとヒョコツとリーナちゃんより一回りほど大きい獣人が。

「あの、初めまして。僕は『ズスフィル・テト・ティンガ』って言いますっ」

「『フィー』って呼んであげてねっ！」

リーナちゃんの後ろに半分隠れるような感じだけど一生懸命見上げてきて…毛が長いタイプなのかフワフワ感倍増で狼というより犬っぽい。

「初めまして。フィー、『君』って言った方が良かったかな？」  
フルフルと横に振られる首。

「うん、じゃあフィーよろしくね」

視線をちゃんと合わせてそう言えば恥ずかしそうに俯いてしまうフィー。

…こうしてみると『狼』っぽいという外見からの先入観は彼らに失礼だと思い、改めて子供2人除いた大人4人を見てみるとバラバラな個性が。

そして私と視線が合ったことから彼らからの自己紹介を受けることに。

1番最初に名乗り出た落ち着いた言動はマライルさん。

ギルドの支部の1つの所長さん。リーナちゃんのお父さんでもある。

その隣にいた細身の姿勢が良いのは『ガザリア・キト・ティンガ』。ガザリアさんはマライルさんの部下でハンター講師をしている。

で、残りの2人は防具・武器を所持しているからハンターで決まりで、実際その通りだった。

男性の方は『オロキユス・テト・ティンガ』。

腰には剣を下げていて頑丈そうな防具を身につけている。フィーとは同じ『テト』性で、2人はいところになるらしい。フィー

自己紹介の際握手を交わし、好青年といった感じだった。

最後の1人は女性。『レイルリー・ト・ティンガ』。

オロキユスさんより軽装で皮製の防具のようだが右腕全体を覆い肩から突出している武器兼防具はキツネさんの防具に施された魔術装飾とは全く異なる装飾が施されていて少しばかり気になった。

彼女からは『レイ』と呼んでくれ、と言われた。

リーナちゃんにフィーにマライルさんにガザリアさんにオロキユスさんにレイさん。

ぐるっと見回して頭の中で名前を反復させて…よし覚えた。

そして顔を上げたら6人の視線が集まり、それが私の番だというのはわかってる。

「私はコトリ。 オルブライト王国国家図書館管理司書長、とかいうのやってます。

よろしく」

『ティンガ族』。

アジュラ内でも1・2を争う戦闘能力の高さを誇り、ヒトとは全く違う『獣人』という種族の彼らは1000年2000年は余裕で生きられる。

外見は二足歩行の狼といった感じだが手はヒトと同じ5本指、言語も同じでありそこからは特に狼という恐怖感はそれほどない。毛色は灰色だったりクリーム色だったり様々で、三毛猫のような模様がそれぞれまた違う色の毛で描かれていて：リーナちゃんやフィーといった子供は正直狼というよりは犬に見える。 まあ狼も犬も元は一緒なんだけどね。

しっかし何でみんな私に有効活用をしたがるのか。

主に説明してくれるのはマライルさんとガザリアさんの2人。職种的にも説明には慣れてるだろうしとてもわかりやすくもあるのでついつい聞いてしまう。

そんな和やかな感じで彼らに案内されるがままについていく。

そして現在。

私を含めたティンガ族6人、計7人は『エラクラレ・トドヴァール揺るぎなき巨塔』の中にあるギルドセンターアジュラ連合国本部の1室にいた。

で何をしているのかといえば『治療』。  
これが元々の『ニオイ』に繋がるわけだけど、これまたマライルさんがわかりやすく説明してくれた。

ティンガ族はヒトよりあらゆる点で勝っており、その中でも彼らの『獣』が狼らしきものであるから非常に『嗅覚』に優れている。  
それは単純なニオイだけでなく個人の魔力をもニオイとして嗅ぎ分ける。

で私からした「ニオイ」というのは魔物のニオイ。  
魔物というのは共通して闇属性の魔力を漂わせているからかどの魔物もほとんど同じニオイがするようで。

まあヒトによつては魔物のニオイも個々に嗅ぎ分けられるらしいがそれはいらぬ有効活用というものだ。

ちなみに私にそのニオイがあると指摘したのはオロキユスさん。  
やはりハンターとして数々の魔物と相対したことがあるからそういつたニオイに敏感らしい。

ちよつと話がずれてきたような。戻そう。

ココで肝心なのは魔物のニオイ、つまり闇属性の魔力がヒトから感じられる、ということだ。

どうも闇属性の魔力というのは魔物を魔物として成り立たせている要因というか。

無機物も闇属性の魔力に侵されればそれは魔物として機能するといふし、ヒトが闇属性の魔力によつて狂ったとか魔物になったとかは聞かないがともかくヒトから闇属性の魔力がニオうのはおかしい。

…心当たりはあった。というかありまくりだ。

観念した私は正直にココ、コルトベヲラントに来る前に魔物の群れ

に襲われ部下と2人で戦闘を行ったこと。  
そしてその際に左足が魔物の口に入り込んだことを正直に話した。  
話せば話すほどその時の情景が脳裏に展開され、思い出せば思い出すほど体が震えたような気もするししくもない。

マライルさん達は私の話を聞いて『揺るぎなき巨塔』内のココ、ギルドセンターに連れて闇属性の魔力を清める…『治療』をしてくれている。

私の左足を水で洗い、ツンとした匂いのする薬草を巻きつけておりのはガザリアさん。

その隣でにこやかな表情で説明してくれているのはマライルさん。リーナちゃんとフィーはオロキユスさんに連れられてやや離れたところに。

レイさんは治療に必要な道具を持ってきたりとガザリアさんの手伝いをしながら私の治療を見つめていた。

「しかし人間が闇属性ニオイの魔力を付けるなんて…お嬢ちゃんは何属性なんだ？」

薬草の上からきつめに包帯を巻きつけ治療も終わりに近づいた頃、子供2人を構いながらオロキユスさんが私に聞いてきた。

属性、か。

「私は“無色”なんですよ。オルブライトでもめつずらしいようですけど…」

色持ちがほとんど、っていうか大半の中ただ無色の純粹魔力だけを保有する人間。

キツネさんだって「風」と「水」の色を持っているというのに…魔力の量も容量も半端ないらしいが倒れたり痺れたりで良いことなんかない。まともに魔術も使えないしね。

「へえー無色か。そりゃあ俺たちみたいなの『白色』と同じなんかね先生？」

「白色？」

炎が赤だったり水が青だったりと色で表現されるのは知っていたが白とはどんな属性なんだろう。

首をかしげる。

「あ、そうですねオルブライトの方でしたら専門でもない限り『白』は知りませんよね。」

いいでしょう、お教えします」

先生と振られたガザリアさんは活き活きとしているように見えた。

まあハンター講師って言うってたしね…。

「先程のマライル所長の説明に重複しますが獣人・半獣と呼ばれる種族の

ほとんどは魔術が扱えない代わりに五感・身体能力が人間に比べて桁違い

なんです。　　だけど我々は魔力がないというわけでなく、むしろ保有

する魔力によってそれらの能力を手に行っているのです。

人間の水・風・炎・大地といった個々独自の色彩色ではなく、『白色』は

個々に差異はなく同じ魔力色。　　勿論魔術に長けていたりする一族は

その種族特有の色を所持していますが基本は同じです。　　例えば占術を

得意とするピキアート族がそれですね。

『白色』は大気から魔力を補充することは一応出来ますが色彩色に比べれば10分の1にもならない速さでしょう。　　ですから『白色』と

「いうのは獣人・半獣が保有する、あるいはあるがないような扱いの魔力色、

といったところでしょうか」

「質問がありますか？と軽く一回り私たちを見渡すとガザリアさんはまた口を開いた。

「では次に『白色』と『無色』の違いを。無色もまた白色と同じで保有者

すべて同じ魔力色となりますが我々と違って身体能力の向上などは一切

ないです。特にこれといった効果があるわけでもなくただ途轍もない

量の魔力とその貯蓄タンクを持ち合わせていると行っていいでしょう。

そして無色、純粹魔力は大気の魔力とほぼ同じ性質を持っているという

特徴もありますね」

「ん？ それじゃあそんなに魔力があっても何にも出来ないってことじゃないか？」

「いえいえ。確かに色持ちが使う魔術は使えませんが魔力そのものの力を動力として

用いる魔術道具マジックアイテムはちゃんと使えますし、その魔力量から霊珠などで外部供給

する必要はないんですから。その点は長所として挙げられると思います」

「なるほどねえ」

「はい、どーぞ」

「ありがとうー！」

「ありがとうございます…」

私は飴玉を袋から取り出し、1個ずつリーナちゃんとフィーにあげた。

結局いつのまにかガザリアさんの説明はレイさんとマライルさんの3人の論議会になってしまった。

蚊帳の外になってしまった私とオロキユスさんはキヤイキヤイ楽しそうな子供2人のところに逃げ込んだ。

「オロキユスさんどうぞ」

飴玉はアジュラの砂漠地帯にしかない『リコ』という木の実の果汁が入ったモノ。

獣人の握力でも割れないこの木の実は非常に濃厚な甘さを持ちそのまんま食べるよりもこうして飴や飲み物に数滴入れるだけで充分にその甘さが楽しめる。

アジュラの名物料理というほどではないがB級グルメ的なアピールがしてあったので親切なおっちゃんにせめてのお礼ということで購入したものだ。

「おお悪りいな。…リコか、なつかしいなーこの味」

左足は薬草と包帯の2重で巻かれていてヘタに動けないので長椅子に座りっぱなし。

そんな私の隣にオロキユスさんがドサツと腰を下ろす。

「何かイメージと違うって感じですか」

「んう？ どの辺？というかどんなイメージ持ってた？」

目の前には木で作られた玩具で遊ぶリーナちゃんとフィー。

更にその奥の小さな円状の卓上を囲んで話し込む大人3人。

お互い飴を転がしながら話す。

「いや見た目狼じゃないですか。だから強さ的な力があれば何でもできる！知識

なんぞいらねえ！な勝手なイメージあったんですけどああやって議論が行われて

いると…違うなーくらいです」

「…ホント勝手なイメージだなお嬢ちゃん。まあそれも否定はできないな。」

事実里の中のヤツらはそういう傾向のが多いつて聞くしな」

「ふうーん、大変そうですねえ」

「他人事だなオイ」

「だって、そうですねえし」

ガリガリ。

ずっと口の中で転がしていると疲れるのである程度満足したらすぐに噛み砕く、私の習性。

「そおいや気になったんだけどさ」

「何ですか？」

「国家図書館管理司書長ってなんだか引きこもりな職のイメージなんだが、なんで

ココ（アジュラ）にいるんだ？」

「…言いますねえ」

「お互いさまだろー」

してやったり顔のオロキユスさん。

好青年というワードに2重線を引く。これはあれだ、その辺の今時な若い兄ちゃんだ。

コホン。

まあそんなのは後回しにしとして前言撤回の言葉をもらうために頑張りますか。

「国家図書館はオルブライト王国のあらゆる文化歴史を記録・保管を目的とする

王様直属の部署になります。で管理司書長はその部署で1番偉

く、国としての

歴史を纏める職務が与えられた際には全てにおいて公平な立場で書き記す。

私がアジユラにいるのも今回の任務で立ち寄らなければならなかったから、です」

「おオー…」

自分でもびっくりするくらいスラスラと言葉が出てきた。

まあ本当は私とキツネさんしかいない部署でちょっぴり見栄張っちゃったけど…いいか。

私だけではないんだし、ね。

それに前言撤回のリアクションもらえたから良しとする。

「なるほどなーハンターでも商人でもないのにココに来たのはそういうことか。」

「じゃあ調べ物が誰かに会いに来た、とかか？」

「どっちもですね。今日は調べ物だったんですけど収穫が全くなくて…ハア」

一応勇者アイザワの過去のこの辺りの戦歴をゲットしたから収穫なしではないけれど最後に大き過ぎる疑問が出てきて台無しだ。

思わずため息が出る。

「ふうんなるほどねえ…」

リコの飴玉をぽい、と口に放り込む。

「なあお嬢ちゃん。互いにハラ割って話してみねえか？」

俺たちティンガ族は『ギルド』の創設・運営しているんだ、損はしないと思っぜ？」

「ほへ…?」

もう一袋買って行こうかな、って考えている場合じゃなくなった。

カリカリカリ。

開けっ放しの窓から差し込んでくる日差しは随分と赤みを帯びていた。

どうやらもうすぐ日が沈むようだ。

部屋の真ん中に置かれたテーブルの上には何枚もの紙が散らばっていて、端には分厚い本を重石として活用中でありその下には『物語』が書かれた紙がまとめられている。

カリカリ、カリ。

何故か共に異世界へと来てしまったボールペンの動きを止める。顔を上げて窓のほうを見ると、『揺るぎなき巨塔』が窓枠の中に。

「……」

夕日を背後に受けて巨大な影を空に作り出している、そんな景色を目にしてふと思いついてテーブルの上をガサコソ探る。あった。

『カレリ・マド・ピターチェ』の細工結晶板。

窓際に移動して夕日に透かしてみると結晶板に描かれた『揺るぎなき巨塔』が現実とは反対に光を一身に集めてまるで浮き上がったきそうな絵がソコにあった。

「……」

日が動いていくにつれて結晶板の絵も動いていく。

ユラユラと光が波打つ様をぼーっとして見つめながら、思い返す。

オロキユスさんの提案に私は乗ることにした。

任務については言い触らして得するもんじゃないなので口にしなかったただけなんだけど、どうやらそれが功を奏したようだ。

まあお金じゃなくて私が任務を話せば欲しい情報が得られるのなら良い話じゃないか。

「さつきも言っただけど私は『歴史』を纏める職でね、今回は『魔王を倒した

勇者アイザワの軌跡』を纏めるのが目的。それであらゆるモノ

から公平な視点で

なければならぬからこうして旅路をなぞる様に旅をしているの」「やっぱりな。　しかしそんなに急かすモンでもないだろ？」

むしろじっくりと調査して作るモノじゃないのか？」

ガリ、と飴玉を半分に砕く。

「勇者アイザワはもうすぐ帰還するからね。　ブームが去る前に忘れられない大波を

作りたいたいと思うよ」

というか異世界初日にワケ分からないまま言い渡されて理解した時には遅かった、って感じだし。

3回、4回と細かく砕いていく。

「さて、バラしたんだから私の質問に答えてくださいよ？」

「ハンターの俺で答えられればいいんだけどな」

「駄目なら？」

「マライルのおっちゃんに頭下げるさ」

結晶板の輝きは鈍く続いていた。

けれど頭上の空は暗く青く沈んでいて、もはや視線の先の遠い空しか赤はない。

私はそろそろ来るであろう霧に備えて窓を閉めた。

大事な『物語』を濡らしてはいけなしね。

紙が散らばるテーブルに戻るとどうやら離れた際に一枚紙が落ちてしまったらしく、イスの足元に白いのが。

腰を折り曲げて拾うとそれは紙ではなく『物語』というか『破片』だったようで異世界の文字が書かれていた。

「『ドラゴン』か…」

ファンタジーなら王道な存在か。

頑丈な鱗に覆われ蝙蝠のような羽を生やし長い尻尾鋭い爪に「絶対王者」の眼差し。

私のイメージとしてはそんな感じであと色は赤で人の10倍以上は大きい。

色は何かの影響かもしれない、覚えていないけどね。

とにかく何故この『ドラゴン』というワードが書いてあるのかといえればこれはオロキユスさんからの情報なのだ。

「SSSランクの任務？」

早速質問するとオウム返しのようにまんま返された。

「もしかして知らない？」

「というか過去にSSSランクの任務が発令された記録はないんだ。こっちが驚きさ」

「え…けれどセンターで確認したんだけどな…」

私はポケットから勇者アイザワのギルドの達成任務の写しをオロキユスさんに見せながら詳しく説明すると思いが当たるのがあったのかポン、と手を叩く。

「そっか、あれかあ…」

「でこのSSSランクはどんな任務なんですか？」

「『ドラゴン』さ」

「え。」

「ケラスを襲撃したドラゴン討伐任務、それがそのSSSランク任務だ」

…結局どういった経緯なのかどんな戦闘なのか報酬はどうなのか、とかはオロキユスさんからは聞けなかった。

いや正しくは『知らない』だそうだけど。

というのもオロキユスさんはレイさんと護衛任務でケラスの武術大会を見に行った豪族に従ってた時にさあアジュラに帰ろうかというタイミングでギルドから呼び出しがあった。

ティンガ族であるから任務よりそちらを優先し、代理を立ててギルドへ向かうと『ドラゴン襲撃』の情報でパニック状態でその負傷者を治療する為の人員と物資の護衛としてケヲスの西の都へ。

…それからちよつと省かせてもらうが襲撃したドラゴンは一通り暴れるとツンボス突山に向かって飛んで行った。

多数の負傷者が発生したケヲスはギルドにドラゴン討伐任務を申請でそれを受けたのが勇者アイザワ一行というわけ。

オロキユスさんとレイさんは欠けたケヲス兵の城壁警備を手伝っている。と今度はマライラさんの護衛としてアジュラに帰ってきた…ということだ。

一番最後の任務であるしあの『ドラゴン』討伐ならSSSランクも領けるから間違いない、ということだ。

これは彼の推測でしかないんだけど、任務内容が白紙なのはここまで情報開示するかとか色々事後処理するためにケヲス支部所長のマライルさんがアジュラに出向いているんじゃないか、とさ。

まあそれなら話的にも繋がるしこれ以上はすべて推測でしかないの。後日「国家図書館管理司書長」としてマライルさんとお話することにした。

オロキユスさんと話し終わって気が付けば大分時間がたっていて、そろそろ宿に戻ろうと呟くとレイさんとオロキユスさんが送ってくれると申し出てくれたので走行獣の引く車に乗って泊まっている宿へと無事に帰還できた。

レイさんにマライルさんへの伝言も頼んだし、欲しかった情報も得られそう。満足しつつ部屋の鍵を受け取りにカウンターに行くと受付のお姉さん（キツネ耳の半獣）にこう言われた。

「あれ？ お連れ様はご一緒じゃないんですね」

…忘れてたし。色々。

部屋に置いてあった荷物からガサゴソと漁ってお目当てのもの一式を取り出す。

外を見ればやや白っぽく見えるので霧が出始めたんだろう。

「まあもうすぐ、ってトコロかな」

やけに響いた声を無視してストックしてある水を感じで適当な量を沸かそうとする。

電気ポットというのがないので炎の宝珠を利用した小さな簡易コンロが部屋に1つ備えられている。

旅では重宝する今では使い慣れたヤカンを設置し、炎を発生させる。沸騰、まではいかなくとも人肌以上に温まればいいだろう、2人分のティーカップと陶器製のティーポットに注いで温める。

もう1度水、今度は2人分を火にかける。

これは沸騰直前まで温める。

ポコポコと浮き上がる泡が5円玉程度になったらそれが目安で、加熱中に温めたティーポットのお湯を捨て茶葉をセットしておく。

確か1人1杯だったかな？

お湯の温度が変わらないうちにポットに高さで勢いをつけて注ぎ、茶葉を踊らす。

注ぎ終わったらタオルを巻きつけて保温しつつ蒸らす。

茶葉は大きいものだったのでもより1〜2分長く蒸らす。

1式の中から砂時計を取り出し、ひっくり返す。

その間に砂糖やミルクを準備しておき、砂が落ちきる少し前にカップのお湯を捨てる。

「よし」

砂が下へと完全に移ったのを確認するとタオルを外し、早速注ぐ。あまり蒸らしても渋くなってしまうから。

ティーポットを揺らしながら、丁寧に注がれたのを均等に。

しっかりと最後の一滴まで耐えつつカップへと落とす。

どこか意識の外で慌しくドタドタ走る音が聞こえた。  
それは段々大きくなるような気がした。

ミルクは牛乳ではないもののこの異世界での該当品。

どの動物から絞られたのかは怖かったので聞けなかったが牛乳より濃厚で甘く、ミルクティーのミルクとして扱うのなら此方の方が個人的に好みなんだとか。

誰の好み？ そんなのはわかりきっている、キツネさんのだ。

音が部屋の前で止んだ。

残念ながらここにある食べ物といえば旅の食料で、せつかくの『紅茶』に添えられるような菓子はない。

一応菓子といえば私の買ったクコの実の飴があるがこれでは駄目だろう。

おそらく走って乱れた身嗜みを整えているのだろう、彼が1番持っている可能性が高い。

なくても霧の中において濡れて冷めた体を温めるのに丁度いい『ミルクティー』を用意した。

持っているであろうクッキーは任せてしまおう。

ガチャ。

「…小鳥さん」

服装はちゃんとしているのに真ん中分けの黒髪が乱れている。

私は冷めてしまうのを避けるため入れずにいたミルクの瓶を持ちながら席に案内した。

「ほらキツネさん早く座って。折角淹れたんだから、お願いしますよ」

席についたと同時にティーカップの隣にミルクを置く。

まだ湯気の立つ『紅茶』の香りを1度嗅いだキツネさんはミルクを入れ『ミルクティー』に。

そしてゆっくりと一口。

「色々と改善すべきところがありますが……まあ今は楽しみましよう」

テーブルの上にコトンとクッキーの入った袋が置かれた。

おまけ とある日の火守人の回想く勇者アイザワただ今Lv42です

「大丈夫か？」

そうアイザワが問えばコクンとしっかりと頷いた。

「…無理しなくてもいいからな。しっかりと休んどけ」

意思表示の動作はちゃんとしたものの目を合わせていないし顔色は青白い。

大丈夫。その返事は明らかにうそだった。

けれどアイザワは隣に腰掛けたまま火の番を続けた。

何もできない。

それが実によく実感できた。

結局自分は足手纏いでしかない、使えるのは「勇者」であるというだけ。

「…」

何で俺は「勇者」としてこの世界に召喚されたんだろう？  
気を抜くとすぐに浮かんできてしまう疑問。

召喚されたあの日から今まで。

数えるのも放棄してしまったその疑問が焚き火の向こうにちらつく。

ああ鬱陶しいと思うがなかったことには出来ない。

だって。

四六時中「勇者」でなければならぬ。

母親にご飯だよーと声をかけられたから一旦ゲームをリセット出来る  
筈がない。

起きてもそれまでいた祖父母の家のソレじゃない。

「重さ」を感じる剣が本物であると、現実であると俺の意思を  
無視して伝える。

何で画面越しの現実でいさせてくれない？

俺が「光」属性だから？

…そんなの知るか。

こんな俺をフランが知ったらどうするだろう？

俺を消して新しい勇者を召喚するのかな？

カトリー又だったら何言ってるのよってぶん殴るのかな？

ケルヴィンだったら一応励ましてくれるのかな？

沈んでいく思考と意識にぼんやりとしながらパチパチと鳴る  
火を見つめる。

その時。

コテン、と隣から温かい体温が転がってきた。

「やっぱ疲れているじゃないか…」

その温かさとは反してまるで気絶したかのような寝顔。

「睡眠」という安らぎが一切ない、無表情。

こんな外じゃなくて荷車内に連れて行ったほうが良いんだろうけど、しない。

せめてこの温かい体温だけは失いたくなかった。ただそう、漠然に。

火の中に積み上げられた枝の1つが崩れる。

漠然とした思いなのか願いなのかハッキリしないままその温かい体温を自分の懐に移動し、寄りかからせる。

それにより行動可能範囲が増えた俺は焚き火に枝を足し、また静かに火を見つめた。

このまま朝を迎えよう、そう決めた時に火の向かいに2本の脚が視界に入る。

「お邪魔しますよ」

夜の宙に凜と流れるような澄んだ声が聞こえた。ピキアートか。

僅かに顔を上げれば肌に奔る鱗のせいでいつも青白い肌が焚き火のオカゲで

赤く見える。

「どうしたんだ？ 火番でもないし、今日はとくに疲れているんだろ？」

確かケルヴィンから聞いた。

俺たちが搜索している時に待機していたピキアートたちが襲撃されたって。

待機組にピキアートしか戦えるヒトがいなかったし、かなりの人数で激しい戦闘が

あった…までしか知らない。

アジユラから派遣された2人のうち1人であるフェオマギ・ルト・

ピキアートという

線の細く少し儂げな雰囲気のある青年はティンガのように腕っ節が強いわけではない。

襲撃に気付いて俺たちが駆けつけた時には満身創痍といった感じだった。

フランが「無茶しやがって」と文句を言いながら治癒魔術を行使していたし。

「心配してくれてありがとうございます。けれど僕は日没前から休ませてもらい

ましたし…正直言つと寝過ぎて目が冴えてしまったんです」

腰に剣があるのでちょこつと顔を出しに来たわけでもないらしい。

「けれどフランが治癒魔術で治して休んだからといってもう大丈夫ってことは

ないだろ？」

ここはゲームなんかじゃない、リアル現実なのだ。

「フフ…ならこうしましょうか。リハビリ、ということだ」

「…そんな様子なら大丈夫そうだな」  
パツと見元気そうだがよく見れば包帯が体のあちこちに巻かれている。

けれどピキアートが譲りそうもないので俺が折れることに。

「…」

「…」

火を見つめる。

絶え間なく送られる熱に意識が遠のきそうになるが、ふとあの時はこの真逆で

冷たく幻想的だったな、とぼんやりした頭で考える。

あの時とは…そう、俺が「勇者」として召喚された時だ。

水そのものが淡く発光しているようで、建物内だというのに床一面水浸しの中俺は

「勇者」として立ち尽くしていた。

最初は何が何だかわからなかった。

お盆だったので祖父母の家に家族で遊びに行き、その裏山を1人で探検してたのだ。

年に2回ほどくるココは周囲が山ばかりで同年代の親戚が居ないので必然的に1人な

俺は毎回こうして近くを探検して時間を潰していたのだ。

たまに叔父が付き合ってくれてアレコレ豆知識を教えてくれるのだがその叔父も

家で親父と一緒に飲んで酔っ払っているんだろう。

なのでいつも通り「探検してくる」と言って裏山に来たわけだが何を思ったのか

奥に進み過ぎてしまい腹の音で引き返すことに。

そんな時だった、踏み出した足がゴポツと水に突っ込み、そのまま前のめりに沈んだのは。

慌てて起き上がるとそこはオルブライト王国の「水晶の間」だったのだ。

小説によくそういう設定があるのは知っていたしマルつきり西洋人なヒトたちが

悠長な日本語を話しているし…何より「そうであつたらイイな」と思っていた自分が

いたのだから「勇者」という言葉に食いついたのだ。

ソコから先は早送りだ。

というより濃密過ぎて走らなければ進めない。

『光属性』の『勇者』として召喚された俺はこれからこの世界に現れる魔王を

倒さなければならぬ。

そして魔王の心臓、核となるモノを持ち帰らなければ現実世界には帰れない。

コロスための知識、技術をトコトン詰め込まれ旅は始まった。

震えたのは最初だけであとは…慣れてしまった。

だってそうしなければ生きていけなかったし、『勇者』でいるにはそうしなければ

いけなかったのだ。

ジャラララッ！

「…何してんだピキアート」

不意な大きな音にはっとする。

顔を上げればピキアートがたくさん細かい白い石を手前にはら撒いていた。

「占いですよ」

その中から9粒をヒョイと拾うと今度は火の中へ放り投げる。

「占い、なのか？」

見たことも無い占い方法に興味というより疑心で注目する。

そんな俺に他の石を袋に戻しながらピキアートは説明してくれた。

「僕たち『ピキアート』は占いが得意でしてね、これはただ未来の

『吉』『凶』を

判定するものです。炎から取り出した石の状況で判断するんで

すよ

「へえ…」

するとピキアートは火に手を差し伸べるように近づけると、聞き取れなかったが

何かを呟いた。

すると手から紫の砂粒程度の光が溢れ、合計9本

の光の直線が

糸が垂れるように火の中へ。

そして釣り上げるように上に引くと紫色の糸の先には石が。

「…6個？」

ただしその内の3本には何もついていない。

釣り上げられた石を見てみると火の中に置かれたというのに真っ白のまま、多少

汚れが見受けられるがそれだけだ。

「…」

しばらく無言でその石を見つめていたピキアートは軽く手を振るって砂粒の光を散らせ

落ちていく石をもう片方の手で受け止めると静かに口を開いた。

「僕たちはこの旅で3人、失うことになりました」

俺は無意識に腕の中で眠る少女を強く抱き締めた。

異世界編 その18 『アジュラ：ティンガ族』（後書き）

ようやくできましたその18。 エラーだったり試験期間だったり  
と中々進まなくて…言い訳ですね、すみません。 ただこのままで  
と文量がこれ以上かこれぐらいになるかと思われるので更新スピー  
ドはさらに遅くなりそうです。

スランプ気味とはいえ書き続けるのは辞めませんので気長にお待ち  
ください。

もっともその18-1とか分ければ週一も夢じゃないんですが最後  
までプロットが

あって話数も決まっているので異世界編に関してはこれまで通りに  
いきます。

異世界編 その19 『アジュラ：バラド族跡地』

その19 『アジュラ：バラド族跡地』

相変わらず星座のない空はそれでもきれいだった。

電気というより灯りの代用品があるこの異世界では夜の暗さに困ることは不便があるもののそれほどではなく、中世のような文明でそれが持ち運び可能であることを考えればやはり便利かもしれない。眩しいほどの灯りではなく周囲の判別がつく程度であれば。

「ふむ：なかなかいけますね」

「絶対にゲロ甘そうだし…」

カップの中身の色はわからないが漂ってくる匂いと目の前で披露された材料から味は予想できる。

まあ鼻だけでなくこの辺一体の空気に絡むような甘ったるい匂いがすれば誰でもできるか。

私はいつもの『紅茶』の入ったカップを手に行っているが果たしてこれを素直に飲んでいつもの味がするだろうか？

「いや、無理だろ」

セルフツツコミをしながらあえて『紅茶』ではなく固さだけが特徴のパンを口に入れる。

…何だか心なしか甘く感じるのは気のせいであるとしておこう、うん。

折角温かい手の中のを丁寧に下へ置くと、上を見上げた。

うん、こっちは変わらない。

飛行獣としては新人であるが非常に優秀であるラバルは今ではとつ  
くに旅に慣れ、安定した飛行を行っている。

そんなラバルに乗っている私とキツネさんも体に受ける強風にも慣  
れて始めは慎重だった会話も気が付けば平然とできるようになった。

「なるほど『ドラゴン』とはまた随分なファンタジーの王道ですね」

「まあね。こんなファンタジー異世界となると空想なものも実現  
するんですねえ」

「今更ですね」

なので先日仕入れた情報を明かせば特にお褒めの言葉もなく鼻で笑  
われた。

せつかくオロキユスさんから教えてもらって、更にはマライラさん  
にも話してもらったのに。

私は不満に感じつつもそれを押し込んで目の前の地平線を見つめた。  
赤い岩山が視界に入った。

『カルドゥ・マール  
黒き渓谷』

赤い岩で形成されたこの渓谷はその深さによって谷底が常に暗いこ  
とから名付けられた。

その奥地に私とキツネさんが訪れている『バラド族』の集落があ  
る。

とはいえ現在は『元』もしくは『跡地』と過去形にしなければなら  
ないんだけど。

何故ならば『バラド族』は誰一人としていないからである。

ただ絶滅と言いつつにはいささか情報が足りないのだから、  
その集落に人はもういない。

集落への渓谷の道筋は2つしかなく、アジュラからとケラスから、

そのどちらもとても細く荷車が通るのは難しい。けれど私とキツネさんはラバルという飛行獣なので悠々と上空から集落へと着地した。

赤色の岩を削り、もしくは積むことでできた2種類の住居。

遠目から随分と原始的な住居だなーと思っていたが着陸して建物をじっくりと見てみると住居の岩肌には細かい装飾：花や草蔓、場所によっては魔術回路によく似た紋様が掘られていて、圧巻だった。キツネさんによるとただの岩に回路を刻んでも意味はないから本当にただの装飾ではないか、とのこと。

…私的にはバード民族は高等秘術の『魔法』を扱っていたのだからそっちの意味合いか、もしくは部族の固有文明なものではないかと思ってみたり。

まあ私はただの高校生だし大した知識もないから希望、つてのが強いかな。

だってその方が面白そうだし。

結局。

霧が出始めるまで私とキツネさんはラバルに荷物番を任せ、集落を探索した。

人一人どころか生き物が全くいないこの集落はとても静かで、建物内の生活感ある部屋だけが人が住んでいた証だった。ただ…ひどく散らかっていたが。

「殺された…？」

1人を除いて。

先程までのほんわかとした雰囲気とは違って僅かな振動で壊れてしまっ一本の透明な線が奔る。

壊そうとする意思はなくとも無意識に飲んだ息がそれをパリンと壊してしまふ。

「そうだ。バラド民族自体それほど数が大きい訳でもないが、それでもそこに

住んでいる人間を1人残して全員殺すっていうのは異常さ。

もつとも残った1人も偶然だったようだがな」

ポテの言葉が淡々と届く。

「アイザワ達がそんなバラド民族の現状を調べてた時、『黒き溪谷』の

入り口付近で待機していた俺とテマ、ピキアートに俺たちの走行  
獣が

いたんだが突然人型の集団に襲われてな…なんとかピキアートの  
おかげで

助かったのさ。で、襲ってきた奴らは顔を隠してたが小柄で魔  
術機具を

使用し身体能力が優れる…そんな特徴を持つのはケラスの人間だ  
けだ」

焚き火はその役目と寿命を終えひっそりとしていた。

そしてそれは光源としては当然使えなく、眠っているラバルの側で  
跡だけが残っていた。

今現在、私とキツネさんの間には炎の宝珠が入ったランプが置かれ  
ている。

溜め込まれた魔力を消費して仄かに光るランプは優しい温かさを伴  
っている。

さつきまで漂っていた甘い匂いは風で薄められ、静かで静かすぎる  
夜の匂いしか感じられない。

そんな中、『物語』を読み直していた私にキツネさんが話しかけてきた。

「小鳥さん」

「何？ キツネさん」

私の視線は『物語』のまま。

「確かあの時コルトベヲラントの『エラグラレ・ト下・ウアール揺るぎなき巨塔』の

中に入ったんですね？」

「ええそうですね、その中のギルドセンター本部にお邪魔したんです」

「何故です？」

「偶々ティンガ族の方と知り合って案内されたって言ったじゃないですか」

嘘だ。

本当はこの左足が原因で、『治療』のために連れ込まれたのだ。

…本当にキツネさんは私の言いたくないことを言わせようとしてくる。わかっているくせに。

けれどこればかりは認めることも口にすることもない。する気がない。

「しかしそんな、」

「そんなことがあっちゃうのが異世界でしょ？ ポテとテマに会ったのと同じようなもんだよ」

だから私はコチヲを言い切る。

そうすればそれが真実として通るのだから。

「それはそうかもしれませんが…」

勝った。

でも私は決して嬉しい気持ちにならない勝利を見て見ぬ振りをする。

「ねえキツネさん、私に付き合わなくて寝てもいいんだよ？」

見張りは私がするからさ」

異世界の文字で書かれた『物語』を現実世界の日本語で『日記』へと書く。

翻訳、というよりは『物語』を聞いた私が自分の解釈も加えて『日記』に纏めている感じなので違うと思う。

要約とも違うし…何て言えばいいんだろ？

「まあいいや」

その言葉見つけても意味はないし。

呟いた声はランプの向こうで眠るキツネさんを起こさないように小さく。

私に負けたキツネさんはしぶしぶ「わかりました」って言うとすぐに寝る体勢になり、しばらくしたら寝息が聞こえてきた。

やっぱり、って思った。

『ドラゴンというのは絵本の中で大暴れしてみんなの住んでいる場所をめちゃくちやにしちゃったり魔物の中で一番強いという想像によって作られた空想の存在であったりと目撃したとかいう実在の情報は一切ないのに人々の間で伝わってきたモノ。

SSSランク任務とドラゴンについて詳しく聞くため訪ねたマライルさん。

獣人である彼の部族「ティンガ族」ではドラゴンについてある口伝があるらしい。

それが「決して竜ドラゴンと対してならない。我らの長チーフなのだから」という言葉だ。

マライルさんとその場にいたガザリアさんによる解説は長くもわかりやすかった。

で、簡単に言ってしまうえば竜は『獣けもの』の長であるのだから殺してはならない。

おかしい。

現在人の中では空想であるものの倒さなければならぬ対象で、昔からの口伝では獣人と同類だから殺してはいけない対象である。マライルさんがそんな嘘を言うようなヒトでないのは短い付き合いだけでわかつている。

だから両方本当で嘘はない。

おかしいけれどまあ現実世界でもよくあることなんかじゃないかとも思う。

ただあれだけ学者のようなマライルさんがそのことに違和感なりおかしさに全く気付いてなさそうだったことだ。

部下のガザリアさんだってその場にいたオロキユスさんだって何も言っていないかった。

勇者アイザワのパーティーの中にはティンガ族が1人いたのに。

…昔と今では思想が変わったから？

でもキツネさんの有効利用によると「獣人」は部族の歴史を重んじる傾向にあるって聞いている。

それは口伝という方法で現在にも伝わっているのだから頷けるし確かだ。

けれどけれど。

ケラスを襲撃したドラゴンは勇者アイザワ達によって倒されている。RPGとかだったら仮想で「倒した」「死んだ」という感触がないんだけど、この異世界は現実リアルなのだから「殺した」んだろう。同類なのに？口伝があつたのに？

勿論勇者アイザワのパーティーは人間もいたから彼らはティンガ族の思想がないから倒すことに躊躇がないというのはわかる。

なら何故それがギルドのSSSランク任務として扱われたのかってことだ。』

とりあえず思いついたまま書き綴ってみた。

読み直していかにもそれらしさが出ていて書き直したくなったけれど手に持っているのはボールペン。

斜線をしてまで訂正するもんでもないと思いきみ、一旦『日記』から目も手も離れた。

「ふう……」

途端に体が軽くなった。

それはそうだ。

『日記』は『赤い本』なのだから。

触れるだけで体の中にある「流れ」を知覚して、その流れがズリズリと蠢くのだ。

最初の時みたいに痺れたり動けなくなったり意識を失うことはなくなっただが、嫌悪感が変わらない。

深く長く、浅い息をして気分を快方へと頑張るが今回は長時間触れ過ぎたようで良くない。

気分は沈み切ったように最悪だ。

私はボールペンをベルトのポケットにしまつとランプに背を向けるように体を反転、誰もいないバラド民族の住居を下部に全面天の川な空を上部を視界に収めた。

ただ単に自然の風景を眺めていればマシになるかな、って。

「……」

まあそうでもないみたいだけど。

そもそもこんな面倒臭いことになっているのは私の「魔力拒絶症」が原因だ。

病気ではなく体質だから治すことは出来ない、けど対応は出来る。今現在「赤い本」に触れている時だけ魔力受給量が急激に増えており、その魔力に身体が対応出来ない為異変が起きている。

おそらく数を重ねることに異変が変わるのは私の身体が慣れようと頑張っているんだろう。

ただその慣れが気持ち悪い感覚を普通と捉える慣れなのか全く感じなくなる慣れなのかはわからないけど。  
できれば後者の方が楽だよな？まあ気が付いたら貯蓄オーバーして倒れたなんていうのはイヤだけど。

とはいえ「赤い本」に触れていなくともただいるだけで魔力は供給され続けている。

慣れがどーのこーの不満を言っている場合じゃないかも。  
ならば考えることは…いかに私の「純粹魔力」を消費するか、だ。

首都アズライトの城下街にあるケヲスの商店のおっちゃんから買ったリストバンド型の魔術道具。  
マジックアイテム

一応純粹魔力で使えるモノで魔力消費のために買ったものだけど…  
反射的にモノを殴って壁に穴を開ける、その辺の石を力を込めて握ればゴナゴナに…いや、消費目的なのに威力強くな？

っていうかソレらは起動しただけで得られる肉体強化という効果だ。  
宿に走って戻る時とか巫女さんとの会談の時には役に立ってくれたけど特に魔力使ったな…とかはなかった。

つまり、それほど魔力を消費しないか私の純粹魔力が多過ぎて多少の消費にも平気だということ。

なら…色々面倒なことになってくれたアジュラの首都入り前での魔物との戦闘ではどうだろう？

正しくは戦闘時に使った「装填」リライトと「噴出」バーストだ。

あの時は魔物を倒す為に一生懸命だったあれは私の純粹魔力をぶっ放しているだけだし。

となれば魔力消費に役立つてくれるかも？

「空に向かってぶっ放せと？」  
想像してみる。

空に向かって「噴出」バーストと叫ぶ小鳥遊小鳥を…。

「ないわー」  
まじでないわー。  
何で真面目な顔で空に向かって両手を突き出しているんだ自分。  
すぐ傍にいたキツネさんが後姿なのが気に食わない。ぜってー笑っ  
てるし。

頭を抱えながら後ろを窺う。

…キツネさんもラバルも熟睡している。 良かった起きてない。

確かに良い方法だと自分でも思うがもはや実行したくない。

いや勿論戦闘とか必要時には使うけど…うん、ないかな。 うん。

次の方法を考えよう、そう思って立ち上がったら「赤い本」を抜い  
ていて片方にしか「重り」がないためバランスを崩す。

片方の重り……。

エルフの巫女さんのどこか遠い目をした笑顔を思い出す。

つて…ああそうか、これ使えるか。

「『コレクターズブック  
収集の本』ねえ…」

くすんだこげ茶色のカバーは見るからに古そうだが触ってみると擦  
れたような感じはなくしつかりした本だ。

きつと巫女さんたちの保管が良かったんじゃないかと思う。

で、その巫女さんによれば中の本紙には全て空の回路が刻まれてい  
るといふ。

その回路は私がしてるマジックアイテム魔術道具のようにワン・ワード・キーによっ

て開閉でき、更にその言霊に籠められたエルフ特有の『魂有する言

葉』が中表紙に刻まれた複雑な回路の魔術を起動、外界にある『力』

を本紙に注ぎ込む…らしい、です。

ケラスは単純な動作か言葉で使用でき魔力の消費を最小限に抑えているのに対してエルフは複雑や長時間の詠唱が必要な魔術を発動の言葉に『魂有する言葉』を加えることで短縮、ただし魔力消費が多い。

…以上、エルフの巫女さんによる有効利用でした。

『魔力消費の効率なんやで悩みのなさそうな管理司書長さんでしたら大丈夫でしょう、多分』

『そもそも格下相手の魔術取り込んでも意味ないですし…あ、失礼ですよね？』

いえいえ、いらぬ記憶まで呼び戻してくれてアリガトウデス。

とにかく、この本を使えば私が溜め込んでいる純粹魔力も減らすことが出来るわけだ。

うん、それだけで良いじゃないか。

それに純粹魔力でも魔物に有効らしいし使えるな、うん。

うんうん。

納得するように頷いて、早速こげ茶色の本を両手に持ち、教えてくれた言葉<sup>ワード</sup>を唱える。

「『<sup>ストア・ザ・ブック</sup>飲み尽くす本』」

…結果？結果なんていうのは本当に嫌なフレーズに聞こえてくる。

「いい加減小鳥さんも学習してくれると嬉しいんですがね  
クアアー。」

ラバルにも呆れられた。

いや確かに私だって同じ気持ちだよ？自分に呆れているよ？

「そんなんじゃない反省している様子もないですね…全く」

「ちゃ、ちゃんとしてるってば！」

唯一動かせる顔だけをキツネさんになんとか向けて、声を上げる。

「倒れてすみませんでしたっ！！」

いやほんとマジでね。

おまけくケロス入国においてのエトセトラく  
ケロスに向かうにあたって出発当日、フランフォルグが突然宣言し  
た。

「変装してケロス入国するから。以上」

「「「えっ?」「」」

反論は認めない、ていうか反論なんてないよ。そうだろ?という上司のスタンスに  
カトリーヌ・ケルヴィン・アイザワの3人はただ啞然とするだけだった。

「そんなカトリーヌとケルヴィン」

「はあ…なんで私がフランフォルグ様の奥様なのよ」

王城には結婚間近の本当の奥さんがいるのに。っていうか女らしい格好なんて似合わねえ。

ため息をつくカトリーヌ(偽妻)にケルヴィン(偽商人)が声をかける。

「よく似合っているよカトリーヌ。　いやカトリーヌ奥様というべきかな?」

早くも商人ウツドロウ・キスリアとして振舞うケルヴィン。

彼はこうしてなりきることで褒めたのだ、普段はそんなこと素直に伝えられないから。

しかしここで問題なのは彼女は真っ直ぐな様で実はそうでもないのだ。

「ふん、こうでもなきや『結婚』して『奥さん』にも、『女性』としても見られ

ないでしょうね。　そんなの自分でも嫌でもわかりきっているのよ」

「あ、いや…そういうわけじゃ…」

ただ純粹に褒めただけなのに。　そんな訂正をする前にカトリーヌは普段身に付けもしない

装飾品をジャラジャラいわせつつケルヴィンに背を向けてその場を離れてしまう。

「そんなケルヴィンとアイザワ」

「…もう無理。マジ無理だから。頭痛い」

「何を言っているんだこの見習い風情が。せめてボロが出ないように人がこうして

教えてやっているのに。見習い風情が覚えることなんぞまだまだあるんだぞ？」

勇者アイザワは商人ウッドロウの部下、見習いのアイザとして。

アイザワは先ほどのケルヴィンとカトリーヌの会話は見ていた。だつて丁度聞きたい

ことがあつて声をかけようとした時だつたんだもの。そしてそれでケルヴィンのことを

からかおうとしたらこれだ。なんでケルヴィンがフラン（鬼教官）化してんだ。おい。

原因は考えればわかるだろうけど今はそれどころじゃない。

「ちよつと休憩ー」

「いいぞ」

知恵熱で頭痛までし始める頭を抱えて試しに言えば意外にもすんなりと頷いてくれた。

それこそマジで？と聞きたい。だつてフランなら即却下するし。

パアアと希望に満ちた視線をケルヴィンに向けると彼は微笑みで持つて地獄に突き落とした。

「休憩さえすればあと残り全部教えてもいいんだな？」

「…いやーだーあー」

「そんなピキアートとある少女」

「どこへ？」

「アイザワと遊ぼうと思って」

「あー…でも彼はとても忙しそうですし邪魔しちゃいけないですよ？」

「…ウン」

「その代わりに私と遊んでくれませんか？」

「イイの？」

「ええ。…ほら、この石面白いい形してますね」

「ホントだ。あ、こっちにキレイなのが」

「これなんてどうです？ 色も鮮やかで丸みがなめらかですよ」  
御者ピキアートとカトリーヌの従者の少女。

「そんなフランフォルグとティンガ」

「おーいフランフォルグ」

「…」

「フランフォルグ、聞こえているだろーが」

「…」

「…」

「オーライト・K・テラー」ボソッ

「何だい？」

「…いや、ああそれでいいんだよな、ああ」

「は？」

貴族の遊び呆ける次男坊、オーライト・K・テラーになりきるフランフォルグに

あまりのなりきりさにちよっと引いたその雇われ護衛のティンガ。

「そんなポテとテマ」

「いや」平和だよなあ、テマ」

「いや兄さんそれ本気で言ってる？ っていつかピキアートのところしか見てないよね？」

「何言ってるんだ、商人たるもの物事の視界は広くないといけないぞ？」

「今言ってるのは現実を見る視界なんだけど」

「いや」平和だよなあ、テマ」

「それ僕の足元見て言ってみな？ 蹲ってる屍なアイザワがいるで

「しよ？見えてるでしょーが」

「そんなのは見て見ぬふりさ。俺の平和にそんなのはいらねえ」

「うわぁ…でも確かにそうなんだよね」

「アジユラの商人ポテと御者テマ。ついでに涙を滝のように流すア  
イザワ。」

異世界編 その19 『アジュラ：バラド族跡地』（後書き）

小鳥さんがグダグダ考える回、でした。

気が付くといつもの目安の文量を超えていたので強制終了、な感じ  
です。

物語というより小鳥さんのグダグダだったのであまり長くてもねエ…

前話から改行の仕方を変えています。

以前の仕方とどちらが見やすいか意見を聞かせてくれるとありがたい  
です。

感想欄・活動報告どちらからでもどうぞ。

ではまた次回に。

異世界編 その20 『まとめまじょう』(前書き)

お久しぶりです。

後書きにて記念なお知らせ。

異世界編 その20 『まとめましょっ』

ミレシアン様からもらった身分証明書は有能過ぎてアジュラ同様の問題なく関所を抜けられ、ついにケヲス入国。

ちなみに正確には東の都、通称『貿易の都』と呼ばれるところに踏み入れた。

ポテから教えてもらった『ギルドセンター』は私とキツネさんがなぞっている勇者アイザワの旅路のヘンゼルとグレーテルの小石のようになりやすい目印として有効で、多少の道が違ってても彼らが訪れた場所として聞き込みなど調査ため立ち寄りつつ進む。

そしてアジュラ内のケヲスとの国境付近の町でのことだった。

アジュラの首都コルトベラントのギルドセンター本部で写した勇者アイザワの履歴を見ていると間が空いていることに気が付いたのだ。

それまで絶えず数件の討伐任務などを請け負っていたのにいきなり途切れて最後のSSSランク『ドラゴン討伐』が書かれている。

この異世界ではオルブライト アジュラ ケヲスと順々に魔物のレベルが上がっていくようで勇者アイザワのレベル上げに任務を受けているのにケヲスに入った途端受けていないのは明らかにおかしい。むしろ増えているもおかしくないし、そうだと思っていた。

疑問を抱いた私はキツネさんにラバルを任せ1人近くの国境付近のギルドセンターの派出所長だというその1番偉い半獣のおじさんに面談を申し込み、話した。

で、結果から言えば勇者アイザワ達一行は2つの馬車に別れて身分を偽り、ケヲスに入国した。…面倒臭い。けれど調査しないといけないので私が『オルブライト王国国家図書館管理司書長』であることも任務についても簡単にだけと説明すればどんな変装だったのかも教えてくれた。

それをまとめるところなる。あ、入国は事前にケヲス側から許可が下りていたらしく記帳には変装した身分が書かれていた。でもって彼らは2つに分かれていたようだ。

まずはAチーム。

貴族の次男坊オーライト・K・テラー（フランフォルグ・クローリスト）

その妻カトリーヌ（騎士カトリーヌ）

護衛ウイリア・ト・ティンガ

御者ピキアート

下女1名。

…護衛と御者はアジュラから派遣された2名。

下女はバラド民族の生き残りだろう。身分のためか名前が書かれていなかった。

次にBチーム。

オルブライト王国の商人ウッドロウ・キスリア（ケルヴィン・J・

ベイトソン）

その部下アイザ（勇者アイザワ）

雇われ御者テマ

案内兼アジュラ商人ポテ

…アイザって。

教えてもらった時に思ったがこの異世界のネーミングを思えばソッ

チの方が「あるかも」、らしい。  
まあわからなくもないが。

この際自分の名前に付いては無視だ、無視。

そして現在に。

私とキツネさんはケヲスの東の都のアジュラ商連の支部店にて彼らのここからの行動を教えてもらったばかり。

正直いつて「面倒臭い」とため息をつきたくなる。

「…はあ」

あ、私じゃないですキツネさんです。

…ギルドセンターに行く前に『アジュラ商連』という看板が見えたから「もしかしたら何か情報得られるかもね」とキツネさんと共に寄ってみたところ、どうやらオルブライト王国のサンヴェイレ街で出会った元パーティーのポテとテマ、多分ポテが所属するアジュラ商連に連絡を入れていた様で名乗ったら奥へ案内、予想していた私の質問にスラスラと答えてくれた。  
すんなりと目的が果たせたこととそれなりの収入があったとはいえその結果に気持ちが湧かない。

けれど「やるべきこと」にすでに慣れているためかベルトのポケッタから白紙を出し入国後はAチームBチームと各チームで行動したようなのでその質問への回答を書いていく。  
無意識に取り出した白紙が何とも恨めしい。

ちなみに隣のキツネさんは訪問から質問回答まで対応してくれた副店長と穏やかに対談中である。

時折耳に入ってくる単語が「結晶」「魔術機具」「始源起動言語」

とか異世界チックな会話をしているようなのでシャットアウト。そんなもってそんなことは置いておくというか放っちゃって。

私は私の仕事を続けるしかない。  
本当は目的地の1つであるギルドホームもしくはセンターに行きたいけれど「メモる時間」ということで。

・オーライト・K・テラー（フランフォルグ・クローリスト）のAチーム。

東の都に到着した次の日出発、中央都市へと馬車での移動開始。陸で、しかも馬車となると2、3日掛かり出発の3日目に中央都市に到着。

…うんこれは単純でまあ東から中央に行っただけ。  
私が詳しく調べるべきなのは中央都市での行動だろう。  
そのためにもギルドに行きたいんだけど、仕方ない。

・アイザ（勇者アイザワ）のいるBチーム。  
こちらは到着したその日にケラスのとある商人から飛行獣を借りて南の都へ。

そしてそこで2日間滞在して中央都市に向かい、Aチームと合流。  
ちなみに中央都市では宿ではなく貴賓客として扱われ、相応の場に宿泊したようだ。

…身分を偽っているのに貴賓客であったり何故南の都に行ったのか、色々疑問が尽きないけれどそれはこれから解決していかないといけないことだ。

面倒だなあと異世界の文字で書かれた「物語」を眺めていると肩を叩かれた。

「ん？」

で、顔を向けてみればキツネさんが座っていたのにいつの間にも立ち去っている。

副店長さんとお話しに夢中だったのに終わったよう。

「小鳥さん」

「何です？」

「行きましようか」

…私が上司のハズ何だけどな。

まあ、いつか。

副店長さんには最後までお世話になった。

彼に教えてもらったギルドホーム…センターより近かったから…までの道のりをキツネさんと並んで歩く。

ちなみにラバルは入国してすぐに関所側の獣舎でお留守番だ。

何でも東の都では商人や軍人といった緊急性を帯びた場合のみ騎乗が許可されていて、個人的な事では駄目だから出発まで面倒見てあげるからここに預けなさい、とな。

私の場合は任務ではあるものの緊急性が高いと思われたい、許可が下りるには中央都市にいるケラスで一番偉い総統帥さんのハンコが必要と中々の手間なのでラバルには我慢してもらった。

頭の中でじいーと見つめてくるラバルの瞳から意識を逸らしつつ、辺りを見る。

「…ここは一番近いのかな？」

貿易の都市という名にふさわしい賑わいの中ポツリと呟いた。

そしてその呟きはキツネさんにも伝わったよう。「ええ」と同じよ

うに見渡して頷く。

オルブライトは人がごった返して移動屋台があれば家の前に机を出して店を出したり細々した店が無造作に並んでいた。

アジュラでは商品が所狭しと言わんばかりに並べられ物々交換オツケー、店と客の距離がとても近く感じられた。

そしてこのケヲス東の都は升目のようにキチンと整えられた街に一軒一軒が暖簾やら旗で店を表し、客は各々の目指す店に足を踏み入れる。

また従業員らしきヒトが通行人に声をかけ、アピールしているのも見かけた。

そこにいるヒトが背の低いケヲス人だったり半獣だったりするのを普通の人間に置き換えれば現実世界と全く同じだろう。どことなくそんな情景に肩の力が抜けてしまう。

「あ、小鳥さんそこは右に曲がりますからね」

……。  
わかってますって。ええ。

白いドーム状の建物の中は天窓から差し込まれる日差しで明るく、清潔感のある場所だった。

何となくイメージだけだと無法者みたいなギルドハンターがワイワイ居酒屋のように集まっているのを想像していたけれど実際は全く逆だった。

ココ、ギルドホームケヲス東の都支部は音が溢れているもののそれ

は全て仕事とかそういった音。

アジュラにあった国境付近のセンター派出所はカウンターが1つだったのに対してココは7つ。

規模の違いがよくわかる数字だと思う。

そんな見たことも無い大きいセンターに圧倒されていたがそうはしてられない。

けれど私たちの用件はドコで解決すればいいのかわからない。

「…どうしましょうか、キツネさん」

「部下に聞いても仕方ないでしょう、小鳥さん」

ちくしょう、こんな時だけ上司役を押し付けるか。

言いたいことがどんどん湧き上がるけど無理にでも置いといて。

周囲を見渡してそれらしい看板を探していると…

「あの、何かお困り…ですか？」

オドオドした声をかけられる。

キツネさんとそちらに振り向くと私より身長の小さいネコ耳尻尾の少女が。

淡い青色の瞳とぶつかる。

「ええ、そうなんです。あるギルドチームの任務履歴を見たい

んですけど

ドコに行けばいいかわからなくて」

ヒトの行き来の激しいカウンターを見ながらそう言うと耳をピコピコと動かしながら少女は「そうなのですか」と頷いた。

そしてその少女によると…

「全てのカウンターで全ての業務の受付なんかできるのです。

なので待機カードを入り口側にある機械から取って、このホール

で待ってれば

「そのうち呼ばれちゃうのですよ」

…近所の郵便局思い出した。

ちよつとシステムのにも違うんだけど、要はそうゆうことでしょ？

そしてカウンターで待つこと20分ほど。

隣に座つてたキツネさんはフリーペーパーのチラシのようなものを興味深く見せて。

私は施設内を観察していた。

で、それでわかったことなんだけど…お客への対応が2種類あることに気が付いた。

まずはカウンターで用を済ませてはい終わりーというパターンと、カウンターで用件を話して奥の部屋にご案内というパターン。

手元の札の番号が呼ばれた。

さてさて私の用件はドツチだろうか……。

「特別報酬金、ですか」

「支払いは『ケラス』ということでしたがそれ以上は守秘義務だと言われてしまいましたね」

ドラゴン討伐の報酬とはまた別の『特別』報酬だ。

まあだからといっても勇者らしく何かしらのイベントからの報酬だとは思っけどさ。

ちなみにその額はオルブライト王国の通貨単位で10マニル。

ものすつごくわかりにくい但至少とも個人所有金額ではなく貴族や国家が用いる単位でありその額が勇者のギルドチームへ報酬とし

て入っているのだから…ものつすい。  
収入3割疑問1割面倒臭さ6割といったところでギルドセンターを  
出る。

陽の高さから大体3時くらいだろうと判断する。

パターンが後者だったので思っていたよりも時間がかかってしまっ  
たためギルドホームにも行きたいところだが、まずは今夜の宿を探  
さなくちゃいけない。

小腹が空いたので近くの屋台でタピオカのようなモノが入った飲み  
物をそれぞれ買い、そこで聞いた宿屋が集まる地区に飲みながら向  
かった。

「ねえキツネさん、早く行かないとさー」

「もう少し、もう少し待ってください」

向かった、まではよかった。

このケヲスの東の都というのは種類ごとに地区を分けてそれぞれ密  
集しているらしい。

さっきまでいたギルドセンターはギルド…冒険者に関わるモノを集  
めた地区。

これまでの行動から考えて経済に関する地区の隣にギルド関連地区、  
そしてその隣が宿屋の地区。

都といってもいわばココは地方都市なわけで主な交通手段が徒歩な  
のだからそれほど隣地区まで歩けないといった遠さじゃない、ハズ。

けれどそれも飛行騎獣に関する装備品を揃えたソレ専門店を通過し  
ようと思っただらそう思ってしまう。

いやまあただ単にキツネさんの関心120%を奪われてしまったの  
で足止めを食らっているだけなんです。

飲み物は私のほうはすでにゴミ箱へ。

手に持っているのは体温で温くなってしまったキツネさんのだ。

「はあ……」

甘々な組み合わせの温くなった飲み物なんて飲みたくないなーとか現実逃避的なことをする頭。

キツネさんを置いていく、という選択肢もあるんだけどアジュラのように心配させるのも不本意だ。

例え彼が原因だとしても、だ。

「はあ……」

どうしよ。

2回目のため息が自然と出る。

きつとキツネさんは気が付いてくれれば反省はするし真摯に誤ってもくれる。

怒りたいけれどそうはならないし、結局私はその謝罪を聞いて許しを与えるしかないのだ。

「ノイ本当に行くの？」

「しょうがないだろ、『中央』は居辛いし、『西』は混乱中だ。」

北』は騎士たちがうるさいしな」

「…俺は興味ある。」

「メアも見てみたいかもです！ タニアちゃんは何がイヤなのか？」

「わ、私は別に…あらメアちゃんと前見て歩きなさいよ」

「はうわわ…すみませんです！ おややさっきの方だったりですか？」

「へっ？」

聞き流していた声に呼ばれて後ろを振り返る。

そこにいたのは4人のヒト。

つてこのパターンにデジャビュ感じてしまうのは間違いじゃなかったり…？

オマケ。

現在勇者強化期間中、デス。インケラス中央都市。

「また剣筋が甘いわよっ！！」  
「っ！！」

自分の身長程、いやもしかしたら以上かもしれない本物の巨大な剣身が容赦ない  
速さで右脇腹を襲ってくる。

体を後方に引いてもその速さと長さで自分は避けられないだろう。  
…実際はそんなこと考える前に体が勝手に自身の剣身を間に滑り込ませ、

剣身と剣身が触れた箇所を支点にその力に流されるままに飛ばされるように回避する。

「回避はマイナス2点って言ったでしょ！」  
右膝を地面に擦りつけながら体勢を整える前に追撃が始まっているのを確認する。

彼女の持つ巨大な剣は得意とする魔術から『振り下ろす』ことが一番恐ろしい。

しかし例え魔力が込められていなくとも力・技術ともに自分を圧倒するソレは

それだけでも十分、恐ろしい。

「避けるなっつーのは無理なんだよっ、このお！」

出来るなら泣き事でも叫びたいがそんな暇はない。

一か八か。

頭を下げ、爪先に力を込めて思いつきり地面を蹴る。

剣を横に振るう…いやそんなのでは遅い。

剣を突き出すように、体ごと突き出すように。

「はああああ…！」

振り下ろされるその前に。

勇者アイザワは訓練相手の騎士カトリーヌを傷つけるとか、そんなのは頭にはなく

無我夢中に戦ってた。

そしてそんな彼が捨て身の、というか投げ身で突き出した一撃は…

「甘い」

彼女の一撃であっさりとK・Oとなった。

…冷たいタオルが何とも愛おしい。

痺れる両手で顔を覆う。

正しくはその間にタオルがあって手は乗っけている感じだけでも。

結局捨て身の一撃はカトリーヌに触れることもなくいきなり横からの衝撃で

吹き飛ばされた。

カトリーヌを傷つけるとかいうのは頭になかった。

だけれどもそれよりも彼女が自分が全く敵わないほど強かっただけ。

ってというか吹き飛ばされた後も訓練は続行して、一撃で吹き飛ばさ

れて

ショックという感情が今になってきた。

そう、ポイントが0（ゼロ）になった今になって。

ここケヲスの中央都市の闘技場で行われる『武術大会』に出場することが

決まったのは3日前。

それから毎日朝から晩まで、みっちりと扱かれている。

そして体を唯一休める晩から鬼教官ことフランやS+ランクのティンガに

戦略についてのアレコレをこれでもかと詰められる。

これは明日までに覚えておかなければそれこそ更なる地獄が待っているため

落ちてくる臉を根性で抑え込みつつ頭に覚えさせる。

…こんなはずじゃなかったのに。

どんなところが？と聞かれればとりあえず今で今までのことだろうか。

まあ今さらと言われるとそうなんだけど鉛以上に重い身体とぼーっ  
としている

頭にそれ以上考えたくもないし考えたくもない。

ああ頭が働かない。

あと1時間もすれば晩飯で、そのあとは勉強会だ。

ようやくそれだけを言葉に表すと少しでも休みたくてテラスに出た。

まだ薄らと霧が視界の奥で残っているが、関係ない。

王様の暮らす屋敷がある敷地にある『離れ』。

勇者とはいえ庶民であつたのは変えられず、全てが上品そうになって  
いうか  
物が高い部屋は無意識に緊張させられる。  
せつかくほぐしたい身体もそれじゃあ休めない。

そういうわけだから、と誰に言っているわけでもないが自分自身に  
説明、そして

納得したかのように頷きながらテラスに置かれたイスに座る。

イスといつても海辺にあるような足を伸ばせる外用のイス…名称が  
抜けてる。

まあイスには違いないしいいや。

「……」

未だに幽かに残る霧を視界に認めつつ重たい体を支えていた  
力を抜き、目も閉じた。

決してその暗闇に安らぐというわけではないけれどそうでもしな  
きゃ  
やっつけられなかった。

なるべく深く息をするだけを意識して行う。

霧が去つたばかりのひんやりした空気が肺を満たし、熱のこもった  
息を吐き出す。

それは白い息とまではいかなかったがほんの少し疲れが吐き出され  
た、気がした。

だって目は開かないのだから、わからない。

「……」

なんだかとても暖かいような凍るような、そんな心地の中目を開くことになった。

「…え？」

わからないまま目を開ければそれでもわからない。

いつのまにやら毛布が腹部だけかけられていて、

いつのまにやら彼女が自分の上で寝ているなんて。

1つ目はともかく2つ目が信じられない。

というか彼女が乗っけていても寝ていたとは…いくら彼女が軽いとはいえ

そこまで疲れていたのか、と起こしかけた体を静かに落とす。

もうすぐ勉強会だ、とか夕食の時間だとかどうでもいい。

とにかくこの少女が「安らぎ」の表情カオをしてくれるのなら。

それだけで何より自分が「安らぐ」のだから。

## 異世界編 その20 『まとめましよう』（後書き）

二ヶ月と約一週間ぶりの更新となります。前書きの通りお久しぶりです。

さてそんなこんなで今月の26日で連載一周年となります。

一時は定期的だったのがこんなに不定期となってしまう…自分でも悲しいです、  
が。

その謝罪代わりというか一周年記念に少しでも『お話』が書ける様に以下の

『リクエスト企画』を用意しました。

私R | i zの本作品の番外編的なのをリクエストがあればどんどん書いていきます。

また以下に選択肢も用意しましたのでコチラのリクエストでもおokです。

- 1・キツネさん視点『出会いの話』
- 2・今話登場ノイ・タニア・J・メアのお話
- 3・現実世界でのとある日常（小鳥か有希視点：中学時代）
- 4・君島トオルのお話（過去）
- 5・ミニスカ紫ワンピースの美少女（魔女）のお話（難解度高）
- 6・カレリ・マド・ピターチエのお話

その他何でもおok、ですがバツテンなのは「タヌキ様視点のお話」と「ネタバレ」

となるリクエストです。タヌキ様ごめんなさい。リク5はネタバレというか謎を呼び込むだけです、ええ。

リクエスト投票は感想や活動報告へのコメントでお願いします。

リクエスト番号のみでも構いませんしその他はリクエストというよ

りお題を振る

感じの方が私的には書きやすいです。

リクエストの発表は26日以降完成次第投稿します。

：取りあえずこんな感じで一周年記念をやることにしました。

\*追加：活動報告にも企画を書いておきました。

お気軽に参加して下さい。お待ちしております。 R | i z

## リクエスト1 キツネさん視点『出会い』（前書き）

本日26日で連載一周年です。わーい。

以下に注意書きみたいのがあるのでお読みください。

\*前話、活動報告にも記載してましたがその記念に『リクエスト企画』なる

ものを立ち上げました。

詳細についてはそちらを。今後については後書きにて。

\*今話はサブタイそのまんまの小話となります。

時間列は本作より前、小鳥とキツネさんが2度目の出会いからしばらくして、です。

\*小鳥とキツネさんの出会いについては一週間限定で晒したモノなので解らない方もいらっしゃると思いますが今後いつになるかわからないネタでもあるので再度公開は今のところありません。

\*今作は限定ではなく個人の企画のため削除する予定はありません、  
が場合によってはそうなるかもしれせん。

\*長い前書き失礼しました。読んでくださってどうもです。

ではリクエストありがとうございます！！

## リクエスト1 キツネさん視点『出会い』

私は人生において『一生モノ』として位置づけられる出会いを数度している。

なんてことのないただの平日の午後、ようやくきた春の陽日は心を穏やかにしてくれる。

そんな心地の中腕を振る舞う。

注がれた波に茶葉が揺るかに踊り、そこから立ち上がる色気ともいうべき香りに包まれた。

あまりの幸福感に目を細め、浸ることにする。

私は人生において『一生モノ』として位置づけられる出会いを数度している。

一人目は『父』。

母を知らない私にとって唯一の親であり家族であった父は自慢する、というより

尊敬すべき人だった。

私を優しく、厳しく育ててくれた父。

確かにそれも大切で宝のようなものだけでも。

やはり父は父の雇い主であった旦那サマの斜め後ろに佇んでいる姿が印象強い。

幼心にあの静かで自然な絵画のような光景は鮮明に刻まれた。

二人目は『旦那さま』。

父のようになりたくて旦那さまのご好意でその元で働かせてもらった。

上司となった父は厳しく、旦那さまが苦笑してしまっほど。

時折こつそりと旦那さまに色々と教わって、それが父に見つかって二人で

怒られるのだ。

今思えば私が旦那さまを盗ったかのように父は息子に嫉妬してたのかもしれない。

第二の父、そんな感じの方だった。

三人目は『お嬢様』。

儂げな外見だけれども実際は気のお強い、私だけの『主』<sup>あまじ</sup>。

仕える経緯は中々複雑で最初は私だけが気まずく、彼女はただ受け入れていた。

きっかけはやはり彼女で、今にして思えば一歩引いていたのが悔やまれる。

そんなこともする気もさせる気もまったくなかったのに。

ただそれをきっかけに時は華やかに煌めいてそして雪の結晶のように儂く、融けた。

四人目は『オーナー』。

ココは『タヌキ様』と呼んだ方がいいだろうか。

まあそれに従う理由も特にないいいだろう、『オーナー』で。オーナーとは知り合いの弁護士の紹介でお会いした。

生憎その時の私は不安定で、記憶が曖昧なのだ。

ハッと気が付いたらオーナーの前で紅茶を淹れていて、思わぬ滴がポチャンと波紋を生んだ。

…今ではオーナーにそのことからかわれるし『皆様』からも笑わ

れているようで  
恥ずかしい限りだ。

そして『小鳥さん』。

五人目ではないのは「一生モノ」と位置づけられるほどではない、  
と思ったからだ。

それでもこうして思い浮かんでくるのは小鳥さんという人物が私に  
とってそれなりの

『人』だからだろうか。いまいちしくりくる言葉が見つからない。  
彼女風に言えば『言葉は当てはめることより浮かんでこそ、し  
つくりでしょ?』だろう。

まあそれはともかく。

そもそも小鳥さんとは出会いからして衝撃で、まさかあの時の少女  
との2度目の

出会で自分が『キツネさん』と名付けられるとはあの時思ってい  
なかった。

それこそしつくりときたその変わり過ぎた名前が今では捨てられな  
いモノであることは認めよう。

私の名前は『キツネ』。

私の過去の、過去で出会った大事な人たちとは全く関係がなくなっ  
てしまった、『キツネ』。

唯一繋がりのあるオーナーは既に『タヌキ様』と呼ばれ『たぬき堂』  
のオーナーを楽しんでる。

私は、私たちは『キツネさん』と『タヌキ様』として、ここにいる。  
そんなきっかけを作った小鳥さんは本当に不思議で…とても面白く  
て…私にとって、

「何1人内心百面相してるんです? キツネさん」

「…おやまたいらっしやいましたか。小鳥さん」

香りを楽しむだけ楽しませてもらった冷たい紅茶は捨てた。

そして、新たに『小鳥さん』のために紅茶を淹れるため、私は動き出した。

## リクエスト1 キツネさん視点『出会い』（後書き）

色々謎の多いキツネさんがちょっと知れた小話でした。  
仕上がりについては触れないでくれると助かります；

\*今後リクエスト企画について。

勢いで決めてしまった本企画ですが、リクエストはまだ受け付けて  
います。

×切りは5月中旬。 発表は来月26日までには。

∴一応リク2 7全部書き始めているのでお蔵入りは悲しいですね。  
まあでもそれはそれで仕方ないか。

\*本編異世界編その21について。

まだ時間がかかりそうです∴ですが出来上がり次第企画中でも投稿  
します。

ではではこれにて。

R  
|  
i  
z

リクエスト5・ミニスカ紫ワンプの美少女（魔女）のお話（前書き）

一周年企画のリクエスト話です。

2〜4話に登場したミニスカ紫ワンプの美少女（魔女）さんのお話です。

ネタが明かされていないので謎全開ですが、お許し下さい。

その他リクエストについては後書きにて。

## リクエスト5・ミニスカ紫ワンプィの美少女(魔女)のお話

便宜上「彼女」と表記する。

彼女は

どこにでもいて、どこにでもいない…どんな時間にもどんな世界にもいて、いない。

足元の雑草は健気に花を咲かせ、その上に彼女はいた。

「…フフフ」

笑うはずのない彼女は誰から見ても機嫌が良いようだ。

短い裾がフワリと舞うのも気にせず滑るように地を歩む。

傾斜の坂の向こうの森、さらにその奥には白壁に囲まれた街が見える。

素晴らしい景色であることには違いないが、彼女にとってどうでも良かった。

足元の草花は風に吹かれて花弁は心地よさそうに風に当たっている。同じように風を受ける彼女の耳には喝采が聞こえていた。

喜び。

興奮。

そんな歓喜な声。

彼女にとってどうでも良かった。

重要、というより関心があるのは喝采の内容。

「景色」と認識されるほど遠い場所からのソレは音でしかないはずなのに、彼女に

とつてあるものがなくないものがあるのだから、「距離」などどうでも良いのだ。  
耳を済ませることなく「聞き取った」ソレに、彼女は機嫌を良くしてみた。

自分という存在。

自分という存在理由。

ただそれだけ、それだけを忠実に実行し「喝采」は実った証。

正直なところ実った実も咲かした花も芽吹いた芽も、どうでも良いんだけども。

なら何故機嫌が良いのか？

何故？

自分の存在理由である目的を遂行し、成功させている。  
ならば機嫌が良いというのはわかる。

けれど彼女にとって距離も時間も、どうでも良いものではないか。

「フフフツ・・・っそ。確かにそうね」

そうやって疑問も機嫌も全て流してしまうと、彼女は己の存在理由のため

次なる行動へと移すことに。

「いつも」のように一歩踏み出すだけ。

風に靡かれる髪を抑えながらその先に視線をやったその時。

.....

珍しいことに。

いや初めてだろう、「呼ばれた」のは。  
明らかに「彼女」に向かつて。

そして理解する。

「っそ。 アナタが私を呼ぶのね」

今度こそ、今度こそ彼女は口元に弧を描かせた。

## リクエスト5・ミニスカ紫ワンプの美少女(魔女)のお話(後書き)

まだ残っているリクエスト選択肢

- 2・37話登場ノイ・タニア・J・メアのお話
- 3・現実世界でのとある日常(小鳥か有希視点・中学時代)
- 4・君島トオルのお話(過去)
- 6・カレリ・マド・ピターチエのお話

\*1・5は公開済みです。

リクエストの受け付けはまだ受け付けております。

また上記以外でもおkですが「タヌキ様視点」と「ネタバレ」はNGです。

その他詳細は活動報告にて。質問などもお気軽にどうぞ。

最後に。

今話におきまして「意味解らん」という苦情は受け付けません。  
(笑)

異世界編 その21 『まず』

ケラス『東の都』2日目。

以前も使用したことのある主従タイプの2つの寝室がついた宿屋で霧に囲まれる朝の中目が覚めた。

ケラスは岩山に立つ国なので霧の時間が長くそして早い。

「午前4時半……」

ようやく昇り始めた朝日は霧のせいではほとんど明るくないはずなのに起きてしまうとは……何故だ。

寝た時間は11時半ごろだったと思う。

で出発は8時半で合っているハズだから……うん早過ぎた。

早起きは三文の得とかいうけれど思い返してみれば早く起きてしまったって良いことが起きたことがない。

だからといって二度寝するほどの眠気がどこかいつてしまっているし……散歩したいけど今回は外ではなく下のホールにでも行くか。

部屋を出るにはキツネさんのいる従者用の寝室の前を通らないといけない。

「……………」

流石のキツネさんもこの時間はまだ寝ているだろう。

それに睡眠という休息も大事であることは重々承知のハズ。

ちよくちよく抜け出している気がする私を止めることはしないだろう、無駄だと分かっているし。

ギルド運営のこの宿屋はギルドに登録している冒険者なら割安で泊まれる。

また所有するランクによっては借りられる部屋のランクも上がるようにランクにもなれば個室専用風呂といった高級旅館のような待遇が受けれるらしい。

ちなみに私とキツネさんが借りたのは依頼者専用の部屋。

勿論冒険者ではないから割安でもなく適正価格の「安心」な寝床の提供だ。

やはり遠方からの客にぼったくりを仕掛けるのはいるらしい。

ま、その辺は所属国からのお墨付きがあるので安心、ということではラバルという特殊な条件がないので今回利用することになった要因の半分である。

もう半分は「誘われた」というのが正しいのだろうか？

というより案内されたらそのまま泊まるよう勧められてこうなってしまった、感じだけだ。

朝日はまだ霧に遮られて微弱のため壁のランプの明かりを頼りに歩いていく。

時間が時間のためか足音が響いている気がして、つい泥棒のように気を配る。

昨日のキツネさん待ちの最中に再度出会った親切なネコ耳少女のいる4人のヒトたちに遭遇した時。

「今度は何をお困りしているのですか？」とネコ耳少女に問われたので素直に「宿屋の地区」と答えたところ、どうやら彼女たちも宿屋地区にある自分たちの宿屋に向かうところだということで渋るキツネさんを「起動<sup>アクセル</sup>」状態で引き摺って一緒にすることになった。

オルブライト風の装飾が施された鎧を身にまとう金髪青年。

ふさふさの尻尾を持つ半獣の少女。  
背の低い色白でゴーグルをしてる少年。

そして親切なネコ耳少女。

そんな中々愉快そうなメンバーは金髪青年をリーダーとするギルド  
チームのようである。

上から「ノイ」、「タニア」、「ジェイ」、「メア」と簡単な自己紹介  
をされたのでこちらもオルブライト王国から任務で派遣された上司  
「小鳥」と部下「キツネ」であることを。

あながち嘘ではないし「国家図書館管理司書長」というのはそれな  
りな役職だそうなので彼らを取材しない限り身分は明かさないで  
おくことにした。

そこで彼らに案内されたのがギルド運営の「宿屋」だった、という  
わけ。

ホール：足に低い長方形のテーブルをソファで囲んだのを1セッ  
トにしたのを8セットほど設置してある大きな部屋：に着いた。  
やっぱり予想通り誰もいない。

そんなひっそりとした清閑とした空間に踏み入れる。

端っこの1セットの2人がけソファの真ん中に腰掛け、ベルトの  
中から「物語」やら「お話」やらをテーブルに広げる。

視界に入るよう一面に広げられたそれらの上に今度は「有効活用」  
と「白紙」。

随分と増えた「有効活用」を一枚一枚一行一行に目を通し、記憶に  
欠ける部分を補うように白紙に綴る。

実はコレ、私のテスト勉強の仕方だったりする。

それまでの授業ノートを見直してノートだけで分からない箇所は教  
科書とかで調べて、理解したトコロだけをテスト用のノートに書い  
ていく。

まあ暗記系の教科にしか使えないんだけどね、コレ。

重ねられる白紙と有効活用が増えていき広げられたモノたちが見えてきた頃。

周囲を感じられなくなるほど集中していた私に何かの気配が感じられた。

そして顔を上げてみると…

「おはよう、早いのだな」

「おはようございます。」「ジエイさん、でしたね」

「Jでいい」

背の低いゴーグルをした少年、Jがいた。

トントン、とまず有効活用と白紙を回収。ポケットへ。

続いて「物語」と「お話」を束ねて流し読みで読んでいく。

やはり書類なので他人に見せて良いものではないだろう。

勿論昨日会ったばかりのJがそんなヒトではないのはわかっているのだけれども。

「んで、Jも早起きしちゃったんですか？」

とりあえず「ながら」ではあるが会話をすることに。

「俺は…自主練だ。飛行時間が半日だと聞く。ならこの時間しかないだろう」

「それは、ご苦労様と言うべきかな？ 私はヒマ潰しみたいなので構わないですよ」

というか今気付いたんだが手の中の紙に「日本語」がチラホラ見受けられて…見られたら絶対にヤバイ。

「……」

「え」

見送る、という動作を希望していたのだがそれに反してJは私の向かいに腰を下ろした。

慌てて文字の面を自分に押し当てることで見れないようにはした。

「…気が変わった」

「どうかされましたか？」

何か私に聞きたいことがあるのだろうか。

「どうしてコトリたちは南の都に行く？ 任務に差し支えない程度で良い。教えて欲しい」

「…そうですね」

理由は勇者一行（変装済み）のBチームが行ったから。

何故行ったのか、そこで何をしたのか、どんなイベントが起きたのか。

Aチームのように真っ直ぐ中央都市に何故向かわなかったのか。

無論それらのことは任務に関係してしまうのだから言えない。

「私たちは『情報』を追っていて、南の都はその通過点のようだから？」

「何故疑問系？」

「正直なところ私らが追う対象ソレが何故南の都に行ったのか、

そもそもその調査のためですからね」

「対象は話せないほど極秘なのか？」

うーん、勇者アイザワは別に話しても良いのかな？

もしかしたら不明のSSSランクに関してのとか知っている可能性があるし…。

「それほどのもんじゃないですよ。『アイザワ』という人物の跡を追って、

そこで何をしたのか調査しているだけです」

自己紹介で「はケラスのヒトだと聞いているから、私の役職で『アイザワ』を追うことが  
どのように重要なかわからない筈なのでこの程度の開示は良いだ  
ろう。

そう思って軽く口にしてみれば。

「……」

相槌さえも聞こえない」に顔を上げて視線を向ける。

すると、暗いゴーグルの奥にある瞳に真っ直ぐぶつかった。

「ナイト・サラバテトリア光聖騎士団』のアイザワ、か？ お前たちもか」

「はい？」

お前たちもか？

頭の中でリピートさせるが混乱が収まらない、むしろ加速する。

そして納得。

「……」

混乱に割いた感情が一斉に「面倒」と呟いた。

「ということは何です？ 勇者アイザワ達がケラスでギルド任務を  
受けて

いなかったのは中央都市で行われた『武闘大会』に出場したから  
で」

「うん」

「出場したらしたらで準優勝をして、それも人数制限が4人の  
ところ3人で出場したチーム戦で」

「うん」

「そしてチーム戦の優勝は昨日出会った4人、チーム『ルト・ララサ』で」  
「うん」

「優勝した彼らは中央都市に居辛くなりここ東の都に逃げてきて今度は『勇者

アイザワは南の都で飛行魔獣なるものを手に入れた』という噂から南の都へ

行こうと決めたとこゝろ偶然、我々と出会って行き先が偶然、同じだったので」

「…うん」

「こうして本日共に南の都へと行くことになりました、と？」

「おっしゃる通りです、キツネさん」

カチヤン。

普段ならしないはずのカップを置く音が何気に部屋に響く。

まるで今のキツネさんの気持ちそのもので責められている感じだ。

まあ偶然、であるけれどやっぱり私の持つ『赤い本』に起因するんだろ？

ポテとテマに出会ったような、偶然。

前向きに考えれば旅のゴールが近づいた、つまり現実世界への帰還が早まるか確実になる…だけ。

そんなのとつくに気付いているしありがたいとは思っけれど、本音を言えば

『ありがた迷惑』なんだよね、キツネさん。

うん、それは私だって同じだっていうことは忘れずして下さいね？

「ではそんな、彼らと合流しましょうか」

「…ですね。飛行魔獣については歩きながら話しましょう」

いろいろ引つかかるけど。  
しょうがない、話し込んでいたら時間がたっていたのだから。

窓の外をちらつと見てみれば清々しいほどに晴れ渡った青い空が。

……ああ何だか、イラっとした。

おまけ〜武闘大会 チーム戦決勝 『ルト・ララサ』 VS 『光聖騎士団』の一部〜

ガキインツ…！

振り下ろされた刃は単純に重く、捉えるのも避けることも出来たが  
敢えて受け止める。

パラノイラ・ガエロ・マニエシュ…長いので本人も公認「ノイ」は  
逃げられないよう剣を巻き込みながら  
仲間を確認する。

半獣のタニア・ママト・アイル…愛称は「ニア」、は相手チーム  
の女性剣士の相手を。

投石という攻撃スタイルの彼女は接近戦が苦手に見えるがそうでは  
なく、どっちでもいい。

己の持つ加護属性の風を纏わせて女性剣士の飛ばす石や砂を防ぎつ  
つ、その場の足止めをしている。

そんな俺たちの後ろからは魔術による砲撃が発射されている。  
グロット・Jによる広範囲の火属性魔術。

腕の魔術機具よって連射とはいかないものの間隔をそれほど空けずに精密な計算によって配置された火の雨を降らせている。

さらにはメア・マロン・ターチによる風の魔術。

杖となるのはケラスでも珍しい拳銃で彼女は2つ、両手に持つ2丁拳銃使いだ。

『斬撃』と『圧縮』の回路が刻まれた弾は魔力によって発射されることにより、発動する。

2人の相手は後方より援護する弓使い。

これまでの闘いを見ると弓と双剣、治癒魔術も使えることがわかっている。

そしてこれが重要なのだが…女性剣士と弓使いはオルブライト王国の騎士、それも第一騎士団のエリートだろう。

精錬された動きはともじやないが無名のギルドチームにふさわしくないし、何より身に着けている防具は個々に作られた特注品だ。

防具に刻まれた装飾はエルフの装飾回路だろう…自分たちでは敵わない。

ただし一対一なら、に限るが。

そうこれはチーム戦。

チームリーダーの腕にある宝玉は騎士ではなく1番若い剣士がつけている。

どうみても未熟な彼に勝敗を決定するソレを持たせるのは…余裕？  
畏？

確かに決勝までできたのだ、特殊な技能か何らかな隠しがあるのか…  
情報がないので答えなどない。

俺とニアで2人を分断させているしJとメアで回復術を使える弓

使いの騎士を抑え込んで入るのだ。  
さっさとこちらのペースにもっていき俺らが、勝つ。

「はああ！… 『ファースト・アイス氷結』！！」  
「なっ…！」

オルブライトの人間がケヲス式の魔術機具を使用するワン・ワード・キーによる魔術を使うのはあまり良い目で見られない。双方から。けれど俺たち4人は『仲間』だ。

仲間の魔術技術を利用しての後ろめたいなんて、思わない。

剣とその周囲に冷気を巻き散らかして相手を斬りこむ。

「アイザワ！」

女性騎士が若いリーダー… アイザワというのか… に気が逸れたのを狙ってニアが己の魔力によって強化した蹴りは腹部を狙うが女性騎士の方がすばやく剣の腹でガードする。

しかしあまりの威力に地面を削りながらも3mほど後退する。

… 充分だ。

「『我が呼び声よ届け導け』フィルル・マーチ彼の結びは において不変なり！其の癒しと友愛をここに… 『風の調べ！！』」

勝利を呼び込む風が、吹いた。

異世界編 その21 『まず』（後書き）

毎度毎度言ってる気がしますけど：お久しぶりです。

6月のいつ頃かあるタレント風にいえば「パツカーンな状態」になりました。

まあ病院行くほどではないものの何もできず、少し回復しても1月ほどは

身体の回復に努めていて執筆は出来ませんでした。

そして、ようやく執筆まで回復しました。

今話はほとんどを伏せる前に書いたもので再開記念的な感じで更新です。

そして今後ですが日常編から異世界編までリクを除いた全てを修正更新して

いきます。話が変わることはないですが、言い回しや誤字を直していきます。

全ての修正が終わった時こちらの後書きをばっさりと消して不定期更新ですが

お話を進めていきたいと思えます。

ではでは。

R  
i  
z

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0752/>

---

わたしと Kitsuneさんと 赤い本

2011年10月10日00時32分発行